

國民文化研究會・聖德太子研究會著

聖德太子佛典講說

維摩經義疏の現代語譯と研究

(下卷)

聖徳太子維摩經義疏

黒上正一郎謹書

自行外化を憶て以て心を
調伏すと雖も若し自他の
二境を存して修行せば
則ち修する所廣からずして
物と其の苦樂を同じく
すること能はず故に

勸めて應に著を離る
べしと明すなり

若し天下の道理を論ぜ
ば悪を遣り善を取るは
必す己れに始まりて方に能
く人を勸む若し自ら能
くせずば安んず人を勸む
を得む

写真の説明：渋谷の国文研事務所会
議室に、小田村寅二郎先生の御遺影と
並び、掲げてある額縁のお言葉は、維
摩經義疏第五章文殊問疾品のなかの
聖徳太子のお言葉であり、黒上正一郎
先生の直筆である。この写真の裏側には
(念のための記)として、「黒上先
生のこの色紙は先生が御在世中に養
田胸喜先生に贈られたものでありま
すが、昭和十六年に国文研の前身であ
る精神科学研究所(田所廣泰理事長)
が創立された時に養田先生から同研
究所に贈られたものである。昭和十八
年、同研究所が、東京憲兵隊に解散さ
れて以降、約三十七年間、小生が保管、
本日改めて額縁に入れ、国文研会議室
(当時は銀座)に掲げることにした。
昭和五十六年二月十一日 小田村寅
二郎」とある。

目次

下巻目次(附 上・下巻目次大要) 1

凡例..... 15

下 卷

第七 觀 衆 生 章

「觀衆生章の名稱の由來」・「中根の人は四の疑ひを生ず」 一

觀衆生章の科段分け 三

觀衆生章の科段分け表 五

衆生即ち空なるを明して實の衆生有りやの疑ひを遣る 五

菩薩の慈は無相なるを明して父母の偏愛に同ずるやの疑ひを遣るの科段分け 九

文殊問ふ 〇

維摩答ふの科段分け及び文殊の問ひの由來 一

無相を修し極果を得しむるを眞の大慈と名づく 二

廣く無相の慈の體を明すの科段分け 二

空の理を借りて譬へを作す 三

三乘の人を借りて譬へを爲す 四

佛果を借りて譬へを爲す 六

因中の萬行を借りて譬へを爲	一七
無相の慈を結す	一九
悲と喜と捨とを明す	二〇
佛の功德に住するの義を明して、以て身を生死に留めて物を濟ふは	二一
新發の堪ふる所に非ずやの疑ひを遣る	二二
御語釋（「身を本と爲す」について）	二五
菩薩の中道の行の定まり無きやの疑ひを遣る、科段分け	二六
天女の身を現じ花を以て衆に散ず	二七
天女は身子と共に論じて、定相無き中道の理を顯はす、科段分け	二八
花の著くと著かざるとに因りて論を作す並びに科段分け	三〇
室に住するの久近に因りて論を作す並びに科段分け	三四
天女の所證を問ふに因りて論を作す	三九
三乘の中に於て天女の求むる所を問ふに因りて論を作す	四一
何ぞ女身を轉ぜざるやと問ふに因りて論を作す	四八
天女の生ずる所を問ふに因りて論を作す	五四
極果を得るを問ふに因りて論を作す 科目段分け	五六
無に就きて無得を明す	五七
有に就きて無得を明す	五九
有と無とに就きて無得を明す	六〇

淨名は天女の徳を讚嘆し、定まり無きの相を結成す……………六二

第八 佛道章

「佛道章の名稱の由來」・「中根の人の疑ひを遣るために釋を爲す」……………六四

佛道章の科段分け……………六五

佛道章の科段分け科段分け表……………六六

非道を行ずるを佛道に通達すと名づく……………六六

正しく非道を行じて佛道に通ずるの相を明す……………六七

塵勞を如來の種と爲すの科段分け……………七二

正しく塵勞は如來の種と爲るを明すの科段分け……………七三

正しく塵勞は如來の種と爲るを明す……………七四

塵勞は如來の種と爲るの意を釋す……………七六

迦葉述成す……………八〇

「御語釋」(「反復」について)・「淨名の種種の不思議の迹を明すの科段分け」……………八二

普現色身菩薩問ふ……………八三

淨名偈を以て答ふ……………八四

偈(本に就きて、但種種の道品を以て眷屬と爲すの偈・其の一)……………八六

「御語釋」・「偈」(本に就きて、但種種の道品を以て眷屬と爲すの偈 其の二)……………八七

「御語釋」・「偈」(本に就きて、但種種の道品を以て眷屬と爲すの偈 其の三)……………八八

第九 入不二法門章

偈(迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの偈・其の一)	八九
偈(迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの偈・其の二・三)	九〇
偈(迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの偈・其の四)	九一
偈(迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの偈・其の五・六)	九二
偈(迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの偈・其の七)	九三
偈(迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの偈・其の八・九)	九四
偈(迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの偈・其の一〇)	九五
「入不二法門の名稱の由来」・「下根の人の疑ひを遣るために釋を爲す」	九六
〔参考〕『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』に於ける	
「二乗の觀は心、有を空するに存するが故に、…」に關する記述	九八
入不二法門章の科段分け	九九
入不二法門章の科段分け表	一〇〇
浄名は各々説くべしと勸む	一〇〇
諸々の菩薩は各々説く科段分け	一〇一
〔研究〕「此の三は皆無言の理は深淺無きを顯はす」の太子『義疏』について	一〇二
諸々の菩薩は言に寄せて無言を詮す	一〇
御語釋(「一相と無相とを二と爲す」について)	一〇六

第十 香積佛章

御語釋（「盡と不盡とを二と爲す」について）……………一〇

御語釋（「四種と空種とを二と爲す」について）……………一三

御語釋（「空と無相と無作とを二と爲す」について）……………一五

御語釋（「福と罪と不動とを二と爲す」について）……………一八

御語釋（「我に従りて二を起すを二と爲す」について）……………一九

御語釋（「有所得の相を二と爲す」について）……………二〇

文殊は言に寄せて言を遣る……………二三

浄名は黙然として言を遣る……………二四

益を得るを明す……………二六

香積佛章の名稱の由來……………二七

香積佛章の科段分け表……………二八

「香積佛章の科段分け」・「食を以て非を行じ是に通ずるを證すの科段分け」……………二九

「眞子の食を念ふを明す」・「浄名は呵を致す」……………三一

須むる所を許す……………三二

食有る處を示す……………三三

浄名は衆の菩薩に誰か能く往きて食を取るに堪ふやと問ふ……………三五

化菩薩を遣はす……………三六

衆香の菩薩は化菩薩を見て未會有なりと嘆ず……………一三九

香積佛は飯を惠みて還らしむの科段分け……………一四一

「香積佛は飯を賜ふ」・「衆香國の菩薩は娑婆世界へ行くことを求む」・「御語釋」……………一四二

香積如來は娑婆世界へ往くことを許す……………一四三

「化菩薩は衆香國の菩薩と俱に歸る」・「淨名の賓を待つ相」・「淨名は飯を受く」……………一四五

飯の香の妙氣を聞きて人天來集す……………一四六

食を衆に施し、非を行じて是に通ずるを證す……………一四七

淨名と衆香の菩薩と互に問答して、二國の物を化するの方法を明す……………一五〇

淨名は衆香國の物を化するの方法を問ふ……………一五一

「衆香國の菩薩は答ふ」・「衆香國の菩薩は娑婆世界の物を化するの法を問ふ」……………一五二

淨名は娑婆世界の物を化するの方法を答ふ……………一五三

御語釋（「諸難處」について）……………一五六

衆香國の菩薩は娑婆世界の教化を嘆ず……………一五六

淨名は衆香國の菩薩の嘆を述成す……………一五七

此の土の菩薩の淨土に生ずる法を問ふ……………一五九

淨名は八法有るを答ふ……………一六〇

大衆は益を得る……………一六三

第十一 菩薩行章

「菩薩行章の名稱の由來」・「維摩經の正説について」	一六四
菩薩行章の科段分け	一六五
「菩薩行章の科段分け表」・「瑞相を菴羅に現す」	一六七
佛に詣りて敬を致す	一六九
佛に詣りて敬を致す	一七〇
御語釋（今正しく是れ時なり）について	一七一
釋迦如來は諸菩薩を慰問す	一七二
阿難の香氣を問ふに因りて香飯の能く物を益するの力を明す	一七四
「阿難は佛に何の香ぞやと問ふ」・「佛は菩薩の毛孔の香なりと答ふ」	一七六
「舍利弗は阿難に語る」・「阿難は香の從來する所を問ふ」	一七七
舍利弗は答ふ	一七八
阿難は淨名に香と飯との氣力の久近を問ふ	一七九
淨名は答ふ	一八〇
御語釋（七日にして勢の消するは）について	一八一
道を資くるに就きて答ふ	一八一
御語釋（「正位に入る」について）	一八二
譬へを擧げて結し答ふ	一八二
香に關する太子の御解説一	一八三

香に關する太子の御解説二	一八四
阿難の嘆に因りて如來は廣く佛事を作すこと同じからざるの義を明す	一八六
阿難に對して上方の菩薩を擊切すの科段分け	一八九
勝劣の想を存すること莫かれと誠む	一九〇
諸佛の功德と智慧とは平等無二なることを釋す	一九一
是の如きの事は唯菩薩のみ證るを得可し	一九三
衆香國の菩薩は佛の說法を請ひ宮に還るの科段分け	一九五
過を悔いて說法を請ふ	一九六
佛は諸菩薩の爲に說法すの科段分け	一九七
盡と無盡との二種の法門有り、學ぶべしと勸む	一九八
「盡と無盡との體相を出す」・「行を教ふ」	一九八
御話釋（「前の三」について）	一九八
有爲を盡さずと無爲に住せずとの相を釋すの科段分け	二〇〇
功德と智慧、菩薩の空觀と有の善行、方丈の説を證す、について太子の御解説	二〇〇
〔参考〕『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』に於ける	二〇二
「身を生死に留めて平等に物を化するは乃ち佛意に當り」に關する記述	二〇二
〔参考〕『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』に於ける	二〇四
「大士は身を生死に留めて苦を忍びて物を度す」に關する記述	二〇四
功德門に就きて有爲を盡さざるを釋す	二〇六

第十二 見 阿 闍 佛 章

御語釋 (「末學を輕んぜず學を敬ふこと佛の如くす」について) 二〇七

御語釋 (「己が樂に著せず」について) 二〇九

御語釋 (「生死は圓の如し」について) 二〇九

御語釋 (「來り求むる者を見ては善師の想を爲す」について) 二一〇

御語釋 (「諸の淨國嚴飾の事を以て己が佛土を成ず」について) 二一一

御語釋 (「諸の淨國嚴飾の事を以て己が佛土を成ず」について) 二一一

御語釋 (「生死無數劫なれども意に而も勇有り」について) 二一二

御語釋 (「常に無念實相の智慧を求む」について) 二一三

御語釋 (「少欲知足」について) 二一四

御語釋 (「威儀を壞せずして」について) 二一五

〔參考〕『聖德太子の信仰思想と日本文化創業』に於ける
「世法を捨てずとは、…」に關する記述 二一七

智慧門に就きて無爲に任せざるを釋す 二一九

功德と智慧との二門に就きて釋を結す 二二一

衆香の菩薩は教へを奉じて宮に還る 二二三

「見阿闍佛章の名稱の由來」・「維摩經の正説と流通説とについて」 二二五

見阿闍佛章の科段分け 二二六

見阿闍佛章の科段分け表	二二七
佛身は無相にして見る可からざるを明す	二二七
佛は淨名に問ふ	二二八
淨名答ふの科段分け	二二九
妙本は無相にして見る可からず	二三〇
境の事に就きて見る可からざるを明す	二三二
三世に就きて見る可からざるを明す	二三三
「御語釋（「前際」について）・「五陰に就きて見る可からざるを明す」	二三四
百非に就きて見る可からざるを明す	二三五
御語釋（「此岸」について）	二三六
見るべ可らざると結す	二三九
舍利弗、淨名の本處を問ふに因りて、理は生滅無きを明す	二四〇
「舍利弗、淨名の本處を問ふ」・「正しく理は生滅無きを明す」	二四一
理の中には生沒無しと雖も俗の中には生沒有り、爲に淨名の本處を説くを明す	二四四
大衆の渴仰に因りて淨名の本國を見せしむ	二四七
「佛見せしむ可しと勅す」・「淨名勅を奉じて見せしむ」	二四八
佛大衆を勧めて發心せしむ	二五一
本處に還る	二五三
「流通説 科段分け」・「流通の縁由の科段分け」	二五四

第十三 法 供 養 章

正しく此の經の功德を嘆ずの科段分け……………二五五

舍利弗此の經の功德を嘆ずの科段分け……………二五五

「流通説の科段分け表」・「佛、舍利弗に見るや不やを問ふ」……………二五六

舍利弗直ちに答ふ……………二五七

「舍利弗願を發す」・「經を弘むる人を嘆ず」……………二五八

「正しく經の功德を嘆ずの科段分け」・「經の功德の深きを明す」……………二五九

經の報いの輕重の相を列す……………二六〇

「法供養章の名稱の由來」・「帝釋天此の經の功德を嘆ず」……………二六三

財供養を擧げて格量し、法供養の尊きに如からざるを明すの科段分け……………二六七

財供養は法供養に如かずと明す……………二六八

流通説の科段分け表……………二七一

「古事を引き今を證すの科段分け」・「正しく古事を引くの科段分け」……………二七二

法供養の本を出す……………二七三

供養する所の法の體を出すの科段分け……………二七五

「供養する法の體を出す」・「御語釋（「信じ難く受け難し」について）……………二七六

御語釋（「但分別思惟の能く得る所に非ず」）……………二七七

御語釋（「菩薩の法蔵の所攝なり」について）・御語釋（「陀羅尼」について）……………二七八

御語釋（善く義を分別して菩提の法に順ず）について	二七九
御語釋（衆經の上にして）について	二八〇
御語釋（衆の魔事及び諸の邪見を離れて）について	二八一
御語釋（我無く、人無く、衆生無く、壽命無し）について	二八二
或る研究家の説 供養する法の用を明す	二八二
「法供養の相を出す 科段分け」・「七品の功德に就きて法供養の相を明す」	二八四
説の如く修行するに就きて法供養の相を明す	二八五
御語釋（義に依りて語に依らず）について	二八六
御語釋（智に依りて識に依らず）について	二八七
御語釋（了義經に依りて不了義經に依らず）について	二八七
御語釋（法に依りて人に依らず）について	二八八
「報利を明すの科段分け」・「法を聞きて恩を報ず」	二八九
誓ひを發して護りを請ふ	二九〇
如來記を賜ふ	二九一
「正しく得益を明すの科段分け」・「月蓋王子の自らの益を明すの科段分け」	二九二
他の益を明す	二九三
古今を會通す	二九四
勸むるを結す	二九五

第一四 囑 累 章

「囑累章の名稱の由來」・「囑累章 科段分け」	二九六
流通説の科段分け表	二九七
彌勒に付囑すの科段分け	二九七
正しく付囑す	二九八
「彌勒旨を奉ずの科段分け」・「上の第三の惡を離れよと誠むるを奉ず」	三〇二
上の第一の正しく經を以て付囑するを奉ず	三〇三
上の第二の流通を勸むるを奉ず	三〇四
「如來述成す」・「餘の諸々の菩薩流通を誓ふの科段分け」	三〇五
諸々の菩薩流通を誓ふ	三〇六
「四天王を通ずる人を護らんと誓ふ」・「阿難に付囑すの科段分け」	三〇七
「佛付囑す」・「旨を奉じて經の名を請ふ」	三〇八
佛經の名を説く	三〇九
諸人は歡喜し奉行す	三一〇

目次

					上卷
					目次大要
					總序
				第一	佛國章
				第二	方便章
			第三	弟子章	
		中卷			
		目次大要			
	第四	菩薩章			
	第五	文殊師利問疾章			
	第六	不思議章			

凡 例

- 一、太子『義疏』本文(原漢文)の「現代語譯」は「あります體」とした。「註」はその節の末尾に附す。
- 一、太子『義疏』本文(原漢文)の「訓讀文(訓み下し文)」は五字下げとした。(註)はその節の末尾に附す。
- 一、『維摩經』經典本文(原漢文)は「くんとん訓點文(返り点・送りがななど)・「訓讀文」・「現代語譯」の順とした。現代語譯の文體は「である體」とした。
- 一、共同研究者の「研究」の文體は、「あります體」とした。
- 一、「現代語譯」「訓讀文」中のゴシック活字は經典の語句の引用であることを示す。
- 一、用字法について—漢字は正漢字を用ひたが一部、当用漢字も使用。かなづかひは歴史的かなづかひを用ひる。但し、漢字音のふり仮名については、現代かなづかひを併用した。
- 一、底本及び主たる参考書について—底本として、法隆寺藏版『昭和會本・維摩經義疏』を使はせて戴き、主たる参考書として四天王寺藏版『四天王寺會本・維摩經義疏』を利用して戴いた。
- 一、佛教語の解説について—「註」の佛教語の解説は、主として次の辭典を使はせて戴いた。

『織田・佛教大辭典』織田得能著

『模範佛教辭典』聖典刊行會編纂部編

『新・佛教辭典』石田瑞麿他著

『佛教大辭典』中村 元著

第七 觀衆生章

〔觀衆生章の名稱の由來〕（現代語譯）

此の經典の第七章は觀衆生章であります。

此の章は、菩薩は衆生をどのやうに觀すべきかを説き明しますので、此の章の名稱を『觀衆生集』と名づけます。

（訓讀文）

觀衆生章第七なり。

此の章は菩薩の衆生を觀することを明すが故に、因り章の目と爲すなり。

〔中根の人は四の疑ひを生ず〕（現代語譯）

此の章と次の佛道章とは中根の人（根機の中程度の人）を教化濟度するための章であります。即ち上述の文殊問疾章で釋し明した通りであります。

中根の人は、上述の文殊問疾章の中の問答を聞いて四つの疑ひを起します。

第一に、上述の文殊菩薩の問ひに答へて維摩居士は、「菩薩は本質として眞實に病むことはありません。ただ惑ひ病む衆生を教化濟度せんが爲に假りに病ひの姿を現はすのです。」と云ひました。中根の人は此の世の生存を希求するために、生きることに執着します。そして衆生は眞實に存在するといふのが眞理であると執着します。それ故に菩薩が病むのは、

眞理なる衆生の存在がその本になつてゐるといふ疑ひを起します。

第二に、また菩薩が衆生を愛することを、世の中の父母が自分の子を愛することに喩へるを聞いて、中根の人は疑ひを起

します。世の父母の子に對する愛情は極めて深いと言つても、それは我が子に對する偏つた愛である、若し菩薩の愛がこれと同じであるならば愛情に執着した慈悲心を未だ捨て去つてゐないことになる、そのやうな執着ある慈悲心を以てどうして衆生を平等に教化濟度することができようか、といふ疑ひであります。

第三に、上述に於て病ひある菩薩の慰諭（安んじ慰め、教へ導く）について云ひました。「菩薩は、この世のはかなく無常であることを觀じ體得してゐるけれども、なほ迷ひあるこの世に留まつて苦を忍んで衆生を教化濟度します。」と。また病ひある菩薩の調伏（心を正しくととのへ、悪心を抑へ除く）を説き明して言ひました。「菩薩は迷ひある此の世に再び生れ出る惡業を斷ち切つてゐるけれども、ただ衆生を教化濟度せんが爲に六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天）の迷ひの世界に生れ出ます。そして我が身に苦があつても、惡に惱み苦しむ衆生を教化濟度せんと大慈悲心を起します。」と。これらを聞いて中根の人は疑ひを起します。その身を迷ひある此の世に留め、苦を忍んで衆生を教化濟度するのは、唯上位のさとり境地にある菩薩のみが爲し得ることであつて、新たに佛道を學びはじめた菩薩にはとても無理であらう、との疑ひであります。

第四に、上述の菩薩が實踐すべき種々の中道の行を列擧して調伏の道理を明らかにして結びの文言とするのを聞いて、中根の人は疑ひを起します。菩薩が實踐すべき道理として、若し爲すべきあれば爲し、若し爲すべからざることあれば爲さず（例へば、涅槃に住れども、永く滅度せず）とありますが、兩者を明らかに分別できないといふ疑ひであります。

（訓讀文）

此より下の兩章は中根の人を化せんが爲なり。即ち上に釋するが如し。

中根の人は上の問疾章を聞きて即ち四の疑ひを生ず。

一には上に問疾に答へて、菩薩は本實の病ひ無し、但物の爲に病むと云へり。中根は存を樂へば即ち執すらく。理の中に實に衆生有り。故に疾を現ずるは必ず衆生を以て本と爲すと。

二には又菩薩の衆生を愛することを世の父母の己が子を愛するに喩ふるを聞きて。則ち疑ひを生ずらく。

世の父母の子を愛すること重しと雖も猶是れ偏愛なり。菩薩若し此に同ぜば愛見未だ亡ぜず。何ぞ能く平等に物を化せんやと。

三には上に慰諭して云へり。菩薩は無常を觀すと雖も、猶生死に留りて苦を忍びて物を濟ふと。又調伏を明して云へり。菩薩は身を受くるの業無しと雖も、但物を化せんが爲に猶六道の身を受く。設ひ身に苦あるも惡趣の衆生を念じて大悲心を起すと。中根は疑ひを生ずらく。身を生死に留めて苦を忍びて物を濟ふは、唯上地の議る所にして、是れ新發の堪ふ可きに非ざらんと。

又上に菩薩の種種の中道の行を擧げて調伏を結成するを聞きて、則ち疑ひを生ずらく。理として若し爲すべきは則ち爲し、若し爲すべからざるは則ち爲さずとは、何ぞ其れ定まり無きやと。

〔觀衆生章の科段分け〕（現代語譯）

中根の人は 實踐すべきまことの道についてためらひがあり、不安な氣持を有してゐます。それ故に菩薩はどのやうに衆生を觀すべきかといふ此の章を擧げて、中根の人の疑ひを釋き明します。今、中根の人の疑ひは四つありますから、此の章には當然に四つの項目があります。

第一に、初めから菩薩は衆生を觀すること此の若しと爲すに迄るまでは、衆生の存在なるものは固定的實體の無い空であつて、幻や夢の如きものである、と菩薩は衆生を觀察します。その觀察によつて中根の人の第一の疑ひ、即ち衆生は眞實に存在するといふ執着と疑ひとを取り除くのであります。

第二に、文殊師利の言はく。若し菩薩にして是の觀を作す者。云何んが慈を行ぜんから以下、菩薩の慈悲は差別對立の相を超えてゐる慈悲であることを説き明して、以て中根の人の第二の疑ひ、即ち菩薩の慈悲は世の父母の子に對する偏つた愛情と同様ではないかといふ疑ひを取り除きます。

第三に、文殊師利。又問ふ。生死に畏れ有る菩薩は當に何をか所依とすべきから以下は、菩薩は安住の據り所としては佛陀

の功德におすがりする他ないといふ意義を廣く説き明して、以て中根の人の第三の疑ひ、—その身を迷ひある此の世に留め、苦を忍んで衆生を教化濟度するのは、唯上位のさどりの境地にある菩薩のみが爲し得ることであつて、新たに佛道を學びはじめた菩薩にはとても無理であらう、—といふ疑ひを取り除きます。

第四に、時に維摩詰の室に一りの天女有りから以下は、中根の人の第四の疑ひ、即ち菩薩が實踐すべき中道の行について、爲すべきこと爲すべからざること、此の兩者を明らかに分別できないといふ疑ひをとりのぞきます。

(訓讀文)

此の如く道門に踟躕して心を不安に置く。所以に此の章を擧げて釋を爲すなり。今此の四の疑ひを遣るが故に自ら四重有り。

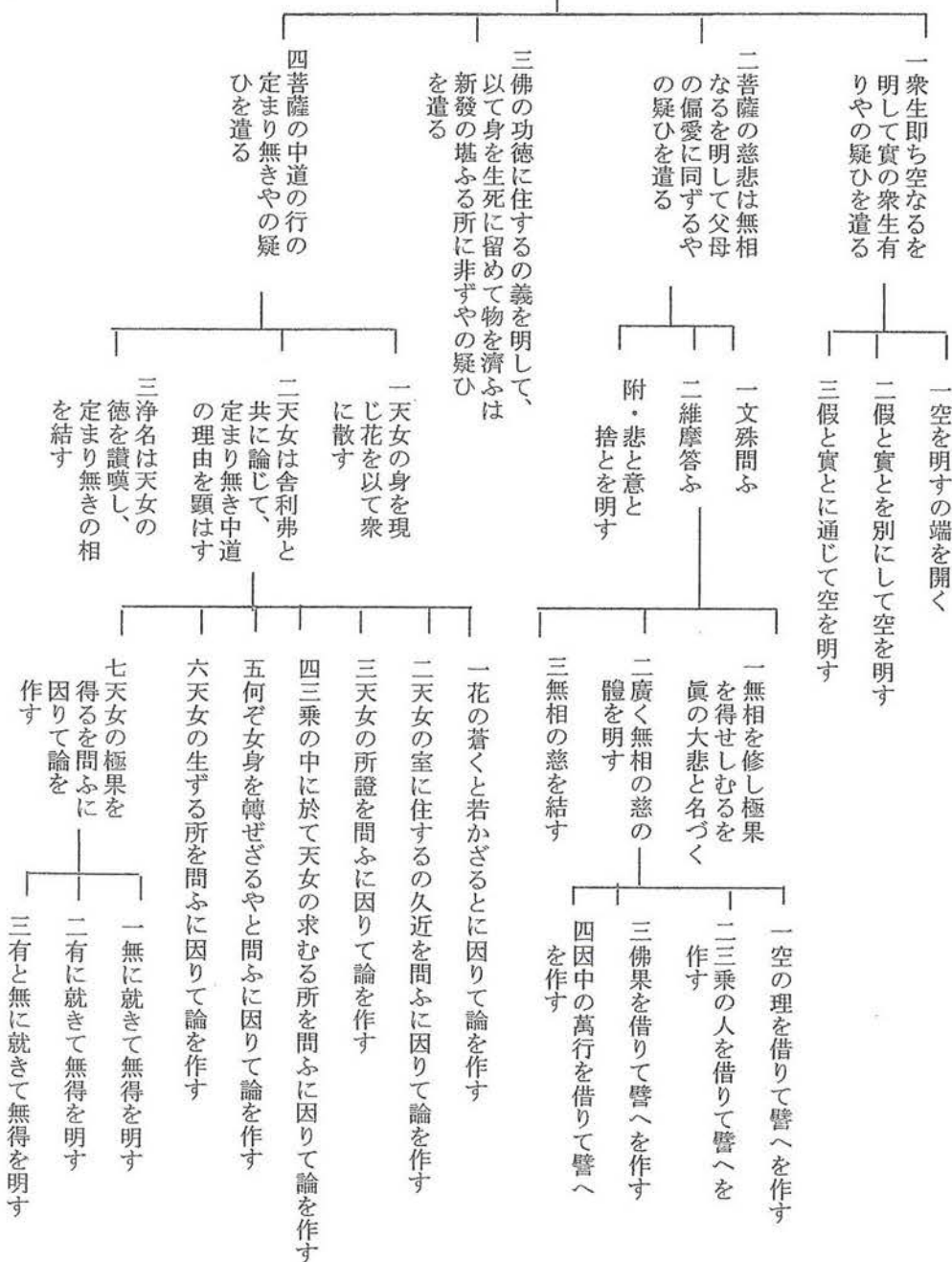
第一に菩薩は衆生を觀すること此の若しとに訖るまで、菩薩は衆生即ち空にして實無し、幻の如く夢の如しと觀じ、以て第一の實に衆生有りやの疑ひと執とを遣る。

第二に文殊師利の言はく、若し菩薩にして是の觀を作す者。云何んが慈を行ぜん従り以下、菩薩の慈は則ち是れ無相の慈なりと明して、以て世の父母の偏愛に同するやの疑ひを遣る。

第三に文殊師利。又問ふ。生死に畏れ有る菩薩は當に何をか所依とすべき従り以下、廣く佛の功德に住するの義を明して、以て第三の身を生死に留めて苦を忍びで物を濟ふは、唯上地に在り、新發の堪ふる所に非ずやの疑ひを遣る。

第四に時に維摩詰の室に一りの天女有り従り以下、其れ何ぞ定まり無きやの疑ひを遣る。

観衆生章



〔衆生即ち空なるを明して實の衆生有りやの疑ひを遣る〕（現代語譯）

觀衆生章の中の第一は衆生は固定的實體の無い空であることと觀察するのでありますが、その中には全部で三十の譬へを擧げて空である理由を釋き明します。その中を三つの項目の分けま。

第一に、初めの一つ譬へ、即ち幻術師が現はし出す幻の人の譬へは衆生は空であることの總體についての端緒を開いてゐるのであります。

第二に、智者の……が如くから以下、十四の譬へがあります。別門（個別的な見方）について衆生の空なることを説き明しま

す。假（現象として假に存在する）と實（眞理として存在する）とを個別的に説き明してゐますので、別門と言ひます。第五の大の如くから以下は、そのやうな存在はあり得ないといふ眞理、即ち眞理における空について説き明してゐます。

第三に、無色界の色の如くから以下、十五の譬へがあります。通門（共通した見方）について衆生の空なることを説き明します。假と實とを共通して説き明してゐますので、通門と言ひます。

此の三項目には皆夫々二つの内容が含まれてゐます。第一には正しく衆生の空なることを説き明し、第二には此の若しと爲すを以て結びの文言としてゐます。經典をご覽なさい。

（訓讀文）

第一の衆生は空なりと觀ずることを明す中に就きて、凡そ三十の譬へを擧げて釋を爲す。分ちて三と爲す。

第一に初めの一の幻の譬へは惣じて端を開く。

第二に智者の……が如く従り以下、十四の譬へ有り、別門に就きて空を明す。假と實とを別に明せり。故に別と

言ふ。第五の大の如く従り以下、實の空を明す。

第三に無色界の色の如く従り以下、十五の譬へ有り。通門に就きて空を明す。通じて假と實とを明す。故に通

と言ふ。

此の三重に皆二有り。一は正しく空を明し。二は此の若しと爲す（義疏は是を以て結す。見つ可し。

經典（空を明すの端を開く）

爾ノ時ニ。文殊師利。問テ。維摩詰ニ。一言ハク。菩薩ハ云何ンガ觀ズルヤニ。於衆生ヲ。

維摩詰ノ言ク。

譬ヘバ如シニ。幻師ノ見ルガニ。所幻ノ人ヲ。菩薩ハ觀ズルコトニ。衆生ヲ。爲スレ。若シトレ。此ノ。

經典訓讀文

爾そのときに、文殊師利もんじゆしり、維摩詰ゆいまきつに問うて言はく。菩薩ぼさつは云何いんが衆生しゆじようを觀かんずるや。

維摩詰の言はく。

譬たとへば幻師げんしの所幻しよげんの人ひとを見るみが如ごとし。

菩薩ぼさつは衆生しゆじようを觀かんずること此かくの若ごとしと爲なす。

經典現代語譯

維摩居士が不可思議解脱の菩薩について語り終つた時、文殊師利菩薩は維摩居士に問うて言ひました。「菩薩は如何に衆生を觀察すべきでせうか。」

維摩居士は答へて言ひました。

「譬へば幻術師が自分の幻術によつて現はし出した幻まぼろしの人を見ると同じやうに、即ち衆生に實體は無しと觀察するのです。菩薩は衆生を觀察すること、此のやうに爲すべきです。」

經典（假と實とを別にして空を明す）

如クニ。智者ノ見ルガニ。水中ノ月ヲ。如クニ。鏡中ノ見ルガニ。其ノ面像ヲ。如クニ。熱時ノ炎ノ。如クニ。呼ブ聲ノ響ノ。如クニ。空中ノ雲ノ。如クニ。水ノ聚沫ノ。如クニ。水上ノ泡ノ。如クニ。芭蕉ノ堅キガ。如シニ。電ノ久ク住スルガ。如クニ。第五ノ大ノ。如クニ。第六ノ陰ノ。如

クニ第七ノ情ノ一。如クニ十三ノ入ノ一。如シニ十九ノ界ノ一。菩薩ハ觀ズルコトニ衆生ヲ一爲スレ若シトレ此ノ。

經典訓讀文

智者の水中の月を見るが如く、鏡中の其の面像を見るが如く、熱時の炎の如く、呼ぶ聲の響の如く、空中の雲の如く、水の聚沫の如く、水上の泡の如く、芭蕉の堅きが如く、電の久しく住するが如し。第五の大の如く、第六の陰の如く、第七の情の如く、十三の入の如く、十九の界の如し。菩薩は衆生を觀すること此の如しと爲す。

經典現代語譯

「さとりりの智慧ある人は、水中に映る月影を實體無しと見るが如く、鏡に映る面像を同じく、地上が熱せられた時の陽炎を同じく、呼ぶ聲の響を同じく、空中に浮ぶ雲を同じく、水の泡の集りを同じく、水に浮ぶ泡を同じく、芭蕉は堅いといふ實體無しと見るが如く、電光は一瞬であつて久しく照らし續ける實體無しと見るが如く、衆生を觀察するのです。」

四大(地・水・火・風)は存在するが第五の大は存在しない如く、五陰(色・受・想・行・識)は存在するが第六の陰は存在しない如く、六根(眼・耳・鼻・舌・身・意)は存在するが第七の根は存在しない如く、六根と六境(色・聲・香・味・觸・法)との十二處は存在するが第十三の處は存在しない如く、十二處と六識(六根の認識作用)との十八界は存在するが第十九の界は存在しない如く、衆生には實體無しと觀察するのです。菩薩は衆生を觀察すること、此のやうに爲すべきです。」

經典(假と實とを別にして空を明す)

如クニ無色界ノ色ノ一。如クニ焦穀ノ芽ノ一。如ク須陀洹ノ身見ノ一。如クニ阿那含ノ入胎ノ一。如クニ阿羅漢ノ三毒ノ一。如クニ得忍ノ菩薩ノ貧・患・毀禁ノ一。如クニ佛ノ煩惱習ノ一。如クニ盲者ノ見ル色ノ一。如クニ入ルヒトノ滅盡定ニ一出入ノ息ノ一。如クニ空中ノ鳥ノ跡ノ一。如クニ石女ノ兒ノ一。如クニ化人ノ煩惱ノ一。如クニ夢ノ所ノ見ル已ニ覺メル寤タルガ一。如クニ滅度ノ者ノ受身ノ一。如シニ無煙之火ノ一。菩薩ハ觀ズルコトニ衆生ヲ一爲スレ若シトレ此ノ。

經典訓讀文

無色界の色の如く、焦穀の芽の如く、須陀洹の身見の如く、阿那含の入胎の如く、阿羅漢の三毒の如く、得忍の菩薩の貧・患・毀禁の如く、佛の煩惱習の如く、盲者の見る色の如く、滅盡定に入るひとの出入の息の如く、空中の鳥の跡の如く、石女の兒の如く、化人の煩惱の如く、夢に見る所の已に寤めたるが如く、滅度の者の受身の如く、無烟の火の如し。菩薩は衆生を觀すること此の若しと爲す。

經典現代語譯

「無色界に色が無いが如く、焼け穀物に芽が出ないが如く、三界の見惑を断ち切つた須陀洹には見惑が無いが如く、欲界の煩惱を断じ盡した阿那含は再び欲界に生れ還ることが無いが如く、すべての煩惱を断じ盡した阿羅漢には貧・瞋・癡の三毒が無いが如く、不生不滅の理を悟つた菩薩には貧・患・毀禁（戒めを犯す）が無いが如く、佛陀には煩惱の餘習が無いが如く、盲者は色像を見ることが出来ないが如く、心のはたらきを滅し盡した滅盡定には出入する息が無いが如く、空中を飛ぶ鳥には跡が無いが如く、石女には兒が無いが如く、幻術で造り出された幻の人には煩惱が無いが如く、夢に見たものは目覺めた時には已に 無いが如く、あの世へ逝つた者は再び此の世に生をうけることが無いが如く、煙の無い所には火は無いが如く、衆生には實體無しと觀察するのです。菩薩は衆生を觀察すること、此のやうに爲すべきです。」

〔菩薩の慈は無相なるを明して父母の偏愛に同するやの疑ひを遣るの科段分け〕（現代語譯）

觀衆生章の第二に、菩薩の大慈は無相（差別對立の相を超脱してある）であることを説き明し、以て菩薩の大慈と世の父母の我が子に執著した偏つた慈愛とは同じではあるまいかといふ疑問を取り除くのでありますが、この中には文殊菩薩の問ひと維摩居士の答へとの二つの項目があります。

（訓讀文）

第二に菩薩の慈は則ち是れ無相の慈なるを明して、以て世の父母の偏愛に同ずといふ疑ひを遣る中に就きて、即ち問ひと答へと二と爲す。

〔文殊問ふ〕（現代語譯）

（菩薩の大慈は無相であることを説き明し、以て菩薩の大慈と世の父母の我が子に執著した偏つた慈愛とは同じではあるまいかといふ疑問を取り除く、その中の第一に文殊菩薩が問ひます。）

文殊菩薩の問ひの若し菩薩にして是の觀を作す者、云何が慈を行ぜんとは、衆生を觀察するに際し、認識の對象たる衆生は皆空であつて實體は無いと觀するのであれば、實體の無い衆生に對して慈愛を垂れる必要はないと思ひますが、何故菩薩は慈愛を行ずるのでせうか、といふことを説き明してゐます。

（訓讀文）

文殊問ひて言はく。若し菩薩にして是の觀を作す者、云何が慈を行ぜんとは、若し衆生を觀じて境は皆空にして實無かる可くんば、云何が慈を行じて以て群生に被らしむるやと明かす。

經典（文殊問ふ）

文殊師利ノ言ク。若シ菩薩ニシテ作スニ是ノ觀ヲ一者。云何が行ゼンレ慈ヲ。

經典訓讀文

文殊師利の言はく。

若し菩薩にして是の觀を作す者、云何が慈を行ぜん。

經典現代語譯

文殊菩薩は問うて言ひました。「若し菩薩が衆生を實體無しと觀するのであれば、實體無きものに慈愛を垂れる必要はないと思ひますが、何故菩薩は衆生に對して慈愛を行ずるのでせうか。」

〔維摩答ふの科段分け及び文殊の問ひの由來〕（現代語譯）

菩薩の大慈は無相であることを説き明し、以て菩薩の大慈と世の父母の我が子に偏つた慈愛とは同じではあるまいかといふ疑問を取り除く中の第二は、維摩居士が答へるのでありますが、その第二の中に三つの項目があります。

第一に、維摩居士は直ちに答へます。菩薩は三空（衆生を觀察するについて説いた三空。端を開く空の譬へ、別門の空、通門の空）に明かに通達し、以て衆生の爲に三空を説法し、衆生をして無相（差別對立を超越する）を修行せしめ終に最上至極の果報を得さしめる、これを菩薩の眞の大慈と名づける、といふのであります。

第二に、寂滅の慈を行すから以下は、無相の大慈の本體を廣範に亘つて説き明します。

第三に、無相の大慈についての結びの文言であります。

ところで此の維摩居士の答へを引き出すために文殊菩薩は問ひを發するわけですが、表面に現はれてゐる問ひの經典の文言は、上述の衆生を觀察するについて説いた三空に基いて直接的に由來してゐます。問ひを發する内々の思ひは、菩薩の大慈は世の父母の我が子に執著した偏つた慈愛と同じではあるまいかといふ疑ひ、その疑ひを取り除くことを意圖してゐるのであります。

（訓讀文）

第二の淨名の答への中に就きて即ち三有り。

第一に直ちに答ふ。菩薩は三空に明達して即ち以て爲に衆生に説き、無相を修し終に極果を得せしむるを眞の大慈と名づくとなり。

第二に寂滅の慈を行す従り以下、廣く無相の慈の體を明す。

第三に無相の慈を結す。

然るに此の中の文殊の發問に就きて外の文は直ちに上の三空に因りて來れり。内の心は則ち世の父母の偏愛に同ずるの疑ひを遣るが故に來るなり。

〔無相を修し極果を得しむるを眞の大慈と名づく〕

(この箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

經典

維摩詰ノ言ク。菩薩ハ作シニ是ノ觀ヲ一已テ自ラ念ズ。我當ニ爲ニ衆生ノ一説ク如キノ斯ノ法ヲ。是レ即チ眞實ノ慈ナリ也。

經典訓讀文

維摩詰の言はく。菩薩は是の觀を作し已りて自ら念ず。我當に衆生の爲に斯の如きの法を説くべし。是れ即ち眞實の慈なり。

經典現代語譯

維摩居士は答へて言ひました。「菩薩は、衆生は實體の無い空であるとの觀察を成就し終つて、自ら心に思ひ定めます。私は衆生の爲に、この空を自覺せしむるべく法を説かねばならない。(それは衆生をして無相を修せしめ極果を得さしめるので、)これこそ眞實の大慈なのです。」

〔廣く無相の慈の體を明すの科段分け〕(現代語譯)

文殊菩薩の問ひに維摩居士が答へる、その中の第二は無相の大慈悲心の本體を廣汎に亘つて説き明しますが、此の中にも亦四つの項目があります。

第一に、空の理(例へば空の理は寂滅であつて生滅が無いなど)を借りて無相の大慈に譬へをなします。

第二に、阿羅漢の慈から以下は、三乘(緣覺乘・菩薩乘・佛乘)の人を借りて無相の大慈に譬へをなします。

第三に、自然の慈を行すから以下は、佛果(佛のさとるといふ究極の結果)を借りて無相の大慈に譬へをなします。

第四に、無厭の慈を行ずから以下は、菩薩の修行時代の萬善の行を借りて無相の大慈に譬へをなします。

(訓讀文)

第二の廣く慈の體を明す中に就きて亦四有り。

第一に空の理を借りて慈の爲に譬へを作す。

第二に阿羅漢の慈従り以下、三乘の人を借りて譬へを爲す。

第三に自然の慈を行ず従り以下、佛果を借りて譬へを爲す。

第四に無厭の慈を行ず従り以下、因中の萬行を借りて譬へを爲す。

〔空の理を借りて譬へを作す〕(現代語譯)

無相の大慈の本體を廣汎に亘つて説き明す中の第一に、空の理を借りて譬へをなしますが、その中に全部で九句あります。

寂滅の慈を行ず、所生滅無きが故に(菩薩は、寂靜にして一切の差別相を離れてゐる大慈を行ずる、その大慈は空の理の如く生滅が無い故である)とは、空の理は寂靜にして一切の相を離れ、生じたり滅したりすることは無いことを説き明してゐます。菩薩の大慈は寂靜にして一切の相を離れ、生じたり滅したりすることが無いのは、空の理と同様であると説き明してゐます。これ以下の八句も此と同様に解釋します。内とは六根(眼・耳・鼻・舌・身・意)であります。外とは六塵(色・聲・香・味・觸・法)〔思考の對象〕であります。空の理の中に於ては、六根はその對象の六塵に働きかけることの無いことを説き明してゐます。

(訓讀文)

第一の空の理を借りて譬へを爲す中に就きて凡て九句有り。

寂滅の慈を行ず、所生滅無きが故にとは、空の理は寂滅にして生滅無きを明すなり。慈は寂滅にして生滅無き

こと亦空の理の如しと明すなり。下の八句は此に例同して釋す。内とは根なり。外とは塵なり。空の理の中には

根と塵との合す可きこと無きを明すなり。(經典は無所生で、滅の語は無い)

經典（空の理を借りて譬へを作す）

行ズニ寂滅ノ慈ヲ一。無キガニ所生一故ニ。行ズニ不熱ノ慈ヲ一。無キガニ煩惱一故ニ。行ズニ等之慈ヲ一。等クスルガニ三世ヲ一故ニ。行ズニ無諍ノ慈ヲ一。無キガニ所起一故ニ。行ズニ不二ノ慈ヲ一。内ト外ト不ルガニ合セ故ニ。行ズニ不壞ノ慈ヲ一。畢竟盡ノ故ニ。行ズニ堅固ノ慈ヲ一。心ノ無キガニ毀ルコト故ニ。行ズニ清淨ノ慈ヲ一。諸法ノ性淨キガ故ニ。行ズニ無邊ノ慈ヲ一。如ナルガニ虚空ノ一故ニ。

經典訓讀文

寂滅じやくめつの慈じを行ぎやうず、所生しよしよう無なきが故ゆゑに。不熱ふねつの慈じを行ぎやうず、煩惱ぼんのう無なきが故ゆゑに。等とうの慈じを行ぎやうず、三世さんぜを等ひとしくするが故ゆゑに。無諍むじやうの慈じを行ぎやうず、所起しよき無なきが故ゆゑに。不二ふにの慈じを行ぎやうず、内ないと外がいと合がつせざるが故ゆゑに。不壞ふえの慈じを行ぎやうず、畢竟盡ひつきうじんの故ゆゑに。堅固けんこの慈じを行ぎやうず、心こころの毀やぶるること無なきが故ゆゑに。清淨しやうじやうの慈じを行ぎやうず、諸法しよほうの性淨しよじやうきが故ゆゑに。無邊むへんの慈じを行ぎやうず、虚空こくうの如ごとくなるが故ゆゑに。

經典現代語譯

維摩居士は次に言ひました。

「菩薩じやくめつは、寂滅じやくめつ（寂靜にして一切の差別相を離れてゐる）の大慈だいじを行ぎやうずる、〃その大慈だいじは空の理の如く〃（以下此の語句は省略）生なまずることも滅めつすることも無ないが故ゆゑにです。不熱ふねつ（苦しみに身みは熱ねつし心こころは惱ねむむ、それが無ない）の大慈だいじを行ぎやうずる、煩惱ぼんのうが無ないが故ゆゑにです。平等びやうどうの大慈だいじを行ぎやうずる、三世さんぜ（過去・現在・未來）にわけ隔へだてなく及およぶすが故ゆゑにです。異論いろんの生なまずること無なき大慈だいじを行ぎやうずる、論争ろんじやうの起おこることは無ないが故ゆゑにです。彼此たつたの別わかなき不二ふにの大慈だいじを行ぎやうずる、六根ろくこん（眼・耳・鼻・舌・身・意）がその對象たいさうの六塵ろくじん（色・聲・香・味・觸・法）に働たづまかけることは無ないが故ゆゑにです。壞滅わいめつすること無なき大慈だいじを行ぎやうずる、究極きうごくをきはじめ盡じんして消滅しょうめつは無ないが故ゆゑにです。堅固けんこなる大慈だいじを行ぎやうずる、心こころが傷やぶつきやぶられることは無ないが故ゆゑにです。清淨しやうじやうなる大慈だいじを行ぎやうずる、一切いっけつの事象じじやうの本姓ほんじやうは清淨しやうじやうなるが故ゆゑにです。かぎり無なき無邊むへんの大慈だいじを行ぎやうずる、虚空こくうの如ごとく無邊むへんなるが故ゆゑにです。」

〔三乘さんじやうの人ひとを借かりて譬へを爲なす〕（現代語譯）

無相の大慈悲心の本體を廣汎に亘つて説き明す中に、三乘（緣覺乘・菩薩乘・佛乘）の人を借りて譬へを爲しますが、それ自體に四句あります。

初の句の阿羅漢の慈を行ず、結賊を破るが故に。（菩薩は、阿羅漢といふ最高の聖者の大慈を行ずる。その大悲は煩惱といふ賊をうち破るが故にである）とは、菩薩の大慈は、阿羅漢が煩惱といふ賊をうち破る、それと同様であることを説き明してゐます。これ以下の三句の解釋も此と同じであります。

（訓讀文）

第二の三乘の人を借りて譬へを爲す中に就きて自ら四句有り。

初めの句の阿羅漢の慈を行ず、結賊を破るが故に。とは、慈は羅漢の如く結賊を破ることを明かすなり。下の三句も亦此に同じ。

經典（三乘の人を借りて譬へを爲す）

行ズニ 阿羅漢ノ慈ヲ一。破ルガニ 結賊ヲ一 故ニ。行ズニ 菩薩ノ慈ヲ一。安スルガニ 衆生ヲ一 故ニ。行ズニ 如來ノ慈ヲ一。得ルガニ 眞如ノ相ヲ一 故ニ。行ズニ 佛ノ之慈ヲ一。覺セシムルガニ 衆生ヲ一 故ニ。

經典訓讀文

阿羅漢の慈を行ず、結賊を破るが故に。菩薩の慈を行ず、衆生を安んずるが故に。如來の慈を行ず、如の相を得るが故に。佛の慈を行ず、衆生を覺せしむるが故に。

經典現代語譯

維摩居士は更に次に言ひました。

「菩薩は、阿羅漢（最高の聖者）の大慈を行ずる、〃その大慈は〃（以下この語句は省略）煩惱といふ賊をうち破るが故にです。八地以上の菩薩の大慈を行ずる、衆生に安らぎを與へるが故にです。如來の大慈を行ずる、眞如の相を得るが故にです。佛

陀の大慈を行ずる、衆生を悟りに導くが故にです。」

〔佛果を借りて譬へを爲す〕（現代語譯）

無相の大慈の本體を廣汎に亘つて説き明す中の第三に、佛果（佛のさとるといふ究極の結果）を借りて譬へを爲しますが、この中にも亦四句があります。

初めの句の自然の慈を行ず、無因にして得るが故に。（菩薩は、師にたよらず、おのづからなる大慈を行ずる、その大慈は佛果と同様に原因無くして得るが故にである）とは、佛果を得るには師の導きはありませぬ。それ故おのづからにして、原因無くして佛果を得ると云ふのであります。菩薩の行ずる大慈は無相（差別對立を超越する）でありますから、原因無くして得られることも亦、佛果に原因が無いのと同様であることを説き明してゐます。以下の三句も此と同様に解釋して經典をご覽なさい。

（訓讀文）

第三の佛果を借りて譬へを爲す中に就きて亦四句有り。

初めの句の自然の慈を行ず、無因にして得るが故に。とは、佛果は師無し。故に自然に因無くして得ると云ふなり。慈は無相なるが故に因無きこと亦佛果の因無きが如しと明すなり。下の三句は例同して見つけ可し。

經典（佛果を借りて譬へを爲す）

行ズニ自然ノ慈ヲ一。無レ因ニシテ得ルガ故ニ。行ズニ菩提ノ慈ヲ一。等シク一味ナルガ故ニ。行ズニ無等ノ慈ヲ一。斷ズルガニ諸愛ヲ一故ニ。行ズニ大悲ノ慈ヲ一。導クニ以スルガニ大乘ヲ一故ニ。

經典訓讀文

自然の慈を行ず、無因にして得るが故に。菩提の慈を行ず、等しく一味なるが故に。無等の慈を行ず、諸愛を斷ずるが故に。大悲の慈を行ず、導くに大乘を以てするが故に。

維摩居士は更に次に言ひました。

「菩薩は、師にたよらず、おのづからなる大慈を行ずる、その大慈は」（以下此の語句は省略）佛果と同様に原因無くして得るが故にです。崇高なさとりに基いた大慈を行ずる、平等かつ全く差別が無いが故にです。

等しいものが無いほど勝れてゐる大慈を行ずる、諸々の愛着を断ち切つてゐるが故にです。大乘（他者の教化濟度を第一義とする）の大慈を行ずる、衆生を導くのに大乘の教へを以てするが故にです。」

〔因中の萬行を借りて譬へを爲す〕（現代語譯）

無相の大悲の本體を廣汎に亘つて説き明す中の第四に、菩薩の修行時代の萬善の行を借りて譬へを爲しますが、この中にも亦十二句あります。

初めの句の無厭の慈を行ず、空・無我を觀するが故に。（菩薩は、疲れ厭ふことの無い大慈を行ずる、その大慈は我が所有といふ執着も、自我ありといふ執着も無いが故にである）とは、菩薩は空・無我（我が所有といふ執着の無いのが空、自我ありと執着しないのが無我）を觀じて衆生を教化濟度するのに疲れ厭ふことはありません。菩薩の大慈は此のやうに疲れ厭ふことは無いのです。以下の諸句は此と同様に解釋し推量して下さい。

（訓讀文）

第四の因中の萬行に就きて譬へを爲す中に就きて亦十一句有り。（經典には十二句有り）
 初めの句に無厭の慈を行ず、空・無我を觀するが故に。とは、菩薩は空・無我を觀じて物を化するに厭ふこと無し。
 慈も亦此の如し。下の諸句は此に例して推す可し。

經典（因中の萬行を借りて譬へを爲す）

行ズニ無厭ノ慈ヲ一。觀スルガニ空・無我ヲ一故ニ。行ズニ法施ノ慈ヲ一。無キガニ遺惜一故ニ。行ズニ持戒ノ慈ヲ一。化スルガニ毀禁ヲ一故ニ。行ズニ忍辱ノ慈ヲ一。護ルガニ彼我ヲ一故ニ。行ズニ精進ノ慈ヲ一。荷ヲ負スルガ衆生ヲ一故ニ。行ズニ禪定ノ慈ヲ一。不ルレ受ケレ味ヲ故ニ。行ズニ智慧ノ慈ヲ一。無キガニ不ルレ知ラレ時ヲ故ニ。行ズニ方便ノ慈ヲ一。一切示現スルガ故ニ。行ズニ無隱ノ慈ヲ一。直心清淨ナルガ故ニ。行ズニ深心ノ慈ヲ一。無キガニ雜行一故ニ。行ズニ無誑ノ慈ヲ一。不ルガニ虛假ナラ一故ニ。行ズニ安樂ノ慈ヲ一。令ルガニ得セニ佛ノ樂ヲ一故ニ。

經典訓讀文

無厭の慈を行ず、空・無我を觀するが故に。法施の慈を行ず、遺惜無きが故に。持戒の慈を行ず、毀禁を化するが故に。忍辱の慈を行ず、彼我を護るが故に。精進の慈を行ず、衆生を荷負するが故に。禪定の慈を行ず、味を受けざるが故に。智慧の慈を行ず、時を知らざるが無きが故に。方便の慈を行ず、一切示現するが故に。無隱の慈を行ず、直心清淨なるが故に。深心の慈を行ず、雜行無きが故に。無誑の慈を行ず、虛假ならざるが故に。安樂の慈を行ず、佛の樂を得せしむるが故に。

經典現代語譯

維摩居士は更に次に言ひました。

「菩薩は、疲れ厭ふことの無い大慈を行ずる、〃その大慈は〃（以下此の語句は省略）我が所有といふ執着も、自我ありといふ執着も無いが故にです。衆生に佛法を説き導くといふ大慈を行ずる、與へることを惜しまないが故です。戒律を守る持戒の大慈を行ずる、戒律を犯す人々を導くが故にです。苦難を耐へ忍ぶ忍辱の大慈を行ずる、内外からの苦難をしりぞけ護るが故にです。精魂こめて努め勵む精進の大慈を行ずる、衆生を荷つて導く努力をするが故にです。心を統一して亂さない禪定の大慈を行ずる、五欲（色・聲・香・味・觸）の味におぼれることが無いが故にです。眞理を見きはめる智慧の大慈を行ずる、衆生を教化濟度すべき時を知らざること無きが故にです。衆生を教化濟度する方便の大慈を行ずる、種々の姿を現はして一切衆生の求めに應ずるが故にです。隠すことの無い大慈を行ずる、直心（純一無雜、素直な心）であり、清淨なるが故にです。

欺くことの無い大慈を行ずる、嘘いつはりが無いが故にです。安樂の大慈を行ずる、佛陀の境地の樂しみを衆生に得さしむるが故にです。」

〔無相の慈を結す〕（現代語譯）

文殊菩薩の問ひに維摩居士が答へる、その中の第三は無相の大慈についての結びの文言であります。菩薩の慈は此の若しと爲すなりといふ經典がこれであります。

（訓讀文）

菩薩の慈は此の若しと爲すなりとは、第三に結す。（義疏は若是）

經典（無相の慈を結す）

菩薩之慈ハ爲スレ、若シト、此ノ也。

經典訓讀文

菩薩の慈は此の若しと爲すなり。

經典現代語譯

維摩居士は結びの言葉を述べた。

「菩薩の大慈は以上述べた通りです。」

〔無相の慈を結す〕（現代語譯）

また一説では次のやうに解釋してゐます。―此の箇所はすべて他者をしてさとりを得さしめようとするのである。菩薩の大慈は、現前の対象の人をして寂滅の理（寂靜にして一切の差別相を離れるといふ眞理）を得さしめるが故に、菩薩の大慈を、寂

滅の大慈」と名づけることを説き明してゐる。所生無きが故に（菩薩の大慈は空の理の如く、生ずることも滅することも無いが故にある）とは、菩薩の大慈悲を「寂滅の大慈」と名づけるのは、現前の對象の人をして無生（生ずることも滅することも無い）、寂滅の理を得さしめるが故に「寂滅の大慈」と名づける、その理由を釋き明してゐる。以下の諸句は皆これと同様に解釋する。語句の配列は異なることはない、——と。

また他の一説は次のやうに解釋してゐます。——端的に菩薩の大慈は「寂滅の大慈」だと云つてゐる。「寂滅の大慈」と名づける理由は、菩薩の大慈は生ずることも滅することも無きが故にである、——と。

〔訓讀文〕

又一に解す。皆他をして解を得せしむることを作す。菩薩の慈は前人をして寂滅の理を得せしむるが故に、菩薩の慈を名づけて寂滅の慈と爲すことを明すなり。無所生無きが故にとは、菩薩の慈を名づけて寂滅と爲す所以は、前人をして無生寂滅の理を得せしむるが故に名づけて寂滅と爲すことを釋るなり。下の諸句は類するに皆爾なり。段を分つこと異ならざるなりと。

又解す。直に菩薩の慈は寂滅なりと云ふなり。寂滅と名づくる所以は、慈は所生無きが故なりと。

〔悲と喜と捨とを明す〕（現代語譯）

菩薩の大慈は無相（差別対立の相を超えてゐる）であることを説き明しましたので、「慈」と共に四無量心である「悲」と「喜」と「捨」について、夫々一問一答を以て説き明します。經典を御覽なさい。

〔訓讀文〕

次に各一の問答を擧げて以て悲と喜と捨とを明かす。則ち見つ可し。

經典（悲と喜と捨とを明す）

文殊師利。又問フ。何ヲカ謂テ爲スレ悲ト。

答テ曰ク。菩薩所作ノ功德ハ。皆與ニ一切衆生一共ニスレ之ヲ。何ヲカ謂テ爲スレ意ト。

答テ曰ク。有レバ。所ニ饒益一歡喜シテ無レ悔ルコト。何ヲカ謂テ爲スレ捨ト。

答テ曰ク。所作ノ福裕。無シレ所ニ希望スル一。

經典訓讀文

文殊師利、又問ふ。何をか謂ひて悲と爲す。

答へて曰はく。菩薩所作の功德は、皆一切衆生と之を共にす。何をか謂ひて喜と爲す。

答へて曰はく。饒益する所有れば歡喜して悔ゆること無し。何をか謂ひて捨と爲す。

答へて曰はく。所作の福裕、希望する所無し。

經典現代語譯

文殊菩薩はまた問ひました。「悲」とは如何なることでせうか。」

維摩居士は答へて言ひました。「菩薩の功德は、皆一切衆生に施して苦勞を救ふのです。」

「喜」とは如何なることでせうか。」

答へて言ひました。「他に利益を與へることがあれば、共に歡喜して悔が無いのです。」

「捨」とは如何なることでせうか。」

答へて言ひました。「幸せに過す身であつても、幸せを求め望むことは無いのです。」

〔佛の功德に住するの義を明して、以て身を生死に留めて物を濟ふは

新發の堪ふる所に非ずやの疑ひを遣る〕 (現代語譯)

觀衆生章の第三は、文殊師利、又問ふ。生死に畏れ有る菩薩は當に何をか所依とすべき (迷ひある此の世に身を留めることを恐れ

をのく菩薩は、何を依りどころとすべきでせうか) から以下であります。

菩薩は安住の依り所としては佛陀の功德におすがりする他はないといふ意義を説き明して、以て中根の人の第三の疑ひ、—その身を迷ひある此の世に留め、苦を忍んで衆生を教化濟度するのは、唯上位のさとり境地にある菩薩のみが爲し得ることであつて、新たに佛道を學びはじめた菩薩にはとても無理であらう、—といふ疑ひを取り除きます。今また、新たに佛道を學びはじめた菩薩であつても佛陀の功德の力におすがりする他ない、佛陀の力を蒙り支へられてゐるのですから、どうしてそれに堪へられないことがあらうか、といふことを説き明してゐます。

その中について、全部で十二の間答があります。順を追つて經典を御覽なさい。

(訓讀文)

文殊師利、又問ふ。生死に畏れ有る菩薩は當に何をか所依とすべき従り以下、第三なり。

佛の功德に住するの義を明して、以て第三の身を生死に留めて苦を忍びて物を濟ふは唯上地に在り、是れ新發の堪ふる所に非ずといふことを遣る。今復新發の菩薩なりと雖も佛の功德の力に住せり、何ぞ其れ堪へざらんやと明す。中に就きて凡そ十二の間答有り。即ち文を尋ねて自ら見つべきなり。

經典(佛の功德に住するの義を明して、以て身を生死に留めて物を濟ふは新發の堪ふる所に非ずやの疑ひを遣る)

文殊師利。又問フ。生死ニ有ル畏レ菩薩ハ當ニ何ヲカ所依トス。

維摩詰ノ言ク。菩薩テ於テニ生死ノ畏レノ中ニ當ニ依ルニ如來ノ功德ノ力ニ。

文殊師利。又問フ。菩薩欲セバ依ラントニ如來ノ功德ノ力ニ。當ニ於テカレ何ニ住ス。答テ曰ク。菩薩欲セバ依ラントニ如來ノ功德ノ力ニ者。當ニ住スニ度ニ脱スルニ一切衆生ヲ。

又問フ。欲セバ度セントニ衆生ヲ一當ニ何ヲカ所トス。除ク。答テ曰ク。欲セバ度セントニ衆生ヲ一除クベシニ其ノ煩惱ヲ。

又問フ。欲セバ除カントニ煩惱ヲ一當ニ何ヲカ所トス。行ズル。答テ曰ク。當ニ行ズニ正念ヲ。

又問フ。云何ンガ行ズルヤニ於正念ヲ一。答テ曰ク。當ニ行ズニ不生不滅ヲ一。

又問フ。何ノ法カ不生。何ノ法カ不滅ナル。答テ曰ク。不善ハ不レ生ゼ。善法ハ不レ滅セ。

又問フ。善ト不善トハ孰レヲカ爲スレ。本ト。答テ曰ク。身ヲ爲スレ。本ト。

又問フ。身ハレヲカ爲スレ。本ト。答テ曰ク。欲貧ヲ爲スレ。本ト。

又問フ。欲貧ハ孰レヲカ爲スレ。本ト。答テ曰ク。虚妄分別ヲ爲スレ。本ト。

又問フ。虚妄分別ハ孰レヲカ爲スレ。本ト。答テ曰ク。傾倒ノ想ヲ爲スレ。本ト。

又問フ。顛倒ノ想ハ孰レヲカ爲スレ。本ト。答テ曰ク。無住ヲ爲スレ。本ト。

又問フ。無住ハ孰レヲカ爲スレ。本ト。答テ曰ク。無住ハ則チ無シレ。本ト。

文殊師利。從リニ無住ノ本一。立ツニ一切ノ法ヲ一。

經典訓讀文

文殊師利又問ふ。生死に畏れ有る菩薩は、當に何をか所依とすべき。維摩詰の言はく。菩薩生死の畏れの中に於て當に如來の功德の力に依るべし。

文殊師利、又問ふ。菩薩如來の功德の力に依らんと欲せば、當に何に於てか住すべき。答へて曰はく。菩薩如來の功德の力に依らんと欲せば、當に一切衆生を度脱するに住すべし。

又問ふ。衆生を度せんと欲せば、當に何をか除く所とすべき。答へて曰はく。衆生を度せんと欲せば、其の煩惱を除くべし。

又問ふ。煩惱を除かんと欲せば、當に何をか行ずる所とすべき。答へて曰はく。當に正念を行ずべし。

又問ふ。云何んが正念を行ずるや。答へて曰はく。當に不生不滅を行ずべし。

又問ふ。何の法か不生、何の法か不滅なる。答へて曰はく。不善は生ぜず。善法は滅せず。

又問ふ。善と不善とは孰れをか本と爲す。答へて曰はく。身を本と爲す。

又問ふ。身は執れをか本と爲す。答へて曰はく。欲貧を本と爲す。

又問ふ。欲貧は執れをか本と爲す。答へて曰はく。虚妄分別を本と爲す。

又問ふ。虚妄分別は執れをか本と爲す。答へて曰はく。顛倒の想を本と爲す。

又問ふ。顛倒の想は執れをか本と爲す。答へて曰はく。無住を本と爲す。

又問ふ。無住は執れをか本と爲す。答へて曰はく。無住は則ち本無し。

文殊師利、無住の本従り一切の法を立つ。

經典現代語譯

文殊菩薩はまた問ひました。「迷ひある此の世に身を留めることを恐れをのく菩薩は、何を依り所とすべきでせうか。」

維摩居士は答へて言ひました。「迷ひある此の世に身を留めて恐れある菩薩は、如來の功德の力を依り所とすべきです。」

文殊菩薩はまた問ひました。「菩薩が如來の功德の力を依り所にしたと思ふならば、如何なることを實踐すべきでせうか。」

答へて言ひました。「菩薩が如來の功德の力を依り所にしたと思ふならば、一切衆生の教化濟度を實踐すべきです。」

また問ひました。「衆生を教化濟度したいと思ふならば、何を取り除いてやるべきでせうか。」

答へて言ひました。「衆生を教化濟度したいと思ふならば、衆生の煩惱を取り除いてやるのです。」

また問ひました。「煩惱を取り除いてやりたいと思ふならば、何を修行すべきでせうか。」

答へて言ひました。「正しい念ひは如何にして修行するのでせうか。」

答へて言ひました。「不生・不滅を修行するのです。」

また問ひました。「不生は如何なることを爲すべきでせうか、不滅は如何なることを爲すべきでせうか。」

答へて言ひました。「悪行は生ぜしめず、善行は滅することのないやうにするのです。」

また問ひました。「善行と悪行とは何を本にして起るのでせうか。」

答へて言ひました。「身體を本にして起るのです。」

また問ひました。「身體は何を本にしてゐるのでせうか。」

答へて言ひました。「欲貪(むさぼり)を本にしています。」

また問ひました。「欲貪は何を本にしてゐるのでせうか。」

答へて言ひました。「虚妄なる分別を本にしてゐます。」

また問ひました。「虚妄なる分別は何を本にしてゐるのでせうか。」

答へて言ひました。「顛倒(さかさまな誤つた考へ)した想ひを本にしてゐます。」

また問ひました。「顛倒した想ひは何を本にしてゐるのでせうか。」

答へて言ひました。「無住(むじゆう)(生起する本が無い)を本にしてゐます。」

また問ひました。「無住は何を本にしてゐるのでせうか。」

答へて言ひました。「無住には本はありません。文殊菩薩さんよ、此の世の一切の現象は無住を本にして成り立つてゐます。」

(一) 無住 此の世の一切の現象には定まつた自らの性といふものはなく、それ故に定まつた所に住することはなく、縁に随つて起るを無住といふ。

〔御語釋〕(現代語譯)

身を本と爲すとは、その意味は、善悪は必ず此の五陰(色・受・想・行・識)で構成されてゐる身體を本にして生起すると言ふのであります。欲貪(むさぼり)とは、行陰(意志または衝動的欲求の心作用)であります。分別(はからひ)とは、受陰(感受、感覺の心作用)であります。顛倒(さかさまな誤つた考へ)とは、想陰(知覺、記憶、想像によつて外界對象を描き出す心作用)であります。無住(生起する本が無い)とは、識陰(認識、識別の心作用。意識そのもの)であります。識陰(意識)より前に働く心作用はありませんから、識陰は無住だと云ふのであります。想陰は識陰を本にして生起します。識陰より前に働く心作用はあり

ませんから、無住は何を本にして生起するのでせうかと問はれた場合、無住は則ち本無しと答へるのであります。文殊師利、無住の本従り一切の法を立つとは、初めに識陰を本にし、次第に他の要素（想・受・行）を生起し、つひに身體を構成することを説き明してゐます。

或る一説では次のやうに云ひます。——無住とは空の理（一切の現象には固定的實體は無いといふ眞理）を言ふのである。その意味は、此の世の一切の現象は皆空の理を本にしてゐると言ふのである、——と。

（訓讀文）

身を本と爲すとは、言ふところは善悪は必ず此の五陰の身に籍りて起るなり。貧とは行陰なり。分別とは受の心なり。顛倒とは想の心なり。無住とは識の心なり。識の前には更に心無きが故に、識は無住と爲すと云ふ。想は識を以て本と爲す。識の前には更に心無し、何を以て本と爲すや。故に無住の本従り一切の法を立つと云ふなり。文殊師利、無住の本従り一切の法を立つとは、識に因るが故に次第に生じて乃ち身に至るを明すなり。或は云はく、無住とは、謂はく空の理なり。言ふところは諸法は皆空の理を以て本と爲すなりと。

〔菩薩の中道の行の定まり無きやの疑ひを遣る、科段分け〕（現代語譯）

觀衆生章の第四は、中根の人の第四の疑ひ、即ち菩薩が實踐すべき中道の行について爲すべきことと爲すべからざること、此の兩者を明らかに分別できないといふ疑ひを取り除きます。時に維摩詰から以下がこれでありませう。此の中について三つの項目に分けます。

第一に、天女の姿を以て現はれ、菩薩や佛弟子たちの上に花を散らし、それによつて論議の端緒を開かうとする、これを經典執筆者が述べることを説き明してゐます。

第二に、爾の時に、天問ふから以下は、天女は佛弟子舍利弗と論議して、正しく定まつた相の無い中道の眞理を顯らかにすることを説き明してゐます。

第三に、爾の時に、維摩詰から以下は、維摩居士は天女の徳を讚嘆し、中道の眞理には定まつた相の無いことを成り立たしめ、結びとすることを説き明してゐます。

(訓讀文)

時に維摩詰從り以下、第四に其れ何ぞ定まり無きやの疑ひを遣る。中に就きて初めに開きて三と爲す。

第一に經家、天女の身を現じ花を以て衆に散じて以て將に論の端と爲さんとするを敍ぶることを明す。

第二に爾の時に、天んと從り以下、天女正しく身子と共に論じて、定相無き中道の理を顯はすことを明す。

第三に爾の時に、維摩詰從り以下、淨名は天女の徳を讚嘆して定まり無きの相を結成することを明かす。

〔天女の身を現じ花を以て衆に散ず〕(現代語譯)

(中根の人の第四の疑ひ、—菩薩が實踐すべき中道の行に定まつた相の無いことについての疑ひ—を取り除く中の第一は、天女が現はれて諸々の菩薩や佛弟子たちの上に花をまき散らします。)

しかしながら天女は、姿は天女であつても實は法身を得てゐる八地以上の菩薩であります。女身に因つて佛弟子と論議し、佛弟子たちを教化濟度しようと欲したので、天女の姿になつて現はれただけであります。花をまき散らすのは論議を起したいと欲したからであります。菩薩には花が著かず、佛弟子には花が著いて離れないのは、これ亦天女の神通力の爲す所であります。八地以上の菩薩が實踐する偏執無き中道の行を以て、新たに佛道を學び始めた菩薩や二乗の人たちの分別(區別、差別するはからひ)と偏執とを抑へたいと欲したのであります。

(訓讀文)

然るに天女は法身の大士なり。將に女身に因りて論議して物を化せんと欲するが故に、現じて天女と爲るのみ。花を以て散ずるは以て論を生ぜんと欲す。花に著くと著かざると有るは、亦是れ天女の神力の爲す所なり。大士の偏せざる中の行を以て、新發及び二乗の分別と偏執とを抑へんと欲するなり。

經典（天女の身を現じ花を以て衆に散ず）

時ニ維摩詰ノ室ニ有リニ一リノ天女一。見ニ諸ノ大人ヲ一。聞テニ所説ノ法ヲ一便チ現ジテニ其ノ身ヲ一。即チ以テニ天華ヲ一散ズニ諸ノ菩薩・大弟子ノ上ニ一。華至ルハニ諸ノ菩薩ニ一即チ皆墮落ス。至ルハニ大弟子ニ便チ著テ不レ墮チ。一切ノ弟子神力ヲモテ去レドモレ華ヲ不レ能ハ令ムルコトヲ去ル。

經典訓讀文

時に維摩詰の室に一りの天女有り。諸の大人を見、所説の法を聞きて便ち其の身を現じて、即ち天華を以て諸の菩薩・大弟子の上に散ず。華諸の菩薩に至るは即ち皆墮落す。大弟子に至るは便ち著きて墮ちず。一切の弟子神力をもて去れども去らしむること能はず。

經典現代語譯

その時、維摩居士の居室にひとりの天女が居た。諸々の大衆の人たちを見、維摩居士の説く法を聞いてその姿を現はし、諸々の菩薩や佛弟子たちの上に天の花をまき散らした。花は諸々の菩薩には附着せず地に落ちたが、佛弟子たちには附着して落ちなかつた。一切の佛弟子たちは、その神通力を以て花を落さうとするが落とすことは出来なかつた。

〔天女は身子と共に論じて、定相無き中道の理を顯はす、科段分け〕（現代語譯）

中根の人の第四の疑ひ、一菩薩が實踐すべき中道の行に定まつた相の無いことについての疑ひ一を取り除く中の第二は、天女は佛弟子舍利弗と共に論議します。爾の時に、天問ふから以下がこれでありす。數多くの問答がありますが順を追つて整理しますと、ただ七つの項にまとめられます。

第一に、その人に花が附着するか、附着しないかに因つて論議します。

第二に、舍利弗の言はく。天この室に止まること其れに已に久しきやから以下、維摩居士の居室に天女が住まつてゐるのは

ずつと前からなのか、それとも近頃なのか、といふことに因つて論議をします。

第三に、舍利弗の言はく。善哉善哉から以下、天女は如何なる證りを得てゐるかを問ふことに因つて論議をします。

第四に、舍利弗天に問ふ。汝三乘に於て何の志求をか爲すから以下、聲聞・縁覺・菩薩の三乘の中に於て、いづれの證りを求めてゐるのかを問ふことに因つて論議をします。

第五に、汝何を以てか女身を轉ぜざるやから以下、何故女身を轉じないのかを問ふことに因つて論議をします。

第六に、舍利弗天に問ふ。汝此に没して當に何れの所に生ずべきから以下、天女は何れの所に生まれかはるのであらうかを問ふことに因つて論議をします。

第七に、舍利弗天に問ふ。汝久如當に菩提を得べきから以下、天女が無上絶對のさとりを得るのは、いつなのであらうかを問ふことに因つて論議をします。

今此の七項目に於てやりとりする問答は數多くありますが、皆定まつた相の無いことを根本の趣意としてゐます。上述の無相の大慈（差別對立を超越した大慈）を成り立たしめ、結びとしてゐることは明らかであります。

(訓讀文)

爾の時に、天問ふ従り以下、第二に正しく共に論議す。問答多しと雖も今次第して相生ずるに但七番と爲す。

第一に花の著くと著かざるとに因りて論を作す。

第二に舍利弗の言はく。天の室に止まること其れに已に久しきや従り以下、室に住するの久近に因りて論を作す。

第三に舍利弗の言はく。善哉善哉従り以下、因りて所證を問ふに因りて論を作す。

第四に舍利弗天に問ふ。汝三乘に於て何の志求をか爲す従り以下、求むる所を問ふに因りて論を作す。

第五に汝何を以てか女身を轉ぜざるや従り以下、轉身を問ふに因りて論を作すなり。

第六に舍利弗天に問ふ。汝此に没して當に何れの所に生ずべき従り以下、生を問ふに因りて論を作す。

第七に舍利弗天に問ふ。汝久如當に菩提を得べき従り以下、得果を問ふに因りて論を作すなり。
今此の七重の往伏の中には問答多しと雖も、皆定まれる無きを以て宗と爲す。則ち謂ふ所の上の無相を結成
すること明らかなり。

〔花の著くと著かざるとに因りて論を作す並びに科段分け〕（現代語譯）

天女が佛弟子舍利弗と共に論議して、定まつた相の無い中道の理を顯はす中の第一は、花がつくか著かないかに因つて論議します。それ自體に三つの項目があります。

第一に、天女は舍利弗に問ひます。何故に花を取り去らうとするのでですか、と。

第二に、舍利弗は答へます。花を身に著けるのは佛法の教へに背くので取り去るのです、と。

第三に、天女は舍利弗を彈呵します。それ自體に四つの項目があります。

第一に直ちに彈呵します。此の花を謂ひて不如法と爲すこと勿れ（此の花を佛法の理に背くものと思つてはなりません）と。

第二にその理由を釋き明します。是の華分別する所無し。仁者自ら分別の想を生ずるのみとは、此の花は空の如く心の働きはありません。それ故此の花自體には取り去る、取り去らない、といふ思ひはありません。此の花が佛法の理に背くと言ふのは、貴方自身が此の花について善惡の分別を爲してゐるにすぎません、といふことを解き明してゐます。

第三に佛法の理にかなふ、佛法の理に背く、といふ意義を説き明します。若し佛法に於て出家してから以下がこれであり
ります。

第四に花が附着する、附着しない、その理由を解き明します。諸の菩薩を觀するにから以下がこれであります。その意味するところは、善惡などを分別する心があれば花は附着して離れず、分別する心が無ければ花は附着しない、と言ふのであります。また恐れをのく心があれば花は附着して離れず、恐れる心が無ければ花は附着しません。また結習（煩惱を斷ち切つた後の殘滓）が未だ殘つてをれば花は附着して離れず、結習を滅し盡くせば花は附着しません。

この箇所は皆經典をご覽なさい。

菩薩と稱されてゐますが七地以下の菩薩は結習を未だ滅し盡くしてはをりません。二乗も同じく結習が残つてゐて花が附着しますが、二乗は何故菩薩より劣つてゐると見るのでせうか。その理由は次の通りです。―七地以下の菩薩は結習を未だ滅し盡くしてをりませんが、菩薩行を行ずることを發心したその日より一切の結習をも斷ち切る決意を堅く定め、また衆生を教化濟度しようとして欲して迷ひある此の世を恐れず、その身を此の世に留めて努めてゐるが故に、結習を斷じたと言ふのであります。眞實の境地について論ずるならば、七地以下の菩薩は未だ結習を斷じ切つてはをりません。二乗の人たちは迷ひある此の世を恐れて衆生を教化濟度することができません。ただ煩惱の主體のみを斷ち切らうとして、結習の斷ち切りにまで心が及んでゐません。それ故に二乗の人たちを劣つてゐると見做すのです、―と。

(訓讀文)

第一の花に因りて論を生ずるに就きて自ら三有り。

一に天は身子に問ふ。何を以てか花を去るやと。

二に身子は答ふ。出家の法に非ざるが故に去ると。

三に天女は身子を呵す。自ら四有り。

第一に直ちに呵す。此の花を謂ひて不如法と爲すこと勿れとなり。

第二に釋す。是の華分別する所無し。仁者自ら分別の想を生ずるのみとは、此の花即ち空にして心無し。

故に本は去るも去らずも無し。仁不如法と爲すと言ふは更に是れ分別なりといふことを明かすなり。

第三に若し佛法に於て出家して従り以下、如法と非法との義を明す。

第四に諸の菩薩を觀するに従り以下、華の著くと著かざるの所以を明す。言ふところは心に分別を存する

が故に著き、分別無きが故に著かず。又心中に畏れ有るが故に著き、畏れ無きが故に著かず。且結習未だ

亡ぜざるが故に著き、結習盡くるが故に著かず。

皆見つ可し。

菩薩と名づくると雖も七地以還は猶未だ結習を盡くさず。何ぞ但偏へに二乗を下すとならば、菩薩は未だ結習を盡くさずと雖も、而も行を發すの日より即ち一切の餘習を斷ずるの心を建て、且將に物を化せんと欲して生死を畏れず、身を留めて世に在るが故に盡くすと言ふなり。實に就きて論を爲さば猶是れ未だ盡くさず。二乗は生死を畏れて物を化する能はず。只正使のみを斷ぜんと欲して餘習に在らず。所以に偏へに之を下すなり。

經典 (花の著くと著かざるとに因りて論を爲す)

(天女は舍利弗に問ふ)

爾ノ時ニ。天問フニ舍利弗ニ。何カ故ソ去ルヤ。華ヲ。

(舍利弗答ふ)

答テ曰ク。華不如法ナリ。是ヲ以テ去ルレ之ヲ。

(天女呵す・直ちに呵す)

天曰ク。勿レテ謂テニ此ノ華ヲ一爲スコト。不如法ト。

(釋す)

所以ハ者何シ。是ノ華無シレ所分別スル一。仁者自ラ生ズルノミニ分別ノ想ヲ一耳。

(如法と不如法との義を明かす)

若シ於テニ佛法ニ一出家シテ有ルヲレ所ニ分別スル一爲スニ不如法ト一。若シ無シレ所ニ分別スル一是レ則チ如法ナリ。

(花の著くと著かざるとの所以を明す)

觀ズルニニ諸ノ菩薩ヲ一華ノ不ルハレ著カ者。已ニ斷ゼルガニ一切ノ分別想ヲ一故ナリ。譬ヘバ如クニ人畏ルル時ハ非人得ルガニ其ノ便ヲ一。如

クレ是ノ弟子畏ルルガニ生死ヲ一故ニ。色・聲・香・味・觸得ルナリニ其ノ便ヲ一也。已ニ離タルレ畏レヲ者ハ。一切ノ五欲無キニ能ク爲スコトヲ一也。結習未ダレ盡キ華著クノミレ身ニ耳。結習ノ盡タル者ハ華不ルナリレ著カ也。

經典訓讀文

爾の時に、天舍利弗に問ふ。何が故ぞ華を去るや。

答へて曰はく。此の華不如法なり。是を以て之を去る。

天曰はく。此の華を謂ひて不如法と爲すこと勿れ。

所以は何ん。是の華分別する所無し。仁者自ら分別の想を生ずるのみ。

若し佛法に於て出家して分別する所有るを不如法と爲す。若し分別する所無ければ是れ則ち如法なり。

諸の菩薩を觀するに、華の著かざるは、已に一切の分別の想を斷ずるが故なり。譬へば人畏るる時は非人其の便を得るが如く、是の如く弟子生死を畏るるが故に、色・聲・香・味・觸其の便を得るなり。已に畏れを離れたる者は、一切の五欲能く爲すこと無きなり。結習未だ盡きざれば華身に著くのみ。結習の盡きたる者は華著かざるなり。

經典現代語譯

その時天女は、舍利弗に問ひました。「何故花を取り去らうとするのですか。」

答へて言ひました。「花が身に著くのは佛法の理に背きます。それ故取り去るのです。」

天女は彈呵して言ひました。「此の花を佛法の理に背くものと思つてはなりません。」

理由を釋き明して言ひました。「此の花は善惡などを分別することはありません。此の花につい善惡を分別してゐるのは、貴方自身の想ひから生じてゐます。」

「佛道修行者にして、若し善惡などを分別するならば佛法の理に背くことになります。若し善惡などを分別しないならば佛法の理にかなふことになります。」

「諸々の菩薩を觀察しますに、花が附着しないのは善惡などを分別する一切の想ひを既に斷ち切つてゐるからです。譬へば

人が畏れを抱く時は悪鬼などが好機至れりと人を苦しめるやうに、佛弟子が迷ひある此の世を畏れるが故に、色・聲・香・味・觸の感覺對象は好機至れりと五欲を起さしめます。畏れを既に離れた者には、五欲は一切生起しません。結習けつじゅう（煩惱を斷ち切つた後の殘滓）を未だ滅し盡くさなければ花は身に附着するのみです。結習を滅し盡くせば花は附着しません。」

〔室に住するの久近に因りて論を作す並びに科段分け〕（現代語譯）

天女が舍利弗と共に論議して、定まつた相の無い中道の理を顯はす中の第二は、維摩居士の居室に天女が住まつてゐるのはずつと前からなのか、それとも近頃なのか、といふことに因つて論議します。舍利弗しゃりぼつの言いはく。天てん此この室しつに止とどまることごとから以下がこれでありませす。亦九つの項目があります。

第一に、舍利弗は、天女が此の居室に住まつてゐるのはずつと前からなのか、それとも近頃なのかを問ひます。天女が自分を彈呵する辨舌は維摩居士と同じく核心をついてくるので、天女はきつと此の居室に永く住んでゐて、維摩居士の辨舌を數々見習つてこのやうに鋭いのであらうと思ひ、此の問ひを發しました。

第二に、天女は答へました。私が此の居室に住み始めたのは長老の貴方が解脱を得た時、證ぎとりを得た時と同じやうなものです。と。此の居室の中には長期間、短期間といふ時の相は無いのであります。

第三に、舍利弗は自分の解脱を得た時に言及されたので、天女はその空の解脱を得た時からの年月を具體的に答へてくれるのであらうと誤り考へて、此こに止とどまることごと久ひさしきやと問うたのであります。

第四に、天女は責めとがめました。長老の貴方が空の解脱を證ぎとつた時、それは久しい以前であつたなどといふ時の相は無いではありませんか、と。

第五に、經典執筆者は、舍利弗が黙然して答へなかつたことを述べます。

第六に、天女は何故黙然として答へないのかを問ひます。年を積み重ねて長老であることを書きと言ひます。舍利弗は釋尊の十大弟子の中で智慧の第一人者でありますので大智だいちと稱たへます。長老であり大智者である貴方が、どうして黙然とし

て答へないのか、といふのであります。

第七に、舍利弗は答へます。解脱は無相（差別對立の相を超越してゐる）です。言語を以て言ひ現はせないで黙してゐるのです、と。

第八に、天女は更に責めとがめます。舍利弗は解脱の境地は言語を以ては表現し得ないことを唯知つてゐるのみであつて、解脱といひ、言語といひますが、そのあるがままの姿は相等しいことを未だ知り得てゐません。今天女が彈呵する理由は、空の理を以て論ずるならば、言語表現を爲してもそれに對する解釋は種々様々であつて言語表現しなかつたのと同様であります。また言語表現をしなくてもそのあるがままの實體は嚴として存在するのですから、そのあるがままの實體の覺知は言語表現以外では爲し得ません。世の中のあらゆる存在、現象は、そのあるがままの姿は全て解脱の相を有してゐます。それ故、**言說文字は皆解脱の相なり**（言語や文字のあるがままの姿は皆解脱の相である）と云ふのであります。解脱は**内ならず**とは、**内**とは六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）であり、六根を清淨にするだけで解脱を得るものではありません。**外ならず**とは六根の對象の六塵（色塵乃至法塵。心を汚すので塵といふ）で、六塵の執着を捨て去るだけで解脱を得るものではありません。**中間**とは六識（六根のはたらき、即ち眼識乃至意識）を言ひます。

また次のやうに解するもよいでせう。—**内**とは迷ひある此の世の中であり、**外**とはさとりの境地の涅槃であり、**中間**とはさとりの道である三十七道品の修行を言ふので有る、—と。また他の説では次のやうに言ひます。—**内外に非ずの内**とは法を説く主體者を言ひ、**外**とは説かれる法を言ひ、**中間**とは法を説く音聲を言ふ。この三者は皆固定的實體の無い空であり、空だと観ずれば何の障礙も無い。何の妨げがあつて舍利弗は答へないのか、—と。

第九に、舍利弗は、若しさうであるなら昔日佛陀は淫欲・怒り・愚迷を捨離するのが解脱であると説法されましたが、何故でせうかと問ひました。天女は答へました。迷ひの世界から脱け出てゐない人、それは未ださとりに到達してゐないにも拘らずさとつたと慢心してゐる人に對しては、佛陀は淫欲などの煩惱を捨離することが解脱であると説かれました。しかし迷ひの世界を超越してゐる人、さとつたといふ慢心の無い人に對しては、煩惱が無いといふのは空想の世界であ

つて煩惱を有することこそ現實の人間界である、それ故煩惱のあるがままの姿を認め、それに立脚してこそ眞の解脱はある、と説かれたのです、と。

(訓讀文)

舍利弗の言はく。天此の室に止まること従り以下、第二に室に住するの久近に因りて論を成す。亦九重有り。

第一に身子は天女に問ふ。室に住するの久近は幾何ぞ。天女の己を呵するの辭辨淨名の若くなる有るを見て、

必ず此の室に在ること久しく數淨名の餘風に染むが故に能く此の如きかと謂へり。所以に此の問ひを致すなり。

第二に天女答ふ。我此の室に止ること耆年の解脱所證の如し。室の中には久近の相無きなり。

第三に身子僻領して、是れ其の空解脱を得てより來のかたの年月をもて答ふと謂ひ、此に止まること久しきや

と言ふなり。

第四に天嘖む。耆年の所證の解脱空の中には何ぞ久しき相有らんや。

第五に經家は身子の默然たるを敍ぶ。

第六に天は身子に問ふ。何が故に默然なるや。年宿を耆と曰ふ。十弟子の中に智慧第一なるが故に大智と稱

す。仁者既に二義を具せり。何が故に默然として答へざるや。

第七に身子答ふ。解脱は無相なり。説く可からざるが故に默然たり。

第八に天は更に身子を責む。身子は但解脱は無言なりと知りて未だ齊一なること能はず。今呵する所以は、理の

中に論を爲さば、言は即ち不言にして、不言は即ち言なり。諸法皆然なり。故に言説文字は皆解脱の相な

りと云ふ。解脱は内ならずとは六根なり。外ならずとは六塵なり。中間とは六識を謂ふ。

亦可なるべし。内を生死と爲し、涅槃を外と爲し、道品を中間と爲す。亦内外に非ずとは、内とは能説の己

身を謂ひ、外とは所説の法を謂ひ、中間とは音聲を謂ふなり。三處は皆空なり。何の礙有りてか答へざる

や。

第九に身子問ふ。若し爾らば、何が故に昔姪・怒・癡を離るるを以て解脱と爲すや。天女答ふ。但有を存する増上慢の者の爲に佛は爲に煩惱を離るるを解脱と爲すと説くなり。若し有を存せず増上慢無き者には、佛は煩惱即ち解脱なりと説くなり。

經典(室に住するの久近に因りて論を作す)

(舍利弗、室に住するの久近を問ふ)

舍利弗ノ言ク。天止ルコトニ此ノ室ニ一其レ已ニ久シヤト。

(天女、室には久近の相無きを答ふ)

答テ曰ク。我止ルコトニ此ノ室ニ一。如シニ耆年ノ解脱ノ一。

(舍利弗、室に住するの年月を問ふ)

舍利弗ノ言ク。止ルコトニ此ニ久シキヤ耶。

(天女、解脱に久しき相無きを責む)

天ノ曰ク。耆年ノ解脱モ亦何如ンガ久シキ。

(經家は舍利弗の默然たるを述ぶ)

舍利弗。默然トシテ不レ答ヘ。

(天女、何故默するやを問ふ)

天ノ曰ク。何如ゾ耆舊ノ大智ニシテ而默セルヤ。

(舍利弗、解脱は言説無きを答ふ)

答テ曰ク。解脱ハ者無シ。所言説スル一。故ニ吾於テレ是ニ不レ知ラ所ヲレ云フ。

(天女更に責む、文字を離れて解脱を説くこと無かれと)

天ノ曰ク。言説文字ハ皆解脱ノ相ナリ。所以ハ者何シ。解脱ハ者不レ内ナラ。不レ外ナラ。不レ在ラニ兩間ニモ一。文字モ亦不レ内ナラ。不レ外ナラ。不レ在ラニ兩間ニモ一。是ノ故ニ舍利弗。無キニ離レテニ文字ヲ一説クコトヲ解脱ヲ也。所以ハ者何シ。一切ノ諸法ハ是レ解脱ノ相ナリ。

(舍利弗問ふ、煩惱を捨離するを解脱と爲すは何故なるやと)

舍利弗ノ言ク。不ランヤ下復タ以テレ離ルルヲニ姪・怒・癡ヲ爲サ中解脱ト上乎。天ノ曰ク。佛ハ爲ニハ増上慢ノ人ノ一説クノミ下離ルルヲニ姪・怒・癡ヲ一爲スト中解脱ト上耳。若シ無キニ増上慢一者ニハ佛ハ説クニ姪・怒・癡ノ性即チ是レ解脱ナリト一。

經典訓讀文

舍利弗の言はく。天此の室に止まること其れ已に久しきや。

答へて曰はく。我此の室に止まること、耆年の解脱の如し。

舍利弗の言はく。此に止まること久しきや。

天の曰はく。耆年の解脱も亦何如んが久しき。

舍利弗、默然として答へず。

天の曰はく。何如ぞ耆舊の大智にして默せるや。

答へて曰はく。解脱は言説する所無し。故に吾是に於て云ふ所を知らず。

天の曰はく。言説文字は皆解脱の相なり。所以は何ん。解脱は内ならず、外ならず、兩間にも在らず。文字も亦内ならず、外ならず、兩間にも在らず。是の故に舍利弗、文字を離れて解脱を説くこと無きなり。所以は何ん。一切の諸法は是れ解脱

の相なり。

舍利弗の言はく。復姪・怒・癡を離るるを以て解脱と爲さざらんや。天の曰はく。佛は増上慢の人の爲には姪・怒・癡を離

るるを解脱と爲すと説くのみ。若し増上慢無き者には、佛は姪・怒・癡の性即ち是れ解脱なりと説く。

舍利弗は問ひました。「天女さん、此の居室にはずつと以前からお住まひですか。」

天女は答へました。「私が此の居室に住まつたのは、長老の舍利弗さんが解脱を得た時と同じやうなものです。」
舍利弗は問ひました。「此の居室にお住まひになつて何年経ちましたか。」

天女はとがめて言ひました。「長老が解脱を得てから何年経ちましたか。」舍利弗は答へることが出來ず、黙した。
天女は問ひました。「佛弟子の長老、大智慧者の貴方がどうして黙するのですか。」

舍利弗は答へました。「解脱は言語を以ては表現できません。それ故私はどう申しあげてよいのかわからないのです。」
天女は言ひました。「言語や文字のあるがままの姿は皆解脱の相を有してゐます。何故かと言ひますと、解脱は六根を清淨にするのみでも不可、六塵の執着を捨て去るのみでも不可、六識を正すのみでも不可、三者の總合によつて解脱は得られます。同様に言語文字は法を説く主體者のみ、説かれた法のみ、法を説く音聲のみに存するのではなく、三者の總合によつて成り立ちます。それ故に舍利弗さん、解脱のあるがままの姿は言語表現を以てしか説き得ないのです。何故かと言ひますと、此の世の一切の存在、現象は、そのあるがままの姿は皆解脱の相を有してゐるのです。」
舍利弗は問ひました。「世尊は淫欲・怒り・愚迷など煩惱を捨離すれば解脱を得るとお説きになりましたが、何故でせうか。」

天女は答へました。「佛陀は、さとりに到達してゐないのに悟つたと慢心してゐる人に對してのみ淫欲・怒り・愚迷などを捨離すれば解脱を得る、と説いたのです。さとりに到達したといふ慢心の無い人に對しては、淫欲・怒り・愚迷などをあるがままに容認する、そこに眞の解脱はあると説かれたのです。」

〔天女の所證を問ふに因りて論を作す〕（現代語譯）

天女が舍利弗と共に論議して、定まつた相の無い中道の理を顯はす中の第三は、天女は如何なる證まことりを得てゐるかを問ふ

ことに因つて論議をします。舍利弗の言はく、善き哉善き哉から以下がこれでありました。天女が空の理を説き明した上述の辨舌が終つたところで、それを聞いた舍利弗は、天女はきつと最上至極の證りを體得してゐるに違ひあるまいと思つたので、天女の證りを問ふのであります。天女、汝は何の得る所ぞ、何を以て證りと爲すやと。

天女の答への中には二つの項目があります。

第一に、正しく答へます。我といふものに對する執着は無いので、私は體得してゐるものも無いし、證りに到達してもゐない、と答へます。

第二に、その理由を釋き明します。若し自分には體得するものありと思ふならば、他の未體得の人たちをきつと輕蔑するやうになりませう。さうなれば佛法の中に於ける増上慢（未ださどつてゐないのに、さとつたと思つておごり高ぶる）となります。それ故に天女は、體得してゐるものも無いし、證りに到達してもゐない、と答へるのであります。

(訓讀文)

舍利弗の言はく、善き哉善き哉従り以下、第三に得る所を問ふに因りて論を成す。上に天女空を明かすことの辨了するを聞きて、必ず應に已に極果を體するなるべし。故に之を問ふなり。天女、汝は何の得る所ぞ、何を以て證りと爲すやと。

答への中に自ら二有り。

- 一に正しく答ふ。我の存せざるが故に得るも證るも無しと言ふなり。
- 二に釋す。若し己に得る有りと思れば必ず他の未得を輕んず。然れば則ち佛法の中に於て既に増上慢と爲す。所以に得るも證るも無しと言ふなり。

經典（天女の所證を問ふに因りて論を作す）

舍利弗ノ言ク。善キ哉善キ哉。天女。汝何ノ所ゾ得ル。以テ何ヲ爲シテ證リト辨ズルコト乃チ如ナルヤ。是ノ。

天ノ曰ク。我無ク^レ得ルトコロ無シ^レ證ルトコロ。故ニ辨ズルトコト如シ^レ是ノ。

所以ハ者何シ。若シ有リ^レ得ルトコロ有ラバ^レ證ルトコロ者。則チ於テニ佛法ニ一爲スニ増上慢ト一。

經典訓讀文

舍利弗の言はく。善き哉善き哉。

天女。汝は何の得る所ぞ。何を以て證りと爲して辨ずること乃ち是の如くなるや。

天の曰はく。我無く得るところ無く證るところ無し。故に辨ずることは是の如し。

所以は何ん。若し得るところ有り證るところ有らば、則ち佛法に於て増上慢と爲す。

經典現代語譯

舍利弗は言ひました。「天女さん、見事な辨舌ですね。貴女は如何なるものを體得されてゐるのですか。如何なる證りに到達して、このやうに見事な辨舌をなさるのですか。」

天女は答へました。「私は何も體得してゐないし、證りに到達してもありません。それ故にこのやうに辨ずるのです。」

「その理由は何かと申しますと、若し體得するものあり、證りに到達してゐると思ふならば、それは即ち佛法に於ける増上慢となるからなのです。」

〔三乘の中に於て天女の求むる所を問ふに因りて論を作す〕（現代語譯）

天女が舍利弗と共に論議して、定まつた相の無い中道の理を顯はす中の第四は、三乘（聲聞乘・緣覺乘・菩薩乘）の中のどの教へを求めようと思つてゐるかを天女に問ふことに因つて論議をします。舍利弗天に問ふから以下がこれであります。何も體得してゐないし、證りに到達してもゐないといふ答へを聞いて、さうであるならば修行して天女が到達してゐる階位は證りにはほど遠い凡夫に違ひあるまいと舍利弗は思ひ、それ故に三乘の中に於て何れの教へを求めようと思つてゐるのかを問ふのであります。又次のやうな解釋もあります。——天女と舍利弗の問答の如きは當然大乗の教へであらう。それ故に三乘

の中の求めるものを問ふのである。天女はまた大乘の教へである理由を釋き明して彈呵するのである、——と。
 天女の答への中に二つの項目があります。

初めに衆生を教化する姿に基いて答へます。三乗の夫々の教へに基いて衆生を教化するので、天女は三乗夫々の姿になつて教化する、舍利弗が三乗の中のただ一つの教へを求める問ひ方をするのは何故ですか、また大乘の教へを求めてゐるに違ひあるまいと舍利弗は何故専心するのかといふことを説き明してゐます。

第二に、舍利弗。人の瞻蔔林に入りて……が如しから以下、本來の姿に基いて答へます。これを二つの項目に分けます。

第一に、先づ大乘の教へのみがあつて小乗の教へは無いことを説き明し、また大乘の教へがあることを以て結びの文言とします。

第二に、舍利弗。吾此の室に止まること以下、先づ小乗の教へは無く大乘の教へのみあることを説き明し、また小乗の教へが無いことを以て結びの文言とします。或る經典研究家は次のやうに云ひます。——初めに教へを受ける人について大乘の教へのみがあることを説き明し、第二に、吾此の室に止まること以下、小乗の教へは無く大乘の教へのみあることを説き明し、結びの文言とする、——と。

吾此の室に止まること十有二年なり。初めより聲聞・闍支佛の法を説くを聞かずとは、此は小乗の教へが無いことを説き明してゐます。但菩薩の……を聞くから以下は、大乘の教へのみあることを説き明してゐます。或る經典研究家は次のやうに云ひます。——吾此の室に止まること以下諸佛の法のみをに訖るまでは、維摩居士の居室について小乗の教へは無く大乘の教へのみあることを説き明し、此の室には常には八の未曾有難得の法を現すから以下は、未曾有かつ得難い八つの事象について大乘の教へがあることを説き明す、——と。他の或る經典研究家は八つの事象について、四對の事象として解釋してゐます。しかし此の解釋は採用いたしません。

舍利弗、此の室には常に……を現すから以下は、また小乗の教へが無いことを以て結びの文言としてゐます。或る經典研究家は次のやうに云ひます。——八つの事象全體は大乘の教へのみがあつて小乗の教へを求める人の無いことの結びの文言であ

る、一と。それ故此の研究家は此の箇所の經典を五つの項目（一、舍利弗問ふ。二、迹に就きて答ふ。三、本に據りて答ふ。四、小無きを以て結を成す。五、小を樂ふ者無きを結す。）に分けてゐます。

しかしながら上述に於ては、天女は幾年此の室に住んでゐるかを問うたのに、その年數は決して言ひませんでした。ただ「長老の舍利弗さんが解脱を得た時と同じです。」と言つて、舍利弗の年數に對する執着を取り除きました。今此に於ては十二年住んでゐると天女が自ら言ふのは如何なる意圖があるものでせうか。その解釋は次の通りです。上述に於ては年數に對する舍利弗の執着を除かんがために具體的な年數は言ひませんでした。今は、上述に於て「長老の舍利弗さんが解脱を得た時と同じです。」と言ふことに因つて、中道の行の定まりの無い相を舍利弗は解し得たと思はれますので、具體的な年數を以て答へるのです。しかし此の室に住まつてゐる年數を十二年とするのは何故かと申しますと、二乗の人たちは最初の十二年の修行でさとりには到達したと執着しますが、その執着を取り除かんがために此の室に住まふのは十二年であると言ふのです。或る經典研究家は次のやうに云ひます。——維摩居士が此の方丈の居室に住んでゐること、現在まで或いは十二年であらう、一と。

(訓讀文)

舍利弗天しやりほつてんに問とふ従より以下いげ、第四だいしに三乘さんじやうの中なかに於おいて求もとむる所ところを問とふに因よりて論ろんを作なす。復上またかみに得うるも證まするも無しと聞ききて、應また是これ行地ぎやうぢ悠悠ゆうゆうたる凡夫ぼんぷなるべし。故ゆゑに三さんの果かの中なかに於おいて何いづれの志し求くをか爲なすと問とふなり。又釋またしやくす。問答もんたうの如ごときは應また是これ大乘だいじやうなるべし。故ゆゑに此この問とひを發おこす。所以ゆゑんに復呵またかを致いたすなりと。答こたへの中なかに二に有り。

初はじめに迹しやくに就つきて答こたを爲なす。三乘さんじやうを化けするを以もつての故ゆゑに我われ三乘さんじやうと爲なる。汝なんぢ云い何いぞ定さだんで問とふや。亦また汝なんぢ云い何いぞ專せん心しんして定さだんで大乘だいじやうと爲なすやと明あかす。

第二だいに舍利弗しやりほつ。人ひとの瞻ぜん蔔ぼく林りんに入りて……が如ごとし以下いげ、本ほんに據よりて答こたへを爲なす。開ひらきて二にと爲なす。第一だいに先まづ大有たいあり小無しょうなきを明あかして、還また大有たいあるを以もつて結けつを成なす。

第二に舍利弗。吾此の室に止まること従り以下、先づ小無く大有るを明して、還小無きを以て結を成す。或は云はく。人に就きて大有るを明し、吾此の室に止まること従り以下、第二に先づ明して小無く大有るを明して結を成すと。

吾此の室に止まること十有二年なり。初めより聲聞・闍支佛の法を説くを聞かずとは、此は小無きを明す。但菩薩の…を聞く従り以下、大有るを明す。或は云はく。吾此の室に止まること以下、諸佛之法のみをに訖るまで、但室に就きて小無く大有るを明し、此の室には常には八の未曾有難得の法を現す従り以下、八の未曾有に就きて大有るを明すと。或は四雙を作して解釋す。然るに今は須ひざるなり。

舍利弗、此の室には常に…を現す従り以下、還小無きを以て結を成す。或は云はく。通じて唯大のみ有りて少を樂ふ者の無きを結するなりと。故に彼の家は大きいに開きて五重と爲すなり。

然るに上には室に住する久近を問へるに、決して其の年數を導はず。只耆年の解脱の如しと言ひて、存せざらしむのみ。今此に何の意ありてか自ら十二と言ふや。解し言はく。上には其の存を除かんと欲するが故に年數を言はず。今は則ち上に耆年の解脱の如しと言ふに因りて、不定の相を解す可し。故に實を以て答へを爲すなり。然るに何が故ぞ止まること十二年と言ふとならば、二乗の十二年の事を執して實と爲すを破さんと欲す。故に止ること十二年と言ふ。或は云はく。淨名現に方丈に居ること今に于て或いは十二年なりと。

經典 (三乘の中に於て天女の求むる所を問ふに因りて論を作す)

(舍利弗問ふ)

舍利弗問フ天ニ。汝於テニ三乘ニ一爲スニ何レノ志求ヲカ。

(天女答ふ・迹に就きて答ふ)

天ノ曰ク。以テニ聲聞ノ法ヲ一化スルガニ衆生ヲ一故ニ我爲ルニ聲聞ト一。以テニ因縁ノ法ヲ一化スルガニ衆生ヲ一故ニ我爲ルニ辟支佛ト一。

以テニ大悲ノ法ヲ一化スルガニ衆生ヲ一故ニ我爲ルニ大乘ト一。

(本に據りて答ふ・大有るを以て結を成す)

舍利弗。如シテ人ノ入テニ瞻蔔林ニ一唯嗅ギテニ瞻蔔ヲノミ一不ルガハ嗅ガニ餘香ヲ一。如クレ是ノ若シ入レバニ此ノ室ニ一。但聞テニ佛ノ功德之香ヲノミ一。不レ樂ハレ聞ククコトヲニ聲聞・辟支佛ノ功德ノ香ヲ一也。舍利弗。其レ有テニ釋・梵・四天王・諸天・龍鬼神等一入ルニ此ノ室ニ一者ハ。聞テ斯ノ上人ノ講ニ説スルヲ正法ヲ一。皆樂ウテニ佛ノ功德之香ヲ一發心シテ而出ツ。

(小無きを以て結を成す)

舍利弗。吾止ルコトニ此ノ室ニ一十有二年ナリ。初ヨリ不レ聞カレ説クヲニ聲聞・辟支佛ノ法ヲ一。但聞クニ菩薩ノ大慈・大悲・不可思議ノ諸佛之法ノミヲ一。

舍利弗。此ノ室ニハ常ニ現ズニ八ノ未曾有難得之法ヲ一。何等ヲ爲スレハト。此ノ室ニハ常ニ以テニ金色ノ光ヲ一照シテニ。晝夜一無シレ異ナルコト。不_下以テニ日月ノ所_口照ヲ爲サ_レ明ト。是ヲ爲スニ一ノ未曾有難得之法ト一。此ノ室ニ入ル者ハ不_レ爲ラニ諸垢ノ之所ト_口惱ス也。是ヲ爲スニ二ノ未曾有難得之法ト一。此ノ室ニハ常ニ有リニ釋・梵・四天王・他方ノ菩薩一。來リ會シテ不_レ絶エ。是ヲ爲スニ三ノ未曾有難得之法ト一。此ノ室ニハ常ニ説クニ六波羅蜜不退轉ノ法ヲ一。是ヲ爲スニ四ノ未曾有難得之法ト一。此ノ室ニハ常ニ作シテニ天人第一之樂ヲ一絃ヨリ出スニ無量法化之聲ヲ一。是ヲ爲スニ五ノ未曾有難得之法ト一。此ノ室ニハ有テニ四ノ大藏衆寶積ミ滿テリ。周ク_レ窮キニ濟ヒ_レ乏キヲ。求メ得テ無シレ盡ルコト。是ヲ爲スニ六ノ未曾有難得之法ト一。此ノ室ニハ釋迦牟尼佛・阿彌陀佛・阿閼佛・寶德・寶炎・寶月・寶嚴・難勝・師子響・一切利成。如キレ是ノ等ノ十方ノ無量諸佛。是ノ上人ノ念ズル時。即チ皆爲ニ來テ廣ク説クニ諸佛ノ祕要ノ法藏ヲ一。説キ已テ還リ去ル。是ヲ爲スニ七ノ未曾有難得之法ト一。此ノ室ニハ一切ノ諸天ノ嚴飾セル宮殿モ。諸佛ノ淨土モ皆於テ_レ中ニ現ズ。是ヲ爲スニ八ノ未曾有難得之法ヲ一。

舍利弗。此ノ室ニハ常ニ現ズニ八ノ未曾有難得之法ヲ一。誰カ有ランヤ_下見テニ斯ノ不思議ノ事ヲ一。而復樂フコト_中於聲聞ノ法ヲ_レ乎。

經典訓讀文

舍利弗天に問ふ。汝三乘に於て何れの志求をか爲す。

天の日はく。聲聞の法を以て衆生を化すが故に我聲聞と爲る。因縁の法を以て衆生を化すが故に我辟支佛と爲る。大悲の法を以て衆生を化するが故に我大乘と爲る。

舍利弗。人の瞻蔔林に入りて唯瞻蔔のみ嗅ぎて餘香を嗅がざるが如し。是の如く若し此の室に入れば、但佛の功德の香のみ聞きて、聲聞・辟支佛の功德の香を聞くことを樂はず。舍利弗。其れ釋・梵・四天王・諸天・龍・鬼神等有りて此の室に入る者は、斯の上人の正法を講説するを聞きて、皆佛の功德の香を樂うて發心して出づ。

舍利弗。吾此の室に止まること十有二年なり。初めより聲聞・辟支佛の法を説くを聞かず。但菩薩の大慈・大悲・不可思議の諸佛の法のみを聞く。

舍利弗。此の室には常に八の未曾有難得の法を現ず。何等を八と爲す。此の室には常に金色の光を以て照して、晝夜異なること無し。日月の所照を以て明と爲さず。是を一の未曾有難得の法と爲す。此の室に入る者は諸垢の惱ます所と爲らざるなり。是を二の未曾有難得の法と爲す。此の室には常に釋・梵・四天王・他方の菩薩有り、來り會して絶えず。是を三の未曾有難得の法と爲す。此の室には常に六波羅蜜不退轉の法を説く。是を四の未曾有難得の法と爲す。此の室には常に天人第一の樂を作して絃より無量法化の聲を出す。是を五の未曾有難得の法と爲す。此の室には四の大藏有りて衆寶積み満てり。窮しきに周く乏しきを濟ひ、求め得て盡くすること無し。是を六の未曾有難得の法と爲す。此の室には釋迦牟尼佛・阿彌陀佛・

阿閼佛・寶德・寶炎・寶月・寶嚴・難勝・師子響・一切利成、是の如き等の十方の無量諸佛、是の上人の念ずる時、即ち皆爲に來りて廣く諸佛の祕要の法藏を説く。説き已りて還り去る。是を七の未曾有難得の法と爲す。此の室には一切の諸天の嚴飾せる宮殿も、諸佛の淨土も皆中に於て現ず。是を八の未曾有難得の法と爲す。

舍利弗。此の室には常に八の未曾有難得の法を現ず。誰か斯の不思議の事を見て、復聲聞の法を樂ふこと有らんや。

經典現代語譯

舍利弗は天女に問ひました。「貴女は三乘（聲聞乘・緣覺乘・菩薩乘）の中のどの教へを求めようと思つてゐますか。」

天女は答へて言ひました。「私は聲聞の教へを以て衆生を教化濟度する場合、聲聞になります。因縁所生の教へを以て教化濟

度する場合、縁覺になります。大乘の慈悲心を以て教化濟度する場合、大乘の菩薩になります。」

「舍利弗さんよ。人が瞻蔔せんかく（チャンパカ。香氣あり）の林に入った場合、ただ瞻蔔のみを嗅いで他の香りを嗅がないと同じで、若し此の室に入ればただ佛陀の教へのみを聞いて、聲聞・縁覺の教へを聞かうとはしません。舍利弗さんよ。佛法の守護神である帝釋天・梵天王・四天王・その他の諸天・龍神・鬼神たちで此の室に入る者は、維摩居士が正法を講説するのを聞いて、皆佛陀の教へに導かれて無上絶對のさとりを求め、かつ衆生を教化救濟しようとの願ひを發して立ち去るのです。」

「舍利弗さんよ。私は、維摩居士の居室に住むこと十二年です。最初から聲聞・縁覺の教へを説くのを聞いたことはありません。ただ大乘の菩薩が説く大慈・大悲・不可思議の諸佛の教へのみを聞きました。」

「舍利弗さんよ。維摩居士の居室には常に未曾有かつ得難い八つの事象が現出されます。八つの事象とは次の通りです。此の居室には常に金色の光が照らしてゐて、晝夜の別がありません。太陽や月の明りは必要としないのです。此を第一の未曾有かつ得難い事象とします。此の室に入った人は、諸々の煩惱に惱まされません。此を第二の未曾有かつ得難い事象とします。此の居室には佛法を守護する帝釋天・梵天王・四天王・その他諸菩薩たちが絶えず來會します。此を第三の未曾有かつ得難い事象とします。此の居室に於ては常に六波羅蜜つねにろくはちみつ（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧）、不退轉の教へを説きます。此を第四の未曾有かつ得難い事象とします。此の居室には常に天上界の最上の音樂が奏され、その絃のひびきより無量の佛法教化の音が出されます。此を第五の未曾有かつ得難い事象とします。此の居室には四つの大きな藏があつて諸々の寶が積み満たされてゐます。貧窮の人々に周まわく施してこれを濟ひ、求める人に施して盡きることはありません。此を第六の未曾有かつ得難い事象とします。此の居室に於て維摩居士が諸佛の來訪を念する時、釋迦牟尼佛・阿彌陀佛・阿閼佛あしやく・寶德佛・寶焰佛ほうえん・寶月佛・寶嚴佛ほうげん・難勝佛・師子響佛ししきやう・一切利成佛等の十方の無量の諸佛は皆居士の願ひに應じて此の居室に現はれ、絶妙深遠な諸佛の教へを廣く説き、説き終れば立ち去ります。此を第七の未曾有かつ得難い事象とします。一切の諸天の莊嚴なる宮殿も、諸佛の淨土も皆、此の居室の中に於て現出されます。此を第八の未曾有かつ得難い事象とします。舍利弗さんよ。維摩居士の居室には常に以上の未曾有かつ得難い八つの事象が現出されます。此の不可思議な事象を見れば、聲聞・縁覺の

教へを求める人は誰一人としてありません。」

〔何ぞ女身を轉ぜざるやと問ふに困りて論を作す〕（現代語譯）

天女が舍利弗と共に論議して、定まつた相の無い中道の理を顯はす中の第五は、何故女身を男身に轉換しないかを天女に問ふことに因つて論議をします。舍利弗の言はく。汝何を以て女身を轉ぜざるやから以下がこれでありませぬ。天女が衆生を教化するには聲聞・緣覺・菩薩の三乘の教へを以てするが、天女の本來の姿は大乗の教へを以てするのだと言ふのを、舍利弗は今聞きました。然らば天女は必ず數多くの徳を積み重ねてゐるに違ひあるまい、それだけの徳を有する身は女身であるべき筈がない、と舍利弗は思ひました。それ故に、どうして女身を男身に轉換しないのかと天女は問ふのです。その中にも亦三つの項目があります。

第一に、女身である天女の姿について問答します。

第二に、即時に天女はから以下は、神通力を以て舍利弗は天女の姿に、天女は舍利弗の姿に身を變へて問答します。

第三に、即時に天女は還神力を攝むから以下は、神通力を攝め、もとの舍利弗の姿に復さしめて問答します。

第一の女身の天女の姿について問答する中に、二つの項目があります。

第一に、何故女身を男身に轉換しないのかと舍利弗が問ひます。

第二に、天女が答ます。その答への中に四つの項目があります。第一に、天女は直ちに答へます。眞諦（相對世界を超えた

絶対平等の世界）の中に於ては本來男・女といふ區別はありません。それ故に天女は十二年間も女身を求め續けましたが、つひに得ることは出来ませんでした。女身を男身に轉換する必要など全く無いのであります。第二に、天女は幻の女人の譬へを擧げ、反對に舍利弗に問ひます。第三に、舍利弗はその譬へについて答へます。第四に、天女は譬へを佛法の理に結び合せ、世の中の一切の現象は固定的實體の無い空なのであるから、女身を男身に轉換する必要など無いのだとするのであります。

第二の即時に天女はから以下は、舍利弗は天女の姿に、天女は舍利弗の姿に身を變へて問答します。その中にも亦四つの項目があります。

第一に、經典執筆者は舍利弗が天女の姿に變へられ、天女は舍利弗の姿に變じたことを述べます。第二に、天女は舍利弗に對して何故女身を男身に轉換しないのかと問ひます。第三に、舍利弗は答へます。私は如何にして女に變身せしめられたのかわかりません。男に變身することは私には出来ません。また次のやうに解するのも良いでせう。——此は神通力による變化の姿であつて現實世界の存在ではない。空無に等しい姿であるから變身する必要はないのである、——と。第四に、天女は順を逐つて舍利弗に教示します。三句あります。初めの句は、舍利弗は既に空無に等しいのであるから變身する必要はない、一切の女人も亦空無に等しいのであるから變身する必要はない、のであります。第二句は、一切は空無に等しいのであるから、女人でないにも拘らず女人の姿を現することを説き明してゐます。第三句は、佛陀の説いた言葉を擧げて此の項全體を證し成立せしめます。

第二の即時に天女は還……を攝むから以下は、天女と舍利弗とがもとの姿に復して問答します。四つの項目があります。

第一に經典執筆者は、天女が神通力を攝め、舍利弗がもとの姿に復することを述べます。第二に天女は、舍利弗に女人の姿は何處にあるかと問ひます。第三に舍利弗は、女人の姿は本來生滅きはまり無い故に存在するとも言へず、存在しないとも言へない、と答へます。第四に天女は、究極の眞理に於ける空觀を以て、一切の存在や現象は固定的實體の無い空であり、生滅きはまり無いことをしめくり、佛陀の説いた言葉を以て證し成立せしめます。

以上は皆經典をこ覽なさい。

(訓讀文)

舍利弗の言はく。汝何を以て女身を轉ぜざるや従り以下、第五に身を轉ずるを問ふに因りて論を成す。今迹は
 三乗爲り、本は即ち是れ大なりと聞く。然れば必ず徳を積むこと既に深し。理として應に女身を受くべからず。
 故に何ぞ女身を轉ぜざるやと問ふ。中に就きて亦三有り。

第一に本の身に就きて問答す。

第二に即時に天女は還…を攝む従り以下、身を轉じて問答す。

第三に即時に天女は還…を攝む従り以下、本の身に復して問答す。

中の第一の本の身の問答の中に就きて自ら二有り。

第一に身子問ふ。

第二に天女答ふ。答への中に四有り。

一に直ちに答ふ。眞諦の中には本男女の相無し。故に我十二年に於て女身を求むるに得ず。當に何の轉ずる

所あるべきやと明す。

二に譬を擧げて反りて身子に問ふ。

三に身子譬へに答ふ。

四に天は合譬を爲して、諸法は皆空なれば轉ず可きこと無しと明すなり。

即時に従り以下、第二に身を轉じて問答す。中に就きて亦四有り。

一に經家二人の身を轉ずるを敍す。

二に問ふ。身子は何が故に女身を轉ぜざるや。

三に身子答ふ。我今轉じて女身と爲る所以を知らず。那ぞ轉じて男と爲ることを得んや。亦可なるべし。此

れ化にして有法に非ず。空なれば轉ず可き無しと。

四に天女は順に身子に教ふ。三句有り。

初めの句は汝既に無なるが故に轉ず可き無し。一切の女も亦空なるが故に轉ず可き無し。

二句は皆空なるが故に女に非ずして而も女を現するを明すなり。

三は佛語を擧げて惣じて證す。

即時そくじに天女てんによは還また…を攝とらむ従より以下いげ、第三だいさんに本もとの身みに復ふくして問答もんどうす。四しの意い有あり。

一いちに經家きやうけ身の本もとに復ふくするを敍じよす。

二にに天てんは身しん子しに女をんなの色しき何いかれに在ありやと問とふ。

三さんに身しん子し答こたふ。本ほん來らい生しやう滅めつ無むきが故ゆゑに在あるも在あらずも無なし。

四しに天てんは理りの空くうを以もつて諸法しよほうは皆みな空くうにして無生むしやうなりと會えして、佛語ぶつごを承うけて證しやうを成なす。

見みつ可べし。

經典 (何ぞ女身を轉ぜざるやと問ふに因りて論を作す)

(本の身に就きて問答す・舍利弗問ふ)

舍利弗せりぶつノ言ク。汝何ヲ以テカ不ルヤレ轉ゼニ女身ヲ一。

(天女答ふ・直ちに答ふ)

天ノ曰ク。我從リニ十二年一來カタ。求ムルニニ女人ノ相ヲ一了ニ不可カラ得。當ニニ何ノ所カアルレ轉ズル。

(譬へを擧げて舍利弗に問ふ)

譬へバ如シニ幻師ノ化ヲ作スルガ幻女ヲ一。若シ有テレ人間ハンニ何ヲ以テカ不ルヤトレ轉ゼニ女身ヲ一。是ノ人爲スヤニ

正シキ問ト一不ヤ。

(舍利弗譬へに答ふ)

舍利弗ノ言ク。不也。幻ハ無シニ定レル相一。當ニニ何ノ所カアルレ轉ズル。

(天女は合譬を爲す)

天ノ曰ク。一切ノ諸法モ亦復如クレ是ノ。無シレ有ルコトニ定レル相一。云何ゾ乃チ問フヤレ不ルトレ轉ゼニ女身ヲ一。

(變身して問答す 二一 經家二人の變身を敍す)

即時ニ天女ハ以テ神通力ヲ變ジテ舍利弗ヲ令シテ如クナラニ天女ノ。天ハ自ラ化シテ身ヲ如クニスニ舍利弗ノ。

(天女は問ふ)

而テ問テ言ク。何ヲ以テカ不ルヤレ轉ゼニ女身ヲ。

(舍利弗答ふ)

舍利弗ハ以テ天女ノ像ヲ一而答テ言ク。我今不レ知ラニ何ソ轉ズルヤヲ。而モ變ジテ爲レリニ女身ト。

(天女は順に舍利弗に教ふ)

天ノ曰ク。舍利弗若シ能ク轉ゼバニ此ノ女身ヲ。則チ一切ノ女人モ亦當ニ能ク轉ズ。如クニ舍利弗ハ非レドモ女ニ而モ現ズルガニ女身ヲ。一切ノ女人モ亦復如シレ是ノ。謂モレ現ズトニ女身ヲ。而モ非ルニ女ニ也。是ノ故ニ佛ハ説クニ一切ノ諸法ハ非ズレ男ニ非ズトロ女ニ。

(本の身に復して問答す 三十一 經家身の本に復するを敍す)

即時ニ天女ハ還攝ムニ神力ヲ。舍利弗ノ身還復スルコト如シレ故ノ。

(天女問ふ)

天ハ問フニ舍利弗ニ。女身ノ色相今何レノ所在ルヤ。

(舍利弗答ふ)

舍利弗ノ言ク。女身ノ色相無クレ在ルモ無シレ不レ在ラ。

(佛語を承けて證を成す)

天ノ曰ク。一切ノ諸法モ亦復如クレ是ノ。無クレ在ルモ無シレ不ルモレ在ラ。夫レ無クレ在ルモ無シトハ不ルモレ在ラ者。佛ノ所レ説ナリ也。

經典訓讀文

舍利弗の言はく。汝何を以てか女身を轉ぜざるや。

天の曰はく。我十二年従り來かた女人の相を求むるに了に得可からず。當に何の轉ずる所かあるべき。

譬へば幻師の幻女を化作するが如し。若し人有りて何を以てか女身を轉ぜざるやと問はん。是の人正しき問ひと爲すや不や。

舍利弗の言はく。不なり。幻は定まれる相無し。當に何の轉ずる所かあるべき。

天の曰はく。一切の諸法も亦復是の如く、定まれる相有ること無し。云何ぞ乃ち女身を轉ぜざると問ふや。

即時に天女は神通力を以て舍利弗を變じて天女の如くならしめ、天は自ら身を化して舍利弗の如くにす。

而して問ひて言はく。何を以てか女身を轉ぜざるや。

舍利弗は天女の像を以て答へて言はく。我今何ぞ轉ずるやを知らず。而も變じて女身と爲れり。

天の曰はく。舍利弗若し能く此の女身を轉ぜば、則ち一切の女人も亦當に能く轉ずべし。舍利弗は女に非ざれども女身を現

ずるが如く、一切の女人も亦復是の如し。女身を現すと雖も、而も女に非ざるなり。是の故に佛は一切の諸法は男に非ず

女に非ずと説く。

即時に天女は還神力を攝む。舍利弗の身還復すること故の如し。

天は舍利弗に問ふ。女身の色相今何れの所に在るや。

舍利弗の言はく。女身の色相在るも無く在らざるも無し。

天の曰はく。一切の諸法も亦復是の如く、在るも無く在らざるも無し。夫れ在るも無く在らざるも無しとは、佛の所説なり。

經典現代語譯

舍利弗は問ひました。「天女さん、徳ある方なのにどうして男に變身しないのですか。」

天女は答へました。「私は十二年間も眞の女人なるものを求めましたが、絶対平等の世界には男女の區別は無く、つひに求めることは出来ませんでした。どうして男に變身する必要があるませうか。」

天女「譬へば幻術師が化作した幻の女人の如きに對し、或る人が何故に男に變身しないのかと問うたとします。その人の問ひは正しい問ひですか、否ですか。」

舍利弗は答へました。「正しい問ひではありません。幻には定まつた姿はありません。どうして變身する必要があるませうか。」

天女は言ひました。「一切の現象、存在も幻と同様に定まつた姿形すがたかたちはありません。私に女身を男に變身しないのかなど、貴方はどうして問ふのですか。」

天女は神通力を以て、即時に舍利弗を天女の姿に變へてしまひ、天女は自分自身を舍利弗の姿に變へてしまつた。そして天女は問ひました。「舍利弗さん、どうして女身を男に變へないのですか。」

天女の姿になつた舍利弗は答へました。「私は何故變身したのかわかりません。而も男の私が女身に變りました。」

天女は言ひました。「舍利弗さん、貴方が此の女身を變へることが出来るならば、一切の女人も變身できますよ。舍利弗さん、貴方は女でないけれども女の姿になつてゐるやうに一切の女人も同様なのです。女の姿になつてゐるけれども、究極の本體は女ではないのです。此の故に佛陀は、一切の存在は男でもなく女でもないとお説きになりました。」

天女が神通力を止めますと、即時に舍利弗はもとの姿に復しました。

天女は舍利弗に問ひました。「女身の姿は今何處にありますか。」

舍利弗は答へました。「女身の姿は存在するとも言へず、存在しないとも言へません。」

天女は言ひました。「此の世の一切の事象も女身と同様に、存在するとも言へません。一切の事象が存在するとも言へないとも言へないとは、そもそも佛陀のお説きになつた言葉なのです。」

〔天女の生ずる所を問ふに因りて論を作す〕（現代語譯）

天女が舍利弗と共に論議して、定まつた相の無い中道の理を顯はす中の第六は、天女は此で死んだ後は如何なる所に生れるのであらうかを問ふことに因つて論議をします。舍利弗しゃりぼつてん天とに問ふから以下がこれであります。

その時舍利弗は、天女が神通力を自在に驅使するのを見て、深く敬ひあふぐ心をおこし、天女は至極のさとりに近い人であらう、死んだ後は必ず極めて妙なる所に生れるに違ひあるまいと思ひました。それ故汝ゆめなんぢ此こゝに没もつして當まさに何いづれの所ところにか生しまずべきと問ふのであります。

佛陀の導きによつて生れ出でしめられた者は、究極の眞理に於ては生ずることも滅することも無い、而るにその生滅を超えた究極の生存を、天女は如何にして得られたのでせうか、と舍利弗は問ひます。天女は、究極の眞理に於ては衆生も皆佛陀と同様に生滅を超えた生存を得るのであり、その究極の生存はただ佛陀獨りのみにあるのではない、と答へます。或る研究家は次のやうに云ひます。—舍利弗は天女の答への意味を領解して、若し佛陀の導きによつて生れ出るならば、それは生滅を超えてゐる生存であり、天女さん貴女もさうですね、と問ふ。天女はその問ひに應じて、究極の眞理に於ては衆生も佛陀と同様に生滅を超えた生存を得る、生滅を超えた生存を得るのは天女の私のみではない、と答へるのである、—と。

(訓讀文)

舍利弗天に問ふ從り以下、第六に生ずる所を問ふに因りて論を成す。

時に人は神力自在なるを見て欽仰の情重く、是れ極に隣りするの人なり、死して後生ずる所は必ず當に花妙なるべしと謂へり。故に汝此に没して當に何れの所にか生ずべきと問ふ。

身子は問ふ。佛化の生は實には生滅するに非ず。而るに汝那ぞ没生せざるを得るや。天答ふ。衆生も皆佛の如く没生せず。豈佛獨りのみならんや。或は云はく。身子は意を領して曰はく。若し是れ佛化の生の如くならば、汝は即ち没生に非ざるなり。故に天は則ち順じて答ふ。衆生も猶佛の如く生滅するに非ず。豈我れ獨りのみならんやと。

經典 (天女の生ずる所を問ふに因りて論を作す)

舍利弗問フ。天ニ。汝於テ。此ニ没シテ當ニ。生ズニ。何レノ所ニカ。天ノ曰ク。佛化ノ所レ。生ズル。吾モ如シニ彼ノ生ノ。一。曰ク。佛化ノ所レ。生ズル非ルニ。没生ニ。一。也。

天ノ曰ク。衆生モ猶然リ。非ルニ。没生ニ。一。也。

經典訓讀文

舍利弗天に問ふ。汝此に於て没して當に何れの所にか生ずべき。天の曰はく。佛化の生ずる所、吾も彼の生の如し。曰はく。佛化の生ずる所は没生に非ざるなり。天の曰はく。衆生も猶然り。没生に非ざるなり。

經典現代語譯

舍利弗は天女に問ひました。「貴女は此で死んだ後はどんな所へ生まれるのですか。」

天女は答へました。「佛陀の導きによつて生れ出でしめられる所、私はそれと同様な所に生れます。」

舍利弗は問ひました。「佛陀の導きによつて生れる所は、生滅を超えた究極の生存だと思ひますが・・・」

天女は答へました。「究極の眞理に於ては衆生も皆生滅を超えた生存を得るのです。」

〔極果を得るを問ふに因りて論を作す 科目段分け〕（現代語譯）

天女が舍利弗と共に論議して、定まつた相の無い中道の理を顯はす中の第七は、無上絶對のさとりを天女が得ることについて、舍利弗が問ふことに因つて論議をします。舍利弗天に問ふ。汝久如當に菩提を得べきから以下がこれであります。その中に三つの項目があります。

第一に、さとりは無爲無相であるので、眞實にはさとりを得ることは無い、と説き明します。

第二に、舍利弗の言はく。今諸佛から以下、世俗に於てはさとりを得ると説きますが、眞實にはさとりを得ることは無いことを説き明します。

第三に、天の曰はくから以下、無爲無相の究極の世界と世俗の世の中について、眞實にはさとりを得ることは無いことを説き明します。

（訓讀文）

舍利弗天に問ふ。汝久如當に菩提を得べき從り以下、第七に極果を得るを問ふに因りて論を成す。上の第六に我

彼の生の如しと云へるを聞き、便ち謂へり。應に是れ高行の人なれば久しからずして菩提を得べしと。所以に此の問ひを致すなり。中に就きて自ら三有り。

第一に無に就きて無得を明す。

第二に舍利弗の言はく。今諸佛従り以下、有に就きて無得を明す。

第三に天の日はく従り以下、通じて有と無とに就きて無得を明すなり。

〔無に就きて無得を明す〕（現代語譯）

無上絶對のさとりを得ることについて舍利弗が問ふ中の第一は、さとりは無爲無相であるので眞實に得ることは無いことを説き明します。その中にも亦四つの項目があります。

第一に舍利弗が問ひます。第二に天女が答へます。舍利弗さん、貴方が以前の凡夫にかへるならば、私も最高至上のさとりが得られませう、と天女は言ひます。第三に舍利弗は言ひました。私は不退轉の階位を得てをりますから、以前の凡夫にかへる道理はありません。第四に天女は言ひました。私にも亦無上絶對のさとりを得る道理はありません。さとりは無爲無相の空なのでから把握することはできないのです。今佛道修行者も無爲無相の空を觀すべく修行するのですから、無上絶對のさとりを得る人は無いのです。

（訓讀文）

第一の中に亦四有り。

一に身子問ふ。

二に天女答ふ。汝還りて凡夫と爲らば、我れ菩提を得べしと言ふ。

三に舍利弗の言はく。我凡夫と爲ること、是の處り有ること無し。

四に天の日はく。我菩提を得ることも亦、是の處り無し。菩提は空なるが故に住處無し。

今行人も亦空なれば能く得る者無きなり。

經典（無に就きて無得を明す）

（舍利弗問ふ）

舍利弗問フ。天ニ。汝久如當ニレ。得ニ阿耨多羅三藐三菩提ヲ一。

（天女答ふ）

天ノ曰ク。如クンバ舍利弗還リテ爲ルガニ。凡夫ト一。我乃チ當ニレ成ズニ阿耨多羅三藐三菩提ヲ一。

（舍利弗の言はく）

舍利弗ノ言ク。我作ルコトニ。凡夫ト一。無シレ。有ルコトニ。是ノ處リ一。

（天の曰はく）

天ノ曰ク。我得ルコトニ。阿耨多羅三藐三菩提ヲ一。亦無シニ。是ノ處リ一。所以ハ者何シ。菩提ハ無シニ。住處一。是ノ故ニ無シレ。有ルコトニ。得ル者一。

經典訓讀文

舍利弗天に問ふ。汝久如當に阿耨多羅三藐三菩提を得べき。

天の曰はく。舍利弗還りて凡夫と爲るが如くんば、我乃ち當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。

舍利弗の言はく。我凡夫と作ること。是の處り有ること無し。

天の曰はく。我阿耨多羅三藐三菩提を得ること、亦是の處り無し。所以は何ん。菩提は住處無し。是の故に得る者有ること無し。

經典現代語譯

舍利弗は天女に問ひました。「貴女は無上絶対のさとりをいつ頃得られるのですか。」

天女は答へました。「舍利弗さんが以前の凡夫にかへるやうでしたら、私も無上絶対のさとりに到達いたしませう。」
舍利弗は言ひました。「私は不退に住してゐますから以前の凡夫にかへる道理はありません。」

天女は言ひました。「私も亦無上絶対のさとりを得るといふ道理はありません。何故ならば、さとりは無爲無相で所在が無く把握できません。それ故に佛道修行者もさとりを得ることはありません。」

〔有に就きて無得を明す〕（現代語譯）

無上絶対のさとりを得ることについて舍利弗が問ふ中の第二は、世俗に於てはさとりを得ると説きますが、眞實にはさとりを得ることは無いことを解き明します。舍利弗の言はくから以下がこれでありました。

正しく一つの問答があります。舍利弗は問ひます。若し無上絶対のさとりは誰も得ることは無いのであれば、諸佛は過去に於て既に得た、また未來に於て必ず得る、と云ふことは出来ないではありませんか。それに對して天女は答へます。無上絶対のさとりを得ると説くのは、全てが因縁によつて生滅する世俗の世に於てのことです。無上絶対のさとりは無爲無相であつて過去・未來・現在の相はありません。眞實には得ることは無いのです。

（訓讀文）

舍利弗の言はく從り以下、第二に有に就きて無得を明す。

正しく一つの問答有り。問うて言はく。若し都て得ること無ければ、那ぞ諸佛は已に得たり、當に得べしと云ふを得んや。答へて曰はく。皆世俗の因縁の中を以て説く。菩提に去・來・今有りて實に得るの相有るに非ざるなり。

經典（有に就きて無得を明す）

舍利弗ノ言ク。今諸佛ノ得ルトニ阿耨多羅三藐三菩提ヲ一已ニ得タルト當ニ得。如シトハニ恆河沙ノ一。皆謂フヤレ何ヲカ乎。

天ノ曰ク。皆以テノニ世俗ノ文字ノ數ヲ一故ニ。説クレ有リトニ三世一。非ズレ謂フニハニ菩提ニ有リトニ去・來・今一。

經典訓讀文

舍利弗の言はく。今諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を得ると已に得たと當に得べきと、恆河沙の如しとは、皆何をか謂ふや。天の曰はく。皆世俗の文字の數を以ての故に、三世有りと言ふ。菩提に去・來・今有りと謂ふには非ず。

經典現代語譯

舍利弗は問ひました。「無上絶對のさとりを諸佛は現在得てゐる、過去に得た、未來に必ず得る、ガンジス河の砂の數ほど多くの諸佛がさうであると言ひますが、そのやうに説くことは出来ないではありませんか。」

天女は答へました。「世俗の世に於ては言語を以て表現しますから、過去・未來・現在があると説きます。究極の眞理に於ては、さとりに過去・未來・現在の相はありませんから、さとりを得ることも無いのです。」

〔有と無とに就きて無得を明す〕(現代語譯)

無上絶對のさとりを得ることについて舍利弗が問ふ中の第三は、無爲無相の究極の世界と世俗の世の中とについて、眞實にはさとりを得ることは無いことを説き明します。天の曰はくから以下がこれです。その中に三つの項目があります。

第一に、天女が舍利弗に、阿羅漢果(小乗の最高の聖者)を得ましたか、と問ひます。

第二に、舍利弗は、無所得故に、而も得たり(阿羅漢果を得ようといふ執着、欲望はありませんでした。だからこそ得られました)と答へました。得ようといふ執着、欲望を捨て去る所に無爲無相の空の實踐があり、現實の世俗の世に於ては阿羅漢果を得ることを説き明してゐます。

第三に、天女は舍利弗の答へに應じて言ひました。諸佛菩薩もその通りです。無爲無相の空を實踐するために一切の執着、欲望を捨て去ります。世俗の世に於ては無上絶對のさとりを得てゐる姿を現はしますが、それは假の姿であつて眞實に得てゐるものではありません。

(訓讀文)

天の日はく従り以下、空と有とに就きて無得を明す。三有り。

一に天は身子に問ふ。汝阿羅漢を得るや。

二に身子答ふ。無所得故に、而も得たり。空に就きては即ち無得なり。假に就きては得るを明す。

三に天女順じて答ふ。諸佛菩薩も亦然なり。空に就きては即ち無得なり。假に就きては得る有れども實には得ること無きなり。

經典 (有と無に就きて無得を明す)

(一) 天女問ふ)

天ノ曰ク。舍利弗。汝ハ得タリヤニ 阿羅漢道ヲ一耶。

(二) 舍利弗答ふ)

曰ク。無所得ノ故ニ。而モ得タリ。

(三) 天女言はく)

天ノ曰ク。諸佛菩薩モ亦復如シ。是ノ。無所得ノ故ニ。而モ得タリ。

經典訓讀文

天の日はく。舍利弗、汝は阿羅漢道を得たりや。

曰はく。無所得の故に、而も得たり。

天の日はく。諸佛菩薩も亦復是の如し。無所得の故に、而も得たり。

經典現代語譯

天女は問ひました。「舍利弗さん、貴方は聖者たる阿羅漢果を得ましたか。」

舍利弗は答へました。「得ようといふ執着、欲望を捨て去りました。それ故にこそ得ることが出来ました。」
天女は言ひました。「諸佛菩薩のさとりも亦それと同じです。さとりは無爲無相ですから得ようといふ執着を捨て去ります。それ故にこそ得られるのです。」

〔淨名は天女の徳を讚嘆し、定まり無きの相を結成す〕（現代語譯）

中根の人の第四の疑ひ―菩薩が實踐すべき中道の行に定まつた相の無いことについての疑ひ―を取り除く中の第三は、維摩居士が天女の徳を讚嘆し、中道の眞理には定まつた相の無いことを成り立たしめ、結びとすることを説き明してゐます。爾の時に、維摩詰から以下がこれであります。その中に亦三つの項目があります。

第一に、天女の昔日の徳行を讚嘆します。第二に、已に能く・・・に遊戯しから以下は、天女が現に具へてゐる徳行を讚嘆します。第三に、本願を以ての故にから以下は、その身を此の世に現はして衆生を數かぎりなく教化濟度することを讚嘆します。

皆經典を御覽なさい。

（訓讀文）

爾の時に、維摩詰從り以下、第三に淨名天女の徳を讚嘆して、無相の義を結成することを明すなり。中に就きて亦三有り。

第一に往行を嘆ず。

第二に已に能く・・・に遊戯し從り以下、現徳を嘆ず。

第三に本願を以ての故に從り以下、現じて無方に物を益することを嘆ずるなり。

皆見つ可し。

經典（淨名は天女の徳を讚嘆し、定まり無きの相を結成す）

爾ノ時ニ維摩詰。語ラクニ舍利弗ニ。

（往行を嘆ず）

是ノ天女ハ已ニ曾テ供ヲ養ヌ九十二億ノ諸佛ヲ一。

（現徳を嘆ず）

已ニ能ク遊シ戲シ菩薩ノ神通ニ一。所願具足シ。得テニ無生忍ヲ一。住セリニ不退轉ニ一。

（無方に物を益するを嘆ず）

以テノニ本願ヲ一故ニ。隨テニ意ニ能ク現ジ教ヲ化衆生ヲ一。

經典訓讀文

爾そのときに維摩詰ゆいまきつ、舍利弗しゃりほつに語かたらく。

是このてん女にょは已すでに曾かつて九十二億きゅうじゅうにおくの諸佛しよぶつを供養くようす。

已すでに能よく菩薩ぼさつの神通じんづうに遊戯ゆうぎし、所願具足しよがんぐそくし、無生忍むしやうにんを得えて、不退轉ふたいてんに住じゆうせり。

本願ほんがんを以もつての故ゆゑに、意いに隨したがつて能よく現げんじ衆生しゆじやうを教化きやうけす。

經典現代語譯

天女の言葉が終つた時、維摩居士は舍利弗に語りました。

「此の天女は昔日、九十二億もの諸佛に供養を爲したのです。」

「既に菩薩の神通力を自在に驅使し、衆生濟度の誓願を具足し、絶對不變の眞理をさとり、不退轉の境地に安住してゐます。」

「衆生教化を本願としてゐますから、意のままに此の世に姿を現はし、衆生を教化濟度します。」

第八 佛道章

〔佛道章の名稱の由來〕（現代語譯）

此の經典の第八章は佛道章であります。

此の章は、菩薩は地獄・餓鬼などの非道の中にもむきますが、それらの罪過つみとがに染まることなく、非道におもむくが故にこそ佛道に通達します。それ故に此の章を『佛道章』と名づけます。

（訓讀文）

佛道章第八なり。

此の章は菩薩の行は非を以て佛道に通達するが故に、因りて章の目と爲すなり。

〔中根の人の疑ひを遣るために釋を爲す〕（現代語譯）

此の章は中根ちゆうこんの人（根機の中程度の人）を教化濟度する二章の中、觀衆生章の次の第二の章です。即ち上述の文殊問疾章で釋き明した通りであります。

中根の人は上述の不思議章に、無量無數の十方の世界に於て魔王の姿をなしてゐる人の多くは、不可思議解脱の境地に到達してゐる菩薩であつて、方便力ほうべんりき（衆生を導く巧みな手立て）を以て衆生を教化濟度せんがために神通力によつて魔王に化身してゐるのだと聞いて、次のやうな疑問を抱きます。——如來の教へは正しい道を実踐することによつて正しい教へが弘まる。非道を実踐して正しい教へに通達できる筈がない。何故に魔王に化身して非道を行ひ、如來の教へに通達し弘めようとするのであらうか、——と。それ故に此の佛道章を擧げて、中根の人の疑ひを釋き明すのであります。

(訓讀文)

此は中根を化(け)する中の第二(だいに)なり。即ち上(かみ)に釋(しゃく)するが如(ごと)し。中根(ちゆうこん)は上の不思議(ふしぎ)章(しよう)に十方(じゆつぱう)世界(せかい)に魔王(まおう)と作る者(ひと)は、多くは是(こ)れ不可思議(ふか)解脫(げだつ)に住(じゆ)する菩薩(ぼさつ)にして、方便(ほうべん)力を以(もつ)て衆生(しゆじやう)を教化(け)せんとして現(げん)じて魔王(まおう)と作るなりと聞(き)きて、即(すなは)ち疑(うたが)ふらく。如來(にょらい)の道(みち)は只應(ただま)に是(ぜ)を以(もつ)て是(こ)れを弘(ひろ)むべし。非(ひ)を以(もつ)て是(ぜ)に通(つう)すべからず。云何(いか)んが猶(なほ)魔王(まおう)と作りて以(もつ)て佛事(ぶつじ)を通(つう)せんやと。所以(ゆゑ)に此(こ)の章(しよう)を擧(あ)げて釋(しゃく)を爲(な)す。

〔佛道章の科段分け〕(現代語訳)

佛道章の中を三つの項目に分けます。

第一に、初めからは是(これ)を佛道(ぶつどう)に通達(つうたつ)すと爲(な)すに訖(まは)るまでは、先づ心のうちには無相(むさう)(差別対立を超越してある)の大慈悲心(だいじひしん)を懷(いだ)き、外見(がいけん)は非道(ひどう)を行(な)す魔王(まおう)の姿(すがた)を現(げん)じ、衆生(しゆじやう)の機根(きこん)に相(あ)かなふ時(とき)を見(み)はからつて、方便(ほうべん)(衆生を導く巧みな手だて)を以(もつ)て衆生(しゆじやう)を教化(け)済(さい)する、そのことを説(と)き明(あ)してゐ(ゐ)ます。衆生(しゆじやう)は非道(ひどう)の中(なか)で苦(くる)しんでゐ(ゐ)ますから、衆生(しゆじやう)を済(さい)ふためには菩薩(ぼさつ)は非道(ひどう)の中(なか)におもむく他(た)ありません。これを菩薩(ぼさつ)は佛道(ぶつどう)に通達(つうたつ)する、と名(な)づけるのです。これを以(もつ)て、非道(ひどう)を行(な)じて佛道(ぶつどう)の正(ただ)しい教(きやう)へに通達(つうたつ)できる筈(はず)がないといふ中根(ちゆうこん)の人の疑(うたが)ひを取り除(と)きます。

第二に、是(こゝ)に於(お)いて維摩詰(じまいまきつ)は文殊(もんじゆ)に問(と)ふ。何等(なんら)を如來(にょらい)の種(たね)と爲(な)すやから以下(以下)は、煩惱(ぼんご)あるが故(ゆゑ)に、それを素因(すゐん)として如來(にょらい)のさとりに到達(とつたつ)し得(え)ることを説(と)き明(あ)し、諸々(しよしよ)の煩惱(ぼんご)を擧(あ)げて證(あか)しとします。

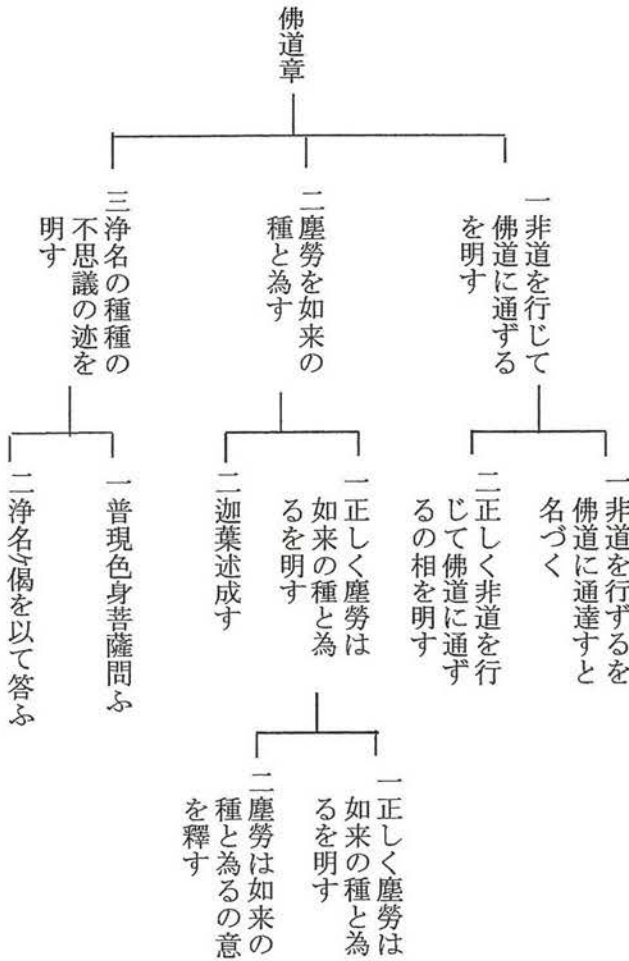
第三に、爾(そ)の時(とき)に會(あ)ひ中(ちゆう)に菩薩(ぼさつ)有(あ)り。普現色身(ふげんしきん)と名(な)づくから以下(以下)は、維摩居士(じまいか)が世俗(せきぞ)の人の姿(すがた)になつて種々(しゆしゆ)の不思議(ふしぎ)を現出(げんしゆ)して衆生(しゆじやう)を教化(け)することを説(と)き明(あ)し、非道(ひどう)を行(な)じて而(しか)も佛道(ぶつどう)の正(ただ)しい教(きやう)へに通達(つうたつ)することを成(な)り立(た)したしめ、結びの文言(もんご)とします。

(訓讀文)

中に就(つ)きて開(ひら)きて三(さん)と爲(な)す。

第一(だいいち)に初(は)じめ從(よ)り是(これ)を佛道(ぶつどう)に通達(つうたつ)すと爲(な)すに訖(まは)るまで、先(ま)づ内(うち)に無相(むさう)の大悲(だいひ)を懷(いだ)きて、外(そと)に非(ひ)を行(な)すを現(げん)じ、物(もの)の機宜(きぎ)

したが、
 に随つて、方便をもつて物を度するを明す。是を菩薩は佛道に通達すと名づく。以て非を以て是に通ずべからざるの疑ひを遣る。
 第二に是に於て維摩詰は文殊に問ふ。何等を如来の種と爲すや従り以下、塵勞を如来の種と爲すと明して類證す。
 第三に爾の時に会中に菩薩有り。普現色身と名づく従り以下、淨名の種種の不思議の迹を明して、非を行じて是に通ずるを結成す。



〔非道を行ずるを佛道に通達すと名づく〕（現代語訳）

佛道章の中の第一は、菩薩が非道の中におもむいて而も佛道に通達することを説き明しますが、その中に二つの問答があります。その第一の問答は、菩薩が非道の中におもむくのを、菩薩は佛道に通達すると名づけられます。問ひと答へとの二つがあります。經典を御覽なさい。

(訓讀文)

第一の中に就きて自ら二番の問答有り。初番は名を定む。正しく問ひと答へとを二と爲す。見つ可し。

經典（非道を行ずるを佛道に通達すと名づく）

爾ノ時ニ。文殊師利ハ問テニ維摩詰ニ言ク。菩薩ハ云何ガ通ニ達スルヤ佛道ニ。

維摩詰ノ言ク。若シ菩薩行ズレバニ於非道ヲ。是ヲ爲スニ通ニ達ニスト佛道ニ。

經典訓讀文

爾の時に、文殊師利は維摩詰に問ひて言はく。菩薩は云何んが佛道に通達するや。

維摩詰の言はく。若し菩薩非道を行ずれば、是を佛道に通達すと爲す。

經典現代語譯

その時文殊菩薩は、維摩居士に問うて言ひました。「菩薩が佛道に通達するには如何なる實踐を爲すべきでせうか。」
維摩居士は答へました。「菩薩が非道の中におもむくことが出来れば、これを佛道に通達すると名づけるのです。」

〔正しく非道を行じて佛道に通ずるの相を明す〕（現代語譯）

菩薩が非道の中におもむいて而も佛道に通達することを説き明す中の第二の問答は、菩薩が非道の中におもむいて而も佛道に通達する種々のあり様を正しく説き明します。問ひと答へとの二つがあります。

答への中には四つの事項があります。

第一に、初めの三行は結果として悪の報いを受ける非道（地獄・餓鬼など）について、その中で苦んでゐる衆生済度のために菩薩はおもむき、而も佛道に通達することを説き明します。

第二に、貪欲を行ずるを示してから以下は、貪欲などの非道を行ずれば悪の報いを受けるわけで、その因としての非道を行つてゐる衆生済度のために、菩薩は同じく非道を行ずるのですが、それに染まることなく佛道に通達することを説き明します。

第三に、諂偽を行ずるを示してから以下は、諂偽（へつらひ偽る）など種々の教へが入り混じつてゐる部門について、それらの非道を行ふ衆生済度のために、菩薩は同じく非道を行ずるのですが、それに染まることなく佛道に通達することを説き明します。

第四に、文殊師利から以下の一行の經典は、結びの文言です。

五無間を行じて而も惱恚無し（五種の無間地獄に墮ちてゐる衆生済度のため、菩薩はそこの中におもむき、衆生の悩み怒りを取り除くことは、衆生をして悩みや怒りの無い結果を、菩薩が得さしめることを説き明してゐます。これ以下の諸句も同様に解釋します。

一説では次のやうに解釋してゐます。―當にあるべき心の状態について解釋してゐる。菩薩は、その外見は無間地獄に墮ちてゐる姿を現出するが、その心のうちに悩みも怒りも無いのである。以下の諸句も同様に解釋する、―と。

第二の貪欲などの因としての非道を行ずる中に、亦二つの項目があります。初めは三毒（食欲・瞋恚・愚癡）について述べ、後に六弊（慳貪・破戒・瞋恚・懈怠・散亂・愚癡）について述べます。衆生済度のため、衆生と同じく三毒と六弊との非道を行ひますが、三善根（無貪・無瞋・無癡）及び六度（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧）の行から離れることは無いことを説き明してゐます。

第三と第四とは、經典を御覽なさい。

（訓讀文）

後番は正しく非を行じて是に通ずるの相を明す。亦問ひと答へとを二と爲す。答への中に自ら四の別有り。
第一に初めの三行は惡の果門に就きて非を行じて是に通ずるを明す。

第二に貪欲を行ずるを示して従り以下、的しく惡の因門に就きて非を行じて是に通ずるを明す。

第三に諂偽を行ずるを示して従り以下、雜門に就きて非を行じて是に通ずるを明す。

第四に文殊師利従り以下、一行は結す。

五無間を行じて而も惱害無しとは、他人をして惱害無き果を得せしむるを明すなり。下の諸句も類して此の如く釋す。

一に解す。直ちに當心に就きて釋を爲す。外に無間を現すと雖も、而も内心は惱害無きなり。下の諸句も亦同じなり。

第二の因門の中に就きて亦二有り。

初めに三毒に就きて、後には六弊に就きて、三毒と六弊とを現すと雖も三善と六度とに垂かずと明すなり。

第三と第四とは見つ可し。

經典 (正しく非道を行じて佛道に通ずるの相を明す)

(文殊問ふ)

又問フ。云何ガ菩薩ハ行ズルヤニ於非道ヲ一。

(維摩答ふ・果の惡行に就きて答ふ)

答テ曰ク。

若シ菩薩行ジテニ五無間ヲ一而モ無シニ惱害一。至リテニ於地獄ニ無シニ諸ノ罪垢一。至リテニ于畜生ニ無シニ有ルニ無明・驕慢等ノ過一。至リテニ于餓鬼ニ一而モ具ニ足ス功德ヲ一。行ジテニ色・無色界ノ道ヲ一不ニ以テ爲サレ勝タリト。

(因の惡行に就きて答ふ)

示シテレ行ズルヲニ貪欲ヲ一離ルニ諸ノ染著ヲ一。示シテレ行ズルヲニ瞋恚ヲ一於テニ諸ノ衆生ニ無シニ有ルコトニ悲礙一。示シテレ行ズルヲニ愚癡ヲ一而モ以テニ智慧ヲ一調ニ伏ス其ノ心ヲ一。示シテレ行ズルヲニ慳貪ヲ一而モ捨テテニ内外ノ所有ヲ一不レ惜マニ身命ヲ一。示シテレ行ズルヲニ毀禁ヲ一而モ安ニ住シ淨戒ニ一。乃至小罪ニモ猶懷クニ大ナル懼ヲ一。示シテレ行ズルヲニ瞋恚ヲ一而モ常ニ慈・忍アリ。示シテレ行ズルヲニ懈怠ヲ一而モ勤修ス

功德ヲ一。示シテ行ズルヲニ亂意ヲ一而モ常ニ念・定アリ。示シテ行ズルヲニ愚癡ヲ一而モ通達ス世間・出世間ノ慧ニ一。

(雜門に就きて答ふ)

示シテ行ズルヲニ諂僞ヲ一而モ善方便モテ隨フニ諸ノ經義ニ一。示シテ行ズルヲニ驕慢ヲ一而モ於テニ衆生ニ一猶シ如シニ橋梁ノ一。示シテ行ズルヲニ諸ノ煩惱ヲ一而モ心常ニ清淨ナリ。示シテ入ルヲニ於魔ニ一而モ順テニ佛ノ智慧ニ一不レ隨ハニ他ノ教ニ一。示シテ入ルヲニ聲聞ニ一而モ爲ニ衆生ノ一説クニ未聞ノ法ヲ一。示シテ入ルヲニ辟支佛ニ一而モ成就シテ大悲ヲ一教ヲ化ス衆生ヲ一。示シテ入ルヲニ貧窮ニ一而モ有テニ寶手一功德無シシ盡クル。示シテ入ルヲニ形殘ニ一而モ具シテニ諸ノ好相ヲ一以テ自ラ莊嚴ス。示シテ入ルヲニ下賤ニ一而モ生ジテニ佛種性ノ中ニ一具スニ諸ノ功德ヲ一。示シテ入ルヲニ羸劣醜陋ニ一而モ得テニ那羅延ノ身ヲ一。一切衆生ニ之所ルニ樂見セ一。示シテ入ルヲニ老病ニ一而モ永ク斷チニ病根ヲ一超テ越ス死ノ畏ヲ一。示シテ有ルヲニ資生一而モ恆ニ觀シテニ無常ヲ一實ニ無シシ所レ貪ル。示シテ有ルヲニ妻妾媵女一而モ常ニ遠テ離ス五欲ノ淤泥ヲ一。現シテニ於訥鈍ヲ一而モ成就シテ辨才ヲ一總持無シシ失フコト。示シテ入ルヲニ邪濟ニ一而モ以テニ正濟一度スニ諸ノ衆生ヲ一。現シテニ遍ク入ルヲニ諸道ニ一而モ斷スニ其ノ因縁ヲ一。現シテニ於涅槃ヲ一而モ不レ斷ゼニ生死ヲ一。

(結す)

文殊師利。菩薩能ク如クレ是行ズニ於非道ヲ一。是ヲ爲スニ通達スト佛道ニ一。

經典訓讀文

又問ふ。云何んが菩薩は非道を行ずるや。

答へて曰はく。

若し菩薩五無間を行じて而も惱害無し。地獄に至りて諸の罪垢無し。畜生に至りて無明・驕慢等の過有る無し。餓鬼に至りて而も功德を具足す。色・無色界の道を行じて以て勝れたりと爲さず。

貪欲を行ずるを示して諸の染著を離る。瞋恚を行ずるを示して諸の衆生に悲礙有ること無し。愚癡を行ずるを示して而も智慧を以て其の心を調伏す。慳貪を行ずるを示して而も内外の所有を捨てて身命を惜まず。毀禁を行ずるを示して而も淨戒に安住し、乃至小罪にも猶大いなる懼れを懷く。瞋恚を行ずるを示して而も常に慈・忍あり。懈怠を行ずるを示して而も功德を勤

修す。亂意を行ずるを示して而も常に念・定あり。愚癡を行ずるを示して而も世間・出世間の慧に通達す。

諂偽を行ずるを示して而も善方便もて諸の經義に隨ふ。驕慢を行ずるを示して而も衆生に於て猶し橋梁の如し。諸の煩惱を行ずるを示して而も心常に清淨なり。魔に入るを示して而も佛の智慧に順つて他の教に隨はず。聲聞に入るを示して而も衆生の爲に未聞の法を説く。辟支佛に入るを示して而も大悲を成就して衆生を教化す。貧窮に入るを示して而も實手有りて功德盡くる無し。形殘に入るを示して而も諸の好相を具して以て自ら莊嚴す。下賤に入るを示して而も佛種性の中に生じて諸の功德を具す。羸劣醜陋に入るを示して而も那羅延の身を得て、一切衆生に樂見せらる。老病に入るを示して而も永く病根を斷ち死の畏を超越す。資生有るを示して而も恆に無常を觀じて實に貪る所無し。妻妾媼女有るを示して而も常に五欲の淤泥を遠離す。訥鈍を現じて而も辨才を成就して總持失ふこと無し。邪濟に入るを示して而も正濟を以て諸の衆生を度す。遍く護道に入るを現じて而も其の因縁を斷ず。涅槃を現じて而も生死を斷ぜず。

文殊師利。菩薩能く是の如く非道を行す。是を佛道に通達すと爲す。

經典現代語譯

文殊菩薩は又問ひました。「佛道を弘めるため、菩薩は如何に非道を行するのでせうか。」

維摩居士は答へて言ひました。

「菩薩は、五種の無間地獄におもむいて、衆生の悩みや怒りを取り除きます。地獄におもむいて衆生の罪垢を取り除きます。畜生の世界におもむいて衆生の無明（根本の無知）や驕慢などの惡徳を取り除きます。餓鬼の世界におもむいて衆生に福德を具足せしめます。色界（清らかな物質の世界）や無色界（物質を超えた精神的世界）におもむいて、その世界の衆生をして勝れてゐると思はしめさせん。」

「菩薩は、むさぼり欲ばる衆生の中におもむいて、諸々の欲望の執着から衆生を離れさせます。怒りの衆生の中におもむいて、衆生に諸々の怒りや障害を起さしめないやうにします。愚癡の衆生の中におもむいて、智慧を以て衆生の心をととのへ惡を制御せしめます。物惜みの衆生の中におもむいて、衆生に内外の所有物を捨てて身命を惜まないやうにさせます。戒めを犯す衆生の中にお

もむいて、衆生を清淨な戒に安住せしめ、小罪を犯しても大きな懼れを懐かしめず。怒りの衆生の中におもむいて、常に衆生に慈悲心・怒りを耐へ忍ぶ心を起さしめます。怠りの衆生の中におもむいて、衆生に功德を積む修行に精を出さしめます。亂れた心の衆生の中におもむいて、常に衆生に専念・心の安定を得さしめます。愚癡の衆生の中におもむいて、衆生をして世間・出世間の智慧に通達せしめます。」

「菩薩は、諂へつらひ偽りを行ふやうに見えてゐて、實は諸々の經典の意義に随つて善き方便を以て衆生を導きます。驕慢を行ふやうに見えてゐて、實は衆生をして己の上を踏ましめ如くに高ぶりません。諸々の煩惱に苦しむやうに見えてゐて、實は菩薩の心は常に清淨です。悪魔の如くに見えてゐて、實は佛陀の智慧を順守し他の教へには随ひません。聲聞の人のやうに見えてゐて、實は未聞の大乗の教へを説きます。辟支佛のやうに見えてゐて、實は大乗の慈悲を成就して衆生を教化します。貧窮のやうに見えてゐて、實は手に財寶あり、衆生に施して功德は盡きません。相好まうごうを具してゐないやうに見えてゐて、實は諸々の優れた相を以て自らを莊嚴にします。下賤であるやうに見えてゐて、實は諸々の功德を具してゐる本來の佛性を現はします。疲れ弱く醜怪なやうに見えてゐて、實は金剛力士の身を得て、一切衆生から仰ぎ見られます。老いかつ病んでゐるやうに見えてゐて、實は病根を永久に斷ち切り、死の畏れを超越してゐます。資産を有してゐるやうに見えてゐて、實は常に財物の無常を觀じてゐて貪ることはありません。妻妾や侍女を有してゐるやうに見えてゐて、實は常に世俗の欲望の汚れから遠く離れてゐます。口が重く鈍いやうに見えてゐて、實は辨才を成就し、善を保持して失はず悪を生ぜしめません。外道の誤つた導きであるやうに見えてゐて、實は佛道の正しい導きによつて衆生を濟度します。遍く諸々の外道を行ずるやうに見えてゐて、實はその因縁を斷ち切つてゐます。さとのり涅槃に安住してゐるやうに見えてゐて、實は衆生濟度のために迷ひの俗世間を離れることはありません。」

「文殊菩薩さんよ、非道の中で苦しんでゐる衆生を濟ふためには、菩薩は非道の中におもむく他ありません。これを菩薩は佛道に通達すると名づけるのです。」

〔塵勞を如來の種と爲すの科段分け〕（現代語譯）

佛道章の第二は、煩惱あるが故に、それを素因として如來のさとりに到達し得ることを説き明し、諸々の煩惱を擧げて證しとします。是に於て維摩詰以下がこれでありませう。一説では次のやうに言ひます。―此の箇所を重ねて如來のさとりに到達する由來を説き明すのは、上述に於て菩薩は非道におもむいて而も佛道に通達するといふことを衆生は聞いて、それは衆生を教化濟度するための手だてであつて、眞實を實踐するのではあるまい、如來のさとりに到達する素因を論ずるならば正しく善行の實踐のみであらうといふ疑ひを衆生は抱くであらう。そこで今善行を説き明すについて、惡を惡として認識するが故にこそ善を行じようといふ志が生ずるのであつて、惡行の存在が無ければ善を行じようといふ志自體が生じないのである。この故に惡行たる煩惱を如來のさとりに到達する素因とする。どうして唯善行のみを素因とすることが出來ようか、―と。此の項の中に二つの項目があります。

第一に、煩惱は如來のさとりに到達する素因であることを正しく説き明します。

第二に、迦葉歎じて言はく。善哉哉から以下、迦葉尊者が讚歎の言葉を述べて、文殊菩薩の説法の正しいことを成立せしめます。

(訓讀文)

是に於て維摩詰從り以下、第二に類證して塵勞を如來の種と爲すことを明す。一に云はく。此に重ねて由來する所を明すは、衆生は上に非を行じて是に通ずと聞きて、復疑ふらく。只物を化せんと欲するが故に然るなり。是れ實に非ざるなり。正しく成佛を論せば唯善に在りと。所以に今善を明すに、善は惡に由りて起り善自ら生ずること無し。是の故に塵勞を猶佛の種と爲す。何ぞ唯善のみに於てせんやと。中に就きて二有り。

第一に正しく塵勞は如來の種と爲るを明す。

第二に迦葉歎じて言はく。善哉哉從り以下、迦葉述成す。

〔正しく塵勞は如來の種と爲るを明すの科段分け〕(現代語譯)

右の第一の煩惱は如來のさとりに到達する素因であることを説き明す中について、二つの問答があります。二つの問答がありますから自ら二つの項目があります。

第一に、初めの一つの問答は、煩惱は如來のさとりに到達する素因であることを正しく説き明します。
第二に、後の一つの問答は、煩惱は如來のさとりに到達する素因であることの意味を、更に釋き明します。

(訓讀文)

第一の中に就きて二番の問答有り。自ら二と爲す。

初めの一の問答は正しく塵勞は如來の種と爲るを明す。

後の一番の問答は更に塵勞は如來の種と爲るの意を顯はす。

〔正しく塵勞は如來の種と爲るを明す〕(現代語譯)

第一の問答、煩惱は如來のさとりに到達する素因であることを説き明す中について亦、三つの項目があります。

第一に維摩居士が問ひます。第二に文殊菩薩が答へます。第三に結び文言です。

これまでは維摩居士が説法して來たのに、ここでは維摩居士が問ひ文殊菩薩に答へさせるのは何故かと申しますと、維摩居士は非道を行ずるので佛道に通達することはあるまい、と衆生は疑問を抱くであります。それ故ここでは維摩居士を退かせ、文殊菩薩に答へさせるのです。

第二に文殊菩薩が答へます。有身を種と爲し(身體を如來のさとりに到達する素因と爲す)とは、此の世の三界の中に於ては身體ある故に煩惱は生ずるので、これを如來のさとりに到達する素因とします。五蓋とは、心を覆ふ五種の煩惱で、貧(むさぼり)・瞋(いかり)・睡眠(心くらく身を重からしめる)・掉悔(心をさわさわさせる掉、心を悩ませる悔)・疑(うたがひ)です。六入とは、六根(眼・耳・鼻・舌・身・意)です。七識處とは、三禪(一)(色界の三つの境地)と三空(二)(無色界の三つの境地)と欲界の人間界・天上界を合せて爲して一とし、合計で七つの境地とします。色界の第四禪には無想定(一切の心作用を止滅した境地)があり、無色界の第四段階の悲想非非想には滅盡定(一切の心作用を滅し盡した寂靜の境地)がありますので、この二つの境地は除外してゐます。地獄・餓鬼・畜生は皆よく知つてゐる三惡道につき擧げるのを省略してゐます。八邪法とは、八正道(正見・正思惟・正語・正

業・正命・正精進・正念・正定に反する悪行であります。九惱處とは、わが善き友を憎む、自分に怨みを抱いてゐるのにそれを察しないので相手を愛しむ、わが身を憎む、この三者が過去・現在・未來の三世に夫々存在しますので、九つの惱みとなります。第三に要を以て言はばから以下は、結びの文言であります。

(一) 三禪 色界に於ける四つの段階的境地を四禪といふ。三禪は初禪、第二禪、第三禪をさし、第四禪は如來のさとりに到達する素因から除外されてゐる。初禪は覺・觀・喜・樂・一心の五支よりなる。第二禪は内淨・喜・樂・一心の四支よりなる。第三禪は捨・念・慧・樂・一心の五支よりなる。第四禪は不苦不樂・捨・念・一心の四支よりなる。

(二) 三空 無色界に於ける四つの段階的境地を四空處または四無色定といふ。(一) 空無邊處。(二) 識無邊處。(三) 無所有處。(四) 非想非非想處。

三空とは (一)、(二)、(三)をさし、(四)は如來のさとりに到達する素因から除外されてゐる。

(訓讀文)

第一番の中に就きて亦三有り。一に問ふ。二に答ふ。三に結す。

然るに文殊に問ふ所以は、物疑ふらく、淨名は非を行ずれば是に通ずべからずと。故に淨名に釋せしむるなり。

第二に答ふ。有身を種と爲しは、三有の中には身を種と爲すなり。五蓋とは、貧・瞋・睡眠・掉悔・疑なり。六入とは六根なり。七識とは三禪と三空と欲界の天人を合して一と爲して七と成す。第四禪には無想定(義疏は無相定)有り、

非非想には滅盡定有り。故に之を用ひず。三途は見知す可し。八邪は八正に翻する。九惱とは、我が善友を憎むと我が怨家を愛すると我が己身を憎むと、三世に就きて九惱と爲すなり。

要を以て言はば従り以下、第三に結す。

經典(正しく塵勞は如來の種と爲るを明す)

於テ是ニ維摩詰ハ問フニ文殊師利ニ。何等ヲ爲スヤニ如來ノ種ト。

文殊師利言ク。有身ヲ爲シレ種ト。無明・有愛ヲ爲シレ種ト。貧・患・癡ヲ爲シレ種ト。四顛倒ヲ爲シレ種ト。五蓋ヲ爲シレ種ト。六入ヲ爲シレ種ト。七識處ヲ爲シレ種ト。八邪法ヲ爲シレ種ト。九惱處ヲ爲シレ種ト。十不善道ヲ爲シレ種ト。以テ要ヲ言ハバレ之ヲ。六十二見及び一切ノ煩惱ハ皆足レ佛種ナリ。

經典訓讀文

是に於て維摩詰は文殊師利に問ふ。何等を如來の種と爲すや。
 文殊師利言はく。有身を種と爲し、無明・有愛を種と爲し、貧・患・癡を種と爲し、四顛倒を種と爲し、五蓋を種と爲し、六入を種と爲し、七識處を種と爲し、八邪法を種と爲し、九惱處を種と爲し、十不善道を種と爲す。
 要を以て之を言はば、六十二見及び一切の煩惱は皆是れ佛種なり。

經典現代語譯

ここに於て維摩居士は、文殊菩薩に問ひました。「何が如來のさとりに到達する素因となりませうか。」

文殊菩薩は答へて言ひました。「如來のさとりに到達する素因は、煩惱を生ず身體であり、無明（根源の煩惱）・有愛（生存に對する妄執）であり、貪り・怒り・愚迷であり、四顛倒（四つのよこしまな見解）であり、五蓋（貪・瞋・睡眠・掉悔・疑）であり、六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）であり、七識處（色界の三禪、無色界の三空處、欲界の人天）であり、八邪法（正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定の八正道に反する行ひ）であり、九惱處（過・現・未の三世夫々に於ける、わが善き友を憎む、自分に怨みをもつ人を愛しむ、わが身を憎む）であり、十不善道（殺生・偷盜・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見）であります。

「要をしめくくつて申しあげれば、六十二の誤つた見解及び一切の煩惱は皆、如來のさとりに到達する素因であります。」

〔塵勞は如來の種と爲るの意を釋す〕（現代語譯）

煩惱は如來のさとりに到達する素因であることを説き明す中の第二の問答は、何の謂ひぞやから以下であります。煩惱は如來のさとりに到達する素因であることの意味を、更に釋き明します。この中に問ひと答へとの二つの項目があります。

第一の問ひは、詳しく述べないで「何故ですか」とただ問ひます。煩惱を如來のさとりに到達する素因とするのは何故なのか、と言ふのであります。

第二の答への中には亦三つの項目があります。

第一に一般的な理法の説を擧げ、もつばら如來のさとりに到達する素因の無い人について、その理由を釋き明します。二乗の人は煩惱を畏れ煩惱から逃避しようとして、ただ無爲（現象世界を離れた絶対的なもの）を觀じて煩惱を滅した境地を得ます。現象世界から離れてしまひますので、衆生を教化濟度するといふ大乘のさとりの道を志すことは終にできないのです。それ故に、煩惱が如來のさとりに到達する素因である、と云ふことを説き明してゐるのです。素因が無いことを説き明してゐますので、一説では次のやうに云ひます。―素因が無いと反對の意味をこめた解釋をして、煩惱あることが如來のさとりに到達する素因だと説き明してゐる、―と。

第二に譬へば高原の陸地には……如しから以下は、譬へを擧げて如來のさとりに到達する素因が有ると無いとの兩者について、その理由を釋き明します。二乗の人は煩惱を滅した境地を得ようと執着してゐますので、煩惱を畏れ煩惱から逃避すべく努めます。それ故に現實世界はかへりみず、衆生を教化濟度するといふ大乘のさとりの道を志すことはできません。凡夫は煩惱を滅す、煩惱あるがままに生きる、その兩者について未だ定つた考へをもつてをりません。それ故に大乘の教へに導かれる機縁に遇へば、絶對無上のさとりを得て衆生を教化濟度しようとしてよく發心する、即ち如來のさとりに到達する素因を有してゐる、といふことを説き明してゐます。

第三に是の故に當に知るべしから以下は、結びの文言であります。一般的な理法の説と譬へとがあります。皆經典を御覽なさい。

(訓讀文)

何の謂ひぞや從り以下、第二番の間答なり。更に塵勞を如來の種と爲すの意を釋するを明す。即ち問ひと答へとを二と爲す。

問ひは開せずして只問ふ。何んが塵勞を如來の種と爲すやと謂ふ。
答への中に亦三有り。

第一に法説を擧げて偏に不得の邊に就きて釋を爲す。二乗の人は塵勞を畏れ避けて、唯無爲を見て正位に入るが故に、終に菩薩の大道を發すこと能はず。故に塵勞を佛種と爲すと云ふことを明すなり。所以に云はく。反釋して得を明すなりと。

第二に譬へば高原の陸地には。如し従り以下、譬へを擧げて并べて得と不得との邊に就きて釋を爲す。二乗の人は偏に正位に存して煩惱を畏れ避く。故に菩提の種を發すこと能はず。凡夫は兩楹未だ定まらず。故に縁に遇へば則ち能く發心して如來の種と爲るを明す。

是の故に當に知るべし従り以下、第三に結す。即ち法説と譬喩と有り。
見つ可し。

經典（塵勞ハ如來ノ種ト爲ルノ意ヲ明ス）

曰ク。何ノ謂ソヤ也。答テ曰ク。

若シ見テ無爲ヲ入ルニ正位ニ者ハ。不能ハニ復發スルコトニ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ。譬へば如シ下高原ノ陸地ニハ不レ生ゼニ蓮華ヲ。卑濕ノ淤泥ニハ乃チ生ズルガ。此ノ華ヲ。如クレ是ノ見テ無爲ノ法ヲ。入ルニ正位ニ者ハ。終ニ不ニ復能ク生ゼニ於佛法ヲ。煩惱ノ泥ノ中ニ乃チ有テ衆生ニ起スニ佛法ヲ一耳。又如シ下植トモニ種ヲ於空ニ。終ニ不レ能ハレ生ズル。糞壤之地ニハ乃チ能ク滋茂スルガ。如クレ是ノ入ルニ無爲ノ正位ニ者ハ不レ生ゼニ佛法ヲ。起スコトニ於我見ヲ一如キモノニ須彌山ノ。猶能ク發シテニ於阿耨多羅三藐三菩提心ヲ。生ズニ佛法ヲ一矣。

是ノ故ニ當ニ知ル。一切ノ煩惱ヲ爲スニ如來ノ種ト。譬エバ如シ下不レバ下ヲニ巨海ニ不ルガト能ハレ得ルニ無價ノ寶珠ヲ。如クレ是ノ不レバ入ラニ煩惱ノ大海ニ一則チ不レ能ハ得ルニ一切智ノ寶ヲ。

曰はく。何の謂ひぞや。

答へて曰はく。若し無爲を見て正位に入る者は、復阿耨多羅三藐三菩提心を發すること能はず。譬へば高原の陸地には蓮華を生ぜず、卑濕の淤泥には乃ち此の華を生ずるが如し。是の如く無爲の法を見て、正位に入る者は、終に復能く佛法を生ぜず。煩惱の泥の中に乃ち衆生有りて、佛法を起すのみ。又種を空に植ゆとも終に生ずる能はず、糞壤の地には乃ち能く滋茂するが如し。是の如く無爲の正位に入る者は佛法を生ぜず。我見を起すこと須彌山の如きもの、猶能く阿耨多羅三藐三菩提心を發して、佛法を生ず。

是の故に當に知るべし。一切の煩惱を如來の種と爲す。譬へえば巨海に下らざれば無價の寶珠を得る能はざるが如し。是の如く煩惱の大海に入らざれば則ち一切智の寶を得る能はず。

經典現代語譯

維摩居士は問ひました。「何故でせうか。」

文殊菩薩は答へて言ひました。「無爲（現象世界を離れた絶対なもの）を觀じて煩惱を滅した境地に到達する人は、無上絶対のさとりを求め、衆生を教化濟度しようと發心することはできません。譬へば高原の陸地には蓮華は生えず、低い濕地の泥土の中に蓮華は生える如しであります。此のやうに無爲を觀じて煩惱を滅した境地に到達する人は、終に佛陀の説いた教法に目覺めることはありません。煩惱といふ泥の中にある衆生のみが佛陀の説いた眞理に到達するのです。又、空中に種を植ゑても終に芽は出ないし、汚れた糞土に植ゑればよく繁茂するが如しであります。此のやうに無爲を觀じて煩惱を滅した境地に到達する人は、佛陀の説いた教法に到達することはありません。自我の執着の極めて強い衆生が無上絶対のさとりを求め、衆生を教化濟度しようと發心して、佛陀の説いた眞理に到達するのです。」

「以上申し述べましたやうに一切の煩惱は、如來のさとりに到達する素因であることを當然に知るべきです。譬へば大海に入らなければ極上の寶珠を得ることができなると同様です。此のやうに煩惱の大海の中に入らなければ、一切を知る佛陀の智慧といふ寶

を得ることはできないのです。」

〔迦葉述成す〕（現代語譯）

煩惱あるが故に、それを素因として如來のさとりに到達し得ることを説き明す中の第二は、迦葉尊者が文殊菩薩の説法を讚嘆して説法の正しいことを成立せしめ、かつまたその説法は二乗の分際を超えてゐて、二乗は佛道を求む志を發し得ないと自ら慨嘆することを説き明してゐます。爾の時に大迦葉嘆じて言はく。善き哉から以下がこれでありました。

此の中についても亦三つの項目があります。第一に、文殊の説法は虚妄ではないと總體として讚嘆します。第二に、塵勞の儻から以下、正しく讚嘆の言葉を述べます。第三に、是の故に文殊から以下、結びの文言であります。經典をご覧なさい。

（訓讀文）

爾の時に大迦葉嘆じて言はく。善き哉従り以下、第二に迦葉文殊の説く所を讚述し、兼ねて復自ら分を絶つを慨む

ことを明す。

中に就きて亦三有り。

第一に惣じて説く所虚に非ずと讚す。

第二に塵勞之儻従り以下、正しく上の語を述べ。

第三に是の故に文殊従り以下、結す。

見つ可し。

經典（迦葉述成す）

爾ノ時ニ大迦葉嘆シテ言ク。善キ哉。善キ哉。文殊師利。快ク説ケリ。此ノ語誠ニ如シ。所ノ言フ。

塵勞之儔爲リニ如來ノ種一。我等今者不^レ復^レタ堪^レ任^レセ發^スニ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ一。乃至五無間ノ罪モ猶能ク發シテ意ヲ生ズニ於佛法一。而ルニ今我等永ク不能^ハレ發^スコト。譬^ハバ如シテ根敗之土ノ其レ於テニ五欲ニ一不^レルガ能^ハレ復^タ利アルコト一。如ク^レ是ノ聲聞ノ諸結斷^セル者ハ於テニ佛法ノ中ニ一無シ^レ所ニ復^タ益スル一。永ク不^ニ志願^セ一。

是ノ故ニ文殊師利。凡夫ハ於テニ佛法ニ一有^レドモ^ニ反復^スルコト一。而モ聲聞ハ無キ也。所以ハ者何^ン。凡夫ハ聞テニ佛法ヲ一能ク起シテニ無上道心ヲ一。不^レ斷^セニ二寶ヲ一。

正使聲聞ハ終ルマデ身ヲ聞ケドモ^ニ佛法ノ力ト無畏等ヲ一。永ク不^レ能^ハレ發^スコト^ニ無上道意ヲ一。

經典訓讀文

爾^ノ時^ニ大迦葉嘆^ジて言^ハク。善^キ哉^{。善}キ哉^{。文殊師利、快}ク説^ケリ。此^ノ語^誠に言^フ所^ノ如^シ。

塵勞^ノ儔^如來^ノ種^爲リ。我等^今ハ復^{阿耨多羅三藐三菩提}心^ヲ發^スニ堪^任せず。乃至^{五無間}ノ罪^モ猶^能ク意^ヲ發^シテ佛法^ヲ生^ズ。

而^ルニ今^我等^永ク發^スコト^能はず。譬^ハバ根敗^ノ土^ノ其^レ五欲^ニ於^テ復^利ある^{コト}能^ハざる^ガ如^シ。是^ノ如^ク聲聞^ノ諸結斷^ゼる^者ハ佛法^ノ中^ニ於^テ復^益する^所無^シ。永^ク志願^{せず}。

是^ノ故^ニ文殊師利、凡夫^ハ佛法^ニ於^テ反復^スること有^レども、而^モ聲聞^ハ無^キなり。所以^ハ何^ん。凡夫^ハ佛法^ヲ聞^キテ能^ク無上道^心を起^シテ三寶^ヲ斷^ぜず。

正使聲聞^ハ身^ヲ終^ルまで佛法^ノ力^ト無畏^等を聞^ケども、永^ク無上道意^ヲ發^スコト^能はず。

經典現代語譯

文殊菩薩の説法が終つた時、迦葉尊者は讚嘆して言ひました。

「最上^ノの説法^{です}。文殊菩薩さん、明快^{にお説き}になりましたね。誠に仰^せの通り^{です}。」^{「全ての煩惱は如來のさとりに到達する}

素因^{です}。私達^{二乗}の者^は、今^は無上^{絶對}のさと^りを求^め、衆生^ヲを教化^{濟度}しよう^と發心^{する}ことが^{でき}ません。五逆罪^{(殺父・}

殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出佛身血)を犯^{して}も猶^{また}、凡夫^ハ菩提心^ヲ發^シテ佛陀^ノ説^{いた}眞理^ニ到達^します。今私達^{二乗}の者^は永^久に菩提心^ヲ發^し得^ません。譬^ハば五根^ヲ損壞^{した}人^ハ五欲^ノ樂^{しみ}を享受^{でき}ないやうな^{もの}です。此^ノやうに諸々^ノ煩惱^ヲ斷

じた聲聞は俗世間を離れてしまつて、佛陀の説いた眞理、即ち衆生を利益することがありません。聲聞は永久に衆生の教化濟度を志すこともなく、願ふこともありません。」

「文殊菩薩さん、以上申しあげた通りで、凡夫は佛道の眞理に到達して佛恩に報いようとはしますが、聲聞にはそれがありません。その理由は、凡夫は佛道の眞理を聞いて無上のさとりを求め、かつ衆生を教化濟度しようと思ひ立て、佛・法・僧の三寶に歸依します。聲聞は全生涯に於てたとひ佛道の眞理の偉大な力や無畏等を聞いても、無上のさとりを求め、衆生を教化濟度しようと思ひ立てることはできません。」

〔御語釋〕〔現代語譯〕

反復はんぷくといふ言葉の意味は、凡夫は佛陀のさとりといふ究極の果報を得て、必ず佛恩に報いべく三寶興隆に努めます。それ故に反復はんぷくすること有りと云ひます。二乗の人たちは佛恩に報いることはありません。それ故に反復はんぷく無きなりと云ふのであります。

(訓讀文)

反復はんぷくとは、言ふところは凡夫ぼんぶは必ず佛果ぶつかを得て能く佛恩ぶつおんを報ず。故に反復はんぷくすること有りと云ふなり。二乗にじじうは爾しかる事無し。故に反復はんぷく無きなり。

〔淨名の種種の不思議の迹を明すの科段分け〕〔現代語譯〕

佛道品の第三は、維摩居士が世俗の人の姿になつて種々の不思議を現出して衆生を教化することを説き明し、非道を行じて而も佛道の正しい教へに通達することを成り立たしめ、結びの文言とします。爾その時に會中えちゆうに菩薩ぼさつあ有り以下がこれでありす。此の中を二つの項目に分けます。

第一に、普現色身菩薩ふげんしきんぼさつ（あまねく種々の姿を示現して衆生を濟度する菩薩）が質問します。

第二に、維摩居士は偈頌げしゆ（詩句）を以て答へます。

此は維摩居士が方丈の居室を空つぽにすることによつて五つの論が生じますが、その中の第四の論議であります。

(訓讀文)

爾その時ときに會あ中に普ぼ薩さつ有あり從より以下いげ、章しょうの中なかの第だい三さんに淨じよう名みやうの種しゆ種じゆの不思議ふしぎの迹あとを明あかして、非ひを行ぎやうじて是ぜに通つうずるを結けつ成じやうす。中なかに就つきて開ひらきて二にと爲なす。

第一だいいちに普ふ現げん菩ぼ薩さつ問とふ。

第二だいにに淨じよう名みやう偈げを以もつて答こたふ。

此これは是これ空くう室しつに因よりて五ご論ろんを生しやうずる中なかの第だい四しの論ろんなり。

〔普現色身菩薩問ふ〕(現代語譯)

維摩居士が世俗の人の姿になつて種々の不思議を現出して衆生を教化し、非道を行じて而も佛道の正しい教へに通達することを成り立たしめる中の第一は、普現色身菩薩が質問します。

「維摩居士さん、貴方は既に世俗の人となつてをられるのに、此の室は狭少で而も空つぽになつてゐます。貴方の父母や親戚は何處に居られるのですか、乗り物その他日常用ひる道具類は何處にあるのですか。」

然しながら此の問ひの内に隠されてゐる意義を推し尋ねれば次の通りです。維摩居士は、本來は不可思議解脱得てゐる大聖です。ただ衆生の機縁に應じて教化濟度するために此の世に姿を現はし、俗人と同様の生活を營んでゐます。惑ひがあつてそれを見抜けない人は、維摩居士の居室が空つぽであるのを見て、果して衆生を教化濟度できるのかと疑念を抱くであります。それ故に普現色身菩薩は此の問ひを發するのであります。

(訓讀文)

第一だいいちに普ふ現げん菩ぼ薩さつ問とふ。

仁者は既に白衣爲るに、此の室狭少にして所有無し。父母・親屬及び諸の須ゆる具、皆何れの所にか在るや。然るに斯の間の内意を推尋すれば、淨名は本是れ不可思議なり。但應迹道の中に現じて俗類に同ぜり。惑者は形を見て其の道に及びざらんかと恐る。故に斯の問ひを生ずるなり。

經典(普現色身菩薩問ふ)

爾ノ時ニ會中ニ有リニ菩薩一。名スクニ普現色身ト。問テニ維摩詰ニ一。言ク。

居士。父母・妻子・親戚・眷屬・吏民・知識。悉ク爲スニ是レ誰トカ。奴婢・童僕・象馬・車乘。皆何レノ所ニカ在ル。

經典訓讀文

爾の時に會中に菩薩有り。普現色身と名づく。維摩詰に問うて言はく。

居士、父母・妻子・親戚・眷屬・吏民・知識。悉く是れ誰とか爲す。奴婢・童僕・象馬・車乘、皆何れの所にか在る。

經典現代語譯

その時説法の座に普現色身(あまねく種々の姿を現して衆生を濟度する)といふ名の菩薩が居り、維摩居士に問うて言ひました。

「維摩居士さん、貴方の父母・妻子・親戚・親族・官民・友人たちは皆、どの方々なのでせうか。下女・下男・象や馬・乗り物などは皆、何處に置いてありますか。」

〔淨名偈を以て答ふ〕(現代語譯)

維摩居士が世俗の人の姿になつて種々の不思議を現出して衆生を教化し、非道を行じて而も佛道の正しい教へに通達することを成り立たしめる中の第二は、維摩居士が詩句を以て答へます。此の中に全部で四十二行の詩句があります。これを三つの項目に分けます。

第一に智度は菩薩の母なりから以下、勝旛を道場に建つに訖るまで、十二行の詩句があります。これは維摩居士の本源の眞實

身について、本源の世界に於ては菩薩はただ種々のさとり道（智慧・方便など）を以て自己の眷屬となし、妻子など世俗の眷屬は無いことを説き明してゐます。

第二に、起滅無きを知ると雖もから以下、二十七行の詩句があります。これは衆生教化のため維摩居士が此の世に姿を現はしたることについて全く何も無い状態から種々の現象を現出します。これは亦八地以上の菩薩の不可思議な能力であります。この不思議を現出することによつて人々の惑ひを取り除くことを説き明してゐます。

第三に、是の如きの道無量なりから以下、三行の詩句があります。維摩居士の本源の眞實身と、この世に姿を現はして衆生を教化済度することと、兩者に通じての結びの詩句であります。

此の中の諸々の詩句について、或る研究者は詩句を細かく分割して解釋してゐます。しかし私は今、詩句の文言に随つて直接的に解釋すべきだと思ひます。

（訓讀文）

第二の淨名の中だいに じようみやう ちゆうに就つきて凡すべて四十二の偈げ有り。分わかちて三と爲なす。

第一に智ち度は菩ぼ薩さつの母ははなり従より以下、勝しょう旛ばんを道どう場じやうに建たつに訖をるまで十二行の偈げ有り。本ほんに就つきて、菩ぼ薩さつは但ただ種しゆ種じゆの道どう品ほんを以もつて屬ぞくと爲なし、世よの眷けん屬ぞくは無なしと明あかすなり。

第二に起き滅めつ無なきを知しると雖いへども従より以下、二に十七行の偈げ有り。迹しやくに就つきて、無むにして有うを現げんす。斯これ亦また大だい士しの不ふ思議しぎの能のうなり。正まさしく不ふ思議しぎを以もつて其その人ひとの惑まどひを非ひとするを明あかすなり。

第三に是だいさんの如かくきの道どう無む量りやうなり従より以下、三行の偈げ有り。通つうじて本ほんと迹しやくとを結けつす。此この中の諸しよ句くは、或あるは文もんを分わかちて細さい釋しやくする有あり。而しかに今いまは文もんに随したがつて直ただちに釋しやくするなり。

經典（淨名偈を以て答ふ）

於て是に維摩詰。以て偈を答へて曰く。

經典訓讀文

是に於て、維摩詰、偈を以て答へて曰はく。

經典現代語譯

普現色身菩薩の質問に、維摩居士は詩句を以て答へ、次のやうに語つた。

〔偈〕(本に就きて、但種種の道品を以て眷屬と爲すの偈・その二)

智度ハ菩薩ノ母ナリ、方便以テ爲スレ父ト。一切ノ衆ノ導師ハ、無シレ不ニ由テレ是ニ生ゼ一。

法喜以テ爲シレ妻ト、慈悲心ヲ爲シレ女ト、善心誠實ハ男ナリ。畢竟空寂ハ舍ナリ。

弟子ハ衆ノ塵勞、隨フニ意ノ之所ニ轉スル。道品ハ善知識ナリ。由テレ是ニ成ズニ正覺ヲ一。

諸度ノ法ハ等侶ナリ。四攝ヲ爲シニ妓女ト一、歌詠シテ誦シニ法言ヲ一、以テレ此ヲ爲スニ音樂ト一。

惣持之園苑ニハ、無漏法ノ林樹アリ、覺意淨妙ノ華サキ、解脱ト智慧トノ果ミノル。

八解之浴池ニハ、定水湛然トシテ滿テリ。布クニ以テシニ七淨華ヲ一、浴スニ此ニ無垢ノ人一。

(偈の訓讀文)

智度ハ菩薩ノ母ナリ、方便以テ父ト爲ス。一切ノ衆ノ導師ハ、是に由りて生ぜざる無し。

法喜以テ妻ト爲し、慈悲心を女ト爲し、善心誠實は男なり。畢竟空寂は舍なり。

弟子は衆の塵勞、意の轉ずる所に隨ふ。道品は善知識なり。是に由りて正覺を成ず。

諸度の法は等侶なり。四攝を妓女と爲し、歌詠して法言を誦し、此を以て音樂と爲す。

惣持の園苑には、無漏法の林樹あり、覺意淨妙の華さき、解脱と智慧との果みのる。

八解の浴池には、定水湛然として滿てり。布くに七淨華を以てし、此に無垢の人浴す。

(偈の現代語譯)

完全なる智慧は菩薩の母であり、衆生を導く方便は父である。一切の諸々の導師は、全て此から生ずる。

法悦の歡喜を妻となし、慈悲心を娘となし、善心誠實は息子であり、究極の空寂が我が家である。

弟子とは諸々の煩惱であり、我が思ひのままに隨ふ。さとりの道（三十七道品など）は善き友であり、これに由つて正しい覺りを完成する。

六度の行法は友人である。四攝（布施・愛語・利行・同事）は歌姫であり、その歌は佛法を讀へ、此を以て音樂と爲す。佛法の保たれてゐる園には、煩惱のけがれ無き樹林があり、清淨かつ妙なる覺りの花が咲き、解脱と智慧との果實がみえる。

八種の解脱の浴池には、靜かに水がたたえられてゐる。浴池には七種の清淨な花が咲き、垢れ無き人が湯浴みしてゐる。

〔御語釋〕（現代語譯）

七淨とは、一は戒淨（戒を保つことが清淨である。以下同じ）・二は心淨・三は見淨・四は度疑淨（疑ひを取り去る）・五は分別淨・六は行淨・七は涅槃淨であります。

（訓讀文）

七淨とは、一は戒淨・二は心淨・三は見淨・四は度疑淨・五は分別淨・六は行淨・七は涅槃淨なり。

〔偈〕（本に就きて、但種種の道品を以て眷屬と爲すの偈・その二）

象馬ノ五通馴セ、大乘以テ爲スレ車ト。調御スルニ以テシニ一心ヲ、遊ブニ八正ノ路ニ。

相ハ具シテ以テ嚴リレ容ヲ、衆好ハ飾ルニ其ノ姿ヲ一。慙愧之上服、深心ヲ爲スニ華曼ト一。

富ハ有テニ七財ノ寶ヲ一、教授シテ以テ滋息ス。如クニ所説ノ一修行シ、回向スルヲ爲スニ大利ト一。

（偈の訓讀文）

象馬の五通馴せ、大乘以て車と爲す。調御するに一心を以てし、八正の路に遊ぶ。

相は具して以て容を嚴り、衆好は其の姿を飾る。慙愧の上服、深心を華曼と爲す。
富は七財の寶を有ち、教授して以て滋息す。所説の如く修行し、回向するを大利と爲す。

〔偈の現代語譯〕

五種の神通力をもつ象馬が、大乘の佛法の車をひいて走つてゐる。馬車を調御する心は一つに統一され、八正道に遊戯してゐる。諸々のすぐれた相好が具つてゐて、その容姿を飾る。慙愧の心を衣服とし、深く道を求める心を花飾りとなす。

富は七種の心の寶をもち、他を教へ導くことによつて富は益々殖える。佛陀の所説の如く修行し、その功德を他にさし向けることが大利益となる。

〔御語釋〕〔現代語譯〕

七財とは、信財・戒財・聞財・捨財・智慧財・慙財（罪を自らの心に恥ぢる）・愧財（罪を他者に恥ぢる）であります。

〔訓讀文〕

七財とは、信・戒・聞・捨・慧・慙・愧・なり。

〔偈〕〔本に就きて、但種種の道品を以て眷屬と爲すの偈・その三〕

四禪ヲ爲シニ牀座ト一、從リニ於淨命一 生ズ。多聞シテ増シニ智慧ヲ一、以テ爲スニ自覺ノ音ト一。

甘露法ノ食、解脱ノ味ヲ爲スニ漿ト。淨心以テ澡浴シ、戒品ヲ爲スニ塗香ト一。

摧ニ滅シ煩惱ノ賊ヲ一、勇健ナルコト無シニ能ク踰ル一。降ニ伏シテ四種ノ魔ヲ一、勝旃ヲ建ツニ道場ニ一。

〔偈の訓讀文〕

四禪を牀座と爲し、淨命從り生ず。多聞して智慧を増し、以て自覺の音と爲す。
甘露法の食、解脱の味を漿と爲す。淨心以て澡浴し、戒品を塗香と爲す。

煩惱の賊を摧滅し、勇健なること能く踰ゆる無し。四種の魔を降伏して、勝旛を道場に建つ。
 (偈の現代語譯)

四禪(色界における四段階の瞑想境地)を床座とし、それは清淨な生活より生ずる。教へを多く聞いて智慧を増し、以て眞理を覺る音聲としてゐる。

甘露の如き佛陀の教へを食物とし、解脱の味を飲物とする。心を淨めることが水浴であり、種々なる戒を香料として身體に塗る。煩惱の賊をうち碎き、勇猛なること超える者はゐない。四魔(煩惱魔・陰魔・死魔・他化自在天魔)を降伏して、勝利の旗を道場に建てる。

〔偈〕(以下は迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの偈・其の一)

雖モ知ルト無キヲ起滅一、示スガ彼ニ故ニ有レ生。悉ク現ズ諸ノ國土ニ。如シ日ノ無キガニ不ル見。
 供ヲ養ス於十方ノ、無量億ノ如來ヲ。諸佛及び己身、無シ有ルコトニ分別ノ想一。

雖モ知ルトニ諸佛ノ國、及び與衆生ノ空ナルヲ、而モ常ニ修シニ淨土ヲ、教ヲ化ス於羣生ヲ。

(偈の訓讀文)

起滅無きを知ると雖も、彼に示すが故に生有り。悉く諸の國土に現す。日の見ざる無きが如し。
 十方の、無量億の如來を供養す。諸佛及び己身、分別の想有ること無し。

諸佛の國、及び衆生の空なるを知ると雖も、而も常に淨土を修し、羣生を教化す。

(偈の現代語譯)

一切の存在は生も滅も無いことを知つてゐるが、衆生に示すために姿を現はす。諸々の國に悉く姿を現はすことは、太陽の見えない國が無いのと同じである。

十方の無量億の數の、如來を供養する。而も諸佛及び己自身について、妄分別の想ひは無い。

諸佛の國土及び衆生は、空なる存在であることを知つてゐるが、而も常に國を淨める行を修し、衆生を教化濟度する。

〔偈〕(迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの偈・その二)

諸有衆生ノ類ノ形聲及ヒ威儀、無畏力ノ菩薩ハ、一時ニ能ク盡ク現ズ。

覺ヲ知シテ衆ノ魔事ヲ一、而モ示ス。隨テニ其ノ行ニ一。以テニ善方便智ヲ一、隨テニ意ニ皆能ク現ズ。

或ハ示シテニ老病死ヲ一、成ニ就ス諸ノ羣生ヲ一。了ニ知シテ如ナルヲニ幻化ノ一、通達シテ無シレ。有ルコトレ礙ケ。

(偈の訓讀文)

諸有衆生の類の形聲及び威儀、無畏力の菩薩は、一時に能く盡く現す。

衆の魔事を覺知して、而も其の行に隨ふを示す。善方便智を以て、意に隨つて皆能く現す。

或いは老病死を示して、諸の羣生を成就す。幻化の如くなるを了知して、通達して礙げ有ること無し。

(偈の現代語譯)

或いは老病死を示して、諸の羣生を成就す。幻化の如くなるを了知して、通達して礙げ有ること無し。

あらゆる衆生の姿形と聲とふるまひとを、無畏の力を有する菩薩はそれらを悉く一時に現出する。

諸々の魔のはたらきを覺知して、而もそのはたらきに隨ふ姿を示す。巧みな方便の智慧を以て、意のままにあらゆる姿を現出する。

或る時は老・病・死の姿を示して、諸々の衆生に無常を悟らしめる。一切は幻術で作られたものの如くであることをよく知り、

眞理に通達してゐて何ものにも礙げられない。

〔偈〕(迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの偈・その三)

或ハ現シテニ劫盡ノ燒ヲ一、天地皆洞然タリ。衆人ニ有リニ常想一、照シテ令ムレ知ラニ無常ヲ一。

無數億ノ衆生、俱ニ來テ請スレバニ菩薩ヲ一、一時ニ到リニ其ノ舍ニ一、化シテ令ムレ向ハニ佛道ニ一。

經書ト禁呪ノ術、工巧ト諸ノ技藝、盡ク現シテレ行ズルヲニ此ノ事ヲ一、饒ニ益ス諸ノ羣生ヲ一。

(偈の訓讀文)

或いは劫盡こつじんの焼しょうを現げんじて、天地皆洞然てんちみなならぬんたり。衆人しゆたんに常想じようさう有り、照てらして無常むじようを知らしむ。
無數億むすおおくの衆生しゆじよう、俱ともに來りて菩薩ぼさつを請しうずれば、一時いちじに其その舍いへに到いたり、化けして佛道ぶつどうに向むかはしむ。
經書きやうしょと禁呪こんじゆの術じゆつ、工巧くぎやうと諸もろの技藝ぎげい、盡ことごとく此この事ことを行ぎずるを現げんじて、諸もろの羣生ぐんじようを饒益にやうやくす。

(偈の現代語譯)

或る時は世界を焼き盡す大火によつて、天地は皆むなしく廣漠たるさまを現出する。
常住の想ひをもつてゐる衆生を、智慧の光で照して無常を知らしめる。

無數億の衆生が、うち連れ來りて菩薩に救ひを求めれば、一時に夫々の衆生の家に趣き、教化して佛道に向はしめる。
諸々の經書や祕密の眞言の術、諸々の技術や技藝、盡くそれらのはたらきを現じて、諸々の衆生に利益を與へる。

〔偈〕(迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの偈・其の四)

世間ノ衆ノ道法、悉ク於テ中ニ出家シ、因テ以テ解キニ人ノ惑ヲ、而モ不レ墮セニ邪見ニ。

或ハ作リニ日月天、梵王世界ノ主ト、或時ハ作リニ地水ト、或ハ復作ルニ風火ト。

劫ノ中ニ有レバニ疾疫一、現ジテ作ルニ諸ノ藥草ト。若シ有レバ之ヲ服スルニ之ヲ者一、除キレ病ヲ消ヌニ衆毒ヲ一。

(偈の訓讀文)

世間せけんの衆もろの道法どうぼう、悉ことごとく中なかに於おいて出家しゆつけし、因よつて人ひとの惑わくを解とき、而しかも邪見じやくけんに墮たせず。

或あるは日月天にちげつてん、梵王世界ぼんおうせかいの主ぬしと作り、或時あるときは地水ちすいと作り、或あるは復風火またふうかと作る。

劫こつの中に疾疫しつえきあれば、現げんじて諸もろの藥草やくそうと作る。若これし之かくを服ものする者あれば、病やまひを除のぞき衆毒しゆどくを消けす。

(偈の現代語譯)

世間の諸々のさとり道、その中に於て悉く修行僧となり、それに因つて人々の惑ひを解き、而も邪見に墮することの無いやうにさせる。

或る時は太陽や月や天や、梵王世界の主となり、或る時は大地や水となり、或る時は又風や火となる。

世の中に疫病がはやれば、諸々の藥草になつて現れる。若しその藥草を服する者があれば、病ひを除き諸々の毒を消す

〔偈〕(迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの偈・其の五)

劫ノ中ニ有レバニ 饑饉一、現ジテ 身ヲ作ルニ 飲食ト一。先ツ救ヒニ 彼ノ饑渴ヲ一、却テ以テ 法ヲ語ルニ 人ニ。

劫ノ中ニ有レバニ 刀兵一、爲ニ之ヲ起シニ 慈悲ヲ一、化シテ 彼ノ諸ノ衆生ヲ一、令ムレ住セニ 無諍ノ地ニ一。

若シ有レバニ 大戦陣一、立ルニ之ヲ以テシニ 等シキ力ヲ一、菩薩現ジテ 威勢ヲ一、降伏シテ使ムニ 和安ナラ一。

(偈の訓讀文)

劫こうの中に饑饉けいこん有れば、身みを現げんじて飲食おんじきと作る。先まづ彼の饑渴けいかつを救すくひ、却かへつて法ほうを以て人ひとに語かたる。

劫こうの中に刀兵とうひやう有れば、之これが爲ために慈悲じひを起おこし、彼の諸もろもろの衆生しゆじやうを化けして、無諍むじやうの地ちに住じやうせしむ。

若し大戦陣だいにせんじん有れば、之これを立たつるに等ひとしき力を以てし、菩薩ぼさつ威勢いせいを現げんじて、降伏かうふくして和安わあんならしむ。

(偈の現代語譯)

世の中に饑饉があると、その身を飲食物に變じて現はれる。先づ人々の飢渴を救ひ、而る後に人々に佛法を説く。

世の中に武器による殺戮が起れば、苦しむ衆生のために慈悲心を起し、諸々の衆生を教化して、争ひの無い土地に安住させる。

若し大戦争が起れば、これに立向ふに菩薩は等しい力を以てし、威勢を現はし、敵を降伏し安穩平和ならしめる。

〔偈〕(迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの偈・其の六)

一切國土ノ中ノ、諸有地獄處ニ、輒チ往テ到リニ 於彼ニ一、勉ヲ濟ス其ノ苦惱ヲ一。

一切國土ノ中ニ、畜生相ト食噉スレバ、皆現ジテ 生ヲ於彼ニ一、爲ニ之ヲ作スニ 利益ヲ一。

示セドモ 受クルラニ 五欲ヲ一、亦復現ズ 行ズルラ 禪ヲ。令ム魔ノ心ヲ憤亂シ、不ヲ能ハレ 得ルニ 其ノ便ヲ一。

(偈の訓讀文)

一切國土いっさいこくどの中の、諸有地獄處あらかゆるぢやくしよに、輒すなはち往ゆきて彼かに到いたり、其その苦惱くのうべんさい勉濟めんさいす。

一切國土いっさいこくどの中に、畜生相ちくしやうひ食噉じきたんすれば、皆生みなを彼かに現げんじて、之これが爲ために利益りやくを作なす。

五欲ごよくを受くるうを示せども、亦復またまた禪ぜんを行ぎずるを現げんす。魔まの心こころを憤亂げちんし、其その便べんを得る能あたはざらしむ。

(偈の現代語譯)

一切の國土の中のあらゆる地獄の場所に、その地獄の何處へでも行つて、人々の苦惱を救ふべくつとめる。

一切の國土の中に於て、畜生が互ひに食ひ争へば、菩薩は皆畜生たちの中に生れ出て、畜生たちに利益を與へる。

五欲の樂しみを享受する姿を示すけれども、他方では禪定を行じ邪心無きを示す。惡魔の心をかき亂し、惡魔に乗すべき機會を與へない。

[偈] (迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの偈・其の七)

火中ニ生ズルニ蓮華ヲ、是レ可シ 謂フニ稀有ト。在テ 欲ニ而モ行ズ 禪ヲ、稀有ナルコト亦如シ 是ノ。

或ハ現シテ作りニ姪女ト、引クニ諸ノ好色ノ者ヲ。先ツ以テニ欲ノ鉤ヲ一牽テ、後ニ令ムレ 入ラニ佛智ニ。

或ハ爲リニ邑中ノ主ト、或ハ作りニ商人ノ導キ、國師及ビ大臣ト、以テ祐ヲリス衆生ヲ。

(偈の訓讀文)

火中かちゆうに蓮華れんげを生しょうずる、是これれ稀有けうと謂いふべし。欲よくに在ありて而しかも禪ぜんを行ぎず、稀有けうなること亦是またの如ごとし。

或あるは現げんじて姪女しんによと作り、諸もろもろの好色こうしよくの者ものを引ひく。先まづ欲よくの鉤かぎを以もつて牽ひきて、後のちに佛智ぶつちに入いらしむ。

或あるは邑中ゆるちゆうの主ぬしと爲なり、或あるは商人しょうじんの導みちびき、國師こくしお及び大臣だいじんと作り、以もつて衆生しゆじゆうを祐ゆうりす。

(偈の現代語譯)

火の中に蓮華を生ずる、これは稀有と言ふべきである。菩薩は欲望のうづまく中に在つても禪を行ずる、是の如く稀有なる姿を

菩薩は示す。

或る時は遊女になつて現はれ、諸々の好色の男を引きよせる。先づ欲望の鉤で引き寄せ、而る後に佛智を悟らしめる。

或る時は村長となり、或る時は商人たちを導き、或る時は高僧や大臣となり、以て衆生をたすけ利する。

〔僞〕(迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの僞・其の八)

諸有貧窮ノ者ニハ 現ジテ作リニ無盡ノ藏ト、因ツテ以テ勸メテ導キ之ヲ、令ムレ發サニ菩提心ヲ一。
我心憍慢ノ者ニハ 為ニ現ジニ大力士ヲ、消コ伏シテ諸ノ貢高ヲ、令ムレ住セニ無上道ニ一。

其レ有レバニ恐懼ノ衆一、居テ前ニ而慰安シ、先ツ施スニ以テシニ無畏ヲ一、後ニ令ムレ發サニ道心ヲ一。

(僞の訓讀文)

諸有貧窮の者には 現じて無盡の藏と作り、因つて以て之を勧め導き、菩提心を發さしむ。
我心憍慢の者には 為に大力士を現じ、諸の貢高を消伏して、無上道に住せしむ。
其れ恐懼の衆有れば、前に居て慰安し、先づ施すに無畏を以てし、後に道心を發さしむ。

(僞の現代語譯)

あらゆる貧窮の者たちには、無盡の藏となつて物品を與へ、それに因つて彼らを勧め導き、さとりを求め衆生を濟度しようとの心を起させる。

我のみが偉いと思つてゐる驕慢の者には、大力士の姿になつて現はれ、諸々の思ひあがりをうち碎き、無上のさとりを求めさせる。

恐怖してゐる衆生があれば、彼らの前に立つて慰め安んじ、先づ恐れを無くすやう導き、而る後にさとりを求める心を起させる。

〔僞〕(迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの僞・其の九)

或ハ現ジテ離ルルヲニ姪欲ヲ一、爲リニ五通ノ仙人ト、開コ導シテ諸ノ群生ヲ、令ムレ住セニ戒忍慈ニ一。
見レバ下須ルニ供事ヲ一者ヲ、現ジテ爲ニ作リニ僮僕ト、既ニ悦コ可シ其ノ意ヲ一、乃チ發スニ以テスニ道心ヲ一。
隨テニ彼ガ所ニロ須ル一、得セシムレ入ルヲニ佛道ニ一。以テニ善方便力ヲ一、皆能ク給コ足ス之ヲ一。

(僞の訓讀文)

或は姪欲を離るるを現じて、五通の仙人と爲り、諸の群生を開導して、戒忍慈に住せしむ。

供事を須むる者を見れば、現じて爲に僮僕と作り、既に其の意を悦可し、乃ち發すに道心を以てす。彼が須むる所に隨つて、佛道に入るを得せしむ。善方便力を以て、皆能く之を給足す。

(僞の現代語譯)

或る時は淫欲を離る姿を現じて、五種の神通力をもつ仙人となり、諸々の衆生を教へ導いて、戒を保つ心・耐へ忍ぶ心・慈悲の心を起させる。

奉仕を求めざる者を見れば、彼らの下僕となり、彼らの心を喜ばし、そしてさとりを求める心を起させる。彼らが求める所に隨つて、佛道に志すことを可能にする。巧みな方便力を以て、彼ら全てを満足させる。

〔僞〕(迹に就きて、不思議を以て人の惑ひを非とすの僞・其の一〇)

如キレ是道無量ニシテ、所行無シ有ルコトレ。涯リ。智慧無クニ邊際一、度ニ脱ス無數ノ衆ヲ一。

假令一切ノ佛、於テニ無數億劫ニ、讚ニ歎ストモ其ノ功德ヲ一、猶尚不レ能ハシ盡スコト。

誰カ聞テニ如キノ是ノ法ヲ一、不レ發サニ菩提心ヲ一。除クニ彼ノ不肖ノ人ト、魑冥無智ノ者トヲ一。

(僞の訓讀文)

是の如き道無量にして、所行涯まり有ること無し。智慧邊際無く、無數の衆を度脱す。

假令一切の佛、無數億劫に於て、其の功德を贊歎すとも、猶尚盡すこと能はず。

誰か是の如きの法を聞きて、菩提心を發さざらん。彼の不肖の人と、魑冥無智の者とを除く。

(僞の現代語譯)

以上の通り菩薩は佛道を修めること無量であり、行ずる所もきはまり無い。智慧は限りなく大きく、無數の衆生を濟度し解脱させる。

たとひ一切の佛陀が、無數億劫に亘つて、菩薩の功德を讚歎すとも、尚讚歎し盡すことはできない。是の如き説法を聞いて、さとりを求め衆生を濟度しようとの心を起さぬ者はあるまい。ただ癡な人、愚迷で無智の人たちを除いては。

第九 入不二法門章

〔入不二法門の名稱の由来〕（現代語譯）

此の經典の第九章は入不二法門章であります。

此の章は、菩薩が不二の法門（有と空とを等しく統合して不二なる教へ）に悟入することを説き明します。それ故に此の章を『入不二法門章』と名づけます。

（訓讀文）

入不二法門章第九なり。

此の章は菩薩の入不二法門を明す。故に因りて章の目と爲すなり。

〔下根の人の疑ひを遣るために釋を爲す〕（現代語譯）

全部で六章（文殊問疾章・不思議章・觀衆生章・佛道章・不二法門章・香積佛章）を擧げて、根機（教へを聞いて修行し得る素質・能力）の上・中・下の人たちを夫々教化するわけですが、此の入不二法門章と次の香積佛章とは、その中の第三で、根機の劣つてゐる下根の人たちを教化します。

上述の觀衆生章では次のやうに述べてをります。―菩薩は衆生の存在は空（固定的な實體は無い）だと觀する、それは地・水・火・風の四大は存在するが第五の大は存在し得ないといふ眞理、即ち眞理における空と同じく觀すべきである、―と。根機の劣つてゐる下根の人たちは、これを聞いて次のやうな疑問を生ずるでありませう。―若しさうであるならば、菩薩も亦二乗と同じく空を觀ずることを主要な行法としてゐる。何故に菩薩は二乗の人たちより尊いとするのであらうか、―と。それ故に此の入不二法門章に

於て、菩薩が空（固定的實體は無いと觀する世界）と有（迷ひある現象世界）との不二を觀する行法を説き明して、下根の人の疑問を取り除くのであります。

理由を釋き明して言ひます。―菩薩と二乗とは同じく空を觀すると言ひますが、空を觀するあり方が同じではないのです。何故ならば二乗の人は、迷ひの現象世界、即ち有は固定的な實體の無い空だと觀することのみに執著してゐるので、迷ひの現象世界を離れ去つて空の理を證り、ただ己自身の證りのみを求めて、衆生を教化濟度しようとの思ひはありません。此の故に二乗の人は空を觀すると言つても相觀（有を捨て去るといふ、有相にとらはれた空觀）になつてゐるのです。菩薩の觀するあり方は、迷ひの現象世界に在つても空の理を忘失することなく、空の理を證つてゐてもあらゆる衆生の教化濟度に盡します。空は即ち有であり、有は即ち空であり、二者を別のものと考へてをりません。有と無とに偏らず、二者を等しく統一把握して一體不二を觀じてゐるのです。それ故に菩薩が空の理を觀するのを眞實の空觀と言ふのです。どうして二乗の空觀と同じと言ふことができませんか、―と。此を以て下根の人の疑問を取り除くのであります。

（訓讀文）

此より下の二章は、凡て六章を擧げて三根を化す中の第三に、下根を化す。

上の觀衆生章に云はく。菩薩は衆生即ち空にして第五の大の如しと觀すと。下根は之を聞きて即ち疑ひを生ずら。若し爾らば菩薩も亦二乗に同じく空を觀するを以て宗と爲す。何を以てか菩薩を尊しと爲すやと。故に此の章に菩薩の不二觀の行を明して、以て此の疑ひを遣る。

曰はく。同じく空を觀すと雖も、空を觀すること亦同じからず。何となれば二乗の觀は心、有を空するに存するが故に、有を捨して空を證し、但自度を求めて化他に在らず。是の故に空を觀すと名づくとも雖も、更に相觀を成するなり。菩薩の觀は有に有りて空を失せず、空に有りて萬化を成す。空即ち有なり。有即ち空なり。有と無とに偏せずして等しく會して不二なり。故に名づけて眞の空觀と爲す。豈便ち二乗に同じと言はんやと。以て之を遣るなり。

〔参考〕

○先師 黒上正一郎先生は、「二乗の觀は心、有を空するに存するが故に、…」の太子『義疏』について次のやうに論じてをられますので、参考として記します。

『太子は此の現疾について「然らば則ち疾の體たらく、必ず大慈悲を以て本と爲し、教の興る所、抑小揚大を宗と爲す」(經題)と仰せられ、その群生教化の慈悲を以て小乗的偏執を批判し、大乘の眞義を宣揚するを以て本經の主眼と宣ふのである。その大乘の妙理とは本經に於いては即ち空有相即の教義であつて、此に空有相即とは宇宙人生の一切は因縁所生であつてすべて固定的存在に非ずとなし、その眞相は空無と觀ずると共にこの空その儘が即ち一切事象の有なりといひ、空有不二を談するのである。ここに空觀によつて我欲我執の迷執を解脱すると共に、空即有なれば之に依つて現實人生を捨離することなく、この純淨の信念を以て世間生活の教化活動に盡し、理想と現實との一致融合を實現することを以て要諦とするのである。太子はこの義を義疏の到る處に宣説し給うたが、入不二法門品の中に、以下の如く示させ給ふ御言葉を引用して今その根本思想を仰がんとするのである。

「二乗の觀は、心、有を空するに存するが故に、有を捨てて空を證す。但自度を求めて化他に在らず。是の故に空を觀ずと名づくとも雖も、更に相觀を成ず。菩薩の觀は有に在りとも空を失せず、空に在りて萬化を成ず。空即ち有、有即ち空にして、偏の有無にあらず。等しく會して不二なり。故に名づけて眞の空觀と爲す。」

と。即ち小乗教徒は唯空觀にのみ偏執して現實生活を顧みず、自分一個の安心解脱に踟躕し他を教化すべき悲智の圓かなる實現に至らぬのである。かくの如き個我中心の宗教に人生を開導すべき原理を求むべきではない。菩薩は我愆、我執なき空觀に在つて萬化、即ち衆生救済の一切事業を成就するのである。これ即ち他と共なる人生を憶念して眞實の大道を以て衆生化益に献身する大悲大願の實現である。この菩薩の教化を太子は又「苦を忍びて物を度す」(菩薩行品)「群生と苦樂を同じうす」(文殊問疾品)とも示させ給ひ、此の宗教的自覺に基く同胞協力の全體主義を表現して、内面的意義に於ける小乗思想、即ち個人主義的人生觀の多種多様の心理に對する批判を示され、ここに一經の教説を生命化し給うたのである。これらの内容

は維摩居士が諸比丘・諸菩薩の思想に對する彈呵を詳述せるところの同經の弟子品・菩薩品の註釋に於いて最もよく開示せられ、ここに一代の御精神の明徹なる表現を仰ぎ得るのである。かくの如き精神の具現者としての維摩居士は、太子に於いては即ち八地以上の菩薩としたまひ、ここに勝鬘經に於ける大乘道の眞實體現者としての攝受正法の菩薩、又法華經に於ける教化的理想人格としての一乘流通の諸大菩薩等の具體的精神内容が明かにされると共に、また一代の教育精神を更に濃やかに偲ばしむるのである。

之を要するに三經義疏の内容は、國民が共に永遠眞實の宗教的生命に歸入してこの根本信念に立つて融合協力し、中外に悖ることなき大道の實現によつて我が文化史的使命を發揚すべき教化精神を宣示せられたるものである。』(前掲書四七頁、四九頁)

〔入不二法門章の科段分け〕(現代語譯)

入不二法門章の中を二つの項目に分けます。

第一に、維摩居士は、諸々の菩薩に對し不二法門に悟入するとは如何なることか、各々説きなさいと要請することを説き明します。

第二に、諸々の菩薩が不二法門とは如何なる教へかを各々が説法することを説き明します。

第三に、是の入不二法門章を説く時から以下は、五千の菩薩が利益を得たことを説き明します。

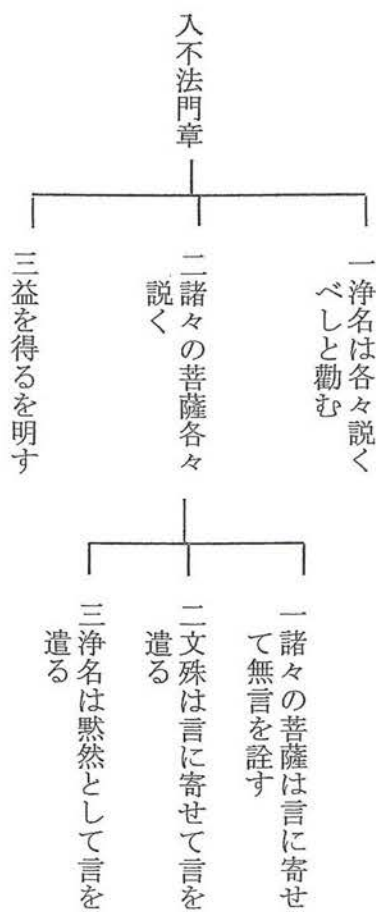
(訓讀文)

此の章の中に就きて大いに開きて三と爲す。

第一に淨名各説くべしと勸むるを明す。

第二に諸菩薩各説くを明す。

第三に是の入不二法門章を説く従り以下、益を得るを明すなり。



〔淨名は各々説くべしと勸む〕

(この箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

經典 (淨名は各々説くべしと勸む)

爾ノ時ニ維摩詰。謂テニ衆ノ菩薩ニ一 言ク。諸ノ仁者。ニ云何カ菩薩ハ入ルヤニ不二法門ニ一。各随テニ所樂ニ一説クト之ヲ。

經典訓讀文

爾そノ時ときに維摩詰ゆいまきつ、衆もろもろの菩薩ぼさつに謂いひて言いはく。諸もろもろの仁者にんじや、云何いかなが菩薩ぼさつは不二法門ふにほうもんに入るいや。各おのおのしよきよう所樂したがつに随これつて之とを説とけと。

經典現代語譯

その時に維摩居士は、諸々の菩薩たちに要請して言ひました。「菩薩さんたちよ、貴方がたは如何にして不二法門(有と無とに偏らず、両者を等しく統合する不二なる教へ)に悟入したのですか。各人が思つた通りにこれを説いて下さいませんか。」と。

〔諸々の菩薩は各々説く科段分け〕（現代語譯）

入不二法門章の第二は諸々の菩薩が不二法門とは如何なる教へかを各々が説法します。この中を二つの項目に分けます。

第一に、諸々の菩薩は言語で表現することによつて、言葉では言ひ盡せない不二の法門を具さに説法する、それを説き明します。

第二に、是の如く諸の菩薩から以下は、文殊菩薩は不二の法門は言語では言ひ盡すことができないと、不二の法門について言語表現を否認する言葉を發する、それを説き明します。

第三に、是に於て文殊、維摩詰に問ふから以下は、維摩居士は一言も言葉を發しないことによつて、不二の法門は言語表現を以ては爲し得ないと説法する、それを説き明します。

此の三項目は皆、言葉で言ひ盡せない不二の法門の眞理には、深い浅いの違ひは無いことを現はしてゐます。ただ衆生は、諸々の菩薩が夫々言語で表現することによつて、言葉では言ひ盡せない不二の法門を説法するのを聞いて、不二の法門の眞理は言語表現によつて、具さに説法することが可能だと必ず思ふであります。そこで文殊菩薩は不二の法門の眞理は言葉では言ひ盡すことができないと、不二の法門について言語表現を否認する言葉を發します。衆生はまた不二の法門の眞理は言語表現を否認するのであらうけれども、言語表現を否認する適切な言葉が存在するにちがひないと誤り考へてあります。そこで維摩居士は默然として一言も言葉を發せず、それによつて言語表現を否認する適切な言葉が存在する、といふ誤つた考へを取り除きます。

（訓讀文）

第二の各説く中に就きて、亦開きて三と爲す。

第一に、諸の菩薩は言に寄せて無言を詮するを明す。

第二に、是の如く諸の菩薩從り以下、文殊は言に寄せて言を遺るを明す。

第三に、是に於て文殊、維摩詰に問ふ從り以下、淨名は無言に寄せて以て無言を詮するを明す。

此の三は皆無言の理は深淺無きを顯はす。但衆生は諸の菩薩の各以て言に寄せて無言を詮するを聞きて、便ち理は

必ず言を以て詮す可しと謂はん。所以に文殊は言に寄せて言を遣る。物は復理は無言なりと雖も應に能遣の言有るべしと計せん。所以に淨名は默然として言はずして、以て能遣の計を遣るなり。

〔研究〕

一、「此の三は皆無言の理は深淺無きを顯はず」の太子『義疏』について

不二法門の眞理について、諸々の菩薩が種々の言語を以て説くところも、文殊菩薩が不二の訪問は言語表現を以ては爲し得ないと説くところも、維摩居士が一言も發しないで不二の法門はかくあるべきとするところも、その三者の眞理には深い浅いの違ひは無いと太子は述べてをられます。

ところが維摩居士が默然として一言も發しないことについて、此の項の終りの經典で、文殊師利、歎じて曰はく。善哉善哉、乃至文字語言有ること無し。是れ眞に不二法門に入るなり。とあり、これについて太子は次のやうに解説してをられます。

「三に文殊讚述す。然るに若し無言を以て極と爲さば、文殊も亦應に無言なるべし。何ぞ猶言を發して讚述するや。解して言はく。理は實には應に爾るべし。然るに若し文殊述べずんば、惑心は唯淨名の默然として答へざるを疑ひて、猶無言を以て極と爲すを知らず。是の故に文殊は將に物に傳へんと欲するが故に、言を發して讚述するなり。」

右の要點を述べれば、不二法門の最高至極の境地は言語表現を以て爲すことはできない。しかし言語による解説が無ければ、衆生にとつては一切が不明で理解することができない。それ故に文殊菩薩は「不二の法門の最高至極は無言である」と言葉をして讚歎するのである。＼と言ふことでありませう。

先には三者の説く眞理には深い浅いの違ひは無いと述べてをられますが、ここでは維摩居士の一點が不二の法門の究極の眞理だと述べてをられます。しかし言語表現無くしては私たち衆生は何事も理解することはできません。それ故、諸々の菩薩の説くところ、文殊菩薩の説くところ、維摩居士の一點、此の三者には眞理の深い浅いの違ひは無いと述べられたのは、

言語表現によつてしか理解し得ない私たち衆生はそのやうに受け止めてよろしい、と仰せられたのではあるまいかと拝する
のであります。

〔諸々の菩薩は言に寄せて無言を詮す〕（現代語譯）

（不二法門とは如何なる教へかを諸々の菩薩が説法する中の第一は、諸々の菩薩が言語で表現することによつて、言葉では言ひ
盡せない不二の法門を具さに説法します。）

生と滅とを二と爲すとは、「生ずる」と「滅する」とは相對世界に於ては二つの概念ですが、世の中の一切の現象は究極の眞理
に於ては生ずることもなく、滅することもなく、姿形は變つても永久に存在します。それ故に「生ずる」と「滅する」との一體不
二を説き明します。以下の諸々の經典については、同様に解釈し、經典を御覽なさい。

（訓讀文）

生と滅とを二と爲すとは、理は本生滅の異無きが故に不二なるを明すなり。

下の諸文は此に類して見つけ可し。

經典（諸々の菩薩は言に寄せて無言を詮す）

會中ニ有リニ菩薩一。名ツクニ法自在ト一。説テ言ク。

諸ノ仁者。生ト滅トヲ爲スレニト。

法本ヨリ不生ナリ。今則チ無シレ滅スルコト。得ルニ此ノ無生法忍ヲ一。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

徳守菩薩曰ク。

我ト我所トヲ爲スレニト。因ルガレ有ルニ我故ニ便チ有リニ我所一。若シ無ケレバ有ルコト我則チ無シニ我所一。是ヲ爲スレ入ルト不二法門ニ一。
不昉菩薩曰ク。

受ト不受トヲ爲スレニト。若シ法ハ不レバレ受ケ則チ不可得ナリ。以テノニ不可得ヲ一故ニ。無ク取モ無シレ捨モ。無クレ作モ無シレ行モ。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

徳頂菩薩曰ク。

垢ト淨トヲ爲スレニト。見レバニ垢ノ實性ヲ一則チ無クニ淨ノ相一。順フニ於滅ノ相ニ一。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

善宿菩薩曰ク。

是レ動ト是レ念トヲ爲スレニト。不レバレ動ゼ則チ無シレ念。無レバレ念即チ無シニ分別一。通ニ達スル此ニ一者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

善眼菩薩曰ク。

一相ト無相トヲ爲スレニト。若シ知レバニ一相即チ是レ無相ナリト一。亦不シテ取ラニ無相ヲモ入ルニ於平等ニ一。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

一。

經典訓讀文

會中えちゆうに菩薩ぼさつ有り。法自在ほうじざいと名づく。説ときて言いはく。

諸もろもろの仁者にんじや、生しょうと滅めつとを二にと爲なす。

法本ほうもとより不生ふしょうなり。今いま則すなはち滅めつすること無し。此この無生むしょう法忍ほうにんを得うる、是これを不二法門ふにほうもんに入いると爲なす。

徳守とくしゅ菩薩ぼさつ曰いはく。

我がと我所がしよとを二にと爲なす。我有があるに因よるが故ゆゑに便すなはち我所有がしよあり。若もし我有があること無なければ則すなはち我所無がしよなし。是これを不二法門ふにほうもんに入いると爲なす。

不胸ふしゆん菩薩ぼさつ曰いはく。受じゆと不受ふじゆとを二にと爲なす。若もし法ほうは受うけざれば則すなはち不可得ふかどくなり。不可得ふかどくを以もつての故ゆゑに取しゆも無なく捨しやも無なし。作さも無なく行ぎやうも無なし。是これを不二法門ふにほうもんに入いると爲なす。

徳頂とくちゆう菩薩ぼさつ曰いはく。垢くと淨じやうとを二にと爲なす。垢くの實性じつしやうを見みれば則すなはち淨じやうの相無そうなく、滅めつの相そうに順したがふ。是これを不二法門ふにほうもんに入いると爲なす。

善宿ぜんしゆく菩薩ぼさつ曰いはく。是これ動どうと是これ念ねんとを二にと爲なす。動どうぜざれば則すなはち念無ねんなし。念無ねんなければ即すなはち分別無ふんべつなし。此これに通達つうたつする者ひと、是これを不二法門ふにほうもんに入いると爲なす。

善宿ぜんしゆく菩薩ぼさつ曰いはく。

是これ動どうと是これ念ねんとを二にと爲なす。動どうぜざれば則すなはち念無ねんなし。念無ねんなければ即すなはち分別無ふんべつなし。此これに通達つうたつする者ひと、是これを不二法門ふにほうもんに入いると爲なす。

善眼菩薩曰はく。一相と無相とを二と爲す。若し一相即ち是れ無相なりと知れば、亦無相をも取らずして平等に入る。是を不二法門に入ると爲す。

經典現代語譯

説法の座に法自在といふ名の菩薩が居た。説法して言ひました。

「皆さん方よ、生ずると滅するとは相對世界では二つの概念です。しかし世の中の一切の現象は本来生ずることもなく、姿形は變つても永久に存在します。此の一切のものは不生不滅であると悟る、これを不二法門に悟入すると爲します。」

徳守菩薩は言ひました。

「我（自己主觀の中心となるもの）と我所（天地萬物）とは相對世界では二つの概念です。我ありと執著するが故に天地萬物は別の存在だと観じます。我ありと執著しなければ、天地萬物と我とは一體不二を觀ずることができます。これを不二法門に悟入すると爲します。」

不昞菩薩は説法して言ひました。

「現象の相に執著するのと執著しないのとは相對世界では二つの概念です。世の中の一切の現象に執著しなければ、得るものは全くありません。得るものが全くありませんから、欲求も無く、捨て去ることもありません。生を受くる業も無く、願望もありません。これを不二の法門に悟入すると爲します。」

徳頂菩薩は説法して言ひました。

「垢れと淨とは相對世界では二つの概念です。垢れの本性を見きはめると淨についての執著が無くなり、垢れと淨とにとらはれない悟りの境地が得られます。これを不二の法門に悟入すると爲します。」

善宿菩薩は説法して言ひました。

「動（心が下界によつて動かされる）と念（心の内からの分別作用）とは相對世界では二つの概念です。外界に對する執著を捨て去れば心が動かされることは無く、即ち動が無ければ念は生じません。念が生じなければ分別作用も起りません。此に通達する人、これ

を不二の法門に悟入すると爲します。」

善眼菩薩は説法して言ひました。

「一相（眞如の相）と無相（差別對立を超えてある相）とは相對世界では二つの概念です。若し一相に對する執着を捨てれば、一相は無相である、と知ります。また無相にも執著せずして兩者を不二とする平等を觀じます。これを不二の法門に悟入すると爲します。」

〔御語釋〕（現代語譯）

一相と無相とを二と爲すとは、一相（眞如の相）は本来無相（差別對立を超えてある相）であります。ただ兩者は二つの存在とする誤つた考へを取り除くために、二つでは無い一の相と云ふのです。しかし惑へる凡夫は、一相といふ概念に執著し、無相といふ概念に執著し、兩者を二つの存在だと誤り考へるのです。

（訓讀文）

一相と無相とを二と爲すとは、一相は即ち是れ無相なり。但二を遣らんと欲するが故に、一相と云ふなり。而るに惑者は執して以て二と爲すなり。

經典

妙臂菩薩曰ク。

菩薩ノ心ト聲聞ノ心トヲ爲スレニ一ト。觀ズルニ心ノ相ハ空ニシテ如シトニ幻化ノ一者ハ。無クニ菩薩ノ心モ一。無シニ聲聞ノ心モ一。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

弗沙菩薩曰ク。

善ト不善トヲ爲スレニ一ト。若シ不レ起サニ善ト不善トヲ一。入テニ無相際ニ一而通達スル者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。師子菩薩曰ク。

罪ト福トヲ爲スレニト。若シ達シニ罪ノ性ハ一則チ與レ福無シト。異ナルコト。以テニ金剛ノ慧ヲ一決ヨ了シテ此ノ相ヲ一。無ク縛モ無キレ解モ者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

師子意菩薩曰ク。

有漏ト無漏トヲ爲スレニト。若シ得レバニ諸法ノ等キコトヲ一則チ不レ起サニ漏ト不漏トノ想ヲ一。不レ著セニ於相ニモ一亦不レ住セニ無相ニモ一。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

淨界菩薩曰ク。

有爲ト無爲トヲ爲スレニト。若シ離ルレバニ一切ノ數ヲ一則チ心ハ如シニ虚空ノ一。以テニ清淨ノ慧ヲ一無キニ所闕者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

那羅延菩薩曰ク。

世間ト出世間トヲ爲スレニト。世間ノ性ノ空ナル即チ是レ出世間ナリ。於テニ其中ニ一不レ入ラ不レ出テ。不レ溢レ不レ散ラ。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

善意菩薩曰ク。

生死ト涅槃トヲ爲スレニト。若シ見レバニ生死ノ性ヲ一則チ無シニ生死一。無ク縛モ無シレ解モ。不レ燃エ不レ滅セ。如クレ是ヲ解スル者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

現見菩薩曰ク。盡ト不盡トヲ爲スレニト。法ハ若シ究竟シテ盡ルモ。若クハ不ルモレ盡キ。皆是レ無シニ盡ノ相一。無キハニ盡ノ相一即チ是レ空ナリ。空ナレバ則チ無シレ有ルコトニ盡ト不盡トノ相一。如クレ是ノ入ル者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

經典訓讀文

妙臂菩薩曰はく。

菩薩の心と聲聞の心とを二と爲す。心の相は空にして幻化の如しと觀する者は、菩薩の心も無く、聲聞の心も無し。是を不二法門に入ると爲す。

弗沙菩薩曰はく。

善と不善とを二と爲す。若し善と不善とを起さず、無相際に入りて通達する者、是を不二法門に入ると爲す。

師子菩薩曰はく。

罪と福とを二と爲す。若し罪の性は則ち福と異なること無しと達し、金剛の慧を以て此の相を決了して、縛も無く解も無き者、是を不二法門に入ると爲す。

師子菩薩曰はく。

有漏と無漏とを二と爲す。若し諸法の等しきことを得れば則ち漏と不漏との想を起さず。相にも著せず亦無相にも住せず。是を不二法門に入ると爲す。

淨解菩薩曰はく。

有爲と無爲とを二と爲す。若し一切の數を離るれば則ち心は虚空の如し。清淨の慧を以て所闕無き者、是を不二法門に入ると爲す。

那羅延菩薩曰はく。

世間と出世間とを二と爲す。世間の性の空なる即ち是れ出世間なり。其の中に於て入らず出でず。溢れず散らず。是を不二法門に入ると爲す。

善意菩薩曰はく。

生死と涅槃とを二と爲す。若し生死の性を見れば則ち生死無し。縛も無く解も無し。燃えず滅せず。是の如く解する者、是を不二法門に入ると爲す。

現見菩薩曰はく。盡と不盡とを二と爲す。法は若し究竟して盡くるも、盡きざるも、皆是れ盡の相無し。盡の相無きは即ち是れ空

なり。空なれば則ち盡と不盡との相有ること無し。是の如く入る者、是を不二法門に入ると爲す。

妙臂菩薩は説法して言ひました。

「菩薩の心（利他心）と聲聞の心（自利心）とは相對世界では二つの概念です。心の本来のすがたは固定的實體の無い空であつて、變化によつて作り出された幻と同様であると観ずる人は、菩薩の心に執着なく、兩者を超越して一體不二と観じます。これを不二の法門に悟入すると爲します。」

弗沙菩薩は説法して言ひました。

「善と不善とは相對世界では二つの概念です。若し善と不善とに執着せず、これを超越して善惡不二の眞實平等の眞理に悟入し、これに通達する人、これを不二の法門に悟入すると爲します。」

師子菩薩は説法して言ひました。

「罪と福とは相對世界では二つの概念です。若し罪の本来の性は福に異なるものではないとの觀に通達し、眞如實相の智慧を以てこれを決定了達し、罪・福を超越して執着しなければ、罪に束縛されることもなく、福に解脱を求めることも無いと觀ずる人、これを不二の法門に悟入すると爲します。」

師子菩薩は説法して言ひました。

「有漏（煩惱がある）と無漏（煩惱が無い）とは相對世界では二つの概念です。世の諸々の現象は一切平等なりとの觀を得れば、有漏と無漏とを差別する想ひは起らず、有漏の相にも執着することなく、無漏の無相にも執着することはありません。これを不二の法門に悟入すると爲します。」

淨解菩薩は説法して言ひました。

「有爲（因縁生所の生滅變化するもの）と無爲（生滅變化を超えた絶對の眞實）とは相對世界では二つの概念です。若し一切の心のはたらきを超越すれば、心は虚空の如く有爲・無爲にとらはれることはありません。この清淨な智慧を以て何ものにも妨げられることの無い人、これを不二の法門に悟入すると爲します。」

那羅延菩薩は説法して言ひました。

「世間（煩惱の惑ひある境）と出世間（煩惱を滅した境）とは相對世界では二つの概念です。世間の本来の性は固定的實體の無い空だと觀すれば、それは即ち出世間です。出世間に入りもせず、世間を出離するでもなく、世間から溢れ出ることもなく、出世間から離れるでもなく、兩者の一體不二を觀する。これを不二の法門に悟入すると爲します。」

善意菩薩は説法して言ひました。

生死（煩惱の惑ある境）と涅槃（惑ひを滅したさとり境）とは相對世界では二つの概念です。生死の本来の性は固定的實體の無い空だと觀すれば、生死の惑ひは消え、生死即涅槃を觀じます。生死に束縛されることもなく、涅槃に基く解脱もありません。涅槃は燃え盡きることも無く、生死は滅することもありません。このやうに解する人、これを不二の法門に悟入すると爲します。」

現見菩薩は説法して言ひました。

「世の現象が盡きる（無となる）と盡きない（永久にある）とは相對世界では二つの概念です。世の一切の現象が盡きる、盡きないとは、相對世界のことであつて、究極の性としては盡きてしまふ相は皆ありません。盡きてしまふ相が無いのは、固定實體の無い空なのです。空でありますから、盡きる、盡きないの相は無く、一體不二なのです。このやうに觀する人、これを不二の法門に悟入すると爲します。」

〔御語釋〕（現代語譯）

盡と不盡とを二と爲すとは、相對世界に於ては有爲（因縁所生）は無常ですから、盡きて無くなり、無爲（因縁所生を離れてある存在）は常住不滅ですから、盡きることなく存在します。相對世界を超越し絶對平等の空の理に於て論ずると、盡きる、盡きないには差別なく、一體不二なのです。

（訓讀文）

盡と不盡とを二と爲すとは、有爲は無常なるが故に盡なり、無爲は常なるが故に無盡なり。一空に就いて論を爲さば、

すなは
即ち無二なり。

經典

普守菩薩曰ク。

我ト無我トヲ爲スレニト。我ハ尚不可得ナリ。非我何ソ可キレ得。見ルニ我ノ實性ヲ一者ハ不ニ復起サレニヲ。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。
電天菩薩曰ク。

明ト無明トヲ爲スレニト。無明ノ實性即チ是レ明ナリ。明モ亦不可取ル。離レニ一切ノ數ヲ一。於テニ其ノ中ニ一平等無二ナル者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

喜見菩薩曰ク。

色ト色空トヲ爲スレニト。色即チ是レ空ナリ。非ズニ色ノ滅シテ空ナルニ一。色ノ性自ラ空ナリ。如クレ是ノ受・想・行・識ト識ノ空トヲ爲スレニト。識即チ是レ空ナリ。非ズニ識ノ滅シテ空ナルニ一。識ノ性自ラ空ナリ。於テニ其ノ中ニ一而通達スル者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

明相菩薩曰ク。

四種ノ異ト空種ノ異トヲ爲スレニト。四種ノ性即チ是レ空種ノ性ナリ。如クニ前際ト後際トノ空ナルガ。故ニ中際モ亦空ナリ一。若シ能ク如クレ是ノ知ル諸種ノ性ヲ一者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

經典訓讀文

普守菩薩曰はく。

我ト無我トをニと爲す。我は尚不可得なり。非我何ぞ得べき。我の實性を見る者は復二を起さず。是を不二法門に入ると爲す。
電天菩薩曰はく。

明ト無明トをニと爲す。無明の實性即ち是れ明なり。明も亦取る可からず。一切の數を離れ、其の中に於て平等無二なる者、是を不二法門に入ると爲す。

喜見菩薩曰はく。

色と色空とを二と爲す。色即ち是れ空なり。色の滅して空なるに非ず。色の性自ら空なり。是の如く受・想・行もなり。識と識の空とを二と爲す。識即ち是れ空なり。識の滅して空なるに非ず。識の性自ら空なり。其の中に於て通達する者、是を不二法門に入ると爲す。

明相菩薩曰はく。

四種の異と空種の異とを二と爲す。四種の性即ち是れ空種の性なり。前際と後際との空なるが如く、故に中際も亦空なり。若し能く是の如く諸種の性を知る者、是を不二法門に入ると爲す。

經典現代語譯

普守菩薩は説法して言ひました。

「我と無我とは相對世界では二つの概念です。我といふ存在を究極的に見きはめることはできません。それ故に無我を見きはめることがどうしてできませんか。我についての執着を捨て去つて我の眞實の性を見きはめる人は、我と無との別なく一體不二を観じます。これを不二法門に悟入すると爲します。」

電天菩薩は説法して言ひました。

「明（さとり）の明りと無明（煩惱の闇）とは相對世界では二つの概念です。無明の眞實の性は、無明から明を生ずるのであつて、無明は即ち明なのです。さとり）の明にも執着してはならず、一切の心のはからひを超越して、明と無明とを絶對平等の不二と観する人、これを不二法門に悟入すると爲します。」

喜見菩薩は説法して言ひました。

「色（物質）と色空（物質は固定的實體なく空である）とは相對世界では二つの概念です。物質には固定的實體は無く空です。物質が滅して空無となるではありません。物質それ自體の性が空なのです。五陰の中の受・想・行も同様です。識（意識）と識空（意識は固定的實體なく空である）とは相對世界では二つの概念です。意識には固定的實體は無く空です。意識が滅して空無となるの

ではありません。意識それ自體の性が空なのです。此の両者の一體不二に通達する人、これを不二法門に悟入すると爲します。」
明相菩薩は説法して言ひました。

「四大(地・水・火・風の要素)が別々のものであり、空大(一)も別のものであるのは相對世界の概念です。四大の本来の性は空大と同じく固定的實體の無い空です。かつて存在したといふ過去及び未だ存在してゐない未來に於ては實體が無い故、空なのであり、それ故に現在といふ一瞬に於ても空なのです。四大と空大とは空であつて一體不二、このやうに四大と空大の眞の性を知る人、これを不二法門に悟入すると爲します。」

(一) 空大 虚空といふ要素。あらゆるものにゆきわたるので大と名づける。妨げられないことを本質とし、妨げないことをはたらきとする。空大あるが故に諸々の物は存在し得る。

〔御語釋〕(現代語譯)

四種と空種とを二と爲すとは、四種とは地大・水大・火大・風大の四大です。空種とは空大です。これらは相對世界を超越した絶對平等の空の理に於ては一體不二なのです。

(訓讀文)

四種と空種とを二と爲すとは、四種とは四大なり。空種とは空大なり。亦一空にして無二なり。

經典

妙意菩薩曰ク。

眼ト色トヲ爲スレニ一ト。若シ知レバニ眼ノ性ヲ一於テ色ニ不レ貧ナラ不レ慧ナラ不レ癡ナラ。是ヲ名ツクニ寂滅ト一。如クレ是ノ耳ト聲・鼻ト香リ・舌ト味・身ト觸レレル・意ト法トヲ爲スレニ一ト。若シ知レバニ意ノ性ヲ一於テ法ニ不レ貧ナラ不レ慧ナラ不レ癡ナラ。是ヲ名ツクニ寂滅ト一。安ヲ住スル其ノ中ニ一。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

無盡意菩薩曰ク。

布施ト廻ヲ向スルヲ一切智ニ一爲スレニト。布施ノ性ハ即チ是レ廻ヲ向スル一切智ニ一性ナリ。如クレ是ノ持戒・忍辱・精進・禪定・智慧ト廻ヲ向スルヲ一切智ニ一爲スレニト。智慧ノ性ハ即チ是レ廻ヲ向スル一切智ニ一性ナリ。於テニ其ノ中ニ一入ルニ一相ニ一者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

深慧菩薩曰ク。

是レ空ト是レ無相ト是レ無作トヲ爲スレニト。空即チ無相ナリ。無相即チ無作ナリ。若シ空・無相・無作ナレバ即チ無シニ心意識一。於テニ一解脱門ニ一即チ是レ三解脱門ナル者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ一。

經典訓讀文

妙意菩薩曰はく。

眼と色とを二と爲す。若し眼の性を知れば色に於て貧ならず悲ならず癡ならず。是を寂滅と名づく。是の如く耳と聲・鼻と香り・舌と味・身と觸れる・意と法とを二と爲す。若し意の性を知れば法に於て貧ならず悲ならず癡ならず。是を寂滅と名づく。其中に安住する、是を不二法門に入ると爲す。

無盡意菩薩曰はく。

布施と一切智に廻向するとを二と爲す。布施の性は即ち是れ一切智に廻向する性なり。是の如く持戒・忍辱・精進・禪定・智慧と一切智に廻向するとを二と爲す。智慧の性は即ち是れ一切智に廻向する性なり。其の中に於て一相に入る者、是を不二法門に入ると爲す。

深慧菩薩曰はく。

是れ空と是れ無相と是れ無作とを二と爲す。空即ち無相なり。無相即ち無作なり。若し空・無相・無作なれば即ち心意識無し。一解脱門に於て即ち是れ三解脱門なる者、是を不二法門に入ると爲す。

經典現代語譯

妙意菩薩は説法して言ひました。

「眼と視覚対象の色境しきまう（色や形）とは相對世界では二つの概念です。眼の本来の性は空であり、眼に執著しなければ、色や形についてもとらへられが無くならず、貧り・怒り・愚癡などは起しません。これを寂滅じやくめつ（究極のさとり）と名づけます。同様に、耳と聲・鼻と香り・舌と味・身體と觸れるもの・意識と思考対象、これらは夫々相對世界では二つの概念です。意識の本来の性は空であり、意識に執着しなければ、思考対象についてもとらへられが無くならず、貧り・怒り・愚癡などは起しません。これを寂滅と名づけます。此の境地に安住する、これを不二法門に悟入すると爲します。」

無盡意菩薩は説法して言ひました。

「布施行と一切をさとる智慧を得ることとは相對世界では二つの概念です。布施行は果を得るための因であり、その本来の性は、果である一切をさとる智慧の性と同じです。同様に、持戒行・忍辱行・精進行・禪定行・智慧行の夫々と、一切をさとる智慧を得ることとは相對世界では二つの概念です。智慧行は果を得るための因であり、その本来の性は、果である一切をさとる智慧の性と同じです。六度の行に於て因果同性の一相を觀する人、これを不二法門に悟入すると爲します。」

深慧菩薩は説法して言ひました。

「空くう（固定的實體なき空を觀する）と無相むさう（差別對立の相が無いことを觀する）と無作むさ（願ひ求める思ひが無いことを觀する）とは相對世界では別々の概念です。絶對平等の觀では、空を觀することは、即ち無相を觀することであり、無相を觀すること即ち無作を觀することです。空・無相・無作の一體不二を觀すれば、心と思慮と認識とについて執着を捨て去ります。相對世界では三つの解脱門とされますが、これを一解脱門と觀する人、これを不二法門に悟入すると爲します。」

〔御語釋〕（現代語譯）

空くうと無相むさうと無作むさとを二にと爲なすとは、此の三つの行法は本来は空くうを觀する一體不二の行であります。ただ一體不二を觀する境地に到達してゐない衆生に、三つの解脱門であると説きます。

(訓讀文)

空と無相と無作とを二と爲すとは、三の界は一つの空の行なり。但未だ達せず、以て三と爲すなり。

經典

寂根菩薩曰ク。

佛ト法ト衆トヲ爲スレニト。佛即チ是レ法ナリ。法即チ是レ衆ナリ。

是レ三寶ハ皆無爲ノ相ニシテ。與ニ虚空一等シ。一切ノ法モ亦爾ナリ。能ク隨フニ此ノ行ニ者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ。

心無関菩薩曰ク。

身ト身滅トヲ爲スレニト。身即チ是レ身滅ナリ。所以ハ者何シ。見レバニ身ノ實相ヲ一者。則チ不レ起サ見ル身ヲ及ヒ見ルトヲ滅身ヲ。身ト與ニ滅身一無レニ分別一。於テニ其ノ中ニ不レ驚ガ不レ懼レ者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ。

上善菩薩曰ク。身ト口ト意業トヲ爲スレニト。是ノ三業ニハ皆無シニ作相一。身ニ無レバニ作相一即チ口ニ無シニ作相一。口ニ無レバニ作相一即チ意モ無シニ作相一。是ノ三業ニ無レバニ作相一。即チ一切ノ法モ無シニ作相一。能ク如クレ是ノ隨フニ無作ノ慧ニ者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ。

福田菩薩曰ク。福行ト罪行ト不動行トヲ爲スレニト。三行ノ實性即チ是レ空ナリ。空ニハ即チ無クニ福行モ一無クニ罪行モ一無クニ不動行モ一。於テニ此ノ三行ニ一而不ルレ起サ者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ。

經典訓讀文

寂根菩薩曰はく。

佛ト法ト衆トを二と爲す。佛即ち是れ法なり。法即ち是れ衆なり。

是れ三寶は皆無爲の相にして、虚空と等し。一切の法も亦爾なり。能く此の行に随ふ者、是を不二法門に入ると爲す。心無関菩薩曰はく。

身と身滅とを二と爲す。身即ち是れ身滅なり。所以は何ん。身の實相を見れば、則ち身を見る及び滅身を見ると起さず。身と滅身と二無く分別無し。其の中に於て驚かず懼れざる者、是を不二法門に入ると爲す。

上善菩薩曰はく、身と口と意業とを二と爲す。是の三業には皆作相無し。身に作相無ければ即ち口に作相無し。口に作相無ければ即ち意も作相無し。是の三業に作相無ければ、即ち一切の法も作相無し。能く是の如く無作の慧に隨ふ者、是を不二法門に入ると爲す。

福田菩薩曰はく、福行と罪行と不動行とを二と爲す。三行の實性即ち是れ空なり。空には即ち福行も無く罪行も無く不動行も無し。此の三行に於て起さざる者、是を不二法門に入ると爲す。

經典現代語譯

寂根菩薩は説法して言ひました。

「佛寶と法寶と僧寶とは相對世界では別々の概念です。佛陀の教への具現が法説でありますから佛寶と法寶は一體不二です。法説を體し説きひろめるのが僧でありますから法寶と僧寶は一體不二です。此の三寶は無爲（生滅變化を超えた常住絶對の眞實）の相であつて、虚空に等しいのです。世の一切の現象も相對世界を超越して觀すれば、同様に一體不二なのです。此のやうに三寶の一體不二を觀する人、これを不二の法門に悟入すると爲します。」

心無關菩薩は説法して言ひました。

「煩惱ある身體と身滅（身體を滅した涅槃の境地）とは相對世界では二つの概念です。身體と身滅とは一體不二なのです。何故かと申しますと、身體に執著しないで、その實相を見れば、身體を見る、身滅を見る、の差別は起りません。身體と身滅とは一體不二で別々のものとは分別しません。兩者の一體不二を觀じて驚かず懼れないひと、これを不二の法門に悟入すると爲します。」

上善菩薩は説法して言ひました。

「身業と口業と意業（身・口・意による行為）とは相對世界では別々の概念です。身・口・意に行爲は、その執着を捨て去れば作相（願ひ求むる思ひ）は無くなります。身體による行為に作相が無ければ、口による行為にも作相は無くなります。意による行為

にも作相は無くなります。身・口・意による行為に作相が無ければ、世の一切の現象に對しても願ひ求むる思ひは無くなり
ます。このやうに願ひ求むる思ひの無い智慧を得る人、これを不二の法門に悟入すると爲します。」

福田菩薩は説法して言ひました。

「福行（欲界における善行）と罪行（殺生など十種の悪行）と不動行（色界・無色界における善行）とは相對世界では別々の概念です。
此の三行の眞實の性は固定的實體の無い空です。その空を觀すれば、福行に執著することもなく、罪行に執著することもなく、
不動行に執著することもありません。此の三行に執著心を起さず一體不二を觀する人、これを不二の法門に悟入すると爲しま
す。」

〔御語釋〕（現代語譯）

福と罪と不動とを二と爲す。とは、福行とは欲界における善行であります。罪行とは十悪（殺生・偷盜・邪淫・妄語・綺語・惡口・
兩舌・貪欲・瞋恚・愚癡）であります。不動行とは色界・無色界における善行であります。三行の本来の性は空の一相であり、三行
は一體不二であります。

（訓讀文）

福と罪と不動とを二と爲す。とは、福とは是れ欲界の善行なり。罪とは是れ十悪なり。不動とは色と無色との行なり。
三行は皆是れ一相にして無二なり。

經典

華嚴菩薩曰ク。

從テ我ニ起スラニヲ爲スニ下。見ルニ我ノ實相一者ハ不起ニ一法ヲ。若シ不レバ住セニ一法ニ。則テ無ク有レ識モ無キニ所識モ一
者。是ヲ爲スレ入ルトニ不二法門ニ。

經典訓讀文

華嚴菩薩曰はく。

我に從りて二を起すを二と爲す。我の實相を見る者は二法を起さず。若し二法に住せざれば、則ち有識も無く所識も無き者、是を不二法門に入ると爲す。

經典現代語譯

華嚴菩薩は説法して言ひました。

我と彼とは相對世界では二つの概念です。我の眞實の相を觀する人は、我に執著しないので我と彼とを一體不二と觀じます。我と彼とは別々の存在ではないと悟れば、主觀の我も無く、客觀の彼も無いと觀する人、これを不二の法門に悟入すると爲します。」

〔御語釋〕（現代語譯）

我に從りて二を起すを二と爲すとは、我に從りてとは我自身のことです。起すとは彼のことです。我に執著せず觀ずれば、我と彼とは一體不二なのです。

（訓讀文）

我に從りて二を起すを二と爲すとは、我に從りてとは即ち我なり。起すとは彼なり。亦不二なり。

經典

德藏菩薩曰ク。

有所得ノ相ヲ爲スレニト。若シ無レバニ 所得一 即チ無シニ 取捨一。無キニ 取捨一者。是ヲ爲スレ入ルトニ 不二法門ニ。

經典訓讀文

德藏菩薩曰はく。

有所得の相を二と爲す。若し所得無ければ即ち取捨無し。取捨無き者、是を不二法門に入ると爲す。

經典現代語譯

徳藏菩薩は説法して言ひました。

「有所得（報いを期待する心）と無所得とは相對世界では二つの概念です。何らかの報いを期待する心が無ければ、取得しようとの心も無く、捨て去ろうとの心もありません。この取得と捨て去るとの一體不二を觀する人、これを不二の法門に悟入すると爲します。」

〔御語釋〕（現代語譯）

有所得の相を二と爲すとは、得（取得）は我に關することであり、相（すがた形）は彼に關することであり、取得しようとの思ひが無く、すがた形にとらはれが無ければ、取得と捨てるの區別は誰にも起りません。

（訓讀文）

有所得の相を二と爲すとは、得は我に在り。相は彼に在り。我に得と相と無ければ、誰をか取捨すること有らんや。

經典

月上菩薩曰ク。

闇ト與ラレ、明爲スレニト。無クレ、闇無レバ、明即チ無シ。有ルコトニ。所以ハ者何シ。如ク、入レバニ、滅受想定ニ、無クレ、闇無キガト、明。一切ノ法相モ亦復如シレ、是ノ。於テニ、其ノ中ニ、一平等ニシテ入者。是ヲ爲スレ、入ルトニ、不二法門ニ。

寶印手筈菩薩曰ク。

樂フトニ、涅槃ラ一不ルトラ、槃ハニ世間ヲ一爲スレニト。若シ不レ、樂ハニ涅槃ヲ一不レバ、厭ハニ世間ヲモ一。則チ無シ、有ルコトニ。所以ハ者何シ。若シ有レバ、縛則チ有レ、解。若シ本無レバ、縛其レ誰カ求メシ、解ヲ。無クレ、縛モ無レバ、解モ則チ無シニ、樂ヲモ、厭ヲモ一。是ヲ爲スレ、入ルトニ、不二法

門二。

珠頂王菩薩曰ク。

正道ト邪道トヲ爲スレ。二ト。住スルニ正道ニ一者ハ則チ不ニ分コ別セ是レ邪ナリ是レ正ナリト。離ルルニ此ノ二ヲ一者。是ヲ爲スレ。入ルトニ不二法門ニ一。

樂實菩薩曰ク。

實ト不實トヲ爲スレ。二ト。實見ノ者モ尚不レ見レ實ヲ。何ニ況ンヤ非實ヲヤ。所以ハ者何ン。非ズニ肉眼ノ所見ニロ。慧眼乃チ能ク見ル。而レドモ此ノ慧眼ハ無ク見ルモ無シレ。不ルモ見。是ヲ爲スレ。入ルトニ不二法門ニ一。

經典訓讀文

月上菩薩曰はく。

闇と明とを二と爲す。闇無く明無ければ即ち二有ること無し。所以は何ん。滅受想定に入れば闇無く明無きが如く一切の法相も亦復是の如し。其の中に於て平等にして入る者、是を不二法門に入ると爲す。

寶印手菩薩曰はく。

涅槃を樂ふと世間を樂はざるとを二と爲す。若し涅槃をも樂はず世間をも厭はざれば、則ち二有ること無し。所以は者何ん。若し縛有れば則ち解有り。若し本縛無ければ其れ誰か解を求めん。縛も無く解も無ければ則ち樂ふも厭ふも無し。是を不二法門に入ると爲す。

と爲す。

珠頂王菩薩曰はく。

正道と邪道とを二と爲す。正道に住する者は則ち是れ邪なり是れ正なりと分別せず。此の二を離るる者、是を不二法門に入ると爲す。

樂實菩薩曰はく。

實と不實とを二と爲す。實見の者も尚實を見ず。何に況んや非實をや。所以は何ん。肉眼の所見に非ず。慧眼乃チ能ク見る。而れ

ども此の慧眼は見るも無く見ざるも無し。是を不二法門に入ると爲す。

經典現代語譯

月上菩薩は説法して言ひました。

「闇(煩惱による迷ひ)と明(悟りの智慧の光)とは相對世界では二つの概念です。闇も無く明も無ければ、此の二者は存在しません。何故かと申しますと、滅受想定(一切の心のはたらきが盡きた境地)に入れば絶對平等であつて、煩惱による迷ひも無く、悟りの智慧の光も無いが如く、一切の存在の眞實のすがたも絶對平等です。此の絶對平等を觀する人、これを不二の法門に悟入すると爲します。」

寶印手管菩薩は説法して言ひました。

「涅槃を求める心と俗世間を厭ひ離れようと思ふ心とは相對世界では二つの概念です。涅槃を求める心も無く、俗世間を厭ふ心も無ければ、此の二者は存在しません。何故かと申しますと、束縛があるからこそ、束縛から解き放たれることを求めます。涅槃を求めるといふ束縛のところがもとも無ければ、どうして俗世間を厭ひ解脱を求める人がありませうか。絶對平等を觀ずれば、束縛も解脱も無く、涅槃を求める心も俗世間を厭ふ心もありません。これを不二の法門に悟入すると爲します。」

珠頂王菩薩は説法して言ひました。

「正道と邪道とは相對世界では二つの概念です。正道に住する人は、正邪を超越した絶對平等を觀じてをり、これは正道、これは邪道と分別することはありません。此の正道・邪道を分別することなく等しく觀する人、これを不二の法門に悟入すると爲します。」

樂實菩薩は説法して言ひました。

「眞實と眞實ならざるものとは相對世界では二つの概念です。眞實なるものを見ようとする者も尚、眞實の相を見抜くことはできません。況んや眞實ならざるものを見抜くことは尚更です。何故かと申しますと、眞實を見抜くのは肉眼では爲し得ないこととで、一切を悟つた智慧の眼のみがよく爲し得るのです。しかし此の智慧の眼は見るでも無く、見と不見といふ相對世界を超

越してゐます。これを不二の法門に悟入すると爲します。

〔文殊は言に寄せて言を遣る〕（現代語譯）

諸々の菩薩が不二法門とは如何なる教へかを各々が説法する中の第二は、文殊菩薩が不二法門は言語では言ひ盡すことはできないと、言語表現を否認する言葉を發する、それを説き明します。是の如く諸の菩薩から以下がこれでありす。此の項自體に二つの項目があります。第一に、諸々の菩薩が質問します。第二に、文殊菩薩が答へます。

（訓讀文）

是の如く諸の從り以下、各説く中の第二に文殊の言に寄せて言を遣るを明す。自ら二有り。一に諸の菩薩問ふ。
二に文殊答ふ。

經典（文殊は言に寄せて言を遣る）

（諸々の菩薩問ふ）

如く是諸ノ菩薩ハ各各説キ已テ。問フニ文殊師利ニ。何等カ是レ菩薩ノ入ルヤ不二法門ニ。

文殊師利曰ク。如キハニ我ガ意ノ一者。於テニ一切ノ法ニ。無クレ言モ。無クレ説モ。無クレ示モ。無クレ識モ離ルニ。諸ノ問答ヲ。是ヲ爲スニ入ルト不二法門ニ。

經典訓讀文

是の如く諸の菩薩は説き已りて、文殊師利に問ふ。

何等か是れ菩薩の不二法門に入るや。

文殊師利曰はく。

我が意の如きは、一切の法に於て、言も無く、説も無く、示も無く、識も無く、諸の問答を離る。是を不二法門に入ると爲す。

以上のやうに諸々の菩薩は不二法門を説きはり、文殊師利に問ひました。

「文殊菩薩さん、不二法門に悟入するとは如何なることでせうか。」

文殊菩薩は答へて言ひました。

「私が思ひますには、不二法門は一切の行法に於て、それを表現する言葉も無く、説明もできず、示しやうも無く、識るすべも無く、諸々の言語による問答を超越してをります。これを不二法門に悟入すると爲します。」

〔浄名は黙然として言を遣る〕（現代語譯）

諸々の菩薩が不二法門とは如何なる教へかを各々が説法する中の第二は、維摩居士は黙然とし一言も言葉を發しないことによつて、不二の法門は言語表現を以ては爲し得ないと説法する、それを説き明します。是に於て文殊問ふ以下がこれでありました。此の項には三つの項目があります。第一に文殊菩薩が問ひます。第二に維摩居士は黙然として一言も發しません。第三に文殊菩薩は、言語表現をしないのが不二法門の至極であると維摩居士を讚歎します。

しかしながら言語表現をしないのが至極であるならば、文殊菩薩も無言であるべきなのに、どうして維摩居士を讚歎する言葉を述べるのでせうか。それについて解説いたしませう。——道理はまさにその通りでせう。しかし若し文殊菩薩が讚歎の言葉を述べなかつたならば、衆生は維摩居士が黙然として一言も答へないのを唯疑問に思ふだけで、不二法門は言語表現をしないのが至極であると悟ることはできません。それ故に文殊菩薩は至極であることを衆生に傳へようと考へて、讚歎の言葉を述べるのであります。

（訓讀文）

是に於て文殊問ふ従り以下、第三に浄名黙然として言を遣るを明す。自ら三有り。
 一に文殊問ふ。二に浄名答へず。三に文殊讚述す。

然るに若し無言を以て極と爲さば、文殊も亦應に無言なるべし。何ぞ猶言を發して讚述するや。解して言はく。理は實には應に爾るべし。然るに若し文殊述べざれば、惑心は唯淨名の默然として答へざるを疑ひて、猶無言を以て極と爲すを知らず。是の故に文殊は將に物に傳へんと欲するが故に、言を發して讚述するなりと。

經典（淨名は默然として言を遣る）

（文殊問ふ）

於テ、是ニ文殊師利。問フニ維摩詰ニ。

我等各自ラ説キ已ヌ。仁者當ニレ説ク。何等カ是レ菩薩ノ入ルヤ不二法門ニ。

（淨名答ヘズ）

時ニ維摩詰。默然トシテ無シレ言。

（文殊讚述ス）

文殊師利。歎ジテ曰ク。善キ哉善キ哉。乃至無シレ有ルコトニ文字語言一。

是レ眞ニ入ルナリ不二法門ニ。

經典訓讀文

是に於て文殊師利、維摩詰に問ふ。

我等各自ら説き已りぬ。仁者當に説くべし。何等か是れ菩薩の不二法門に入るや。

時に維摩詰。默然として言無し。

文殊師利。歎じて曰はく。善き哉善き哉。乃至文字語言有ること無し。

是れ眞に不二法門に入るなり。

經典現代語譯

ここに於て文殊菩薩は、維摩居士に質問しました。

「私たちは各自が説きをほりました。貴女のお説をお聞かせ下さい。不二法門に悟入するとは如何なることでせうか。」
維摩居士は黙然として一言も答へませんでした。

文殊菩薩は讚歎して言ひました。

「素晴らしいことだ。不二法門は言語文字では表現できません。無言なることこそ不二法門悟入の最上至極の境地です。」

〔益を得るを明す〕（現代語譯）

入不二法門の中の第二は、説法を聞いた菩薩たちが大きな利益を得たことを説き明します。是の不二…を説くから以下がこれでありませぬ。

（訓讀文）

是の不二…を説く從り以下、品の中の第二に益を得るを明すなり。

經典（益を得るを明す）

説クニ是ノ入不二法門章一ヲ時。於テ此ノ衆中ニ五千ノ菩薩ハ皆入りニ不二法門ニ。得タリニ無生法忍ヲ一。

經典訓讀文

是の入不二法門章を説く時、此の衆中に於て五千の菩薩は皆不二法門に入り、無生法忍を得たり。

經典現代語譯

以上の不二法門の悟入が説き終つた時、説法の座に居た五千人の菩薩たち（新たに發心した菩薩）は皆不二法門に悟入し、不生不滅の眞理による安らぎを得ました。

第十 香積佛章

〔香積佛章の名稱の由来〕（現代語譯）

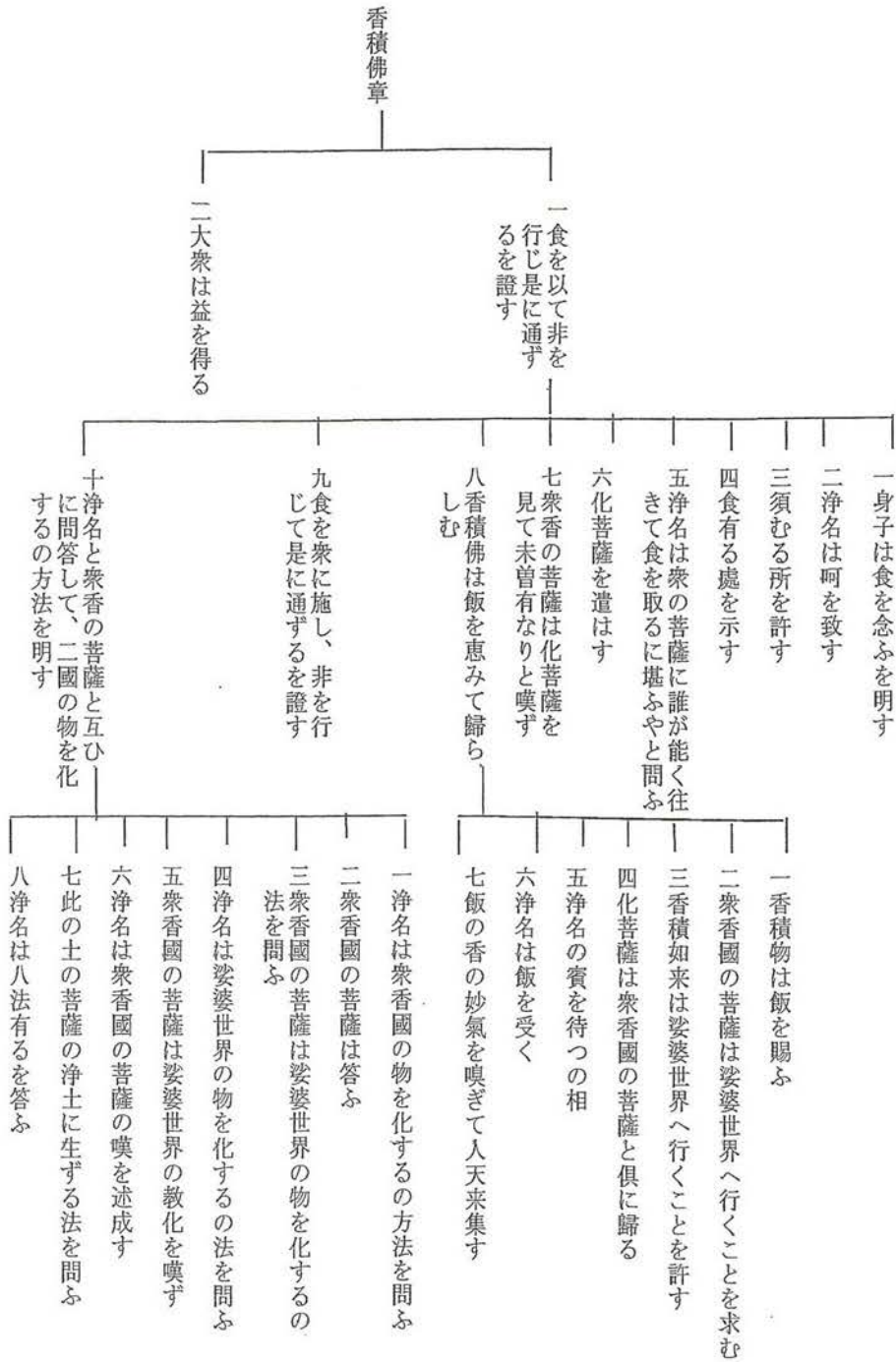
此の經典の第十章は香積佛章であります。

此の章は、根機の劣つてゐる下根の人たちを教化する第二であります。下根の人たちは上述の第八章佛道章に於て、「菩薩は非道を行じて、佛道の正しい教へに通達する」といふ説法を聞いて、それはただ言葉の上のみであつて、菩薩の眞實の姿ではあるまいと思ふであります。それ故に、飲食物は欲望のとりはれであるけれども、そのご飯を香積佛から貰ひうけて大いに衆生教化をすることを説き明します。欲望のとりはれのご飯を香積佛に請ふといふ非道を行じて、衆生教化といふ正しい教へに通達することは、説かれた眞理に順へば必ずその證しが現はれることを知るべきであります。それに因つて此の章の名稱を香積佛章と名づけます。

（訓読文）

香積佛章第十なり。

此は是れ下根の人を化す中の第二なり。下根の人は、上の佛道章に非を行じて是に通ずといふを聞きて、便ち言のみ有りて實に非すと謂はん。故に今揣食は累なれども、而るに今飯を香積佛に請うて、大いに佛事を作すを明す。應に非を行じて是に通ずること信在れば微有りと知るべしとなり。因りて章の目と爲す。故に香積章と云ふなり。



〔香積佛章の名稱の科段分け〕（現代語譯）

香積佛章の中を二つの項目に分けます。

第一に、欲望のとははれのご飯を香積佛に請ふといふ非道を行じて、衆生教化といふ正しい教へに通達するといふ證しを説き明します。

第二に、大勢の人たちが利益を得たことを説き明します。

（訓読文）

此の章に就きて大いに開きて二と爲す。

第一に正しく食を以て非を行じ是に通ずるを證するを明す。

第二に益を得るを明す。

〔食を以て非を行じ是に通ずるを證すの科段分け〕（現代語譯）

香積佛章の中の第一の、欲望のとははれのご飯を香積佛に請ふといふ非道を行じて、衆生教化といふ正しい教へに通達することを證す中を、十項目に分けます。

第一に、佛弟子舍利弗が、食事の時刻だけ何を食べるのかと心の中で思ふことを説き明かします。

第二に、時に維摩詰、其の意を知りてから以下は、維摩居士は舍利弗が心の中で思つたことを知つて、舍利弗を彈呵します。

第三に、若し食せんと欲せばから以下は、維摩居士は食事を與へることを許します。

第四に、時に維摩詰、即ち三昧に入りてから以下は、食事のある衆香國を示します。

第五に、時に維摩詰、衆の菩薩に問ふから以下は、維摩居士は諸々の菩薩に對し、誰か衆香國へ行つて食事を貰ってくる者はないかと問ひます。

第六に、是に於て維摩詰から以下は、維摩居士は神通力を以て菩薩を化作し、その化菩薩を衆香國へ遣はします。

第七に、彼の諸の大士、化菩薩を見てから以下は、衆香國の菩薩たちが化菩薩を見て、その容貌や威徳が未曾有であると讚嘆します。

第八に是に於て香積如來から以下は、香積如來はご飯を與へ、化菩薩を娑婆世界へ歸らせませす。

第九に、時に維摩詰、舍利弗…に語らくから以下は、維摩居士は香積如來から貰つたご飯を大勢の人々に施し、欲望のとははれの飲食物といふ非道を行じて、衆生教化といふ正しい教へに通達することを證します。

第十に、爾の時に維摩詰、衆香の菩薩に問ふから以下は、維摩居士と衆香國の菩薩とは互ひに問答して、衆香國と此の娑婆世界との二國に於ける、衆生を教化濟度する方法について説き明します。

(訓読文)
第一の中に就きて亦開きて十と爲す。
第一に身子の食を念ふを明す。
第二に維摩詰、其の意を知りて従り以下、淨名は呵を致す。
第三に若し食せんと欲せば従り以下、須むる所を許す。
第四に時に維摩詰、即ち三昧に入りて従り以下、食有る處を示す。
第五に維摩詰、衆の菩薩に問ふ従り以下、淨名は衆の菩薩に誰か能く往きて食を取るに堪ふやと問ふを明す。
第六に是に於て維摩詰従り以下、淨名は化菩薩を遣はすことを明す。
第七に彼の諸の大士、化菩薩を従り以下、衆香の菩薩は化菩薩を見て未曾有なりと嘆するを明す。
第八に是に於て香積如來従り以下、香積佛は飯を惠みて還らしむることを明す。
第九に維摩詰、舍利弗…に従り以下、淨名は即ち食を以て衆に施し、正しく非を行じて是に通ずるを證するを明すなり。
第十に爾の時に維摩詰、衆香の菩薩に従り以下、淨名は衆香の菩薩と更相に問答して、仍ち二國の物を化するの

(訓読文)

第一の中に就きて亦開きて十と爲す。

第一に身子の食を念ふを明す。

第二に維摩詰、其の意を知りて従り以下、淨名は呵を致す。

第三に若し食せんと欲せば従り以下、須むる所を許す。

第四に時に維摩詰、即ち三昧に入りて従り以下、食有る處を示す。

第五に維摩詰、衆の菩薩に問ふ従り以下、淨名は衆の菩薩に誰か能く往きて食を取るに堪ふやと問ふを明す。

第六に是に於て維摩詰従り以下、淨名は化菩薩を遣はすことを明す。

第七に彼の諸の大士、化菩薩を従り以下、衆香の菩薩は化菩薩を見て未曾有なりと嘆するを明す。

第八に是に於て香積如來従り以下、香積佛は飯を惠みて還らしむることを明す。

第九に維摩詰、舍利弗…に従り以下、淨名は即ち食を以て衆に施し、正しく非を行じて是に通ずるを證するを明すなり。

第十に爾の時に維摩詰、衆香の菩薩に従り以下、淨名は衆香の菩薩と更相に問答して、仍ち二國の物を化するの

ほうほう
方法を明すことを明すなり。

〔眞子の食を念ふを明す〕（現代語譯）

欲望のとははれの飯を香積佛に請ふといふ非道を行じて、衆生教化といふ正しい教へに通達することを證す中の第一は、佛弟子の舍利弗が食事のことを心の中で思ふことを説き明します。

舍利弗が食事をとるべき時間だがと思ふのは、佛法の制度では食事は正午前に爲すきまりになってゐます。それ故に正午近くになつて來たのでさう思ふのであります。此の諸の菩薩、當に何をか食すべきやとは、舍利弗自身が食事のことを思ふといふのは憚りがありますので、菩薩を擧げて心の中で思ふのであります。

（訓読文）

第一の眞子の食を念ふとは、佛法の制は中に當りて乃ち食す。故に日時已に至ると云ふなり。此の諸の菩薩、當に何をか食すべきやとは、自ら擧ぐるは則ち難し。故に菩薩を稱するなり。

經典（眞子の食を念ふを明す）

於て是舍利弗。心ニ念フ。日時欲ス。至ラント。此ノ諸ノ菩薩。當ニ於何ヲカ食スベキヤ。

經典訓讀文

是に於て舍利弗、心に念ふ。日時至らんと欲す。此の諸の菩薩、當に何をか食すべきや。

經典現代語譯

此に於て舍利弗は心の中で思ひました。「正午近くになつてきた。諸々の菩薩さんたちの食事はどうするのであらうか。」

〔浄名は呵を致す〕（現代語譯）

欲望のとははれの飯を香積佛に請ふといふ非道を行じて、衆生教化といふ正しい教へに通達することを證す中の第二は、維摩

居士が彈呵します。即ち八解脫はちげだつ（八種の解脫を得る禪定）を擧げて彈呵します。八解脫は欲界の欲望を厭ひ去り、煩惱の束縛から解き放ちます。「貴方は此の八解脫の修行を既に成してゐるではないか。而るに何故に食事を欲望する心を以て佛法を聞かうとするのか。」と彈呵します。

（訓読文）

第二に呵を致す。即ち八解を擧げて呵を爲す。八解脫は欲界を厭ひ、能く人の縛を解く。仁は既に受行せり。云何ぞ欲食の心を以て而も法を聞かんや。

經典（淨名は呵を致す）

時ニ維摩詰。知テニ其ノ意ヲ一而語テ言ク。佛説ケリニ八解脫ヲ一。仁者ハ受行ス。豈雜ヘテニ欲食ヲ一而モ聞カンヤ。法ヲ乎。

經典訓讀文

時に維摩詰、其の意を知りて語りて言はく。佛八解脫を説けり。仁者は受行す。豈欲食を雜へて而も法を聞かんや。

經典現代語譯

その時維摩居士は、舍利弗が心の中で思ったことを知つて彈呵しました。「佛陀釋尊は八種の解脫をお説きになり、貴方は欲望を離れるその修行を成してゐるではありませんか。而るに何故食事を欲望する心を以て佛法を聞かうとするのですか。」

〔須むる所を許す〕（現代語譯）

欲望のとははれの飯を香積佛に請ふといふ非道を行じて、衆生教化といふ正しい教へに通達することを證す中の第三は、維摩居士は舍利弗が食事を求めることを許し、素晴らしい食事を與へようと約します。「

（訓読文）

第三に須むる所を許す。

經典(須むる所を許す)

若シ欲セバ、食セント者。且ラク待ツコト須臾セヨ當ニレ令ムニ汝ヲシテ得セニ未曾有ノ食ヲ一。

經典訓讀文

もし食せんと欲せば、且らく待つこと須臾せよ。當に汝をして未曾有の食を得せしむべし。

經典現代語譯

「食事を欲するならば暫時お待ちなさい。貴方が未だ曾つて食したことのない素晴らしい食事を與へませう。」

〔食有る處を示す〕(現代語譯)

欲望のとりはれの飯を香積佛に請ふといふ非道を行じて、衆生教化といふ正しい教へに通達することを證す中の第四は、維摩居士は食事のある衆香國を示します。

經典を御覽なさい。

(訓讀文)

第四に食有る處を示す。

見つ可し。

經典(食有る處を示す)

時ニ維摩詰。即チ入リテ三昧ニ。以テニ神通力ヲ示スニ諸ノ大衆ニ。上方ノ界分過ギテ四十二恒河沙ノ佛土ヲ一。有リレ國。名ツクニ衆香

ト

佛ヲ號スニ香積ト一。今現ニ在ス。其ノ國香氣ハ比スルニ於十方ノ諸佛ノ世界ノ入天之香ニ。最モ爲スニ第一ト一。彼ノ土ニ無シレ有ルコトニ聲聞・

辟支佛ノ名一。唯有りニ清淨ノ大菩薩衆ノミ一佛爲ニ説クレ法ヲ。其ノ界ノ一切ハ皆以テレ香ヲ作りニ樓閣ヲ一。經ヲ行シ香地ニ一。苑園皆香シ。其ノ食ノ香氣周ク流ルニ十方無量ノ世界ニ一。時ニ彼佛ハ與ニ諸ノ菩薩ト一方共ニ坐シテ食ス。有りニ諸ノ天子一。皆號スニ香嚴ト一。悉ク發シテ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ一。供ニ養ス彼佛及ビ諸ノ菩薩ヲ一。此ノ諸ノ大衆ハ莫シレ不ニ目ノアタリ見サル一。

經典訓讀文

時に維摩詰、即ち三昧に入りて、神通力を以て諸の大衆に示す。上方の界分四十二恒河沙の佛土を過ぎて、國有り、衆香と名づく。

佛を香積と號す。今現在に在す。其の國の香氣は十方の諸佛の世界の天人の香に比するに、最も第一と爲す。彼の土に聲聞・辟支佛の名有ること無し。唯清淨の大菩薩衆のみ有り、佛爲に法を説く。其の界の一切は皆香を以て樓閣を作り、香地に經行し、苑園皆香し。其の食の香氣周く十方無量の世界に流る。時に彼の佛は諸の菩薩と方に共に坐して食す。諸の天子有り、皆香嚴と號す。悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發して、彼の佛及び諸の菩薩を供養す。此の諸の大衆は目のあたり見ざる莫し。

經典現代語譯

その時維摩居士は心を靜かに統一して、神通力を以て、食事のある處を會座の諸々の人々に示しました。

無量無數の佛國土を過ぎた上方の世界に、衆香と名づける國がある。その國の佛陀は香積と號し、今現在そこに在す。その國の香氣は、十方の諸佛の世界の人間界や天上界の香氣と比較するに最上第一である。その國には、自己の覺りを求める聲聞や辟支佛は居ない。

唯清淨なる大菩薩衆のみが居て、香積佛は彼らの爲に説法する。その國の一切は香氣で、香氣を以て樓閣を作り、香りの大地を靜かに歩み、苑園は皆香しい。その國の食事の香氣は周く十方無量の世界に流れる。今、香積佛は諸々の菩薩たちと共に坐して食事をとつてゐる。皆香嚴と名づける諸々の天子が居て、無上絶對の悟りを求め、衆生を教化濟度しようとの心を發し、香積佛及び諸々の菩薩たちを禮拜してゐる。

維摩居士が神通力で示した以上の光景を、會座の諸々の人々は悉く目のあたりに見ました。

〔浄名は衆の菩薩に誰か能く往きて食を取るに堪ふやと問ふ〕（現代語譯）

欲望のとらはれのご飯を香積佛に請ふといふ非道を行じて、衆生教化といふ正しい教へに通達することを證す中の第五は、香積佛のご飯を誰か貰つて來る者は居ないかと、維摩居士が問ひかけます。その中には四つの意趣があります。

第一に維摩居士が問ひかけます。

第二に文殊菩薩は、維摩居士の威徳を顯示しようと思つて、菩薩たちを黙然とせしめ答へさせません。

第三に維摩居士は未熟な菩薩たちを激勵しようと思つて、「誰も行く者が居ないとは、恥づかしくありませんか。」と言ひます。

第四に文殊菩薩は初心の菩薩たちを精進せしめようと思つて、佛陀釋尊の言葉を引用し、「未學の菩薩たちを輕蔑してはいけません。」と言ひます。

（訓讀文）

第五に淨名は誰か能く往くに堪ふやと問ふを明すに就きて、即ち四の意有り。

一に淨名問ふ。

二に文殊は淨名の徳を顯はさんと欲し、衆をして答ふこと無からしむ。

三に淨名は未成を厲さんと欲す。故に乃ち耻づ可きこと無きやと言ふ。

四に文殊は新學を進めんと欲す。故に佛の言を引きて未學を輕んずること勿れと曰ふなり。

經典（浄名は衆の菩薩に誰か能く往きて食を取るに堪ふやと問ふ）

時ニ維摩詰。問フニ衆ノ菩薩ニ。諸ノ仁者。誰カ能ク致サンニ彼ノ佛ノ飯ヲ。以テノニ文殊師利

ノ威神力ヲ。故ニ。咸ク皆默然タリ。維摩詰ノ言ク。仁。此ノ大衆無キヤニ乃チ可キコトヲ耻ツ。

文殊師利ノ曰ク。如クニ佛ノ所ノ言フ。勿レレ輕ンズルコトニ未學ヲ。

經典訓讀文

時に維摩詰、衆の菩薩に問ふ。諸の仁者、誰か能く彼の佛の飯を致さん。文殊師利の威神力を以ての故に、咸く皆黙然たり。維摩詰の言はく。仁、此の大衆乃ち耻づ可きこと無きや。文殊師利の曰はく。佛の言ふ所の如く未學を輕んずること勿れ。

經典現代語譯

その時維摩居士は、諸々の菩薩たちに問ひかけました。「皆さん方よ、誰か香積佛のご飯を貰つて来る者は居ませんか。」文殊菩薩はその神通力を以て、菩薩たちを皆黙然とせしめ、誰にも答へさせません。維摩居士は言ひました。「皆さん、誰も行く者が居ないとは、恥づかしくありませんか。」

文殊菩薩は言ひました。「佛陀釋尊のお言葉の通り、未學の菩薩たちを輕蔑してはいけません。」

〔化菩薩を遣はす〕（現代語譯）

欲望のとははれのご飯を香積佛に請ふといふ非道を行じて、衆生教化といふ正しい教へに通達することを證す中の第六は、維摩居士は神通力によつて化菩薩を衆香國へ遣はします。是に於て維摩詰から以下がこれであります。この中にも亦三つの項目があります。

第一に、維摩居士は神通力を以て菩薩を化作します。

第二に、而して之に告げて曰はくから以下、維摩居士は、衆香國へ行つて香積佛を禮し敬意を表する作法を化菩薩に教へます。

第三に、時に化菩薩から以下、化菩薩は、維摩居士の教へを承つて上方にある衆香國へ昇つて行きます。經典を御覽なさい。

(訓讀文)

是に於て維摩詰從り以下、第六に淨名は化菩薩を遣はす。中に就きて亦三有り。
第一に菩薩を化作することを明す。

第二に而して之に告げて曰く従り以下、彼に就きて禮するの法を教ふ。
第三に時に化菩薩従り以下、教へを奉じて上方に昇るを明す。
亦見つ可し。

經典 (化菩薩を遣はす)

(菩薩を化作す)

於テ是維摩詰。不レ起タニ干座ラ一居リテ衆會ノ前ニ。化ヲ作ス菩薩一。相好。光明。威徳。殊勝ニシテ蔽フニ於衆會ラ一。

(香積佛を禮するの法を教ふ)

而シテ告レ之ニ曰ク。汝往ケニ上方ノ界分ニ。度テ如キニ四十二恒河沙ノ一佛土上。有リレ國名ツクニ衆香ト一。佛ヲ號スニ香積ト一。與ニ諸ノ菩薩一方ニ共ニシテ坐食ス。汝往テ到リレ彼ニ如クニ我ガ辭ノ一曰セ。維摩詰ハ稽ヲ首シテ世尊ノ足下ニ一致スコト敬フ無量ナリ。問ヲ訊シマツリニ起居ラ一。少病少惱ニシテ氣力安キヤ不ヤ。願クハ得テニ世尊ノ所ノ食スル之餘リラ一。當ニ於テニ娑婆世界ニ一施ヲ作シ佛事ラ一。令メ下此ノ樂ヲニ小法ラ一者ヲシテ得セト弘ムルヲニ大道ラ一亦使ムニ如來ノ名聲ヲシテ普ク聞エ。

(化菩薩は教へを奉じて上方に昇る)

時ニ化菩薩ハ即チ於テ會ノ前ニ一昇ルニ于上方ニ。舉リテ衆ヲ皆見ル其ノ去テ到テニ衆香界ニ一禮スルヲ。彼ノ佛ノ足上。又聞クニ其ノ言ヲ一維摩詰ハ稽ヲ首シテ世尊ノ足下ニ一致スコト敬フ無量ナリ。問ヲ訊シマツルニ起居ラ一。少病少惱ニシテ氣力安キヤ不ヤ。願クハ得ニ世尊ノ所ノ食スル之餘リラ一。欲ス於テニ娑婆世界ニ一施ヲ作シ佛事ラ一。使メ下此ノ樂ヲニ小法ラ一者ヲシテ得セト弘ムルヲニ大道ラ一。亦使ントニ如來ノ名聲ヲシテ普ク聞エ。

經典訓讀文

是に於て維摩詰、座を起たす衆會の前に居りて、菩薩を化作す。相好、光明、威徳、殊勝にして衆會を蔽ふ。
而して之に告げて曰はく。汝上方の界分に往け。四十二恒河沙の如き佛土を度りて、國有り衆香と名づく。佛を香積と號す。諸

の菩薩と方に共に坐して食す。汝往きて彼に到り、我が辭の如く曰せ。維摩詰は世尊の足下に稽首して敬を致すこと無量なり。起居を問訊しまつるに、少病少惱にして氣力安きや不や。願はくは世尊の食する所の餘りを得て、當に娑婆世界に於て佛事を施作し、此の小法を樂ふ者をして大道を弘むるを得せしめ、亦如來の名聲をして普く聞えしむべし、と。

時に化菩薩は即ち會の前に於て上方に昇る。衆を擧りて皆其の去りて衆香界に到りて彼の佛の足を禮するを見る。又其の言を聞く。維摩詰は世尊の足下に稽首して敬を致すこと無量なり。起居を問訊しまつるに、少病少惱にして氣力安きや不や。願はくは世尊の食する所の餘りを得て、娑婆世界に於て佛事を施作し、此の小法を樂ふ者をして大道を弘むるを得せしめ、亦如來の名聲をして普く聞えしめんと欲す。

經典現代語譯

そこで維摩居士は、會座に集つた人々を前にして坐つたまま、神通力を以て菩薩を化作しました。化菩薩の相好、光明、威徳は、殊のほか勝れてゐて、會座の人々の上を蔽ひました。

維摩居士は化菩薩に申しつけました。「お前は上方の國へ往つてきなさい。無量無數の佛國土を過ぎると、衆香と名づける國がある。その國の佛陀は香積と號す。香積佛は諸々の菩薩たちと共に坐つて食事をとつてゐる。お前は衆香國へ行つて、私の教へる次の通りに挨拶をしなさい。『維摩詰は世尊のみ足を頂いて禮拜し、最高至上の敬意を表します。日常のご様子をお伺ひ申しあげますに、病ひや惱みは無く、ご氣分安らかなことと存じます。願はくは、世尊のお食事の餘りを頂戴して我が娑婆世界の衆生に施し、それによつて衆生を教化し、小乗佛法を求める者（己の悟りのみを願ふ者）をして大乘佛法を弘めることに向はしめ、また香積如來の名聲を普く十方世界に弘めたいと思ひます。』と。」

その時化菩薩は、會座の人々を前にして上方の國へ昇つて行きました。會座の人々は皆、化菩薩が衆香國に到着して香積佛の足に禮拜する様子を悉く見ました。又化菩薩が言上する言葉を聞きました。「維摩詰は世尊のみ足を頂いて禮拜し、最高至上の敬意を表します。日常のご様子をお伺ひ申しあげますに、病ひや惱みは無く、ご氣分安らかなことと存じます。願はくは、世尊のお食事の餘りを頂戴して我が娑婆世界の衆生に施し、それによつて衆生を教化し、小乗佛法を求める者（己の悟りのみを願ふ者）をして大乘佛

法を弘めることに向はしめ、また香積如來の名聲を普く十方世界に弘めたいと思ひます。」

〔衆香の菩薩は化菩薩を見て未曾有なりと嘆ず〕（現代語譯）

欲望のとははれのご飯を香積佛に請ふといふ非道を行じて、衆生教化といふ正しい教へに通達することを證す中の第七は、衆香國の菩薩たちが化菩薩を見て、その容貌や威徳が未曾有であると讚嘆します。彼の諸の大士から以下がこれであります。この中に四つの項目があります。

第一に、衆香國の菩薩たちが化菩薩を未曾有であると讚嘆し、如何なる理由に基くのかを世尊、即ち香積佛に問ひます。

第二に、佛は之に告げて曰くから以下、衆香國の香積佛はその理由を答へます。

第三に、彼の菩薩に言はくから以下、維摩居士の威徳について衆香國の菩薩たちは又問ひます。

第四に、佛の言はく、甚だ大なりから以下、香積佛は、維摩居士の神通力は甚だ大きく、衆生教化の窮まりないことを答へます。（他に太子のご解説がありませんから、「見つ可し」と同様です。）

（訓讀文）

彼の諸の大士従り以下、第七に衆香の菩薩は化菩薩を見て、未曾有なりと嘆ずるを明すなり。中に就きて即ち四有り。

第一に衆香の菩薩は未曾有なりと嘆じて、即ち其れを世尊に問ふことを明す。

第二に佛は之に告げて曰く従り以下、衆香の佛の答へを明す。

第三に彼の菩薩に言はく従り以下、復淨名の徳を問ふ。

第四に佛の言はく、甚だ大なり従り以下、佛は答へて淨名の神力甚だ大にして、化物窮まり無きことを明す。

經典（衆香の菩薩は化菩薩を見て未曾有なりと嘆ず）

（衆香の菩薩は未曾有なりと嘆じて佛に問ふ）

彼ノ諸ノ大士ハ見テニ化菩薩ヲ一。歎ズニ未會有ナリト一。今此ノ上人從リニ何レノ所一來タレルヤ。娑婆世界ハ爲スヤ。在リトニ何レノ許ニ一。云何ンガ名ツケテ爲スヤ。樂フニ小法ヲ一者ト。即チ以テ問フレ佛ニ。

(衆香の佛は答ふ)

佛ハ告ゲテレ之ニ曰ク。下方度リテ下如キニ四十二恒河沙ノ一佛士ヲ上。有リニ世界一名ツクニ娑婆ト一。佛ヲ號スニ釋迦牟尼ト一。今現ニ在リテニ於五濁惡世ニ一。爲ニ下樂フニ小法ヲ一衆生ノ上。敷ニ演ス道教ヲ一。彼ニ有リニ菩薩一名ツクニ維摩詰ト一。住シテニ不可思議解脫ニ一。爲ニ諸ノ菩薩ノ一説レ法ヲ。故ニ遣ハシレ化ヲ來タリテ稱ニ揚シ我ガ名ヲ一。并ビニ讚メテニ此ノ士ヲ一令ムニ彼ノ菩薩ヲシテ増ニ益セ功德ヲ一。

(淨名の徳を問ふ)

彼ノ菩薩ノ言ク。其ノ人何如シガ乃チ作シニ是ノ化ヲ一。徳力・無畏・神足若キヤレ斯ノ。

(香積佛答ふ)

佛ノ言ク。甚ダ大ナリ。一切ノ十方ニ皆遣シレ化ヲ。往テ施ニ作シ佛事ヲ一。饒ニ益ス衆生ヲ一。

經典訓讀文

彼の諸の大士は化菩薩を見て、未曾有なりと歎す。今此の上人何れの所從り來たれるや。娑婆世界は何れの許に在りと爲すや。云何んが名づけて小法を樂ふ者と爲すや。即ち以て佛に問ふ。

佛は之に告げて曰はく。下方四十二恒河沙の如き佛土を度りて、世界有り娑婆と名づく。佛を釋迦牟尼と號す。今現に五濁惡世に在りて、小法を樂ふ衆生の爲に道教を敷演す。彼に菩薩有り維摩詰と名づく。不可思議解脫に住して、諸の菩薩の爲に法を説く。故に化を遣はし來たりて我が名を稱揚し、并びに此の土を讀めて彼の菩薩をして功德を増益せしむ。

彼の菩薩の言はく。其の人何如んが乃ち是の化を作し、徳力・無畏・神足の若きや。佛の言はく。甚だ大なり。一切の十方に皆化を遣はし、往きて佛事を施作し、衆生を饒益す。

經典現代語譯

衆香國の諸々の菩薩たちは化菩薩を見て、その容貌、威徳が未曾有であると讚嘆します。「今、此の上人は何處から來たのでせう

か。娑婆世界は何處に在るのでせうか。小乗佛法を求めるとは如何なる人たちのことを言ふのでせうか。」と、香積佛に問ひました。

香積佛は答へて言ひました。「下方、無量無數の佛國土を過ぎると、娑婆世界と名づける國がある。その國の佛陀は釋迦牟尼佛と號す。今現に五濁（ごじよく）（解説〇〇〇頁）の惡世に於て、小乗佛法を求めると衆生のために、大乘佛法をひろく説き示してゐる。その國に維摩詰と名づける菩薩が居る。不可思議解脱（ふかしぎげだつ）（〇〇〇頁に太子のご解説あり）の境地に到達して、諸々の菩薩の爲に佛法を説いてゐる。その爲に我が衆香國に化菩薩をさし遣はし、我が香積の名を讚め稱へ、併せて我が佛國土を讚歎し、それに由つて娑婆世界の菩薩たちの功德を更にふやさしめてゐる。」

衆香國の菩薩たちは香積佛に問うて言ひました。「維摩居士さんは如何なる威徳の力、畏れなき確信、思ひのままに何處にでも行ける力を有しゐて、そのやうな衆生教化ができるのでせうか。」

香積佛は答へて言ひました。「維摩詰のみ神通力は極めて大である。一切の十方世界に菩薩を遣はし、衆生を教化濟度し、衆生に大きな利益を與へる。」

〔衆積佛は飯を煮みて還らしむの科段分け〕（現代語譯）

欲望のとらはれのご飯を香積佛に請ふといふ非道を行じて、衆生教化といふ正しい教へに通達することを證す中の第八は、香積如來がご飯を與へ、化菩薩を娑婆世界へ歸らせませす。是に於て香積如來はから以下がこれでありませす。此の中に七つの項目があらませす。

第一に、香積如來は化菩薩にご飯を與へませす。

第二に、時に彼の九百萬のから以下は、衆香國の菩薩たちは、化菩薩に隨つて娑婆世界に行きたいと、香積如來に許しを求めませす。

第三に、時に彼の九百の萬から以下は、香積如來は、衆香國の菩薩たちに行くことを許しませす。

第四に、時に化菩薩はから以下は、化菩薩は衆香國の菩薩たちと俱に維摩居士の許に歸つて來ませす。

第五に、時に維摩詰は…を化作しから以下は、維摩居士が衆香國の菩薩たちを迎へる様子を述べます。

第六に、化菩薩から以下は、維摩居士は香積如來のご飯を受けとります。

第七に、飯の香は普く…に薫すから以下は、ご飯の妙なる香りを嗅いで、諸々の人々や諸天が維摩居士の舎に集つてきます。

〔訓讀文〕

是に於て香積如來は從り以下、第八に飯を賜ひ還らしむるを明す。中に就きて自ら七有り。

第一に飯を賜ふを明す。

第二に時に彼の九百萬の從り以下、上方の菩薩は佛に隨ふを求むるを明す。

第三に佛の言はく。往く可し從り以下、求めを許す。

第四に時に化菩薩は從り以下、衆香の菩薩と俱に來たるを明す。

第五に時に維摩詰は…を化作し從り以下、淨名は賓を待つとの相を明す。

第六に化菩薩從り以下、淨名は飯を受くるを明す。

第七に飯の香は普く…に薫す從り以下、香の妙氣を聞きて則ち人天皆來集するを明す。

〔香積佛は飯を賜ふ〕(現代語譯)

〔衆香國の菩薩は娑婆世界へ行くことを求む〕(現代語譯)

(この二箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

〔御語釋〕

第一、第二項は經典を()覽なさい。

〔訓讀文〕

前の二は見つ可し。

經典（香積佛は飯を賜ふ）

於テ、是ニ香積如來ハ以テ、衆香ノ鉢ヲ一盛りニ滿シテ香飯ヲ一。與フニ化菩薩ニ一。

（衆香國の菩薩は娑婆世界へ行くことを求む）

時ニ彼ノ九百萬ノ菩薩ハ俱ニ發シテ聲ヲ言ク。我欲ス詣テ娑婆世界ニ。供養セント釈迦牟尼佛ヲ。并ニ欲ス見ント維摩詰等ノ諸ノ菩薩衆ヲ。

經典訓讀文

是に於て香積如來は衆香の鉢を以て香飯を盛り滿たして、化菩薩に與ふ。

時に彼の九百萬の菩薩は俱に聲を發して言はく。我娑婆世界に詣りて釈迦牟尼佛を供養せんと欲す。並びに維摩詰等の諸の菩薩衆を見んと欲す。

經典現代語譯

是に於て香積如來は、妙なる香りのご飯を衆香國の食器に盛り滿たし、化菩薩に與へました。

その時衆香國の九百萬人の菩薩たちは一齊に香積如來に申しあげました。「私たちは娑婆世界へ往つて釋迦牟尼佛を供養したいと思ひます。并せて維摩居士たち諸々の菩薩衆にお會ひしたいと思ひます。」

〔香積如來は娑婆世界へ行くことを許す〕（現代語譯）

香積如來がご飯を與へて化菩薩を娑婆世界へ歸らせる中の第三は、衆香國の菩薩たちに娑婆世界へ行くことを許します。その中に二つの項目があります。

第一に、行くことを直ちに許します。

第二に、娑婆世界における身の處し方を教へます。その教への中に三つの項目があります。第一に、身體の妙なる香氣を收め藏す

ことを教へます。第二に、菩薩たちが本來もつてゐる妙なる姿形を捨て去ることを教へます。第三に、賤しみ蔑む心を懷いてはならぬことを教へます。

(訓讀文)

第三に往くを許す中に就きて、自ら二有り。

一に直ちに許す。

二に教ふ。教への中に三有り。一に身香を攝めるを教ふ。二に本形を捨つるを教ふ。三に輕賤を懷く莫かれと教ふ。

經典 (香積如來は娑婆世界へ往くことを許す)

(往くことを直ちに許す)

佛ノ言ク。可シレ往ク。

(娑婆世界における身の處し方を教ふ 身香を攝めるを教ふ)

攝メヨニ汝ガ身香ヲ一。無レ令ニ彼ノ諸ノ衆生ヲシテ起サシムルニ惑著ノ心ヲ一。

(本形を捨つるを教ふ)

又當ニ捨ツベシニ汝ガ本形ヲ一。勿レ使ムルニ彼ノ國ノ求ムルニ菩薩ヲ一者ヲシテ而自ラ鄙耻セ。

(輕賤を懷く莫かれと教ふ)

又汝ハ於テ彼ニ莫シ懷テニ輕賤ヲ一而作ヌ中礙想ヲ一。所以ハ者何シ。十方ノ國土ハ皆如シニ虚空ノ一。又諸佛ハ爲ニ欲スルガ化セント諸ノ樂テニ小法一者ヲ一。不ルノミ盡クハ現ゼニ其ノ清淨ノ土ヲ一耳。

經典訓讀文

佛の言はく。往く可し。

汝が身香を攝めよ。彼の諸の衆生をして惑著の心を起さしむる無かれ。

又當に汝が本形を捨つべし。彼の國の菩薩を求むる者をして自らを鄙耻せしむる勿れ。
又汝は彼に於て輕賤を懷きて癡想を作す莫かれ。
所以は何ん。十方の國土は皆虚空の如し。又諸佛は諸の小法を樂ふ者を化せんと欲するが爲に、盡くは其の清淨の土を現せざるのみ。

經典現代語譯

香積佛は言ひました。「娑婆世界へ往つてきなさい。」

「お前たちの身體の香氣を收め藏しなさい。娑婆世界の諸々の衆生に、妙なる香氣に執著し惑ふ心を起さしめてはなりません。」

「又お前たちの本來の姿形を捨てなさい。娑婆世界の菩薩の教へを求める者たちに妙なる姿を見せ、自らの賤しい姿を恥づる心を起さしめてはなりません。」

「又お前たちは娑婆世界の人々を賤しみ蔑み差別する心を懷いてはなりません。」

「以上のやうに身を處さねばならぬ理由は次の通りです。十方の諸佛の國土は虚空の如く何らの礙げもなく、本來は清淨な世界です。諸佛は、自己の覺りのみを願ふ小乘佛法を志向する者たちを教化する爲には、國土の盡くを清淨にしておくことは出来ないからなのです。」

〔化菩薩は衆香國の菩薩と俱に歸る〕(現代語譯)

〔淨名の寶を待つ相〕(現代語譯)

〔淨名は飯を受く〕(現代語譯)

(此の箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

〔飯の香の妙氣を聞きて人天來集す〕(現代語譯)

第四、第五、第六、第七項は經典を讀み覽なさい。

(訓讀文)

後の四重は見つ可し。

經典(化菩薩は衆香國の菩薩と俱に歸る)

時ニ化菩薩ハ既ニ受ケニ鉢ノ飯ヲ一。與ニ彼ノ九百萬ノ菩薩ト一俱ニ受ケテニ佛ノ威神及ビ維摩詰ノ力ヲ一。於テニ彼ノ世界ニ一忽然トシテ不レ現ゼ。須臾ノ間ニ至ルニ維摩詰ノ舍ニ一。

(淨名の賓を待つ相)

時ニ維摩詰ハ即チ化ヲ作シ九百萬ノ師子ノ之座ヲ一。嚴好ナルコト如シレ前ノ。諸ノ菩薩ハ皆座スニ其上ニ一。

(淨名は飯を受く)

化菩薩ハ以テ滿レ鉢ノ香飯ヲ一與フニ維摩詰ニ一。

(飯の香の妙氣を聞きて人天來集す)

飯ノ香ハ普ク薫スニ毘耶離城及ビ三千大千世界ニ一。時ニ毘耶離ノ婆羅門・居士等ハ聞テニ是ノ香氣ヲ一。身意快然トシテ歎スニ未曾有ナリト一。於テレ是ニ。長者主月蓋ハ從ヘテニ八萬四千人ヲ一來ヲ入ス維摩詰ノ舍ニ一。見テニ其ノ室ノ中ニ菩薩甚ダ多ク。諸ノ師子ノ座ノ高廣嚴好ナルヲ一。皆大ニ歡喜ス。禮シニ衆ノ菩薩及ビ大弟子ヲ一。却イテ住スニ一面ニ一。諸ノ地神・虚空神。及ビ欲・色界ノ諸天。聞テニ此ノ香氣ヲ一。亦皆來ヲ入ス維摩詰ノ舍ニ一。

經典訓讀文

時ニ化菩薩ハ既ニ鉢ノ飯を受け、彼の九百萬の菩薩と俱に佛の威神及び維摩詰の力を受けて、彼の世界に忽然として現ぜず、須臾の間に維摩詰の舍に至る。

時に維摩詰は即ち九百萬の師子の座を化作し、嚴好なること前の如し。諸の菩薩は皆其の上に座す。

化菩薩は滿鉢の香飯を以て維摩詰に與ふ。

飯の香は普く毘耶離城及び三千大千世界に薫す。時に毘耶離の婆羅門・居士等は是の香氣を聞きて、身意快然として未曾有なりと歎ず。是に於て、長者主月蓋は八萬四千人を從へて維摩詰の舍に來入す。其の室の中に菩薩甚だ多く、諸の師子の座の高廣・嚴好なるを見て、皆大いに歡喜す。衆の菩薩及び大弟子を禮し、却いて一面に住す。諸の地神・虛空神及び欲・色界の諸天、此の香氣を聞きて、亦皆維摩詰の舍に來入す。

經典現代語譯

その時既に化菩薩は食器に盛つたご飯を受け取り、衆香國の九百萬の菩薩と俱に香積如來と維摩居士との威神力を受けて、衆香國から忽然として姿を消し、少時にして維摩居士の舍に歸り着きました。

その時維摩居士は神通力を以て九百萬の師子の座を作り、その嚴かで美しいことは前と同じでした。衆香國の九百萬の菩薩たちは皆その師子座に座りました。

化菩薩は香積如來から頂いた滿鉢の妙なる香氣のご飯を維摩居士に渡しました。

ご飯の妙なる香氣は毘耶離城及び娑婆世界に普く薫りました。その時、毘耶離の婆羅門・居士(資産者)たちは此の妙なる香氣を嗅いで身も心も快然となり、未曾有の香氣であると讚嘆しました。そこで主月蓋長者は八萬四千人を從へて維摩居士の舍に參りました。其の室の中に甚だ數多くの菩薩が居るのを見、諸々の師子座が高く大きく嚴かで美しいのを見て、皆大いに歡喜しました。諸々の菩薩や佛陀釋尊の大弟子たちに一禮し、退いて室の片隅に座りました。諸々の地神・虛空神及び欲界や色界の天上の神々は、此の妙なる香氣を嗅いで、皆維摩居士の舍に集つて來ました。

〔食を衆に施し、非を行して是に通ずるを證す〕(現代語譯)

非道(欲望のとははれの)飯を香積佛に請ひ大衆に與へる)を行じて、衆生教化といふ正しい教へに通達することを證す中の第九は、維摩居士は香積如來から貰つたご飯を大勢の人々に施し、非道を行じて衆生教化といふ正しい教へに通達することを、正しく證しま

す。時に維摩詰は舍利弗…に語るから以下がこれでありす。此の中に五つの項目があります。

第一に、維摩居士は「飯を喰べなさい」と勧めます。

第二に、異の聲聞有りてから以下は、「ご飯が少くこの大衆の全員が喰べることはできまいと、聲聞の中のある者は疑ひます。

第三に、化菩薩の曰はくから以下は、此のご飯は全員に與へても盡きること無しと、化菩薩が答へます。

第四に、是に於て鉢の飯はから以下はの十二字は、「ご飯が盡きないことを正しく説き明します。

第五に、其の諸の菩薩から以下は、「ご飯を喰べた者たちは利益が得たことを正しく説き明します。

(他に太子のご解説がありませんから、「見つ可し」と同様です。)

(訓讀文)

時に維摩詰は舍利弗…に語る依り以下、第九に食を以て衆に施して正しく非を行じて是に通ずるを證するを明す。中に就きて亦五有り。

第一に淨名は食を勧むるを明す。

第二に異の聲聞有りて従り以下、飯の少きかを疑ふ。

第三に化菩薩の曰はく従り以下、無盡なりと答ふ。

第四に是に於て鉢の飯は従り以下、十二字は正しく竭きざるを明す。

第五に其の諸の菩薩から従り以下、正しく飯を食する者の利を得るを明す。

經典(食を衆に施し、非を行じて是に通ずるを證す)

(淨名は食を勧む)

時ニ維摩詰ハ語ルニ舍利弗等ノ諸大聲聞ニ。仁者可シレ食スニ如來ノ甘露味ノ飯ヲ。大悲ノ所

ナリ薫スル。無レ下以テニ限意ヲ一食シレ之ヲ使ムルコト也。不ラレ消セ也。

(飯の少きを疑ふ)

有リテニ異ノ聲聞一。念フニ是ノ飯少シ。而モ此ノ大衆ノ人人當ニロ食ス。

(化菩薩は無盡なりと答ふ)

化菩薩ノ曰ク。勿レテ以テニ聲聞ノ小徳・小智ヲ一。稱量スル如來ノ無量ノ福慧ヲ。四海ハ有ラ

ンモレ。竭クルコト。此ノ飯ハ無クレ。盡ルコト。使ムニ一切ノ人ヲシテ食セ。揣ハ若クニ須彌ノ一。

乃至一劫ストモ猶不レ能ハレ。盡スコト。所以ハ者何シ。無盡ノ戒・定・智慧・解脱・解脱知見

ノ功德具足セル者ノ所ノ食スル之餘リナレバ。終ニ不レ可ラ。盡クス。

(飯は盡きざるを明す)

於テ是三鉢ノ飯ハ悉ク飽シムルモニ衆會ヲ一猶レ故ノ不レ賜キ。

(飯を食する者の利を得るを明す)

其ノ諸ノ菩薩・聲聞・天人。食スルニ此ノ飯ヲ一者ハ身安ク快樂ナルコト。譬ヘバ如シニ一切

莊嚴國ノ諸ノ菩薩ノ一也。又諸ノ毛孔ヨリ皆出スコトニ妙香ヲ一。亦如シニ衆香國土ノ諸樹ノ一

香ノ。

經典訓讀文

時に維摩詰は舍利弗等の諸の大聲聞に語る。仁者如來の甘露味の飯を食す可し。大悲の薰する所なり。限意を以て之を食し消せざらしむること無かれ。異の聲聞有りて、是の飯少し、而も此の大衆の人人當に食すべきやと念ふ。

化菩薩の曰はく。聲聞の小徳・小智を以て、如來の無量の福慧を称量する勿れ。四海は竭くること有らんも、此の飯は盡ること無く、一切の人をして食せしむ。揣は須彌の若く、乃至一劫すとも猶盡すこと能はず。所以は何ん。無盡の戒・定・智慧・解

脱・解脱知見の功德具足せる者の食する所の餘りなれば、終に盡す可からず。是に於て鉢の飯は悉く衆會を飽かしむるも、猶故のごとく竭きず。

其の諸の菩薩・聲聞・天人、此の飯を食する者は身安く快樂なること譬へば一切樂莊嚴國の諸の菩薩の如し。又諸の毛孔より皆妙香を出すこと、亦衆香國土の諸樹の香の如し。

經典現代語譯

その時維摩居士は、舍利弗たち諸々の大聲聞に語りかけました。「皆さん方、香積如來から頂戴した甘露の味のご飯を召しあがり下さい。如來の大慈悲心の香りがします。小乗にとらはれた狭い心で食べると消化しません。」

聲聞たちのある者は、「一鉢のご飯で少いではないか。此の大勢の人々全員が喰べることができのだらうか。」と疑念を抱きました。

化菩薩はその疑念に答へて言ひました。「聲聞の小なる福德・小なる智慧を以て、如來の無量の福德・智慧をおし量つてはなりません。四海の水は盡きることがあるかも知れませんが、此のご飯は盡きること無く、一切の人々に食せしめることが出来ます。此の一握りのご飯は須彌山の如く大きく、永遠の長期間に亘つて人々に與へても盡きることはありません。その理由は、無盡の持戒・禪定・智慧・解脱及び解脱の安らぎを自覺した功德を具足してゐる如來が食した餘りなのですから、永遠に盡きることはい無いです。」

香積如來の一鉢のご飯は、會座の大衆を悉く満腹せしめましたが、猶以前の通り盛り満たされてゐて盡きることはありませんでした。會座の諸々の菩薩・聲聞・天上の神々や人々は、香積如來のご飯を頂いて身は安らかになり、心地よい喜びを感じました。それは譬へば一切樂莊嚴國といふ樂しみの満ちてゐる國の菩薩の如くでした。又諸々の毛孔から皆妙なる香りを出すこと、それは衆香國の諸々の樹木の香りの如く妙なるものでした。

〔淨名と衆香の菩薩と互に問答して、二國の物を化するの方法を明す〕（現代語譯）

非道（欲望のとらはれのご飯を香積佛に請ひ大衆に與へる）を行じて、衆生教化といふ正しい教へに通達することを證す中の第十は、維摩居士と衆香國の菩薩とが互ひに問答して、衆香國と此の娑婆世界との二國に於ける、衆生を教化濟度する方法を明らかにします。

爾の時に維摩詰、衆香の菩薩に問ふから以下がこれであります。

此の中に八つの項目があります。(以下太子『義疏』は、科段分けと一部の御語釋を示されたのみで、そのほかの説明はない。)

(訓讀文)

爾の時に維摩詰、衆香の菩薩に問ふ從り以下、第十に淨名と衆香の菩薩と更相に問答して、仍ち二國の物を化するの方法を明すことを明す。
中に就きて即ち八有り。

〔淨名は衆香國の物を化するの方法を問ふ〕(現代語譯)

維摩居士と衆香國の菩薩とが互ひに問答して、二國に於ける衆生教化の方法を明らかにする中の第一は、維摩居士が衆香國の衆生教化の方法について質問します。

(訓讀文)

第一に淨名は上方の法を問ふ。

經典(淨名は衆香國の物を化するの方法を問ふ)

爾ノ時ニ維摩詰。問フニ衆香ノ菩薩ニ。香積如來ハ以テカレ何ヲ説クヤレ法ヲ。

經典訓讀文

爾の時に維摩詰、衆香の菩薩に問ふ。香積如來は何を以てか法を説くや。

經典現代語譯

その時維摩居士は、衆香國の菩薩に質問しました。「香積如來は如何なる方法を以て説法し、衆生を教化するのですか。」

〔衆香國の菩薩は答ふ〕（現代語譯）

維摩居士と衆香國の菩薩とが互ひに問答して、二國に於ける衆生教化の方法を明らかにする中の第二は、衆香國の菩薩は「衆香國に於てはただ諸々の妙なる香りを以て衆生を教化します。」と答へます。彼の菩薩から以下がこれでありす。

（訓讀文）

第二に彼の菩薩従り以下、衆香の菩薩は但衆香を以て化を爲すことを答ふ。

經典（衆香國の菩薩は答ふ）

彼ノ菩薩ノ曰ク。我ガ土ノ如來ハ無シニ文字ノ説一。但以テニ衆香ヲ一令ムニ諸ノ天人ヲシテ得セロ入ルヲニ律行ニ一。菩薩ハ各各坐シニ香樹ノ下ニ一。聞テニ斯ノ妙香ヲ一。即チ獲ルニ一切徳藏三昧ヲ一。得タルニ是ノ三昧ヲ一者ハ菩薩ノ所有功徳皆悉ク具足ス。

經典訓讀文

彼の菩薩曰はく。我が土の如來は文字の説無し。但衆香を以て諸の天人をして律行に入るを得しむ。菩薩は各各香樹の下に坐し、斯の妙香を聞きて、即ち一切徳藏三昧を獲る。是の三昧を得たる者は菩薩の所有功徳皆悉く具足す。

經典現代語譯

衆香國の菩薩は答へて言ひました。「我が香積如來は言語や文字による説法は致しません。ただ諸々の妙なる香りによつて、天上の神々や人々を戒律にかなつた道に入らしめます。菩薩は各々が香樹の下に坐し、その妙なる香りを嗅いで、一切の福徳を藏する三昧を得ます。此の三昧を得た人は皆、菩薩のあらゆる功徳を悉く具足いたします。」

〔衆香國の菩薩は娑婆世界の物を化するの法を問ふ〕（現代語譯）

維摩居士と衆香國の菩薩とが互ひに問答して、二國に於ける衆生教化の方法を明らかにする中の第三は、衆香國の菩薩が「娑婆世界に於ては如何なる方法を以て衆生教化を爲すのですか。」と問ひます。彼の諸の菩薩から以下がこれでありす。

(訓讀文)

第三に彼の諸の菩薩従り以下、衆香の菩薩は此の間の法を問ふ。

經典(衆香國の菩薩は娑婆世界の物を化するの法を問ふ)

彼ノ諸ノ菩薩。問フニ維摩詰ニ。今世尊釋迦牟尼ハ以テカレ何ヲ説クヤレ法ヲ。

經典訓讀文

彼の諸の菩薩、維摩詰に問ふ。今世尊釈迦牟尼は何を以てか法を説くや。

經典現代語譯

衆香國の菩薩たちは維摩居士に問ひました。「世尊の釋迦牟尼佛は如何なる説法によつて娑婆世界の衆生を教化するのでせうか。」

〔淨名は娑婆世界の物を化するの方法を答ふ〕(現代語譯)

維摩居士と衆香國の菩薩とが互ひに問答して、二國に於ける衆生教化の方法を明らかにする中の第四は、維摩居士は「娑婆世界の衆生は強情かたくなで教化し難いので、今は種々の強い言葉を以て呵責し、衆生を調伏(心を正しくととのへ、惡を抑へ除く)するのです。」と答へます。維摩詰の言はくから以下がこれであります。

(訓讀文)

第四に維摩詰の言はく従り以下、淨名は此の間の衆生は強豪にして化し難きが故に、今種種の苦切の語を以て調伏を爲すことを答ふ。

經典(淨名は衆香國の物を化するの方法を問ふ)

維摩詰ノ言ク。此ノ土ノ衆生ハ強剛ニシテ難シ化シ。故ニ佛ハ爲ニ説テニ剛強ノ之語ヲ一以テ調伏ス之ヲ一。言ク。

是レ地獄。是レ畜生。是レ餓鬼ナリ。是レ諸難處。是レ愚人ノ生處ナリ。是レ身ノ邪行。是レ身ノ邪行ノ報ナリ。是レ口ノ邪行。是レ口ノ邪行ノ報ナリ。是レ意ノ邪行。是レ意ノ邪行ノ報ナリ。是レ殺生。是レ殺生ノ報ナリ。是レ不與取。是レ不與取ノ報ナリ。是レ邪婬。是レ邪婬ノ報ナリ。是レ妄語。是レ妄語ノ報ナリ。是レ兩舌。是レ兩舌ノ報ナリ。是レ惡口。是レ惡口ノ報ナリ。是レ無義語。是レ無義語ノ報ナリ。是レ貧嫉。是レ貧嫉ノ報ナリ。是レ瞋惱。是レ瞋惱ノ報ナリ。是レ邪見。是レ邪見ノ報ナリ。是レ慳悋。是レ慳悋ノ報ナリ。是レ毀戒。是レ毀戒ノ報ナリ。是レ瞋恚。是レ瞋恚ノ報ナリ。是レ懈怠。是レ懈怠ノ報ナリ。是レ懈怠ノ報ナリ。是レ亂意。是レ亂意ノ報ナリ。是レ愚癡。是レ愚癡ノ報ナリ。是レ結戒。是レ持戒。是レ犯戒ナリ。是レ應作。是レ不應作ナリ。是レ障礙。是レ不障礙ナリ。是レ得罪。是レ離罪ナリ。是レ有淨。是レ垢ナリ。是レ漏。是レ無漏ナリ。是レ正道。是レ邪道ナリ。是レ有爲。是レ無爲ナリ。是レ世間。是レ涅槃ナリト。
 以テノ難キノ化シ之人心ハ如クナルヲ猿猴ノ一故ニ。以テ若干種ノ法ヲ一制ニ御シテ其ノ心ヲ一。乃チ可シニ調伏ス。譬ヘバ如シ象馬ノ龍悞不調ナル。加フルコトニ諸ノ楚毒ヲ一。乃至徹シテ骨ニ。然後ニ調伏スルガ上。如クレ是ノ剛強ニシテ難キ化シ衆生ノ故ニ。以テ一切苦切ノ言ヲ一。乃チ可シ入ル律ニ。

經典訓讀文

維摩詰の言はく。此の土の衆生は剛強にして化し難し。故に佛は爲に剛強の語を説きて之を調伏す。

言はく。
 是レ地獄。是レ畜生。是レ餓鬼ナリ。是レ諸難處。是レ愚人ノ生處ナリ。是レ身ノ邪行。是レ身ノ邪行ノ報ナリ。是レ口ノ邪行。是レ口ノ邪行ノ報ナリ。是レ意ノ邪行。是レ意ノ邪行ノ報ナリ。是レ殺生。是レ殺生ノ報ナリ。是レ不與取。是レ不與取ノ報ナリ。是レ邪婬。是レ邪婬ノ報ナリ。是レ妄語。是レ妄語ノ報ナリ。是レ貧嫉。是レ貧嫉ノ報ナリ。是レ瞋惱。是レ瞋惱ノ報ナリ。是レ邪見。是レ邪見ノ報ナリ。是レ慳悋。是レ慳悋ノ報ナリ。是レ毀戒。是レ毀戒ノ報ナリ。是レ瞋恚。是レ瞋恚ノ報ナリ。是レ懈怠。是レ懈怠ノ報ナリ。是レ懈怠ノ報ナリ。是レ亂意。是レ亂意ノ報ナリ。是レ愚癡。是レ愚癡ノ報ナリ。是レ結戒。是レ持戒。是レ犯戒ナリ。是レ漏。是レ無漏ナリ。是レ正道。是レ邪道ナリ。是レ有爲。是レ無爲ナリ。是レ世間。是レ涅槃ナリト。
 以テノ難キノ化シ之人心ハ如クナルヲ猿猴ノ一故ニ。以テ若干種ノ法ヲ一制ニ御シテ其ノ心ヲ一。乃チ可シニ調伏ス。譬ヘバ如シ象馬ノ龍悞不調ナル。加フルコトニ諸ノ楚毒ヲ一。乃至徹シテ骨ニ。然後ニ調伏スルガ上。如クレ是ノ剛強ニシテ難キ化シ衆生ノ故ニ。以テ一切苦切ノ言ヲ一。乃チ可シ入ル律ニ。

無漏なり。是れ正道、是れ邪道なり。是れ有為、是れ無為なり。是れ世間、是れ涅槃なり、と。
 化し難きの人の心は猿猴の如くなるを以ての故に、若干種の法を以て其の心を制御して、乃ち調伏す可し。譬へば象馬の龍候
 不調なる、諸の楚毒を加ふる事、乃至骨に徹して、然る後に調伏するが如し。是の如く剛強にして化し難き衆生の故に、一切
 苦切の言を以て、乃ち律に入る可し。

經典現代語譯

維摩居士は答へて言ひました。「娑婆世界の衆生は強情かたくなで教化し難いのです。それ故世尊の釋迦牟尼佛は強い言葉を以て
 説法し、衆生を調伏するのです。」

世尊は説法して次のやうに言ひます。

「惡を爲せば地獄、畜生、餓鬼道に墮ちる。諸難処（佛や佛法に無縁な世界）には愚人が生れる。身體による邪行を爲せば身邪行の報
 いをうける。口舌による邪行を爲せば口邪行の報いをうける。意による邪行を爲せば意邪行の報いをうける。殺生を爲せば殺生の
 報いをうける。不與取（盗み）を爲せば不與取の報いをうける。邪淫を爲せば邪淫の報いをうける。妄語（嘘いつはり）を爲せば妄語
 の報いをうける。兩舌（二枚舌）を爲せば兩舌の報いをうける。惡口を言へば惡口の報いをうける。無義語（うはべを飾つた巧みな言
 葉）を言へば無義語の報いをうける。貧嫉（貪りとねたみ）を起せば貧嫉の報いをうける。瞋惱（いかりの煩惱）が盛んになれば瞋惱の
 報いをうける。邪見を起せば邪見の報いをうける。慳吝（ものおしり）の心を起せば慳吝の報いをうける。毀戒（戒めを犯す）を爲せ
 ば毀戒の報いをうける。瞋恚（怒り）が盛んになれば瞋恚の報いをうける。懈怠（怠り）を行へば懈怠の報いをうける。亂意（心の亂
 れ）を起せば亂意の報いをうける。愚癡が盛んになれば愚癡の報いをうける。設定された戒律に基き戒律を保持すべきであり、戒
 律を犯してはならぬ。應作（人々を救ふ）すべきであり、不應作であつてはならぬ。障礙（さとりを得るための障害）があつてはなら
 ぬ、取り除くべきである。罪を得てはならぬ、罪から離れるべきである。清淨たるべきで、不淨であつてはならぬ。煩惱のままに
 生きてはならぬ、煩惱を離れよ。正道を進むべきであり、邪道に入つてはならぬ。生滅變化するものに執着してはならぬ、常住絶
 對の眞實をもとめよ。俗世間に満足してはならぬ、涅槃を求めよ。」と。

「教化し難い人の心は猿と同じやうなので、種々の強い方法を以て調伏（心を正しくととのへ、悪を抑へ除く）しなければなりません。譬へば飼主に反抗して素直に従はない象や馬に對しては、骨身に徹するやうな厳しい鞭を與へ、然る後に調教するのと同様です。娑婆世界の衆生は強情かたくなで教化し難いので、一切の強い言葉を以て呵責することによつて、戒律にかなつた道に入らしめるのです。」

〔御語釋〕（現代語譯）

諸難處とは、八難処（一）であります。愚人の生處とは、佛教以外の教へを奉ずる外道と凡夫であります。無義語とは、うはべを飾つた偽りの言葉で人を喜ばしめる者であります。その他の諸々の語句は皆經典をこゝ覽なさい。

（訓讀文）

諸難處とは八難処なり。愚人の生處とは外道と異習とを謂ふ。無義語とは美言を以て人を悦ばしむる者を謂ふなり。余の諸句は皆見つ可し。

（一）八難処 佛を見ず、佛法を聞くことができない八種の境界。

（一）地獄（二）餓鬼（三）畜生（以上の三惡道は苦痛が激しいため）（四）長壽天（長壽を樂しんで求道心が起らない）

（五）邊地（樂しみが多すぎる）（六）盲聾瘖瘂（感覺器官に缺陷があるため）（七）世智辨聰（世俗智にたけて正理に

従はない）（八）佛前佛後（佛が世に在さぬ時）

〔衆香國の菩薩は娑婆世界の教化を嘆ず〕（現代語訳）

維摩居士と衆香國の菩薩とが互ひに問答して、二國における衆生教化の方法を明らかにする中の第五は、衆香國の菩薩が娑婆世界の佛や菩薩たちの衆生教化を讚嘆します。彼の諸の菩薩は是を説くを聞き已りてから以下がこれであります。

（訓讀文）

第五に彼の諸の菩薩は是を説くを聞き已りて従り以下、上方の菩薩は此の間の化の大士等を嘆ずるを明す。

經典(衆香國の菩薩は娑婆世界の教化を嘆ず)

彼ノ諸ノ菩薩ハ聞キ、説クヲ、是ヲ已テ。皆曰ク。未曾有ナリ也。如キハ、世尊釋迦牟尼佛ノ。隱シテニ其ノ無量自在ノ力ヲ一。乃チ以テニ貧ノ所樂ノ法ヲ一度、脱ス衆生ヲ上。斯ノ諸ノ菩薩モ亦能ク勞謙シテ以テニ無量ノ大悲ヲ一生ズニ是ノ佛土三。

經典訓讀文

彼の諸の菩薩は是を説くを聞き已りて、皆曰はく。未曾有なり。世尊釈迦牟尼佛の如きは、其の無量自在の力を隠して、乃ち貧の所樂の法を以て衆生を度脱す。斯の諸の菩薩も亦能く勞謙して無量の慈悲を以て是の佛土に生ず。

經典現代語譯

衆香國の菩薩たちは維摩居士の説法を聞きをはり、皆が言ひました。「此の國の衆生教化は未曾有です。世尊の釋迦牟尼佛はその無量自在なる力を隠して、心貧しき者たちの願ふ所に應同して衆生を濟度なさる。菩薩たちも亦衆生濟度の大慈悲心の故に此の佛土に生れ、その勞を誇ることもありません。」

〔淨名は衆香國の菩薩の嘆を述成す〕(現代語譯)

維摩居士と衆香國の菩薩とが互ひに問答して、一國に於ける衆生教化の方法を明らかにする中の第六は、維摩居士は、衆香國の菩薩たちが娑婆世界の菩薩を讚嘆したことについて、菩薩の衆生教化のあり方を説明し、その讚嘆を成立せしめます。説明の内容は、菩薩がその一生涯を此の娑婆世界に於て、十善の法(布施など十種の善法)を以て衆生を教化し利益を與へる功德は、衆香國に於ける百千劫といふ長い期間の修行よりも勝れてゐると言ふのであります。維摩詰の言はくから以下がこれでありました。

此の中に三つの項目があります。第一に、維摩居士は仰せの通りだと直ちに述べます。第二に、然も其の一世から以下、此の國における菩薩の衆生教化と功德とが正しく勝れてゐることを述べます。第三に、所以は何んから以下、十種の善法を擧げて、教化、

功德が勝れてゐる事由を釋き明します。十種の善法とは、六度の法（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧）を六種とし、八難（八難處）を救ふのを第七とし、大乘の教へを第八とし、諸々の善根を第九とし、四攝法（布施・愛語・利行・同事）を第十とします。

（訓讀文）

第六に維摩詰の言はく從り以下、淨名は彼の菩薩の嘆を述成するを明す。言ふところは二世此に在りて、十善の法を以て物を化し利せしむること、必ず彼の百千劫の修行よりも勝れたりと。中に就きて自ら三有り。第一に直ちに述べ、第二に然も其の一世從り以下、正しく化功の此に如かずと明す。第三に所以は何ん從り以下、十の善を擧げて釋を成す。十の善とは六度を自ら六と爲し、八難を七と爲し、大乘の法を八と爲し、諸の善根を九と爲し、四攝を十と爲す。

經典（淨名は衆香國の菩薩の嘆を述成す）

（直ちに述べ）

維摩詰ノ言ク。此ノ土ノ菩薩ハ於テニ諸ノ衆生ニ。大悲堅固ナルコト誠ニ如シレ所ノ言フ。

（教化の功德勝れたるを明す）

然モ其ノ一世ニ饒ニ益スルコト衆生ヲ。多シニ於彼ノ國ノ百千劫ノ行ヨリモ。

（十善の法を擧げて釋を成す）

所以ハ者何シ。此ノ娑婆世界ニハ有リニ十事ノ善法。諸餘ノ淨土ニ之所ナリ。無キレ有ルコト。何等ヲカ爲スレ。十ト。以テニ布施ヲ一攝シニ貧窮ヲ一。以テニ淨戒ヲ一攝シニ毀禁ヲ一。以テニ忍辱ヲ一攝シニ瞋恚ヲ一。以テニ精進ヲ一攝シニ懈怠ヲ一。以テニ禪定ヲ一攝シニ乱意ヲ一。以テニ智慧ヲ一攝スニ愚癡ヲ一。説テニ除難ノ法ヲ一度シニ八難ノ者ヲ一。以テニ大法ヲ一度シニ樂フニ小乗ヲ一者ヲ一。以テニ諸ノ善根ヲ一濟ヒニ無徳ノ者ヲ一。常ニ以テニ四攝ヲ一成ニ就ス衆生ヲ一。是ヲ爲スレ。十ト。

經典訓讀文

維摩詰の言はく。此の土の菩薩は諸の衆生に於て、大悲堅固なること誠に言ふ所の如し。

然も其の一世に衆生を饒益すること、彼の國の百千劫の行よりも多し。

所以は何ん。此の娑婆世界には十事の善法有り。諸餘の淨土に有ること無き所なり。何等をか十と爲す。布施を以て貧窮を攝し、淨戒を以て毀禁を攝し、忍辱を以て瞋恚を攝し、精進を以て懈怠を攝し、禪定を以て乱意を攝し、智慧を以て愚癡を攝す。除難の法を説きて八難の者を度し、大乘の法を以て小乘を樂ふ者を度し、諸の善根を以て無徳の者を濟ひ、常に四攝を以て衆生を成就す。是を十と爲す。

經典現代語譯

維摩居士は言ひました。「娑婆世界の菩薩が堅固な大慈悲心を以て衆生を教化してゐることは仰せの通りです。」

「然も菩薩の娑婆世界に於ける一生涯の衆生教化は、衆香國に於ける百千劫といふ長い期間の修行より勝れてゐます。」

「その事由を申しませう。他の諸淨土には必要ないことですが、此の娑婆世界には十種類の善法があります。十の善法は次の通りです。布施（法施、財施）を以て心や生活の貧しい者を救ひ、戒律を堅固に保つことによつて戒律を犯す者を救ひ、堪へ忍ぶことによつて怒りを抑へしめ、精進によつて怠け心を無くし、靜かに瞑想することによつて心の亂れを取り除き、智慧によつて愚かさや捨てさせます。除難の法を説いて八難のある者を救ひ、大乘の法を説いて小乘を信奉する者を救ひ、諸々の善根を以て徳の無い者を救ひ、四攝法によつて衆生を完全な姿に導きます。以上が十種類の善法です。」

〔此の土の菩薩の淨土に生ずる法を問ふ〕（現代語譯）

維摩居士と衆香國の菩薩とが互ひに問答して、二國に於ける衆生教化の方法を明らかにする中の第七は、衆香國の菩薩が問ひます。「維摩居士さんの言はれる通り、此の娑婆世界にはさとりの方げが甚だ多いのですが、此の國の菩薩は、如何なる法を修行してさとりの方げを免れ、淨土に生まれるのでせうか。」と。

彼の菩薩の曰はくから以下がこれでありませう。

(訓讀文)

第七に彼の菩薩の曰はく従り以下、上方の菩薩は浄名の言ふが如く、此の土には妨難甚だ多し。菩薩は何れの道を修行してか、此の過を免れることを得て、浄土に往生するやと問ふことを明す。

經典(此の土の菩薩の浄土に生ずる法を問ふ)

彼ノ菩薩ノ曰ク。菩薩ハ成ニ就シテカ幾バクノ法ヲ一。於テニ此ノ世界ニ一行ニ無クニ瘡疣一 生ズルヤニ干淨土ニ一。

經典訓讀文

彼の菩薩の曰はく。菩薩は幾ばくの法を成就してか、此の世界に於て行に瘡疣無く浄土に生ずるや。

經典現代語譯

衆香國の菩薩は問ひました。「娑婆世界の菩薩は如何なる修行によつてさとりの方げを免れ、如何な善法を成就して、浄土に生れるのでせうか。」

〔浄名は八法有るを答ふ〕(現代語譯)

維摩居士と衆香國の菩薩とが互ひに問答して、二國に於ける衆生教化の方法を明らかにする中の第八は、維摩居士が八種の善法があることを答へます。娑婆世界の菩薩は此の八善法を修行することにやつて、さとりの方げを免れ、浄土に生まれることができます。維摩詰の言はくから以下がこれでありま。

此の中に二つの項目があります。第一に、八善法を總體として答へます。第二に、何等をか八と爲すから以下、八善法を列挙します。

衆生を饒益して而も報いを望まず、一切の衆生に代りて諸の苦惱を受けとは、菩薩の大悲心です。所作の功德は盡く以て之を施すとは、菩薩の大慈心です此の二句は合はせて第一の善法とします。心を衆生に等しくして謙下して礙り無しは、第二の

善法です。諸の菩薩に於て之を視ること佛の如くすは、第三の善法です。

未だ聞かざる所の經は之を聞きて疑はずは、第四の善法です。聲聞と興にして相違背せずは、第五の善法です。彼の供を嫉ま
ず、己が利を高くせず、而も其の中に於て其の心を調伏すは、第六の善法です。常に己が過ちを省みて彼の短を訟へずは、
第七の善法です。恒に一心を以て諸の功德を求むは、第八の善法です。

(訓讀文)

第八に維摩詰の言はく從り以下、淨名は八法有るを答ふ。此に在る菩薩は此の法を修行して、能く過を免るを得て、
彼の淨土に往く。中に就きて自ら二有り。

第一に惣して答ふ。

第二に何等をか八と爲す從り以下、八法を列す。饒益して而も報いを望まず、一切の衆生に代りて諸の苦惱を受け
とは大悲なり。所作の功德は盡く以て之を施すとは大慈なり。此の二は合して一法と爲す。心を衆生に等しくして
謙下して礙り無しは二なり。諸の菩薩に於て之を視ること佛の如くすは三なり。未だ聞かざる所の經は之を聞きて
疑はずは四なり。聲聞と興にして相違背せずは五なり。彼の供を嫉まず、己が利を高くせず、而も其の中に於て其の
心を調伏すは六なり。常に己が過ちを省みて彼の短を訟へずは七なり。恒に一心を以て諸の功德を求むは八な
り。

經典(淨名は八法有るを答ふ)

(惣して答ふ)

維摩詰ノ言ク。菩薩ハ成ニ就スレバ八法ヲ。於テニ此ノ世界ニ一行ニ無クニ瘡疣ニ。生ズニ干淨土ニ。

(八法を列す)

何等ヲカ爲スレハト。饒ニ益シテ衆生ヲ。而モ不レ望マレ報ヲ。代テニ一切ノ衆生ニ受ケニ諸ノ苦惱ヲ。所作ノ功德ハ盡ク以

テ施スレ之ヲ。等クテニ心ヲ衆生ニ謙下シテ無シ礙リ。於テニ諸ノ菩薩ニ視ルコトノ之ヲ如クスレ佛ノ。所ノ未ダ聞カ
 經ハ聞テ之ヲ不レ疑ハ。不興ニシテ聲聞ト而相違背セ。不嫉マニ彼ノ供ヲ。不レ高クセニ己ガ利ヲ。而モ於テニ其
 ノ中ニ調伏ス其ノ心ヲ。常ニ省テ己ガ過ヲ一不レ訟ニ彼ノ短ヲ。恆ニ以テニ一心ヲ一求ムニ諸ノ功德ヲ。是ヲ爲スニ八
 法ト。

經典訓讀文

維摩詰の言はく。菩薩は八法を成就すれば、此の世界に於て行に瘡疣無く、淨土に生ず。何等をか人と爲す。衆生を饒益して而も報いを望まず。一切の衆生に代りて諸の苦惱を受け、所作の功德は盡く以て之を施す。心を衆生に等しくして謙下して礙り無し。

諸の菩薩に於て之を視ること佛の如くす。未だ聞かざる所の經は之を聞きて疑はず。聲聞と興にして相違背せず。彼の供を嫉まず、己が利を高くせず、而も其の中に於いて其の心を調伏す。常に己が過ちを省みて彼れの短を訟へず。恒に一心を以て諸の功德を求む。是を八法と爲す。

經典現代語譯

維摩居士は答へました。「娑婆世界の菩薩は八善法を成就することによつて、さどりの妨げを免れ、淨土に生まれるのです。」

「八善法とは次の八法です。衆生に利益を與へるがその報いをもとめず、一切の衆生に代つて諸々の苦惱を受け、自分が作した功德を盡く衆生に施します。謙つて衆生と同じ心になり、修道の障害を無くします。未熟な諸々の菩薩を蔑視せず、佛陀に接すると同様にします。未だ聞いたことのない經典でも、佛説なる故その教へを疑ひません。自分だけの悟りを求める聲聞を排斥せず、共に佛道を求めます。他が供養を受けるのを嫉まず、己の善による利養を誇らず、心をととのへ悪心を抑へます。常に己の過ちを反省し、他の短所をあげつらいません。常に一心不乱に諸々の功德を求めます。以上を八善法と言ひます。」

「大衆は益を得る」(現代語譯)

香積品の中を二つに項目に分けた、其の第二は、會座に集つた大勢の人々が利益を得たことを説き明します。維摩詰と文殊…是の法を説く時から以下がこれでありませう。

(訓讀文)

維摩詰と文殊…是の法を説く時従り以下、第二の^{だい}二の大段にして大衆の益を得るを明すなり。

經典(大衆は益を得る)

維摩詰ト文殊師利。於テニ大衆ノ中ニ一説クニ是ノ法ヲ一時。百千ノ天人皆發シ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ一。十千ノ菩薩ハ得タリニ無生法忍ヲ一。

經典訓讀文

維摩詰と文殊師利、大衆の中に於て是の法を説く時、百千の天人皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、十千の菩薩は無生法忍を得たり。

經典現代語譯

維摩居士と文殊菩薩とが大勢の人々の前で以上の教へを説き終つた時、百千の諸天や人々は阿耨多羅三藐三菩提心(無上絶對のさとりを求め願ひ、それによつて衆生を教化濟度しようといふ心)發し、十千の菩薩は無生法忍(不生不滅の眞理のさとり)を得た。

第十一 菩薩行章

〔菩薩行章の名稱の由來〕（現代語譯）

此の經典の第十一章は菩薩行章であります。

此の章は、釋迦如來が衆香國の菩薩の爲に、菩薩が學ぶべき善行を説きます。それに因つて此の章の名稱を菩薩行章と名づけます。

（訓讀文）

菩薩行章第十一なり。

此の章は佛、衆香の菩薩の爲に菩薩の行を説く。故に因りて章の目と爲すなり。

〔維摩經の正説について〕（現代語譯）

此の第十一章菩薩行章から以下、見阿閼佛章のなかの衆を擧げて皆見るに訖るまでは、維摩經の正説であつて、その正説の第二として維摩居士は菴羅樹園へ行き、釋迦如來と共に菩薩の種々の妙なる善行を説き明して、維摩居士の方丈の居室に於ける説法を眞實であると證し成立せしめます。何故かと申しますと次の通りであります。此の經典の上述の六章（文殊師利疾章・不思議章・觀衆生章・入不二法門章・香積佛章）の所説は皆信じ難く受行し難い肝要な善行であります。維摩居士の本源の眞實身は不可思議の如來であります。此の世に現はれて衆生を教化する姿は世俗の居士と同じであり、釋迦如來の弟子になつてゐることを示してゐます。

惑ひ多き者たちは維摩居士の姿を見て、恐らく其の所説を悉くは信じないであります。それ故に方丈の居室に於ける説法を終つて菴羅樹園へ行き、釋迦如來の許しを得て、釋迦如來と共に互ひに菩薩の種々の妙なる善行を説き明して、維摩居士の方丈の居室

に於ける説法を眞實であると證し成立せしめ、惑ひ多き者たちをして信ぜしむるのであります。

一説では次のやうに云ひます。―此の維摩經の所説の本體は唯方丈の居室に於ける説法にある。此の菩薩行章より以下は、既に方丈の居室から出た後の説法である。それ故に當然に流通説に入れるべきである、―と。しかしながら此の説は採用しません。

(訓讀文)

此の章從り以下、見阿閼佛國に入りて衆を擧げて皆見るに訖る以來は、正説の中の第二に、菴羅に就きて、佛と共に菩薩の種々の妙行を明して、方丈の説を證成す。何となれば則ち此の上の六章の中の所説は、皆是れ難信難受の要行なり。淨名は本は是れ不可思議なれども、但一化の迹は世俗の居士に同ずるを現じて弟子と爲ることを示す。恐らく惑へる者は形を見て悉くは其の所説を信ぜざらん。所以に方丈の事畢りて、即ち菴羅に就きて印可を極人に求め、更相に佛と共に菩薩の種種の妙行を明して方丈の説を證成し、物をして信を生ぜ令むるなり。一に云はく。此の經の正體は唯方丈の所説に在り。此の章從り以下は、既に方丈を出づ。應に流通説に入るべしと。然るに今は須ひず。

〔菩薩行章の科段分け〕(現代語譯)

菩薩行章の中を大きく分けて六つ項目とします。

第一に、初めから此の瑞應を爲すに訖るまでは、維摩居士と文殊菩薩とが釋迦如來の許に參上しようと思ひ、そこで先づ慶事のするしを菴羅樹園に現出します。

第二に、是に於て維摩詰は文殊に語るから以下は、維摩居士と文殊菩薩とが共に釋迦如來の許に參上し、佛陀を敬ひ拜禮します。

第三に、爾の時に阿難は佛に白して言はくから以下は、如何なる香氣でありませうかと、阿難が釋迦如來に問ふことに因つて、衆生に利益を與へる香飯の力を説き明します。

第四に、阿難は佛に白して言はく。未曾有なりから以下は、阿難の讚嘆に基いて、釋迦如來は諸佛が衆生を教化濟度するには

種々様々のあり方があつて、同一ではないことを廣く説き明します。

第五に、菩薩の此の門に入る者はから以下は、釋迦如來は阿難に對して、衆香國の菩薩の蒙を啓きただします。

第六に、爾の時に衆香世界の菩薩の來れる者はから以下、菩薩行品の終りまでは、衆香國の菩薩は釋迦如來の説法を請ひ、聞きをはつて衆香國へ歸ります。

(訓讀文)

此の章の中に就きて大いに開きて六と爲す。

第一に初め從り此の瑞應を爲すに訖るまでは、將に佛に詣らんと欲して、先づ瑞相を菴羅に現するを明す。

第二に是に於て維摩詰は文殊に語る從り以下、正しく共に佛に詣りて敬を致す。

第三に爾の時に阿難は佛に白して言はく從り以下、阿難の香氣を請問するに因りて、直ちに香飯の能く物を益するの

力を明す。

第四に阿難は佛に白して言はく。未曾有なり從り以下、如來は阿難の嘆に因りて、廣く佛事を作すこと同じからざる

の義を明す。

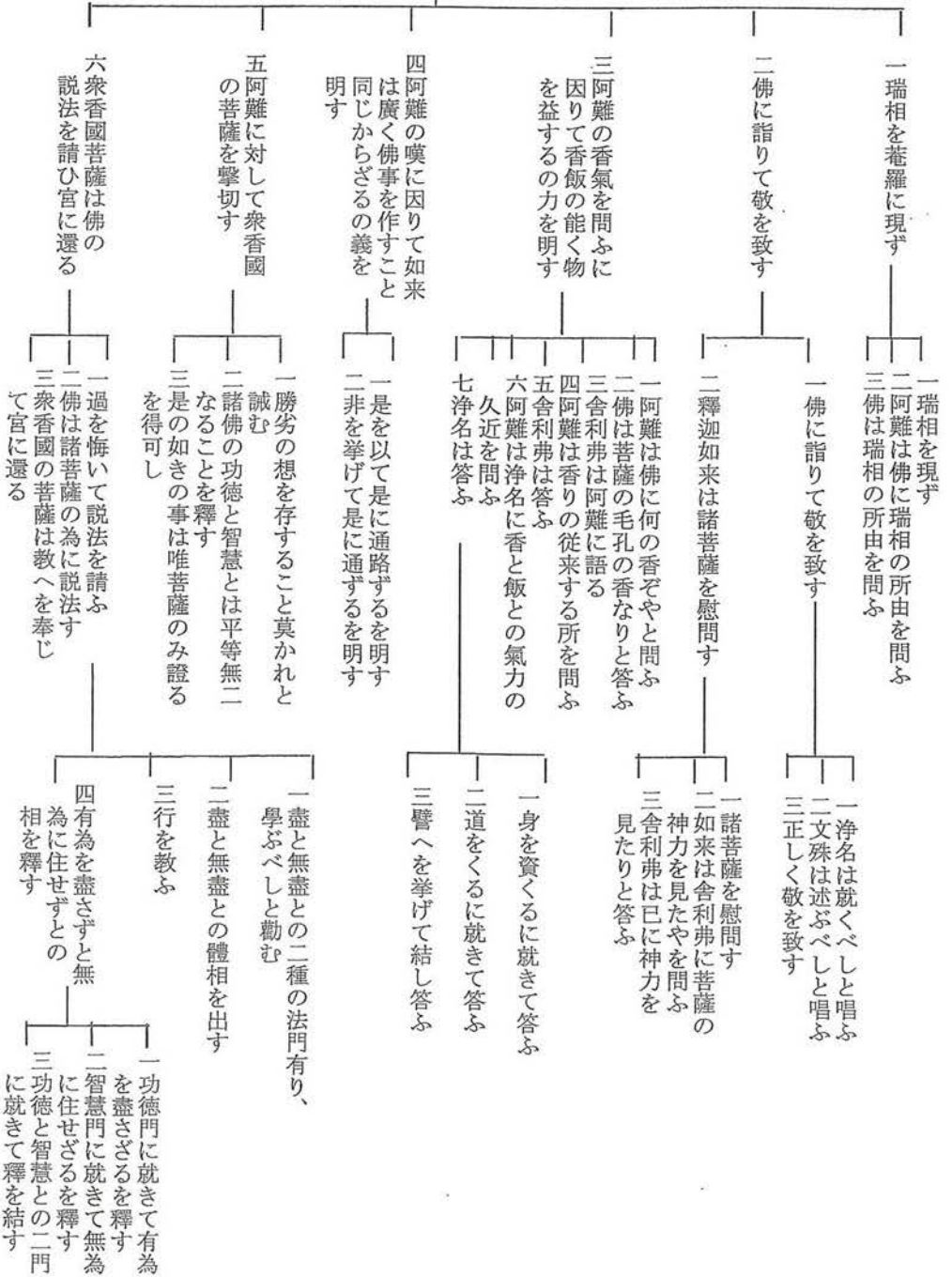
第五に菩薩の此の門に入る者は從り以下、阿難に對して、上方の菩薩を擊切す。

第六に爾の時に衆香世界の菩薩の來れる者は從り以下章の盡くるまで、上方の菩薩は佛の説法を請うて宮に還ること

を明すなり。

菩薩行章

〔瑞相を菴羅に現す〕（現代語譯）



菩薩行草の中の第一は、先づ慶事のしるしを菴羅樹園に現出します。

此の中に三つの項目があります。第一に、慶事のしるしを現出します。第二に、阿難は、釋迦如來に慶事のしるしが現はれた事由を問ひます。第三に、釋迦如來は慶事のしるしの事由を答へます。

經典をこ覽なさい。

(訓讀文)

第一に瑞を現ずる中に就きて自ら三有り。一に瑞を現ず。二に阿難は佛に瑞の所由を問ふ。三に佛答ふ。見つ可し。

經典 (瑞相を菴羅に現ず)

(瑞相を現ず)

是ノ時ニ佛ハ説クニ法ヲ於菴羅樹園ニ。其ノ地忽然ト廣博ノ嚴事アリ。一切ノ衆會皆作ルニ金色ト。

經典訓讀文

是の時に佛は法を菴羅樹園に説く。其の地忽然と廣博の嚴事あり。一切の衆會皆金色と作る。

經典現代語譯

その時、釋迦如來は菴羅樹園に於て説法してをられた。忽然として菴羅樹園に廣大な瑞相が現はれた。説法の會座に集つてゐた一切の大衆が皆金色に輝いたのである。

經典 (阿難は佛に瑞相の所由を問ふ)

阿難ハ佛ニ白シテ言ハク。世尊。以テカニ何ノ因縁ヲ。有ルヤニ此ノ瑞應ニ。是ノ處忽然トシテ廣博ノ嚴事アリ。一切ノ衆會皆作ルヤニ金色ト。

經典訓讀文

阿難は佛に白して言はく。世尊。何の因縁を以てか、此の瑞應有るや。是の處忽然として廣博の嚴事あり。一切の衆會皆金色と作る。

菩薩行草

るや。

經典現代語譯

阿難は釋迦如來に問ひました。「世尊よ、如何なる因縁によつて、此の瑞應は現はれたのでせうか。菴羅樹園は忽然として廣々として美しく飾られ、會座の一切の大衆は何故金色に輝いたのでせうか。」

經典（佛は瑞相の所由を答ふ）

佛ハ告グニ阿難ニ。是レ維摩詰ト文殊師利。與ニ諸ノ大衆ノ一恭敬圍遶セラレテ發シテ。意ヲ欲ス。來ラント。故ニ先ツ爲スニ此ノ瑞應ヲ。

經典訓讀文

佛は阿難に告ぐ。是れ維摩詰と文殊師利、諸の大衆の與に恭敬圍遶せられて意を發して來らんと欲す。故に先づ此の瑞應を爲す。

經典現代語譯

釋迦如來は阿難の問ひに答へて言ひました。「維摩居士と文殊菩薩とは大衆に尊敬され取り圍まれて、此處へ來ようと思ひ定めた。そこで先づ此の瑞相を現はしたのである。」

〔佛に詣りて敬を致す〕（現代語譯）

菩薩行章の中の第二は、維摩居士と文殊菩薩とが大衆を伴つて菴羅樹園の釋迦如來の許に參上し、恭しく禮拜し供養します。その中に亦二つの項目があります。

第一に、釋迦如來の許に參上し、恭しく禮拜し供養します。

第二に、是に於て世尊から以下、釋迦如來は定められた通りに菩薩たちを慰勞します。

（訓讀文）

第二に佛に詣りて敬を致す中に就きて亦二有り。

- 一に佛に詣りて敬を致す。
- 二に是に於て世尊従り以下、如來は法の如く慰問す。

「佛に詣りて敬を致す」(現代語譯)

右の第一の釋迦如來の許に參上し、恭しく禮拜し供養する中に、三つの項目があります。第一に、維摩居士は「釋迦如來の許に參りませう。」と唱導します。第二に、文殊菩薩はそれに贊同します。第三に、正しく釋迦如來を禮拜し、供養します。

皆經典を覽なさい。

(訓讀文)

第一の敬を致す中に就きて三有り。

一に淨名は應に就くべしと唱ふ。

二に文殊は述べ唱ふ。

三に正しく敬を致す。

皆見つ可し

經典 (佛に詣りて敬を致す)

(淨名は就くべしと唱ふ)

於テレ是ニ維摩詰ハ語ルニ文殊師利ニ。可シ下共ニ見エレ佛ニ與ニ諸ノ菩薩一禮事供養ス上。

經典訓讀文

是に於て維摩詰は文殊師利に語る。共に佛に見え諸の菩薩と禮事供養す可し。

經典現代語譯

維摩居士は文殊菩薩に對し、「ご一緒に釋迦如來にお目にかかり、諸々の菩薩と共に禮拜し供養ませう。」と誘ひました。

經典（文殊は述べ唱ふ）

文殊師利ノ言ク。善キ哉。行カン矣。今正シク是レ時ナリ。

經典訓讀文

文殊師利の言はく。善き哉、行かん。今正しく是れ時なり。

經典現代語譯

文殊菩薩は贊同して言ひました。「有難いお言葉、早速参りませう。今こそ正しく參上すべき好機です。」

〔御語釋〕（現代語譯）

今正しく是れ時なりとは、菩薩の衆生教化と、それに感應する衆生の根機とが相稱ふ、その時を言ふのであります。

（訓讀文）

今正しく是れ時なりとは、化と物の機と相稱へるの時を謂ふなり。

經典（正しく敬を致す）

維摩詰。即チ以テニ神力ヲ一持チニ諸ノ大衆竝ニ獅子ノ座ヲ一。置テニ於右ノ掌ニ一往ニ詣シ佛所ニ一。到リ已テ地ニ著レ稽ヲ首シ佛ノ足ヲ一。右ニ遠ルコト七匝シテ。一心ニ合掌シテ在テニ一面ニ一立ツ。其ノ諸ノ菩薩ハ即チ皆避ケテ座ヲ稽ヲ首シ佛ノ足ヲ一。亦遠ルコト七匝シテ。於テニ一面ニ一立ツ。諸ノ大弟子・釋・梵・四天王等モ亦皆避ケテ座ヲ稽ヲ首シ佛ノ足ヲ一。在テニ一面ニ一立ツ。

經典訓讀文

維摩詰、神力を以て諸の大衆並びに獅子の座を持ち、右の掌に置きて佛所に往詣し、到り已りて地に著きて佛の足を稽首し、

右に遶ること七匝して、一心に合掌して一面に在りて立つ。其の諸の菩薩は即ち皆座を避けて佛の足を稽首し、亦遶ること七匝して、一面に於て立つ。諸の大弟子・釋・梵・梵・四天王等も亦皆座を避けて佛の足を稽首し、一面に在りて立つ。

經典現代語訳

維摩居士は神通力を以て、諸々の大衆並びに獅子の座を右の手のひらに載せて釋迦如來の菴羅樹園に參上し、大地にひれ伏し、釋尊の足に額をつけて禮拜し、釋尊の周りを右廻りすること七回、一心に合掌して會座の一隅に立ちました。其の他の諸々の菩薩は座席にはつかず、釋尊の足に額をつけて禮拜し、釋尊の周りを廻ること七回、會座の一隅に立ちました。釋尊の大弟子・帝釋天・梵天王・四天王等の諸々の大衆も亦座席にはつかず、釋尊の足に額をつけて禮拜し、會座の一隅に立ちました。

〔釋迦如來は諸菩薩を慰問す〕(現代語譯)

釋迦如來の許に參上し、禮拜供養する中の第二は、釋迦如來が諸々の菩薩を慰勞します。此の中に亦三つの項目があります。第一に、釋迦如來が慰勞します。第二に、釋迦如來は、菩薩の神通力を見たか否かを舍利弗に問ひます。第三に、舍利弗は、菩薩の神通力を見たか答へます。

これも亦經典をご覧なさい。

(訓讀文)

第二の佛の慰問の中に就きて、亦三有り。

一に慰す。

二に佛は眞子に見るや不やを問ふ。

三に眞子は已に見ると答ふ。

亦見つ可し。

經典（釋迦如來は諸菩薩を慰問す）

（諸菩薩を慰問す）

於テレ是ニ世尊ハ如クレ法ノ慰ヲ問シ諸ノ菩薩ヲ一已テ。各令ムレ復タレ座ニ。即チ皆受ケレ教ヲ。衆ハ坐スルコト已ニ定ル。

經典訓讀文

是に於て世尊は法の如く諸の菩薩を慰問し已りて。各座に復ら令む。即ち皆教へを受け。衆は坐すること已に定まる。

經典現代語譯

そこで釋迦如來は「よく來てくれた」と諸々の菩薩をねぎらひ、夫々の座席に坐らせました。座席については已に教へを受け、皆定まつてをりました。

經典（如來は舍利弗に菩薩の神力を見たやを問ふ）

佛ハ語ラクニ舍利弗ニ。汝ハ見ルヤニ菩薩大士ノ自在神力ノ之所ヲ爲ヲ乎。

經典訓讀文

佛は舍利弗に語らく。汝は菩薩大士の自在神力の所爲を見るや。

經典現代語譯

釋迦如來は舍利弗に問ひました。「維摩居士」の神通力の自由自在なる所爲を、お前は見ましたか。」

經典（舍利弗は已に神力を見ると答ふ）

唯然ナリ、已ニ見ル。

汝ガ意ハ云何ン。

菩薩行章
世尊。我其ノ爲スコトラ觀ルニ其ノ為スコトラ一不レ可ラニ思議ス。非ズニ意ノ所ニ圖ル、非ズニ度ノ所ニ測ル。

經典訓讀文

唯然ゆいしかなり。已すでに見るみ。

汝なんぢが意こころは云何いかん。

世尊せそん。我われ其そのの爲なすことを觀みるに思議しぎす可べからず。意いの圖はかる所ところに非あらず、度どの測はかる所ところに非あらず。

經典現代語譯

「はい仰せの通り、私は神力を見ました。」

「舍利弗、お前はどのやうに思ひましたか。」

「世尊よ、維摩居士さんの神通力の所爲を見るに、私には思議することが出来ません。私の思量の及ぶ所ではなく、私の度量を以て測ることなど出来ません。」

〔阿難の香氣を問ふに因りて香飯かうはんの能く物を益するの力を明す〕（現代語譯）

菩薩行章の第三は、如何なる香氣でありませうかと、阿難が釋迦如來に問ふことに因つて、衆生に利益を與へる香飯の力を説き明します。此の中を七つの項目に分けます。

第一に、阿難は如何なる香氣でありませうかと、釋迦如來に問ひます。

第二に、釋迦如來は「衆香國の菩薩の毛孔けあなの香氣である。」と直ちに答へます。

第三に、舍利弗は「私の毛孔からも亦此の香氣が出ます。」と、阿難に語ります。

第四に、阿難は何れの所から香氣がもたらされたのかを問ひます。

第五に、舍利弗は香氣の由來を答へます。

第六に、阿難は、香氣と香飯の力は何時まで保つのかを、維摩居士に問ひます。

第七に、維摩居士は香飯の力について答へます。

經典をぞ観なさい。

但し第七の香飯の力について答へる中には、三つの項目があります。

第一に、身體を資けることに就いて答へます。

第二に、若し聲聞のから以下は、佛道の修行を資けることに就いて答へます。

第三に、藥有り…如しから以下は、譬へを擧げて答へ、結びの文言とします。

文言をたどり、皆經典をぞ観なさい。

(訓讀文)

第三の阿難の香氣を問ふに因りて、直ちに香飯の能く物を益するの力を明す中に就きて、又開きて七と爲す。

第一に阿難は佛に是れ何の香ぞやと問ふ。

二に佛は直ちに菩薩の毛の香なりと答ふ。

三に身子は阿難に語る。我が毛よりも亦此の香を出すと。

四に阿難は香の從來する所を問ふ。

五に身子は答ふ。

六に阿難は淨名に香と飯との氣力の久近を問ふ。

七に淨名は答ふ。

見つ可し。

但し飯の力を答ふる中に就きて三有り。

第一に身を資くるに就きて答へを爲す。

二に若し聲聞の従り以下、道を資くるに就きて答を作す。

三に藥有り…如し従り以下、譬を擧げて結し答ふ。

文を尋ねて皆見つ可し。

〔阿難は佛に何の香ぞやと問ふ〕（現代語譯）

（第一項と第七項について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。但し第七項には御語釋がある。）

經典（阿難は佛に何の香ぞやと問ふ）

爾ノ時ニ阿難ハ白シテレ佛ニ言ク。世尊。今所ノ嗅グ香ハ自リレ昔未ダレ有ラ。是レ爲スヤニ何ノ香ト一。

經典訓讀文

爾その時ときに阿難あなんは佛ぶつに白もうして言いはく。世尊せそん、今いま嗅かぐ所ところの香かうは昔むかし自より未いまだ有あらず。是これ何なんの香かうと爲なすや。

經典現代語譯

その時阿難は釋迦如來に問うて言ひました。

「世尊よ、今嗅ぐ香氣は、昔から一度も嗅いだことのない好い香りです。此れは何の香氣なのでせうか。」

〔佛は菩薩の毛孔の香なりと答ふ〕（現代語譯）

（科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。）

經典（佛は菩薩の毛孔の香なりと答ふ）

佛ハ告ツニ。阿難ニ一。

是レ彼ノ菩薩ノ毛孔之香ナリ

佛は阿難に告ぐ。

是れ彼の菩薩の毛孔の香なり。

經典現代語譯

釋迦如來は阿難に答へて言ひました。

「此れは衆香國の菩薩の毛孔から發する香氣である。」

〔舍利弗は阿難に語る〕（現代語譯）

（科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。）

經典（舍利弗は阿難に語る）

於レ是ニ舍利弗ハ語テニ阿難ニ一言ク。

我等ガ毛孔モ亦出スニ是ノ香ヲ一。

經典訓讀文

是に於て舍利弗は阿難に語りて言はく。

我等が毛孔も亦是の香を出す。

經典現代語譯

ここに於て舍利弗は阿難に語りかけ、言ひました。

「私たちの毛孔からも亦此の香氣が出てゐますよ。」

〔阿難は香の從來する所を問ふ〕（現代語譯）

(科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

經典 (阿難は香の從來する所を問ふ)

阿難ノ言ク。

此レ所アリヤニ從來スル一。

經典訓讀文

阿難あなんの言いはく。

此これ從來じゅうらいする所ところありや。

經典現代語譯

阿難は問ひました。

「此の香氣は何れの所からもたらされたのでせうか。」

〔舍利弗は答ふ〕 (現代語譯)

(科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

經典 (舍利弗は答ふ)

曰ク。

是レ長者維摩詰。從リニ衆香國一取ルニ佛ノ餘リノ飯ヲ一。於テレ舍ニ食スル者ノ一切ノ毛孔ハ皆香キコト若シレ此ノ。

經典訓讀文

菩薩行章
曰はく。

是れ長者維摩詰、衆香國従り佛の餘りの飯を取る。舎に於て食する者の一切の毛孔は皆香しきこと此の若し。
經典現代語譯

舍利弗は答へて言ひました。

「これは維摩居士さんが衆香國の香積如來のご飯の餘りを頂戴したのです。居士さんの居室でこれを食べた者は皆、一切の毛孔からこのやうな香しい香氣が出るのです。」

〔阿難は淨名に香と飯との氣力の久近を問ふ〕（現代語譯）

（科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。）

經典（阿難は淨名に香と飯との氣力の久近を問ふ）

阿難ハ問フニ維摩詰ニ。是ノ香氣ノ住スルコト當ニ久シカル如一。

維摩詰ノ言ク。

至ルベシニ此ノ飯ノ消スルニ。

曰ク。

此ノ飯ハ久如當ニ消ス。

經典訓讀文

阿難は維摩詰に問ふ。是の香氣の住すること當に久しかるべしや。

維摩詰の言はく。

此の飯の消するに至るべし。

菩薩行章

曰はく。

此の飯は久如當に消すべきや。

經典現代語譯

阿難は維摩詰に問ひました。

「此の香氣は何時ごろまで保つのでせうか。」

維摩居士は答へて言ひました。

「此のご飯が消化するまで保ちますよ。」

阿難はまた問ひました。

「此のご飯が消化するには何時までかかるのでせうか。」

〔淨名は答ふ〕（現代語譯）

（科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。）

經典（身を齎くるに就きて答ふ）

曰ク。

此ノ飯ノ勢力ハ至テニ千七日ニ然ル後ニ乃チ消ス。

經典訓讀文

曰はく。

此の飯の勢力は七日至りて然る後に乃ち消す。

經典現代語譯

維摩居士は答へて言ひました。

「此の飯の勢力は七日間を経て、然る後に消化するのです。」

〔御語釋〕（現代語譯）

七日を経て飯の勢力が消え消化するのは、通常のきまりであります。

（訓讀文）

七日にして勢の消するは飯の常法なり。

〔道を資くるに就きて答ふ〕（現代語譯）

（科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。）

經典（道を資くるに就きて答ふ）

又阿難。若シ請問ノ人ノ未ダレ入ラニ正位ニ食スルニ此飯ヲ一者ハ。得テ入ルニ正位ニ然ル後ニ乃チ消ス。已ニ入テ正位ニ食スルニ此ノ飯ヲ一者ハ。得テニ心解脱ヲ一然ル後ニ乃チ消ス。若シ未ダレ發サニ大乘ノ意ヲ一食スルニ此ノ飯ヲ一者ハ。至テ發スニ意ヲ乃チ消ス。已ニ發シテレ意ヲ食スルニ此ノ飯ヲ一者ハ。得テニ無生忍ヲ一然ル後ニ乃チ消ス。已ニ得テニ無生忍ヲ一食スルニ此ノ飯ヲ一者ハ。至テニ一生補處ニ一然ル後ニ乃チ消ス。

經典訓讀文

「又阿難。若し聲聞の人の未だ正位に入らずして此の飯を食する者は、正位に入るを得て然る後に乃ち消す。已に正位に入つて此の飯を食する者は、心解脱を得て然る後に乃ち消す。若し未だ大乘の意を發さずして此の飯を食する者は、意を發すに至りて乃ち消す。已に意を發して此の飯を食する者は、無生忍を得て然る後に乃ち消す。已に無生忍を得て此の飯を食する者は、一生補處に至りて然る後に乃ち消す。」

章行薩摩

一生補處に至りて然る後に乃ち消す。

又阿難さんよ、聲聞の人でまた正位しやうゐ（四善根の位）に到達してゐないで此のご飯を喰べた者は、正位に到達した後に「ご飯は消化します。既に正位に到達して此のご飯を喰べた者は、心解脱しんげだつ（心が煩惱の束縛から離れる）を得た後に「ご飯は消化します。まだ大乘の佛道を志向してゐないで此のご飯を喰べた者は、大乘を志向した後に「ご飯は消化します。既に大乘の佛道を志向して此のご飯を喰べた者は、無生法忍むしやうほうにん（不生不滅の眞理のさとり）を得た後に「ご飯は消化します。既に無生法忍を得て此のご飯を喰べた者は、一生補處いつしやうふしよ（次の生涯には佛陀となる位）を得た後に「ご飯を消化します。」

〔御語釋〕（現代語譯）

正位しやうゐに入るとは、内凡ないぼん（凡夫ではあるが、さとりに近づいた者。小乗佛教では四善根位を言ふ）であります。心解脱しんげだつ（心が煩惱の束縛から解放たれる）とは、聲聞の最高位の阿羅漢果であります。意いを發おこすに至いたるとは、大乘の佛道を志向してゐる人が内凡ないぼん（大乘佛教では菩薩五十二位のうちの十住・十行・十廻向を言ふ）を得るのであります。無生忍むしやうにん（不生不滅の眞理をさとる）とは、七地の菩薩であります。補處ふしよ（次の生涯には佛處を補ふ、即ち佛陀となる階位）とは、十地の菩薩であります。

（訓讀文）

正位しやうゐに入るとは、内凡ないぼんなり。心解脱しんげだつとは、阿羅漢果なり。意いを發おこすに至いたるとは、大乘の人の内凡ないぼんを得るを明あかす。無生むしやう忍にんとは、七地なり。補處ふしよとは、十地なり。

〔譬へを擧げて結し答ふ〕（現代語譯）

維摩居士が香飯の力について答へる中の第三は、結びの答へであります。即ち譬へを擧げることと、譬へを眞理に合致せしめることとがあります。

經典をご覽なさい。

(訓讀文)

第三に結す。即ち開と合と有り。
見つ可し。

經典(譬を擧げて結し答ふ)

譬へば如シ。有リ。藥名ケテ曰フニ「上味ト」。

其ノ有シ。服スルコト者ハ。身ノ諸ノ毒滅シテ然ル後ニ乃チ消スルガ上。

此ノ飯モ如シ。是ノ。滅ニ除シテ一切ノ諸ノ煩惱ノ毒ヲ。然ル後ニ乃チ消ス。

經典訓讀文

譬へば藥有り名づけて上味と曰ふ。

其の服すること有らん者は、身の諸の毒滅して然る後に乃ち消するが如し。

此の飯も是の如し。一切の諸の煩惱の毒を滅除して然る後に乃ち消す。

經典現代語譯

「譬へば上味(すぐれた味)と名づける薬があります。それを服薬した者は、身體の諸々の毒が消滅した後に、薬の力も消滅するのと同様です。此の香飯も同じです。一切の諸々の煩惱の毒を滅除した後に、香飯は消化し、その力は消滅します。」

〔香に關する太子の御解説一〕(現代語譯)

疑問を提示して問ひます。衆香國の菩薩の毛孔の香氣と、舍利弗の身體の香氣とは、一つの香氣なのでせうか。それとも別の香

氣なのでせうか。若し一つの香氣であるならば、今釋迦如來は如何なる意圖があつて衆香國の菩薩の香氣のみを稱へるのでせうか。若し別々の香氣であるならば、今阿難が嗅いでゐる香氣は誰から發せられてゐるのでせうか。

その疑問を説き明して言ひます。香氣はもとより一つの香氣であります。しかし、今釋迦如來が衆香國の菩薩の香氣のみを稱へるには二つの理由があります。

第一には、衆香國の菩薩の香氣は香飯の本であります。

第二には、舍利弗自らをして己が得た利益を發言せしめ、それに因つて大衆に求道の念を發さしめようと欲したのであります。

(訓讀文)

問うて曰はく。上方の菩薩の毛香と、眞子が身香とは、皆是れ一香なりや、異なりや。若し是れ一ならば、今佛は何の意ありてか唯上方の菩薩のみを稱へるや。若し異ならば、今阿難の聞く所は是れ誰の香なりや。釋して曰はく。香は即ち故より是れ一香なり。然るに今佛の唯上方の菩薩のみを稱へるには、二有り。

一には上方の菩薩は是れ香飯の本なり。

二には眞子をして自ら己が利を顯はさしめ、因りて大衆をして發心せしめんと欲す。

〔香に關する太子の御解説二〕(現代語譯)

又疑問を提示して問ひます。衆香國の菩薩たちが維摩居士の許に訪れようとしたその時に、香積如來は菩薩たちに三つの戒めを教示しました。第一は汝の身體の妙なる香氣を收め藏しなさい。第二は汝が本來持つてゐる妙なる姿形を捨て去りなさい。第三は娑婆世界の人々を賤しみ蔑む心を懷いてはならぬ、この三つであります。香積如來が戒めたのは如何なる香氣なのでせうか。もし衆香國の菩薩が今放つてゐる毛孔の香氣であるならば、香積如來の「香氣を收め藏しなさい」といふ戒めに、衆香の菩薩は既に違背してゐるではありませんか。

その疑問を釋き明すについて二つの解釋があります。

一説では次のやうに云ひます。―香積如來が「藏しなさい」と戒めたのは煩惱を生ずる香氣である。佛道に入らしむる香氣ではない。それ故に衆香の菩薩は、香積如來の教へに隨つて煩惱を生ずる香氣を收め藏し、放たないのである―と。しかしながら香積

如來は戒めの教示に當つて、ただ直ちに「汝の身體の妙なる香氣を收め藏しなさい」とだけ言つて、二種類の香氣についての言及はありません。まして優れてゐる衆香國の菩薩に、どうして煩惱を生ずる香氣などありませうか。それ故にこの解釋は採用しません。

他の一説では次のやうに解釋してゐます。―香氣は佛道に入らしむるただ一つの香氣である。但し香氣を放つのと收め藏すには、必ず適切な時がある。何故ならば、大衆が香飯を喰べない前に菩薩が妙なる身體の香氣を放つたならば、大衆は恐らく執著心を生じ、或いは非道を爲すこともありませう。それ故に香氣を收め藏すやうに戒めるのである。大衆が既に香飯を喰べた今は、各々が自己の利益を見て皆佛道に入らうとの心を發す。その適切な時に隨つて菩薩は妙なる香氣をあまく放ち、共に衆生教化に勵むのである。これも亦香積如來の本意である。どうして香積如來の戒めに違背してゐると言へようか、―と。

(訓讀文)

又問ふ。衆香の菩薩の將に來らんとするの時に、其の香積佛に已に三の戒め有り。一には汝が身香を攝めよ。二には汝が本形を捨てよ。三には輕淺を懷くこと莫かれと。其の戒むる所は何の香なりや。若し故より是れ今の毛孔ならば、則ち衆香の菩薩は既に其の佛の戒むる所に違するなり。釋するに二有り。

一に云はく。戒むる所は、煩惱を生ずるの香を謂ふ。今道に入るの香には非ざるなり。所以に煩惱を生ずるの香をば教へに隨つて攝めて放たずと。然るに佛の戒むる時に當りて、但直ちに汝の身香を攝めよと言ひて、二の香を別たす。且つ上方の菩薩に何ぞ方に煩惱を生ずるの香有るべきや。所以に此の釋を用ひず。

一に解して言はく。香は即ち故より是れ道に入るの一香なり。但し其の放つと攝むるとは必ず宜しき時有り。何となれば、大衆の未だ香飯を食せざるの先に此の身香を放たば、恐らくは物は著を生じて或いは非道を起さん。故に戒めて之を攝めしむ。今は即ち大衆は既に香飯を食し、各自利を見て皆道心を發す。故に宜しきに隨つて放ち影はし佛事を共にす。此れも亦皆是れ其の佛の本意なり。豈に其の佛の戒むる所に違せんやと。

〔阿難の嘆に因りて如來は廣く佛事を作すこと同じからざるの義を明す〕（現代語譯）

菩薩行章の中の第四は、阿難の讚嘆に基いて、釋迦如來は諸佛が衆生を教化濟度するには種々様々のあり方があつて、同一ではないことを廣く説き明します。阿難は佛に白して言はくから以下がこれであります。

此の中にも亦二つの項目があります。第一に、先づ正しい道を實踐することによつて正しい教へを弘めることを説き明します。第二に、阿難よ、此の四魔の：有りから以下、非道（諸々の煩惱）を擧げて正しい教へに通達することを以て、上述の佛道品に於て非道の中にもむいて佛道に通達する旨を正しく證した、そのことを説き明します。此の二つの項目には夫々結びの文言があります。

經典をぞ覽なさい。

善行は十三の事項が擧げてあります。他の經典解説書にはその類似の事項についての解説がありますが、今は記載致しません。

（訓讀文）

阿難は佛に白して言はく從り以下、章の中の第四に阿難の嘆に因りて、如來は廣く佛事を作すこと同じからずと明すことを明す。中に就きて亦二有り。

一に先づ是を以て是に通ずるを明す。

二に阿難よ、此の四魔の：有り從り以下、非を擧げて是に通ずるを以て、正しく上の佛道章に非を行じて佛道に通達するの旨を證することを明す。二には皆結有り。

見つ可し。

善を擧ぐる中に即ち十三の事有り。其の縁類は餘疏に出づ。今は記せざるなり。

經典（阿難の嘆に因りて如來は廣く佛事を作すこと同じからざるの義を明す）

未曾有ナリ也。世尊如クレ此ノ香飯ハ能ク作スニ佛事ヲ一。

經典訓讀文

阿難は佛に白して言はく。

未曾有ナリ。世尊、此の如く香飯は能く佛事を作す。

經典現代語譯

阿難は釋迦如來に申しあげました。

「世尊よ、衆香の香飯が此のやうに佛道を實踐するとは、未曾有でございます。」

經典（是を以て是に通ずるを明す）

佛ノ言ク。

如クレ是ノ如シレ是ノ。阿難ヨ。或ハ有リ下佛土ノ以テニ佛ノ光明ヲ一而作ス中佛事ヲ上。有リ下以テニ諸ノ菩薩ヲ一而作ス中佛事ヲ上。有リ下以テニ佛ノ所化ノ人ヲ一而作ス中佛事ヲ上。有リ下以テニ菩提樹ヲ一而作ス中佛事ヲ上。有リ下以テニ佛ノ衣服・臥具ヲ一而作ス中佛事ヲ上。有リ下以テニ飯食ヲ一而作ス中佛事ヲ上。有リ下以テニ園林臺觀ヲ一而作ス中佛事ヲ上。有リ下以テニ三十二相・八十隨形好ヲ一而作ス中佛事ヲ上。有リ下以テニ佛身ヲ一而作ス中佛事ヲ上。有リ下以テニ虚空ヲ一而作ス中佛事ヲ上。衆生ハ應ニ下以テニ此ノ縁ヲ一得ルコトヲニ律行ニ一。有リ下以テニ夢・幻・影・響・鏡中ノ像・水中ノ月・熱時ノ焰。如キレ是等ノ喩ヲ一而作ス中佛事ヲ上。

有リ下以テニ音聲・語言・文字ヲ一而作ス中佛事ヲ上。或ハ有リ三清淨ノ佛土ノ寂寞ニシテ。無言・無説・無示・無識・無作・無爲ニシテ而モ作スニ佛事ヲ一。

經典訓讀文

佛の言はく。

菩薩行章 是の如く是の如し、阿難よ。或は佛土の佛の光明を以て佛事を作す有り。諸の菩薩を以て佛事を作す有り。佛の所化の人を以て

佛事を作す有り。菩提樹を以て佛事を作す有り。佛の衣服・臥具を以て佛事を作す有り。飯食を以て佛事を作す有り。園林臺觀を以て佛事を作す有り。三十二相・八十隨形好を以て佛事を作す有り。佛身を以て佛事を作す有り。虚空を以て佛事を作す有り。衆生は應に此の縁を以て律行に入ることを得べし。夢・幻・影・響・鏡中の像・水中の月・熱時の焰。是の如き等の喩へを以て佛事を作す有り。音聲・語言・文字を以て佛事を作す有り。或は清淨の佛土の寂寞にして、無言・無説・無示・無識・無作・無爲にして而も佛事を作す有り。

經典現代語譯

釋迦如來はお説きになられました。

「阿難よ、佛道の實踐、即ち衆生教化は次の通り種々様々である。或る佛國土に於ては佛陀の光明を以て佛道を實踐を爲す。諸々の菩薩を以て佛道を實踐するものもある。佛陀の神通力による幻化の人を以て佛道を實踐するものもある。菩提樹（釋尊がこの樹の下でさとりを開いた）を以て佛道を實踐するものもある。佛陀の衣服や寢具を以て佛道を實踐するものもある。飲食物を以て佛道を實踐するものもある。高壹の園林を以て佛道を實踐するものもある。三十二種の相好や八十種の優れた特徴を以て佛道を實踐するものもある。佛身を以て實踐するものもある。虚空を以て佛道を實踐するものもある。何の礙げも無いから衆生は戒律になつた行ができる。夢・幻・影・響・鏡にうつる像・水面にうつる月・熱時の焰等の喩へを以て佛道を實踐するものもある。音聲・言語・文字を以て佛道を實踐するものもある。或る靜まりかへつた清淨な佛國土では、無言・無説法・無教示・無識（認識を超越する）・無作（作爲が無い）・無爲（生滅變化を超越する）であつて而も佛道の實踐を爲す。」

經典（結びの文言）

如クレ是ノ阿難ヨ。諸佛ノ威儀・進止。諸ノ所ハニ施爲スル一無シレ非ルニ佛事ニ一。

經典訓讀文

菩薩行章

是の如く阿難よ。諸佛の威儀・進止、諸の施爲する所は佛事に非ざる無し。

經典現代語譯

「阿難よ、以上述べた通りである。諸佛の立居ふるまひや行動、諸々の爲し施す所は、悉くが佛道の實踐である。」

經典（非を擧げて是に通ず）

阿難ヨ。有リニ此ニ四魔ノ八萬四千ノ諸ノ煩惱ノ門一。而シテ諸ノ衆生ハ爲ニ之ガ疲勞ス。諸佛ハ即チ以テニ此ノ法ヲ一而作スニ佛事ヲ一。

經典訓讀文

阿難よ。此に四魔の八萬四千の諸の煩惱の門有り。而して諸の衆生は之が爲に疲勞す。諸佛は即ち此の法を以て佛事を作す。

經典現代語譯

「阿難よ。四魔（煩惱魔・五陰魔・死魔・他化自在天魔）による八萬四千の諸々の煩惱がある。衆生はこれに苦しみ疲勞する。諸佛は煩惱ある衆生の中にもむき衆生を教化濟度し、佛道を實踐するのである。」

經典（結びの文言）

是ヲ名ツクレ入ルトニ一切諸佛ノ法門ニ一。

經典訓讀文

是を一切諸佛の法門に入ると名づく。

經典現代語譯

「右の實踐を、一切諸佛の眞理の教へをさとる、と稱するのである。」

〔阿難に對して上方の菩薩を擊切すの科段分け〕（現代語譯）

菩薩行章の中の第五は、釋迦如來は阿難に對して衆香國の菩薩の蒙を啓きただします。菩薩の此の門に入る者はから以下がこれ

であります。

此の中に三つの項目があります。

(訓讀文)

菩薩の此の門に入る者は従り以下、章の中の第五に、阿難に對して上方の菩薩を擊切することを明す。中に就きて三有り。

〔勝劣の想を存すること莫かれと誠む〕(現代語譯)

釋迦如來が阿難に對して、衆香國の菩薩の蒙を啓きただす中の第一に、一切の佛國土を見るに際し、〃勝れてゐる〃、〃劣つてゐる〃との想ひを抱いてはならぬと誠めます。菩薩にして諸佛の眞理の教へをさとる者は、清淨な佛國土を見ても歡喜せず、さりとして不淨な佛國土を見ても憂ひと爲しません。ただ諸佛の功德を讚嘆するのであります。諸佛の功德は絶對平等で差別對立はありません。ただ衆生を教化濟度せんが爲の故に、方便を以て佛國土に淨と穢との不同を現するのであります。「汝等、衆香國の菩薩も佛國土を見て、あそこは勝れてゐる、此は劣つてゐる、などの想ひを抱いてはなりません。」と説き明します。

(訓讀文)

第一に先づ上方の菩薩に勝劣の想を存すること莫かれと誠む。菩薩の此の門に入る者は、淨を見るも喜ばず、穢を見るも憂へず、但諸佛に於て未曾有なりと嘆ず。諸佛は平等無二なり。但物を化せんが爲の故に土を現すること同じからず。汝等上方の菩薩も亦應に彼は勝なり此は劣なりの想を存せざるべしと明すなり。

經典(勝劣の想を存すること莫かれと誠む)

行菩薩ノ入ルニ此門ニ一者ハ。若シ見ルモニ一切ノ淨好ノ佛土ヲ一。不ニ以テ爲サロ喜ト。不レ貪ラ不レ高ブラ。若シ見ルモニ一切ノ不淨ノ佛土ヲ一。不ニ以テ爲サロ憂ト。不レ礙トセ不レ没セ。

但於テニ諸佛ニ一 生ジニ清淨ノ心ヲ一。歡喜シ恭敬ス未會有ナリト一也。諸佛・如來ハ功德平等ナレドモ爲ノニ教ニ化センガ衆生ヲ一故ニ。而モ現ズルコトニ佛土ヲ一不レ同カラ。

經典訓讀文

菩薩の此の門に入る者は、若し一切の淨好の佛土を見るも、以て喜びと爲さず、貪らず高ぶらず。若し一切の不淨の佛土を見るも、憂ひと爲さず、礙げとせず没せず。

但諸佛に於て清淨の心を生じ、未曾有なりと歡喜し恭敬す。諸佛・如來は功德平等なれども衆生を教化せんが爲の故に、而も佛土を現すること同じからず。

經典現代語譯

「菩薩にして諸佛の眞理の教へをさとる者は、一切の清淨な佛國土を見ても、歡喜の心は起さず、それに貪り執著することもなく、高慢な心も起さない。一切の不淨な佛國土を見ても、憂ひ心配することなく、不淨に礙げられることもなく、その中に没入することもない。ただ諸佛の功德によつて清淨心を起し、未曾有であると歡喜し、諸佛を恭敬する。諸佛や如來の功德は絶對平等であるけれども、衆生を教化濟度せんが爲の故に、方便を以て淨や穢の佛國土を現するのである。」

〔諸佛の功德と智慧とは平等無二なることを釋す〕（現代語譯）

釋迦如來が阿難に對して、衆香國の菩薩の蒙を啓きただす中の第二に、阿難に對して大地と虚空との二つの譬へを擧げ、諸佛の功德と智慧とは絶對平等で差別對立の無いことを釋き明します。阿難、汝見よから以下がこれでありませう。

（訓讀文）

第二に阿難。汝見よ從り以下、阿難に對して地と空との二の譬へを擧げて、諸佛の功德と智慧とは平等無二なることを釋す。

一經典（諸佛の功德と智慧とは平等無二なることを釋す）

阿難。汝見^ヨ。諸佛ノ國土ハ一。地ニハ有レドモニ若干一。而モ虚空ニハ無キニ若干一也。如クレ是ノ見ルノミニ諸佛ノ色身ニ有リトニ若干一耳。其ノ無礙ノ慧ハ無キニ若干一也。阿難。諸佛ノ色身ノ威相・種性。戒・定・智慧・解脫・解脫知見。力・無所畏・不共ノ之法。大慈・大悲・威儀ノ所行。及ビ其ノ壽命・說法ハ。教化成^コ就シ衆生ヲ一。淨メニ佛國土ヲ一。具スルコトニ諸ノ佛法ヲ一悉ク皆平等ナリ。是ノ故ニ名ケテ爲シニ三藐三佛陀ト一。名ケテ爲シニ多陀阿伽度ト一。名ケテ爲スニ佛陀ト一。阿難。若シ我廣ク説カバニ此ノ三句ノ義ヲ一。汝以テスルモニ劫壽ヲ一不能ハニ盡ク受ルコト一。正使三千世界ノ滿ツルニ中ニ衆生。皆如クニニ阿難ノ一多聞第一ニシテ得タルニ念總持ヲ一。此ノ諸ノ人等。以テスルモニ劫ノ之壽ヲ一亦不レ能ハレ受ルコト。如シレ是ノ阿難。諸佛ノ阿耨多羅三藐三菩提ハ無シレ有ルコトニ限量一。智慧ト辨才トハ不可思議ナリ。

經典訓讀文

阿難、汝見よ。諸佛の國土は、地には若干有れども虚空には若干無きなり。是の如く諸佛の色身に若干有りと見るのみ。其の無礙の慧は若干無きなり。阿難。諸佛の色身の威相・種性。戒・定・智慧・解脫・解脫知見。力・無所畏・不共の法。大慈・大悲・威儀の所行、及び其の壽命・說法は。衆生を教化成就し、佛國土を淨め、諸の佛法を具すること悉く皆平等なり。是の故に名づけて三藐三佛陀と爲し、名づけて多陀阿伽度と爲し、名づけて佛陀と爲す。阿難。若し我廣く此の三句の義を説かば、汝劫壽を以てするも盡く受くること能はず。正使三千世界の中に滿つる衆生、皆阿難の如くに多聞第一にして念總持を得たる、此の諸の人等、劫の壽を以てするも亦受くること能はず。是の如し阿難。諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は限量有ること無し。智慧と辨才とは不可思議なり。

經典現代語譯

「阿難よ、よく見なさい。諸佛の佛國土は、その大地の上には種々様々のものが存在するが虚空には何も無い。これと同様に、諸佛の肉身に種々な特徴があるのは、たださう見えるだけである。諸佛の自在の智慧は全てに對して平等にはたらく。阿難よ。

諸佛の肉身の威嚴ある相・すぐれた素質、戒の保持・禪定による心の統一・智慧・解脫・解脫の自覺、十力・畏れ無き確信・佛のみに存する特質、大慈悲心・大悲心・日常の爲す所、及び諸佛の無量なる壽命・說法は、衆生を教化濟度し、佛國土を淨め、諸々

のすぐれた徳を具する、それらは皆悉く平等である。この故に諸佛を三藐三佛陀さんみやくさんぶつた（正等覺者）と稱し、多陀阿伽度ただあかど（如來）と稱し、佛陀ぶつた（覺者）と稱する。阿難よ。私が此の三句の意義を詳しく説かうとすれば、劫といふ無限の時間をかけて説いても、汝はその意義を悉く知り盡すことはできない。三千世界の大勢の中の衆生にして阿難の如く多聞第一であつて、すぐれた記憶力をもつ人たちが假にあつたとしても、劫といふ無限の時間をかけて説いても、亦知り盡すことはできない。阿難よ、此の通りである。諸佛の阿耨多羅三藐三菩提たらさんみやくさんぼだい（無上絶對のさとり）は無限、無量である。諸佛の智慧と辨才とは思議することはできない。」

〔是の如きの事は唯菩薩のみ證るを得可し〕（現代語譯）

釋迦如來が阿難に對して、衆香國の菩薩の蒙を啓きただす中の第二に、阿難が「お説きになられた事は私どもの境地には及びもつきません。」と答へることによつて、此の事は唯菩薩のみ證ることができると釋迦如來は説き明します。阿難は佛に白してから以下がこれでありませう。

これはまた上述の佛道品に於て迦葉が「二乗の分際を超えてゐて、腐つた種子の如く、私たちには如來のさとりに到達する素質が無い。」と自ら慨嘆して言ふのを、證し成立せしめます。

（訓讀文）

第三に阿難は佛に白して従り以下、阿難の我が境界に非ずと答ふるに因りて、仍ち是の如きの事は唯菩薩のみ乃ち證るを得可しと明すなり。此は是れ亦上の佛道章に迦葉は自ら分を絶せりと慨き、如來の道に於て猶敗種の如しとの言を證成するなり。

經典（是の如きの事は唯菩薩のみ證るを得可し）

阿難ハ白シテ佛ニ言ク。

菩薩行章
我從リ今已往不取テ自ライ謂テ以テ爲サニ多聞ト一。

佛ハ告グニ阿難ニ一。

勿レ起スコトニ退意ヲ一。所以ハ者何シ。

我。説ク汝ハ於テ聲聞ノ中ニ爲リトニ最モ多聞一。非ズレ謂フニハ菩薩ヲ一。

且ク止メヨ。阿難。

其レ有智ノ者ハ不レ應ニ限ニ度既諸ノ菩薩ヲ一也。

一切ノ海淵ハ尚可シニ測量ス一。

菩薩ノ禪定・智慧・總持・辨才・一切ノ功德ハ不レ可ラレ量ル也。

阿難。汝等ハ捨テ置ケ菩薩ノ所行ヲ一。

是ノ維摩詰ノ一時ニ所ノ現ズル神通ノ力ハ。一切ノ聲聞・辟支佛ノ於テニ

百千劫ニ一盡シテ。カラ變化ストモ所ナレ。不レ能ハレ作スコト。

經典訓讀文

阿難ハ佛に白して言はく。

我今從り已往敢へて自ら謂ひて以て多聞と爲さず。

佛は阿難に告ぐ。

退意を起すこと勿れ。所以は何ん。

我、汝は聲聞の中に於て最も多聞爲りと説く。菩薩を謂ふには非ず。

且く止めよ。阿難。其れ有智の者は應に諸の菩薩を限度すべからず。一切の海淵は尚測量す可し。

菩薩の禪定・智慧・總持・辨才。一切の功德は量る可からざるなり。阿難。汝等は菩薩の所行を捨て置け。是の維摩詰の一時に

現する所の神通の力は、一切の聲聞・辟支佛の百千劫に於て力を盡して變化すとも作すこと能はざる所なり。

阿難は釋迦如來に申しあげました。

「私は今後、多聞の第一人者であるとは自らは決して申しません。」
釋迦如來は阿難に諭し告げました。

「しりごみした考へを起してはならないよ。何故ならば私が、汝は多聞第一であると言いたのは聲聞の人々の中に於てであつて、菩薩の中に於てではない。しりごみは止めなさい。

阿難よ。限りある智慧を以ても諸々の菩薩の功德の極みを量らうとしてはならない。全ての海の深さは測量できるが、菩薩の禪定による心の統一・智慧・總持（善を保持し、惡を起らしめない）・辨才・一切の功德の偉大さを量ることはできない。阿難よ。汝たちは菩薩の所行については關心を捨てなさい。維摩居士が一時に現出する神通力は、一切の聲聞や辟支佛が百千劫といふ無限の期間に於て、力を盡して神通力を發揮しても及ぶ所ではない。」

〔衆香國の菩薩は佛の説法を請ひ宮に還るの科段分け〕（現代語譯）

菩薩行章の中の第六は、衆香國の菩薩が釋迦如來に説法を請ひ、聞きをはつて衆香國に歸ります。爾の時に衆香世界の菩薩の來れる者はから以下、菩薩行品の終りまでがこれでありす。此の中を三つの項目に分けます。

第一に、初めから當に如來を念ずべしまでは、衆香國の菩薩が娑婆世界を見て、劣つてゐる佛國土だとの想ひを懷いたことを悔い、釋迦如來に説法を請ひます。

第二に、佛は諸々の菩薩に告ぐから以下、釋迦如來は衆香國の菩薩の爲に説法します。

第三に、爾の時に彼の諸の菩薩から以下、衆香國の菩薩は釋迦如來の教へを奉持して衆香國へ歸ります。

（訓讀文）

爾の時に衆香世界の菩薩の來れる者は從り以下、章を訖るまで、第六に衆香の菩薩の法を請ひ宮に還るを明す。中に就きて又開きて三と爲す。

第一に當に如來を念ずべしに訖るまでは、過を悔いて法を請ふを明す。

第二に佛は諸々の菩薩に告ぐ従り以下、佛は爲に法を説くを明す。

第三に爾の時に彼の諸の菩薩従り以下、衆香の菩薩の教へを奉じて宮に還ることを明す。

〔過を悔いて説法を請ふ〕（現代語譯）

（衆香國の菩薩が釋迦如來に説法を請ひ、聞きをはつて衆香國へは歸る項目の中の第一は、娑婆世界を見て劣つてゐると蔑む想ひを懷いたことを悔い、釋迦如來に説法を請ひます。）

衆香國の菩薩が過失を悔いるのであれば、香積如來の三つの誡め（妙香を收めかくしなさい。妙なる姿形を現はしてはならぬ。娑婆世界を見て劣つてゐると蔑む心を懷いてはならぬ。）の全てについて悔いるべきでありませう。しかるに何故娑婆世界が劣つてゐると蔑む想ひを懷いた過失のみを悔いるのであるか、と申しますと、妙香を收めかくすこと、妙なる姿形を現はさないこととは、香積如來の誡めに隨つて過失はありませんでした。それ故に、ただ劣つてゐると蔑む想ひを懷いた過失のみを悔います。且つまた上述の釋迦如來が衆香の菩薩の蒙を啓きただす中に於て、ただ、清淨なる佛國土のみを舉げて蒙を啓きただしました。それ故に過失もあり、無過失でもあつたとは言ふものの、釋迦如來の淨と不淨とのお言葉に隨つて、不淨を見て劣つてゐると蔑む想ひを懷いた過失のみを悔います。

（訓讀文）

然るに失ありて悔ゆとならば、三の誡めを皆亦應に悔ゆべし。何ぞ但此の劣想を生ずるの過のみを悔ゆとならば、香と形の美しきとは誠めに隨ひて失なし。故に劣想のみを悔ゆるなり。且つ上に釋迦の擊切する中に但勝劣のみを擧げて切と爲す。故に失と不失とありと雖も勅に隨ひて過を悔ゆるなり。

爾ノ時ニ衆香世界ノ菩薩ノ來レル者ハ。合掌シテ白シテ佛ニ言ク。

世尊。我等初テ見テ此ノ土ヲ一^ニ生ズニ下劣ノ想ヲ一。今自ラ悔イ責シテ捨テ離是ノ心ヲ一。所以ハ者何ン。諸佛ノ方便ハ不可思議ナリ。爲ノ^レ度センガニ衆生ヲ一故ニ。隨テニ其所^ニ應ニ現ズニ佛國ノ一異ナリヲ。唯然リ。世尊願クハ賜ヘニ少法ヲ一。

還テニ於彼ノ土ニ一當ニ念ズニ如來ヲ一。

經典訓讀文

爾^ノ時^ニ衆香世界ノ菩薩ノ來れる者は、合掌して佛に白して言はく。

世尊。我等初めて此の土を見て下劣の想ひを生ず。今自ら悔責して是の心を捨離す。所以は何ん。諸佛の方便は不可思議なり。衆生を度せんが爲の故に、其の所應に隨つて佛國の異なりを現す。唯然り。世尊願はくは少法を賜へ。彼の土に還りて當に如來を念ずべし。

經典現代語譯

その時、娑婆世界を訪れた衆香國の菩薩たちは、合掌して釋迦如來に申しあげました。

「世尊よ。私どもは初めて此の娑婆世界を見て、劣つてゐると蔑む想ひを懷きました。今は後悔し自らを責め、其の想ひは捨て去りました。諸佛の衆生教化の方便は不可思議であります。諸佛は衆生を教化濟度せんが爲に、種々異なる衆生に適應した佛國土を現出されます。此の娑婆世界は衆生教化の爲、敢へて穢土として現出されたのだと知つたからであります。世尊よ。私共に少しでも説法していただけませんでせうか。衆香國に歸つて釋迦如來の功德を念じたいと思ひます。」

「佛は諸菩薩の爲に説法すの科段分け」(現代語譯)

衆香國の菩薩が釋迦如來に説法を請ひ、聞きをはつて衆香國へ歸る項目の中の第二は、釋迦如來は衆香の菩薩たちの爲に佛法を説きます。佛は諸の菩薩に告ぐから以下がこれであります。此の中の四つの項目があります。

第一に、盡(消滅する。捨て去る)と無盡との二種の教法があり、「汝たちは此を學びなさい。」と直ちに勧めます。有爲(生滅變化

するこの現實世界は種々の差別の相を有しますので盡と名づけれます。無爲（生滅變化を超えた常住絶對の理想世界）は差別の相がありませんから無盡と名づけれます。

第二に、何をか謂ひてから以下、盡と無盡との特質を示します。

第三に、菩薩の如きはから以下、菩薩の修行のあり方を教へます。

第四に、何をか有爲を盡さずと謂ふやから以下、有爲を盡さず（迷ひある現實世界を捨て去らない）と、無爲に住せず（生滅變化を超えた理想世界に安住しない）との善行のありさまを釋き明します。

（訓讀文）

佛は諸の菩薩に告ぐ從り以下、第二に佛は爲に説法す。中に就きて四有り。

第一に直ちに盡と無盡との二種の法門有り、汝等當に學ぶべしと勸む。有爲は是れ相なるが故に盡と名づく。無爲は無相なるが故に無盡と名づく。

第二に何をか謂ひて從り以下、有盡と無盡との體相を出す。

第三に菩薩の如きは從り以下、行を教ふ。

第四に何をか有爲を盡さずと謂ふや從り以下、盡さずと住せずとの相を釋す。

〔盡と無盡との二種の法門有り、學ぶべしと勸む〕（現代語譯）

〔盡と無盡との體相を出す〕（現代語譯）

〔行を教ふ〕（現代語譯）

（この三項目について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。）

〔御語釈〕

第一、第二、第三項は經典を御覽なさい。

(訓讀文)

前の三は見つ可し。

經典(盡と無盡との二種の法門有り、學ぶべしと勸む)

佛ハ告テニ諸ノ菩薩ニ。有リニ盡ト無盡トノ解脱ノ法門一。汝等當ニ學フ。

經典訓讀文

佛は諸の菩薩に告ぐ。盡と無盡との解脱の法門有り。汝等當に學ぶべし。

經典現代語譯

釋迦如來は衆香の菩薩たちにお説きになつた。

「盡(消滅する。捨て去る。)と無盡との二種の解脱の教法がある。汝たちはまさにこれを學ぶべきである。」

經典(盡と無盡との體相を出す)

何ヲカ謂テ爲スヤレ盡ト。謂ク有爲ノ法ナリ。何ヲカ謂フヤニ無盡ト一。謂ク無爲ノ法ナリ。

經典訓讀文

何をか謂ひて盡と爲すや。謂はく有爲の法なり。何をか無盡と謂ふや。謂はく無爲の法なり。

經典現代語譯

「何をか盡といふのであるか。有爲(生滅變化し迷ひある現實世界)に於ける教法である。何を無盡と言ふのであるか。無爲(生滅變化を超えた常住絶對の世界)に於ける教法である。」

經典(行を教ふ)

如キハニ菩薩ノ一者。不レ盡サニ有爲ヲ一。不レ住セニ無爲ニ一。

經典訓讀文

菩薩の如きは、有爲を盡さず。無爲に住せず。

經典現代語譯

「菩薩たる者は、生滅變化し迷ひある現實世界（有爲）を捨て去つてはならぬ。生滅變化を超えた常住絶對の理想世界（無爲）に住せずしてはならぬ。」

〔有爲を盡さずと無爲に住せずとの相を釋すの科段分け〕（現代語譯）

釋迦如來が衆香の菩薩たちの爲に佛法を説く中の第四は、有爲を盡さず（迷ひある現實世界を捨て去つてはならぬ）と、無爲に住せず（現實世界を超脱した理想世界に住せずとを釋き明します。此の中に三つの項目があります。

第一に、功德の教法について、迷ひある此の現實世界を捨て去つてはならないことを釋き明します。

第二に、智慧の教法について、現實世界を超脱した理想世界に住せずとを釋き明します。

（第三に、功德と智慧との二つの教法を並べて釋き明し、結びの文言とします。）

（訓讀文）

但し第四の有爲を盡さずと住せずとを釋する中に就きて三有り。

第一に功德門に就きて有爲を盡さざるを釋す。

第二に智慧門に就きて無爲に住せずとを釋す。

（第三に並べて功德と智慧との二門に就きて釋を結す）

〔功德と智慧、菩薩の空觀と有の善行、方丈の説を證す、について太子の御解説〕（現代語譯）

しかしながら功德と智慧との教法を何故別々に釋き明すのかと申しますと、功德とは萬全行のすべてに通ずる名稱であり、智慧とは眞理を照し見るはたらきに對する深妙な名稱であります。菩薩は迷ひあるこの現實世界に於て、對象たる衆生の實相を照し見て、是と非とを識別します。これを衆生を導くための方便と名づけ、これは功德の教法に屬する善行であります。

しかるに迷ひある現實世界を捨て去つてはならぬとの教へ、現實世界を超越した理想世界に安住してはならぬとの教へ、この二つを釋き明すのに、ただ現實世界に於ける善行のみを勸めてをります。菩薩は空觀（現實世界の一切の現象には固定的實體は無い、従つて一切の執着を捨離する）を成就して煩惱を斷ち切ることができ、この空觀と現實世界に於ける衆生教化の善行とは、菩薩にとつては鳥の二つの翼と同様であると云はれてゐます。空觀には言及せず、ただ現實世界に於ける善行のみを勸めるのは如何なる意圖があつてのこととせうか。その理由を釋き明します。菩薩は空觀の成就と衆生教化との二行を兼ねて具へてゐることは、當然の理です。しかるに二乗の人たちは唯空觀を成就して己は證りに到達したのだと思ひこみ、現實世界に於て迷ひ惑つてゐる衆生の教化濟度は全く顧みません。二乗の誤つてゐることを示さんが爲に、現實世界に自己の身を留め、迷ひある衆生を教化濟度するのは釋迦如來の本來の意でありますので、衆生教化を善行の最上であると説き明し、以て衆生教化を實踐しなさいと勸めるのであります。菩薩の空觀の成就と衆生教化との二行は、鳥の二つ翼と同様であると言ふことは、智慧の教法を釋き明す中に於て自ら明らかにされます。

ところで現實世界に於ける衆生教化を説く内容は、八地以上の菩薩は皆自己の身を現實世界に留め、苦難を耐へ忍んで衆生の教化濟度に盡します。その趣意は、文殊問疾品に於ける惑ひある新學の菩薩の慰諭（安んじ慰め、教へ導く）と調伏（心を正しくとのへ、惡心を抑へ除く）とを説いたのと同じであります。方丈に於ける維摩居士の説法が正しいとの證しであることは明らかであります。

（訓讀文）

然るに功德と智慧とは云何んが別を取るのならば、功德は是れ萬行の都名、智慧は是れ達理の深號なり。有の中に亦鏡を照して是と非とを識達すること有り。即ち方便と名づけ、功德門に屬す。

然るに盡さずと住せずとを推尋するに、但有の行のみを勸む。既に云へり。菩薩は空を觀じて結を斷ずるを得、空と有

との二行を菩薩は鳥の二翼の如しと爲すと。何の意ありてか但有の行のみを勸むるや。釋して曰はく。理は即ち然なり。而るに二乗の人は唯空を以て證りと爲して有の中に物を化するを絶つ。故に身を生死に留めて平等に物を化するは乃ち佛意に當り、亦是れ行の中に最上なりと明して以て之を勸むるなり。謂ふ所の鳥の二翼の如しとは、即ち智慧の中に自ら明らかなり。然るに此れが中に説く所、皆是れ大士は身を生死に留めて苦を忍びて物を度す。義は慰諭と調伏との説に同じと明す。謂ふ所の方丈の説を證すること明らかなり。

〔参考〕

○先師 黒上正一郎先生は、「身を生死に留めて平等に物を化するは乃ち佛意に當り」の太子『義疏』について次のやうに論じてをられますので、参考として記します。

『太子は自ら僧侶と儒生とを指導せられ、國民教化の先頭に立たせたまうたのであるが、又勅を奉じて時に經典を宮中に講説したまひ、親しく執政の任に當る群臣の心田を開發し給うたのである。法王帝説に太子御講經の相状を述べて、

「戊午の年四月十五日、少治田天皇上宮王に請ひて勝鬘經を講せしむ。其の儀僧の如く也。諸王公主及臣連、信受して嘉せざる無し。三日の内、講説訖る。」

とつたへ、攝政の太子にして又僧の如くましまししといふことは、即ち眞俗相依の理想を具現したまひし御心を偲びまつらしむるのである。この戊午年は、推古天皇第六年と考證せられてゐるが、又日本書紀には第十四年七月「天皇皇太子を請せて勝鬘經を講かしたまひき」といひ、又この年太子法華經を岡本宮に讚講し給ひしことも傳ふるのである。この太子の宗教教化は自ら義疏に、

「身を生死に留めて平等に物を化するは乃ち佛意に當り、またこれ行の最上なりと明かして以て之を勸むるなり。」（維摩經義疏菩薩行品）

とのたまひし如く、全國民の平等救済に其の理想があらせられしと共に、これを以て、皇統無窮の翼賛にささげまつり給

ひしことは、一代御著作の内容に明かなるのみならず、又最後の御言葉に

「…熊凝村に始め在る道場を、仰ぎ願はくば、古き御世御世の帝皇、将来の御世御世の御宇天皇の捧爲に、此の道場を大寺に成して营造せんと欲す。」（大安寺縁起並流記資財帳）とあるにも親しく之を仰ぐところである。この皇統無窮の信念のもとに、わが文化史的使命を發現したまひし御精神は、推古天皇十五年の神祇崇拜の御詔勅、また同二十八年の國史選修の御事業の如きと表裏して考察せらるべきものである。かくて外來文化の攝取のうちに我が歴史的信念を開展せしめ給ひし御心は又これ憲法十七條の内容とも照應するのである。

太子が常に自ら全國民を包含する教化活動を念じ給ひ、三經義疏のうちには苦樂を共にしてひろく一切を教化すべき精神を表現したまひ、又衆生の根機の上・中・下等の差別に拘らず、ひとしく之を救濟すべき切實の念願を示させ給へるは、無名下層の民のころをもすべをさめて平等教化を希求したまひし廣大の御心をあらはすのである。太子はこの大願を永遠の國民生活に及ぼし給ひ、國家統治の暇なき御生活に三經義疏を述作してとしへにこの教化精神をとどめましたのである。太子が推古天皇二十九年國民哀悼の裡に薨去し給ふに至るまで、國民文化建設の大業に盡させ給ひし歴史は、この動亂痛苦の生の戦を内容とするものである。されば、太子の御事業の形式を以て直ちに其の御精神の内的光景を計量して活きたる人生の波瀾に代ふるに整頓せる模倣を以てする如きは、眞に一代の御精神を仰ぐ所以ではないのである。太子の生命は國化生活の未曾有の轉機に在つて眞に全國民の痛苦を荷はせたまひ、その偉大の御精神に大陸文化を批判統御せられ、我が文明の根柢を確立し給ひたる切實の信念體驗そのものに存するのである。（前掲書二九頁～三二頁）

『我等は既に三經義疏の御言葉を辿つて、太子が佛の「常住眞實」を仰がせ給ひ、萬徳の正體たる永久生命に歸依し給ひしことを憶念したのである。「常住眞實」の佛心は、一切諸惡に障へられぬ至徳であり、故に蒼生を養育する平等の慈悲を示現するのである。これ即ち群生を開導する理法の源泉であつて「常住法身」とは之を云ふのである。自己の解脱に安住せられずして、「三界の五濁八苦の中に生じて」衆生のため化父たり給ひし釋尊の行化は、正しく「常住法身」の顯現である。ここに歸依佛眞の信仰は太子に於ては、即ち「身を生死に留めて平等に物を化するは佛意に當る」と示されたる、

生死動亂の裡にあつて解脱を自らのために求めず、衆生救済の大悲を體現することである。これを國家生活に就いていふとき、即ち憲法第十五條に「私に背きて公に向ふは是れ臣の道なり」とある、個我を全體生命に没入せしめ、共に等しく忠誠の信を以て國民的責務の遂行に盡すことである。」（前掲書一〇九頁〜一一〇頁）

○先師 黒上正一郎先生は、太子の憲法十七條親筆及び各條の解説に際して「大士は身を生死に留めて苦を忍びて物を度す」の『義疏』を引用してをられますので、参考として記します。

『太子は内に黨利と政權に迷執せる幾多の群臣をすべをさめ給ひ、又歸化人の奸智を制御せられ、外に三韓・支那に向ひて對外的地位の確立を計らせ給ひつつ、又外來文化の攝取によつて國民生活の開發進展を促進せられ、波瀾と動搖のうち國と民とのため御身を捧げ盡させ給うたのである。その新羅征討の舉止むと共に國內文化の充實に對する御事業は更に開展したのである。推古天皇十二年には自ら憲法十七條を肇めて、當代氏族制度の積弊に對し、日本本來の國家精神に基きて之が改革指導の原理を開示し給ひ、ここに立つて時弊に對する剴切の訓示を下し給うたのである。太子が憲法第一條に「和を以て貴しと爲し、忤ふことなきを宗と爲す」と示させたまひたるは、國家統治の根本精神は上下の融合、國民の協力にあることを宣ひしものである。任那日本政府滅亡の問題を中心とする國威の對外的不振も、又長年月に亘る内政紊亂の實状も、悉く氏族朋黨の個我に迷執して全體協力を志すことなき個人主義的思想に發するのである。太子が憲法第三拾條に「共に是れ凡夫」と示されし如き深刻の人生觀を以て其の心理を洞察し給ひ、之を同胞協力に導くべき精神原理を開示されたものは正しく憲法の「和」の思想であつた。太子に於いてはこの上下和睦の思想は常に、皇室の下、萬民一體の國家精神に基かれたものである。即ち憲法第拾二條に

「國司、國造、百姓に斂ること勿れ。國に二君なく、民に兩主なし。卒土の兆民王を以て主となす。任ずる所の官司は皆是れ王臣なり。何ぞ敢て公と與に百姓に賦斂せむ。」

と仰せられ、全國民は等しく 天皇の臣民たることを照明し給ひ、此の國體の本義に基きて豪族私有の土地人民が朝廷に

歸屬せしめらるべきを明かし、王政統一の根本精神を闡明すると共に、ここに大化改新の實現せらるべき素地を作らせ給うたのである。太子にこの精神を以て、當代氏族制度の積弊に對して不斷改革の勞を捧げられ、常に制度政策の外的施設に止まらせ給はずして更に之を統一して生命あらしむべき「人」の問題を重んぜさせ給ひ、憲法第七條には

「事に大小なく、人を得て必ず治まる。時に急緩なく、賢に遇へば自ら寛なり。此に因て國家永久にして社稷危きこと勿し。故に古の聖王は、官の爲に人を求め、人の爲に官を求めず。」

と示したまうたのである。即ち政治の根本は人の心を治めることであると常には常に太子の御精神の存するところである。ここに憲法第拾五條に「私に背きて公に向ふは、是れ臣の道なり」と宣ひしも没我奉公の至誠の人格にして始めて眞實の統治が行はるべきことを示すのであつて、第拾四條に政治の要諦は聖賢を得るに在ることを宣へるのも、またこの精神をあらはすのである。ここに正しく政治生活の根柢に國民教化の事業を伴はせ給ひたる御心を思ひまつるのである。推古天皇十一年には冠位十二階（大德・小德・大仁・小仁・大禮・小禮・大信・小信・大義・小義・大智・小智）を制定せられ、從來氏族制度に於いては國家統治の大任に當るべき官職も世襲たりしに對して直接朝廷より個人に賜はる冠位を以て分位を表彰せられ、ここに人材登用先驅たるべき制度を樹立して國政の刷新と文化の發達とを促進せんとし給うたのである。この制度に精神を與ふるものは即ち以上引用せるところの憲法第七條の内容である。憲法には更に上下の秩序より公私の公明と民力の發達とを期すべき幾多の訓示を内容とせられたのである。而も其の一貫せる思想は即ち皇室を中心とする國民協力の精神を國家組織に實現して、全體生活の開發進展を成就すべき根柢の確立に存するのである。太子は自らこの精神を具現して常に「大士は身を生死に留めて苦を忍びて物を度す」（維摩經義疏菩薩行品）と宣ひ、國民救済のため一切の勞苦を忍びまして、其の生涯を盡させ給うたのである。また推古天皇十年濟僧勸勒來朝して曆本を獻じ、通説には十二年より曆日を用ふることとなりしといふのである。然るにこの曆法制定は單にこの一般の意味に止まらず、又之を上古より推古天皇に至る年紀を定め給ひしものと云はれ、推古天皇二十八年、自ら鳴鳴大臣と議して「天皇記また國記、臣、連伴造國造百八十部併せて公民等の本記を録したまひき」とある國史撰修の大業を起したまへる豫件と

なりしものとも推定せられるのである。又朝禮を肅正して「およそ宮門を出入せむときは、兩つの手以て地を押し、兩の脚もて跪け。柵を越えては立ちて行け」(推古天皇紀)と宣ひ、是らにも上下の秩序を正したまひしも、又憲法親筆の年に當るのである。』(前掲書二〇頁〜二三頁)

〔功德門に就きて有爲を盡さざるを釋す〕(現代語譯)

(有爲を盡さず)迷ひある現實世界を捨て去つてはならぬ。無爲に任せず。現實世界を超脱した理想世界に安住してはならぬ。明す中の第一は、功德の教法について現實世界を捨て去つてはならないことを釋き明します。

大慈の心大悲の心とは、菩薩が衆生を教化濟度する、その本たる心です。それ故に先づ初め大慈、大悲を示します。發心して、修行の結果としての佛陀の一切智を求めるのは、自行(自らがさとりを得るための修行)の本です。それ故にこれを忘れてはならないのです。

これ以下の諸句は經典をご覽なさい。

(訓讀文)

慈と悲とは是れ菩薩の外化の本なり。故に先づ之を出す。發心して佛果の一切智を求むるは、是れ自行の本なり。故に忘る可からざるなり。下の諸句は見つ可し。

經典(功德門に就きて有爲を盡さざるを釋す)

何ヲカ謂フヤレ。不トレ。盡サニ有爲ヲ一。謂ク。

不離ニ大慈ヲ一不レ捨テニ大悲ヲ一。深ク發シテ一切智ノ心ヲ一而モ不ニ忽忘セ一。教ニ化シテ衆生ヲ一終ニ不ニ厭倦一。於テニ四攝法ニ一常ニ念ジテ順行ス。護ニ持シテ正法ヲ一不レ惜マニ軀命ヲ一。種ニ善根ヲ一無シレ有ルコトニ疲厭一。志ハ常ニ安住ス方便ト廻向トニ。

菩薩行章
求メテレ法ヲ不レ懈ラ説クニレ法ヲ無シレ悵ムコト。勤テ供スガニ諸佛ヲ一故ニ入リテ生死ニ一而モ無シレ所レ畏ル。於テニ諸ノ榮辱ニ一心無シニ

憂喜一。不輕^レ未學^ヲ敬^フコト^レ學^ヲ如^クス^レ佛^ノ。

經典訓讀文

何をか有爲を盡さずと謂ふや。謂はく。

大慈を離れず大悲を捨てず。深く一切智の心を發して而も忽忘せず。衆生を教化して終に厭倦せず。四攝法に於て常に念じて順行す。正法を護持して軀命を惜まず。諸の善根を種ゑて疲厭有ること無し。志は常に方便と廻向とに安住す。法を求めて懈らず法を説くに恪むこと無し。勤めて諸佛を供すが故に生死に入りて而も畏るる所無し。諸の榮辱に於て心憂喜無し。未學を輕んぜず學を敬ふこと佛の如くす。

經典現代語譯

「現實世界を捨て去らないとは、何を言ふのであるか。次の諸行を言ふのである。」

「大慈悲心、大悲心を離れ捨て去らない。深く發心して佛果の一切智を求めることを忘れない。衆生を教化濟度して厭ひ倦むことが無い。四攝法（布施・愛語・利行・同事）を常に念じ隨順し行ずる。正法を護持して身命を惜まない。衆生に諸々の善根の種を植ゑ疲れ厭ふことが無い。志は常に衆生教化の方便と己の善根功德を衆生にめぐらすことに安住してゐる。佛法を求めて懈らず、佛法を説くに惜しむことが無い。諸佛の供養に勤めるが故に畏れる所なく迷ひの世界に入つて衆生を教化する。諸々の榮譽と恥辱とについて喜び憂ふことなく心は動搖しない。未學者を輕んぜず、學ある人は佛陀と同様に敬ふ。」

〔御語釋〕（現代語譯）

未學を輕んぜず學を敬ふこと佛の如くすとは、下々の人々を慈しみ、上長を敬ふのは天下の大義であります。それ故に『老子』（上篇第二十七章）では「不善の人の悪行を見て、悪行を爲してはならぬと善行を志す人は思ふ、即ち不善の人は善人の資けとなつてゐる。その不善の人の資けを惠みと思はず、己の師を貴ばないならば、智慧があつても大いに迷つてゐる人である。」と云つてゐます。又『尚書』（夏書五子之歌）では「私がよくよく天下の人を視るに、匹夫匹婦であつても其の優れた一つのはたらきは私よりも

勝つてゐる。」と云つてゐます。又『百行』(一)では「愚人」の一つの勝れた徳行は、智慧ある人の師である。」と云つてゐます。此の「未學を輕んぜず」以下の四つの文言は、ただ表現は少しく異なつてをりますが、その意味する内容は皆同じです。と申しますのは、慥慢は悪行の中の極悪であることを明らかにしてゐます。

(一)百行 『百行箴』か。羅什門下八俊の一、通恆傳(『高僧傳』六)参照。福井康順氏は、太子より三十六年後に没した唐初の杜正倫の『百行章』の一説であるとして、偽作説の根據としてゐるが、田村晃祐氏に『百行箴』説とも解せるといふ研究がある。：中村元氏の解説による。

(訓讀文)

未學を輕んぜず學を敬ふこと佛の如くす(經典は不輕未學)とは、下を慈しみ上を敬ふは天の大義なり。所以に外の老に亦云はく。不善の人は善人の資けなり。其の師を貴ばざれば、智ありと雖も大いに迷へりと。又書に云はく。予は天下を示るに、匹夫匹婦も一能予に勝れりと。(夏書は豫視天下。愚夫愚婦一能勝予)又百行に云はく。愚人の一徳は智者の師なりと。此の四は但言は少しく異なれども内意は皆同じ。然れば則ち慥は悪の中の極たること明らかなり。

經典

墮スルニ煩惱ニ一者ニハ令ムレ發サニ正念ヲ一。於テニ遠離ノ樂ニ一不ニ以テ爲サレ貴シト。不レ著セニ己ガ樂ニ一慶ブニ於彼ノ樂ヲ一。

經典訓讀文

煩惱に墮する者には正念を發さ令む。遠離の樂に於て以て貴しと爲さず。己が樂に著せず彼の樂を慶ぶ。

經典現代語訳

菩薩行章 煩惱にとらはれ邪念を有する人には正しい念ひを發させる。世俗や欲望などを超離してゐる安樂を貴しとしない。己が功德の安樂に執著せず、他者の善行の安樂を讚へる。

〔御語釋〕（現代語譯）

己が樂に著せずとは、己の功德を喜びとせず、唯他者の善行を喜び讚へるのです。

（訓讀文）

己が樂に著せず（經典は不着己樂）とは、己が功を擧ぐる事莫く、唯人の善を擧ぐ。

經典

在リテハニ禪定ニ一如クスニ地獄ノ想ノ一。於テハニ生死ノ中ニ一如クスニ園觀ノ想ノ一。

經典訓讀文

諸の禪定に在りては地獄の想の如くす。生死の中に於ては園觀の想の如くす。

經典現代語譯

諸々の禪定に於て心の安らぎを得ても地獄に在つて苦しむ衆生を忘れない。衆生教化の爲に苦しみ迷ひある現實世界を美しい園林の如くに觀ずる。

〔御語釋〕（現代語譯）

衆生を教化濟度せんが爲の故に、生死は園の如し（苦しみ迷ひある現實世界を美しい園林の如し）と觀ずるのです。

（訓讀文）

物を化せんを欲するが故に、生死は園の如し觀ず。

經典

見テハニ來リ求ムル者ヲ一爲スニ善師ノ想ヲ一。

經典訓讀文

來り求むる者を見ては善師の想を爲す。

經典現代語譯

佛法の教へを求め請ふ者が來れば、善き師が來て下さつたとの想ひを以て接遇する。

〔御語釋〕（現代語譯）

他者に佛法を説き聞かせれば、己の執著心を捨て去る結果となり、却て自己に利益をもたらします。それ故に佛法を請ふ人に對し、善師の想を爲す（善き師が來て下さつたとの想ひを以て接遇する）と云ふのです。これはただ佛法を他者に施す場合だけではなく、財物を施す、食物を施す場合も同様です。

（訓讀文）

法を以て人に施せば還つて能く我を益す。故に善師の想を爲すと云ふ。但法施のみに非ず。財も食も亦然なり。

經典

捨テテ一諸ノ所有ヲ一具スニ一切智ノ想ヲ一。見テハニ毀ルレ戒ヲ人一起スニ救護ノ想ヲ一。諸ノ波羅蜜ニハ爲スニ父母ノ想ヲ一。道品之法ニハ爲スニ眷屬ノ想ヲ一。發ニ行シテ善根ヲ一無シレ有ルコトニ齋限一。以テニ諸ノ淨國嚴飾ノ之事ヲ一成ズニ己ガ佛土ニ一。

經典訓讀文

菩薩行章 諸の所有を捨てて一切智の想を具す。戒を毀る人を見ては救護の想を起す。諸の波羅蜜には父母の想を爲す。道品の法には眷屬の想を爲す。善根を發行して齋限有ること無し。

諸の淨國嚴飾の事を以て己が佛土を成ず。

經典現代語譯

身命財など一切の所有物を捨てて衆生に施し、佛果たる一切智を具足する。戒律を犯す人を見て救護の想ひを起す。布施など諸々の波羅蜜は、さとりを生み出す父母であると思ふ。道品(三十七のさとりの道)は、己を支へてくれる眷屬であると思ふ。善を行ずべく心に決め、限りなく修行に勵む。諸々の佛土を莊嚴して淨國となし、それに因つて己が佛土を淨く完成する。

〔御語釋〕(現代語譯)

諸の淨國嚴飾の事を以て己が佛土を成ずとは、諸々の他の佛土を嚴飾するといふ修行を因として、その結果として己が佛土を淨く完成することを説き明してゐます。

(訓讀文)

諸の淨國嚴飾の事を以て己が佛土を成ずとは、因を修すること彼の如く。以て己が佛土を成ずることを明すなり。

經典

行ジテニ無限ノ施ヲ一具ニ足ス相好ヲ一。除テニ一切ノ惡ヲ一淨ムニ身・口・意ヲ一。生死無數劫ナレドモ意ニ而モ有リ、勇。

經典訓讀文

無限の施を行じて相好を具足す。一切の惡を除きて身・口・意を淨む。生死無數劫なれども意に而も勇有り。

經典現代語譯

布施行を無限に修行して、美しい姿形を具足する。一切の惡行を取り除いて身・口・意を清淨ならしむ。苦しみ迷ひの生死の世界は無限に續くけれども、心に勇氣があつて衆生教化を遂行する。

〔御語釋〕（現代語譯）

生死無數劫なれども意に而も勇有りととは、苦しみ迷ひの生死の世界に於て、衆生を教化濟度して疲れ厭ふことが無いといふ意です。己が身が清淨でなければ衆生を教化することはできません。それ故に先づ己の身は汚濁の三界（欲界・色界・無色界）から出離します。

（訓讀文）

生死無數劫なれども意に而も勇有りととは、言ふところは苦に處して物を化し疲厭無きなり。若し己身清からざれば物を化すること能はず。故に先づ己身を三界より出す。

經典

聞テニ佛ノ無量ノ徳ヲ一志而モ不レ倦マ。以テニ智慧ノ劍ヲ一破リニ煩惱ノ賊ヲ一出ツニ陰・界・入ヲ一。荷ニ負シテ衆生ヲ一永ク使ムニ解脱セ一。以テニ大精進ヲ一摧ニ伏ス魔軍ヲ一。

經典訓讀文

佛の無量の徳を聞きて志而も倦まず。智慧の劍を以て煩惱の賊を破り陰・界・入を出づ。衆生を荷負して永く解脱せしむ。大精進を以て魔軍を摧伏す。

經典現代語譯

諸佛の無量の徳行を聞き、徳行を積まうとの志は倦むことは無い。智慧の劍を以て煩惱による迷ひを破り、陰・界・入（一）を出づ。衆生を背負つて解脱を永劫ならしむ。大精進を以て惡魔の軍勢を摧き降伏させる。

（一）

陰・界・入 人間存在の構成要素である五陰（色・受・想・行・識）と十八界（六根・六境・六識、①眼と色・形と視覚②耳と

音聲と聽覺③鼻と香りと嗅覺④舌と味と味覺⑤皮膚と觸れられるものと觸覺⑥心と考へられるものと心の識別作用と十二入（六

根・六境）を云ふ。

經典

常ニ求ムニ無念實相ノ智慧ヲ一。

經典訓讀文

常に無念實相の智慧を求む。

經典現代語譯

常に無念（一切の執着・妄念が無い）で實相（眞實のありのままの姿）を知る智慧を求めぬ。

〔御語釋〕（現代語譯）

常に無念實相の智慧を求むには二種の解釋があります。第一説は、八地以上の菩薩は過・現・未の三世に於て、その到達した境地から退くことは無い。それ故に無念（一切の執着・妄念が無い）と云ふのである、と。第二説は、煩惱の汚れを無くした清淨な心は差別對立の相は無く、心は其の境地のままにはたらくので、皆無念と名づけるのである、と。

（訓讀文）

常に無念實相の智慧を求むとは（經典は無念實相智慧とは解するに二有り。一に云はく。八地以上の時は三の退を免る。故に無念と云ふと。二に云はく。無漏心は無相にして境に行ずるをもつて皆無念と名づくと。

經典

行ジテニ少欲知足ヲ一而モ不レ捨テニ世法ヲ一。

經典訓讀文

菩薩行章
少欲知足を行じて而も世法を捨てず。

欲心を抑へ足るを知ることを實踐して、而も俗世間の人々と共なる生活をなす。

〔御語釋〕（現代語譯）

少欲知足とは、自己の分に過ぎたことは爲さないことを言ひます。『老子』（下篇、第四十四章）では、「禍ひは足るを知らないことより大なるものは無く、過ちは欲望のままに得ようとするより甚だしいものは無い。足るをすれば失ふものは無く、欲心を抑へることができれば何らの危いことも無い。」と云つてゐます。又『春秋傳』（左傳、宣公、十五年）では、「鞭が長いと言つても馬腹の長さには及ばない。その長さで役立つのである。」と云つてゐます。而も世法を捨てずとは、修行によつて自己がある程度の高い境地に到達してゐるからと言つて、俗世間の人々を見下し、人々に隨順することを忘れてはならぬ、といふ意味です。『論語』（卷五、憲問第十四）に、「言葉遣ひはへりくだつて丁寧にし、行ひは練磨して正しくする。」とあるのは、これと同じことを言つてゐるのです。

（訓讀文）

少欲知足とは、分に過ぎざるを言ふ。外の老に云はく。禍は足るを知らざるより大なるは莫く、咎は得んと欲するより甚しきは莫し。足るをすれば辱かしめられず、止まるをすれば殆ふからずと。又春秋傳に曰はく。鞭の長しと雖も馬腹及ばずと。而も世法を捨てずとは、言ふところは己れ能くすと雖も、然も世に違して自ら異なること莫れとなり。外の論に云はく。言遜ひ行を危くすとは斯の謂ひなり。

經典訓讀文

威儀いぎを壊えせずして而しかも能よく俗ぞくに隨したがふ。

經典現代語譯

規律にかなつた起居動作を守り、而も俗世間の規律にも隨順する。

〔御語釋〕（現代語譯）

威儀いぎを壊えせずしてとは、佛道における規律にかなつた起居動作を守るといふことです。その意味は、衆生を教化して天上界の果報を得さしめるといふのです。また次のやうに言つても良いでせう。―自らが梵天王の身を現じて釋迦如来に説法を請ふのである、―と。

（訓讀文）

威儀いぎを壊えせずしてとは、の威儀いぎなり。言いふこころは物ものを教をしへて天てんの報ほうを受けしむ。亦また可かなるべし。自みづから梵主ぼんしゅと爲なりて佛ぶつの説法せつぽうを請こふと。

經典

起起シテニ神通ノ慧ヲ一引ニ導ス衆生ヲ一。

得得テニ念總持ヲ一所レ聞ク不レ忘レ。

善ク別チテニ諸根ヲ一斷ズニ衆生ノ疑ヲ一。

以以テニ樂說辯ヲ一演ブルコトレ法ヲ無礙ナリ。

淨淨メテニ十善道ヲ一受クニ天人ノ福ヲ一。

修修シテニ四無量ヲ一開クニ梵天ノ道ヲ一。

菩薩行章

勸_レ請_{シテ}說法ヲ一隨喜讚善ス。

得ルニ佛ノ音聲・身・口・意ノ善ヲ一。

得ルニ佛ノ威儀ヲ一。

深ク修シニ善法ヲ一所行轉勝ル。

以テニ大乘ノ教ヲ一成ズニ菩薩僧ヲ一。

心ニ無クニ放逸一不レ失ハニ衆ノ善ヲ一。

行ズルニ如キノレ此ノ法ヲ一。是ヲ名ツクニ。菩薩不ト_レ盡サニ有爲ヲ一。

經典訓讀文

神通の慧を起して衆生を引導す。

念總持を得て聞く所忘れず。

善く諸根を別ちて衆生の疑ひを斷ず。

説辯を以て法を演ぶること無礙なり。

十善道を淨めて天人の福を受く。

四無量を修して梵天の道を開く。

説法を勸請して隨喜讚善す。

佛の音聲・身・口・意の善を得る。

佛の威儀を得る。

深く善法を修し所行轉勝る。

大乘の教へを以て菩薩僧を成ず。

心に放逸無く衆の善を失はず。

此の如きの法を行ずる、是を菩薩有爲を盡さずと名づく。

經典現代語譯

神通力の智慧を發揮して衆生を導き佛道に引き入れる。

眞實のすがたを把握し、記憶し、佛陀の説法を聞いて忘れない。

諸々の衆生の根機をよく見分け、諸々の衆生の疑惑を斷ち切る。

さはやかに眞理を説き述べ、何らのさまたげもなく佛法を説く。

十善（殺生・偷盜・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋志・邪見を行はない）の道を淨め、天上界の福德を衆生に授ける。

四無量心（慈・悲・喜・捨）を修して、衆生が梵天に生れる道を開く。

佛陀の説法を勸請して、その善行を喜び讃嘆する。

佛陀の音聲・身體・口・意こころから發する善行を得る。

佛陀の規律にかなつた起居動作を得る。

深く善法を修め、行ずる所はいよいよ勝る。大乘の教へを説いて菩薩の集りを形成する。佛道に背き怠ることなく、諸々の善行を

失ふこともない。

以上の如き功德の教法を行ずる、此を菩薩は有爲を盡さず（迷ひある現實世界を捨て去らない）と名づけるのである。

〔参考〕

○先師 黒上正一郎先生は、「世法を捨てずとは、…」の太子『義疏』について次のやうに論じてをられますので、参考として記します。

『世間虚假唯佛是真』とは太子自ら宣らせ給ひしところである。御夫人橘大郎女はこの御言葉で太子をその薨後に記念しまつられたのである。太子が我が國未曾有の轉機に於いて國民文化の根柢を確立し給ひし其の事業は、雄大なる改

革指導の精神に基かねば成就せられざりしところである。當代氏族制度の積弊と對照するのみに於いても、憲法十七條の啓示は正にこの御精神を顯彰して餘りあるのである。而も世間虚假と示して罪劫の人生を自らの足らはぬ姿に窮め、唯、佛の眞實を念じ給ひし御心は常に人生永遠の未完成を信知して、自ら國と民とのために無窮の求道努力を相續し給うたのである。此に維摩經菩薩行章に「少欲知足にして世法を捨てず。」とある語を釋して、「世法を捨てず。とは、言ふところは己れ能くすと雖も、然も世に違して自ら異なること莫れとなり。外の論に言遜しなひ行を危くすと云ふはこの謂なり。」と示されたる御言葉に我等はこの御心に基きし太子一代の行化を偲びまつるのである。これ慧遠が

「少欲知足にして自行染ぜんを離れ、世を捨てずして有に隨ひて物を益す。」（維摩經義記卷四本）と解し、又吉蔵菩薩が、

「行ひは少欲知足にして世法をば捨てず。威儀を壞せずして能く俗に隨ひ、道儀を壞せずして能く俗に隨ふ。俯仰天下、皆我と同じと謂ふも、我獨り人に異なるなり。」（維摩經義疏卷六）

と論ずる如く、其言葉の一般的意義に於いては菩薩は解脱を得と雖も尚世間に同じく教化妙用を現すべきことを説くものである。

けれども太子の御釋は唯此の如き概念的教義を示させ給うたのではない。己れ能くすと雖も常に他と共なる生を念じ、同じく人たる事実にめざめて内的平等の信に徹し、その行ひの上にこの信念を顯はせよとをしへ給ふのである。現實世間生活に隨順すと雖も、自らを高きに置く心在るときは、それは尚世法を捨つることとなるべきを暗示し給ふのである。ここに論語の「言遜しなひ行を危くす」の語を引用したまひ、内に深痛の誠を抱くが故に外に簡素の姿を示し、濁悪人間生活の不斷改革に盡しつつも他を責めずして人と相和し、外に意志する改革的念願を我が内心の懺悔求道に具現して之を自らの行ひを以て示すべきをのらせ給ふのである。偉大なる改革指導の御精神は、眞に人生の未完成に徹し、外なる業績に満足せさせ給はずして、濁悪じよくあくの世を統ぶる眞實の生命を自らに體得すべき希求を相續し給ひ、之を一代行化に具現して、この心の全體國民生活に通はむことを念じ給ふのである。これまことに世間虚假の懺悔求道心に自らを没し、くもりなき大悲の永久生命を仰いで、

一切を「唯佛是真」に歸攝し給ひし嚴肅悲痛の信仰に基かせ給ふのである。日本文化創業の大任は、この外的功業に安住し給はず、目に見えぬ「まこと」を念じて献身勞苦したまひたる御心の威嚴に依つてこそ、一切の波瀾と障礙とを打破して、之を成就せられたのである。太子はこの信を照明し濁惡の生を護念し給ふ三世永遠の教主として釋迦牟尼佛を仰がせ給うたのである。』(前掲書一〇三頁〜一〇五頁)

〔智慧門に就きて無爲に任せざるを釋す〕(現代語譯)

有爲を盡さず(迷ひある現實世界を捨て去つてはならぬ)と、無爲に住せず(現實世界を超越した理想世界に安住してはならぬ)とを釋き明す中の第二は、智慧の教法について、現實世界を超越した理想世界に安住してはならないことを釋き明します。何をか菩薩無爲に住せずと謂ふや以下がこれであります。

二乗の人たちは變轉きはまりない現實世界の無常を厭ひ觀知して、現實世界をかへりみず自己のみの境地に安住しますが、菩薩はあくまで現實世界を離れず、衆生教化に盡します。

(訓讀文)

何をか菩薩無爲に住せずと謂ふや従り以下、智慧門に就きて無爲に住せざるを釋す。二乗は無常を觀じて則ち涅槃に入るも、菩薩は然らず。

經典(智慧門に就きて無爲に住せざるを釋す)

何ヲカ謂フヤニ菩薩不トロ住セニ無爲ニ一。

謂ク。

章修ニ學シテ空ヲ一不ニ以テレ空ヲ爲サロ證ト。修ニ學シテ無相・無作ヲ一不下以テニ無相・無作ヲ一爲サロ證ト。

行修ニ學シテ無起ヲ一不下以テニ無起ヲ一爲サロ證ト。

菩薩修ニ學シテ無起ヲ一不下以テニ無起ヲ一爲サロ證ト。

觀ジテニ於無常ヲ一而モ不レ厭ハニ善本ヲ一。觀ジテニ世間ノ苦ヲ一而モ不レ惡マ生死ヲ一。觀ジテニ於無我ヲ一而モ侮ヘテレ人ヲ不レ倦マ。觀ジテニ於寂滅ヲ一而モ不ニ永ク寂滅セ一。

觀ジテニ於遠離ヲ一而モ身心ニ修スレ善ヲ。觀ジテレ無シトニ所歸スル一而モ歸ニ趣ス善法ニ一。觀ジテニ於無生ヲ一而モ以テニ生法ヲ一荷ニ負ス一切ヲ一。觀ジテニ於無漏ヲ一而モ不レ斷ゼニ諸漏ヲ一。觀ジテレ無シトニ所行一而モ以テニ行法ヲ一教ニ化ス衆生ヲ一。觀ジテニ於空無ヲ一而モ不レ捨テニ大悲ヲ一。

觀ジテニ正法ノ位ヲ一而モ不レ隨ハ小乘ニ一。觀ズレドモニ諸法ハ虛妄ニシテ無クレ牢無クレ人無クレ主無キコトヲ相。本願未レ滿タ而不レ虛シクセニ福德・禪定・智慧ヲ一修スルニ如キノレ此ノ法ヲ一。是ヲ名ツクニ菩薩不ト口住セニ無爲ニ一。

經典訓讀文

何をか菩薩無爲に住せずと謂ふや。

謂はく。

空を修學して空を以て證りと爲さず。無相・無作を修學して無相・無作を以て證りと爲さず。無起を修學して無起を以て證りと爲さず。

無常を觀じて而も善本を厭はず。世間の苦を觀じて而も生死を惡まず。無我を觀じて而も人を侮へて倦まず。寂滅を觀じて而も永く寂滅せず。

遠離を觀じて而も身心に善を修す。歸する所無しと觀じて而も善法に歸趣す。無生を觀じて而も生法を以て一切を荷負す。無漏を觀じて而も諸漏を斷ぜず。所行無しと觀じて而も行法を以て衆生を教化す。空無を觀じて而も大悲を捨てず。

正法の位を觀じて而も小乘に隨はず。諸法は虛妄にして牢無く人無く主無きことを觀ずれども本願未だ滿たざれば福德・禪定・智慧を虚しくせず。

此の如きの法を修する、是を菩薩無爲に住せずと名づく。

經典現代語譯

「理想世界に安住しないとは、何を言ふのであるか。次の所行を言ふのである。「空（諸現象に固定的實體は無い）を修學してもそれを以て證りに到達したとしない。無相（差別の相が無い）・無作（因縁による造作がない）を修學してもそれを以て證りに到達したとしない。無起（因縁によつて生ずることが無い）を修學してもそれを以て證りに到達したとしない。諸々の存在の無常を觀じても善根功徳を厭はず積む。この世の苦を觀じても倦まず衆生を教化する。煩惱の火をかけた安らぎの境地を觀じて永くその境地に住することはない。」

世俗のけがれを超越することを觀じても身心に善行を修める。たよれるものは無いと觀じても自他を益する善法をたよりとする。生滅變化の無いことを觀じても生滅變化する一切の衆生や存在をになふ。煩惱を離れた境地を觀じても諸々の煩惱を斷ち切らない。修行すべき事からは無いと觀じても種々の修行の方法を以て衆生を教化する。一切の存在は實體なく差別相の無いことを觀じても衆生を救ふ大慈悲心を捨てない。

佛陀の教への眞理のありさまを觀じてもそこに止まつてゐる小乗には隨はない。

この世の一切の存在は不變で無く、實體としての自己無く、行為主義では無く定まつた相無きことを觀じても、衆生教化の本願が成就しなければ、その福德・禪定・智慧のはたらきを充實せしめる。

以上の如き智慧の教法を修する、此を菩薩は無爲に任せず（理想世界に安住しない）と名づけるのである。」

〔功德と智慧との二門に就きて釋を結す〕（現代語譯）

有爲を盡さず（迷ひある現實世界を捨て去つてはならぬ）と、無爲に住せず（現實世界を超脱した理想世界に安住してはならぬ）とを釋き明す中の第三は、功德と智慧との二つの教法を並べて釋き明し、結びの文言とします。又福德を具するが故にから以下がこれでありませぬ。此の中に亦三つ項目があります。

菩薩行章

第一に、功德と智慧との二つの教法について釋き明し、結びの文言とします。

第二に、自行（自らがさとりを得るための修行）と外化（他者を教化濟度するための実践）とについて釋き明し、結びの文言とします。衆の法藥を集むる以下がこれでありませう。

第三に、諸の正士から以下、衆香國の菩薩たちに對する説法の全體を釋き明し、結びの文言とします。そして汝たちは此の行法を學びなさいと勧めます。

經典を二覽なさい。

（訓讀文）

又福徳を具するが故に『義疏』は徳の字洩れ）従り以下、第三に並べて功徳と智慧との二門に就きて釋を結す。中に盡きて亦三有り。

初めに功徳と智慧との二門に就きて釋を結す。

後に自行と外化との二行に就きて釋を結す。衆の法藥を集むる『義疏』は法實）従り以下是なり。

諸の正士従り以下、第三に釋を結し學すべしと。

見つ可し。

經典（功徳と智慧との二門に就きて釋を結す）

又具スルガニ 福徳ヲ一 故ニ不レ 住セニ 無爲ニ一。 具スルガニ 智慧ヲ一 故ニ不レ 盡サニ 有爲ヲ一。 大慈悲ノ故ニ不レ 住セニ 無爲ニ一。 滿ズルカニ 本願ヲ一 故ニ不レ 盡サニ 有爲ヲ一。

集ムルガニ 法藥ヲ一 故ニ不レ 住セニ 無爲ニ一。 隨テ授ルガニ 藥ヲ故ニ不レ 盡サニ 有爲ヲ一。 知ルガニ 衆生ノ病ヲ一 故ニ不レ 住セニ 無爲ニ一。 滅スルガニ 衆生ノ病ヲ一 故ニ不レ 盡サニ 有爲ヲ一。

諸ノ正士菩薩ハ已ニ修シテニ 此ノ法ヲ一 不レ 盡サニ 有爲ヲ一。 不レ 住セニ 無爲ニ一。 是ヲ名ツクニ 盡ト無盡トノ解脱ノ法門ト一。 汝等當ニレ 學ス。

又福德を具するが故に無爲に住せず、智慧を具するが故に有爲を盡さず。大慈悲の故に無爲に住せず。本願を満するが故に有爲を盡さず。

法藥を集むるが故に無爲に住せず、随つて藥を授くるが故に有爲を盡さず。衆生の病ひを知るが故に無爲に住せず。衆生の病ひを滅するが故に有爲を盡さず。

諸の正士菩薩は已に此の法を修して有爲を盡さず、無爲に住せず。是を盡と無盡との解脱の法門と名づく。汝等當に學すべし

經典現代語譯

「又菩薩は、福德を具へてゐるが故に、無爲に住せず（現實世界を超脱した理想世界に安住しない）、智慧を具へてゐるが、故に、有爲を盡さず（迷ひある現實世界を捨て去らない）。衆生教化の大慈悲心の故に無爲に住せず、衆生教化の本願を満たしむる故に有爲を盡さない。

病ひをなほす教への藥を集むるが故に無爲に住せず、病状に随つて藥を與へるが故に無爲を盡さない。衆生が如何に病んでゐるかを知るが故に無爲に住せず、衆生の病ひを治癒するが故に有爲を盡さない。

諸々の正道を求める大士や菩薩は以上説いてきた教へを既に修行しをはつて、有爲を盡さず、無爲に住しない。これを盡（捨て去る）と無盡との二種の解脱の教法と名づける。汝たちはまさに此の教へを學ぶべきである。」

〔衆香の菩薩は教へを奉じて宮に還る〕（現代語譯）

衆香國の菩薩が釋迦如来に説法を請ひ、聞きをはつて衆香國へ歸る項目の中の第三は、衆香國の菩薩は釋迦如来の教へを奉持して衆香國へ歸ります。爾の時に彼の諸の菩薩から以下がこれでありす。

（訓讀文）

爾の時に彼の諸の菩薩従り以下、第三に教へを奉じて宮に還るなり。

經典（衆香の菩薩は教へを奉じて宮に還る）

爾ノ時ニ彼ノ諸ノ菩薩。聞テレ説クラニ是ノ法ヲ一。皆大ニ歡喜シ。以テニ衆ノ妙華ノ若干種ノ色若干種ノ香ヲ一散ジニ遍クシテ三千大千世界ニ一。供ヲ養シ於佛及び此ノ經法竝ニ諸ノ菩薩ヲ一已テ。稽ヲ首シ佛足ヲ一歎ジテニ未曾有ナルコトヲ一言ク。釋迦牟尼佛。乃チ能クストニ於此ノ善行ト方便トヲ一。言ヒ已テ忽然トシテ不レ現ゼ。還テ到ルニ彼ノ國ニ一。

經典訓讀文

爾そのときにかのもろもろのぼさつのこのほうをとききて、みなおほにかんぎし、もろもろのみょうけのにやくかんしゆのいろ・にやくかんしゆのかをもつてさんぜんだいせんせかいにさんにあまねくぼんして、ぼん及びこのきようほうにもろもろのぼさつをは供養くようしを已まりて。佛足ぶつそくを稽首けいしゆしみぞう未曾有みぞうなることを歎たんじて言いはく。釋迦牟尼佛しやかむにぶつ、乃すなはち此この善行ぜんぎようと方便ほうべんとを能よくすと。言いひ已まりて忽然こつぜんとして現げんぜず、還かへりて彼かの國くにに到いたる。

經典現代語譯

釋迦如来が以上の教へを説くのを聞いて、衆香國の菩薩たちは大いに歡喜し、種々様々の色や香の數多くの妙なる華を三千大世界に遍く散じて釋迦如来及び此の經典に説かれた教へ並びに諸々の菩薩たちを供養し、釋迦如来の足に額をつけて禮拜し、讚歎して申しあげた。「釋迦牟尼佛さん、此の善行と方便とを實踐なさること未曾有と申すほかございませぬ。」と。言ひをはつて忽然として姿を消し、彼の衆香國へ還つてゆきました。

第十二 見阿闍佛章

〔見阿闍佛章の名稱の由來〕（現代語譯）

此の經典の第十二章は見阿闍佛章であります。阿闍佛とは五佛（大日如來を中心に、東に阿闍、西に阿彌陀、南に寶生、北に不空成就如來を配す）の一つであり、此の章では妙喜國の無動如來と稱されてをります。

諸々の衆生に阿闍國及び如來を見させます。それに因つて此の章の名稱を見阿闍佛章と名づけれます。若し經典の説く内容に隨つて名稱を付するならば、觀如來身章（如來身を觀ずる章）と云ふことができませう。しかしながら此では衆生が利益を得る、それに因つて名稱を付してをりますので、見阿闍佛章と云ふのであります。

（訓讀文）

見阿闍佛章第十二なり。衆をして彼の國を見せしむ。因りて章の目と爲す。然るに若し文に隨つて目を爲さば、觀如來身章と云ふ可し。而れども今得益に因りて目と爲るが故に、見阿闍佛章と云ふ。（義疏は阿闍國）

〔維摩經の正説と流通説とについて〕（現代語譯）

この章の初めから衆を擧げて皆見るに訖るまでは、維摩經の正説であります。

此の章の末尾の佛舍利弗に告ぐから以下は、流通説であります。これは上述の菩薩行章に於て釋き明した通りであります。

（訓讀文）

此の章の初めより衆を擧げて皆見るに訖る以來は正説に入る。此の章の末佛舍利弗に告ぐ従り以下は流通に入る。即ち上に釋するが如し。

〔見阿闍佛章の科段分け〕（現代語譯）

見阿闍佛章の中を四つの項目に分けます。

第一に、此の章の初めから若し他觀の者をば名づけて邪觀と爲すに訖るまでは、佛身は無相（一切の差別や執着を離れてゐて、特別のすがた形をもたない）であつて、見ることはできないことを説き明します。

第二に、爾の時に舍利弗、維摩詰に問ふから以下は、舍利弗が維摩居士の本地（眞實身の本源）は何れの國に在るやを問ふことに因つて、更に本地の究極の眞理に於ては佛身には生ずることも滅することも無いことを説き明し、佛身の生滅に衆生が執着してゐるのを捨て去らせます。

第三に、是の時に佛、舍利弗に告ぐから以下は、釋迦如來は究極の眞理としては佛身は生ずることも滅することもないのであるが、娑婆世界の世俗の道理としては佛身に生滅がある、その爲に維摩居士の眞實身の本地（妙喜國）について説法することを説き明します。

第四に、是の時に大衆渴仰してから以下は、會座の衆生たちが妙喜國を仰ぎ慕ひ見んと欲することに因つて、維摩居士の眞實身の本地たる妙喜國を正しく見させるのであります。

（訓讀文）

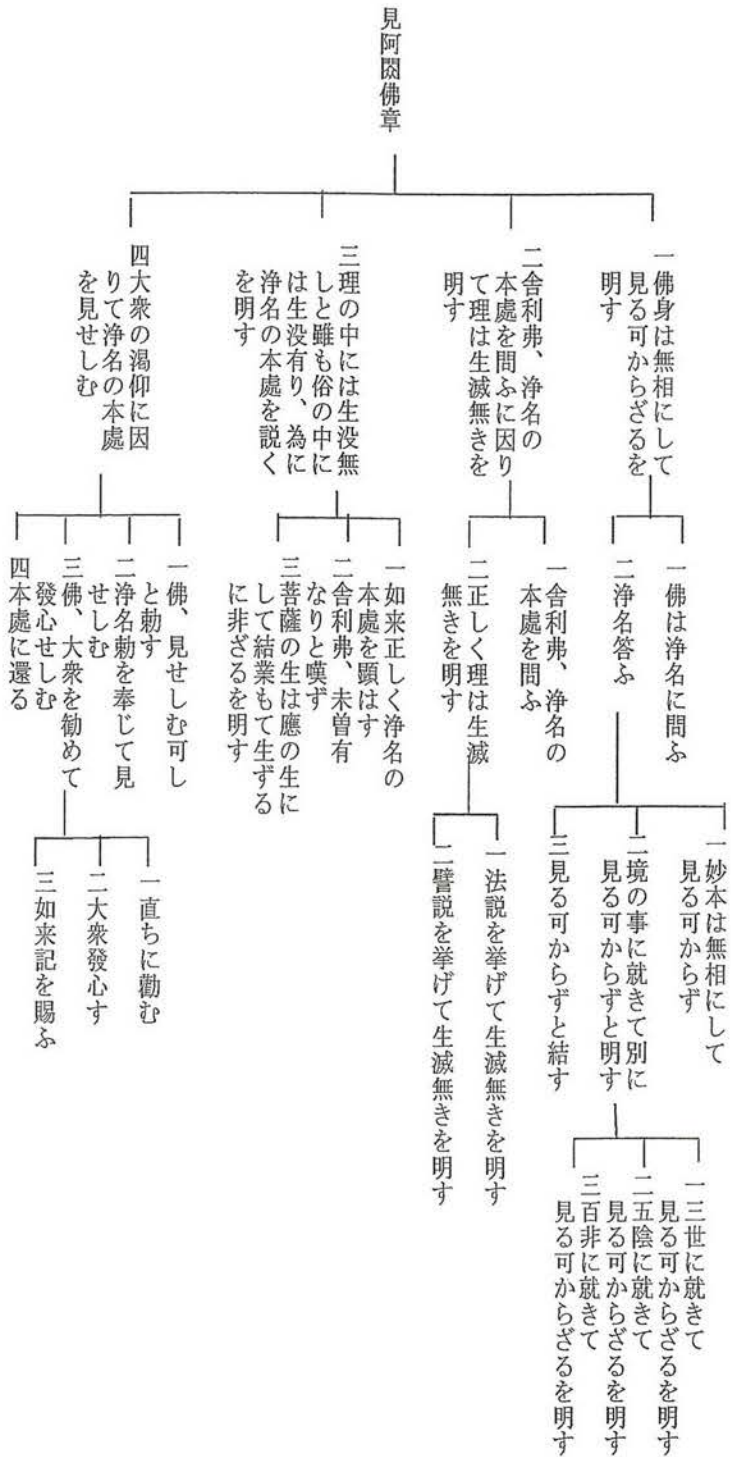
中に就きて開きて四と爲す。

第一に初め從り若し他觀の者をば名づけて邪觀と爲す以來は、佛身は無相にして見る可からざるを明す。

第二に爾の時に舍利弗、維摩詰に問ふ從り以下、眞子が淨名の本處を問ふに因りて、更に理は本には生滅無きを明して、物の封執を遣る。

第三に是の時に佛、舍利弗に告ぐ從り以下、如來は理の中には生沒無しと雖も、俗諦の道の中には亦生沒有り、爲に淨名の本處を説くことを明す。

第四に是の時に大衆渴仰して従り以下、大衆の渴仰に因りて正しく淨名の本國を見せしむるなり。



〔佛身は無相にして見る可からざるを明す〕（現代語譯）

見阿閼佛章の中の第一は、法身は無相（一切の差別や執着を離れてゐて、特別のすがた形をもたない）であつて、見ることはできないことを説き明します。

此の説法の本来の趣意は、上述の菩薩行章の初めに於て維摩居士は文殊菩薩に、「共に行つて釋迦如來にお目にかからうではないか。」と誘ひましたが、諸々の衆生は本地の中の究極の眞理に於ては佛身を見ることはできないことを知りません。また本地（佛・菩薩の本源における眞實心）と迹（衆生教化のために此の世に現はれた姿。應迹の佛身）との意義も理解してをりません。應迹の佛身を見て、佛身は眞實に存在するので今現に見ることができると誤り考へます。それ故今此に於て、佛身は無相であつて見ることができないこと、百非（「佛身は四大より起るに非ず」など、佛身はさういふ存在ではないといふ數多くの否定）の迷ひの世界を出離してゐることを、維摩居士をして説き明さしめ、假の姿である應迹の佛身に衆生がとらはれて、それを本地の眞實身だと誤り考へる衆生の惑ひを捨て去らしめます。

（訓讀文）

今第一に法身は無相にして見る可からざるを明す。
 而るに此の説の來意は、上の菩薩行章の初めに淨名は文殊に共に佛に見ゆる可しと語る。大衆は理の中には佛の見る可き無きを知らず。亦本迹の義をも解せず。迹を見て便ち實に佛身有り今の如く見る可しと謂へり。所以に今此に更に淨名をして佛身は無相にして見る可からず、百非を出でたるを明して、物の迹に執して本に迷ふの惑を遣らしむ。

〔佛は淨名に問ふ〕（現代語譯）

法身は無相であつて見ることはできないことを説き明す中の第一は、釋迦如來が維摩居士に問ひます。

「汝は如來を見ようと欲するとき、如何なる想ひを以て觀ようとしませうか。」

（訓讀文）

佛は淨名に問ふ。

汝は將に何れの相を作して如來を觀んと欲するや

經典（佛は淨名に問ふ）

爾ノ時ニ世尊。問フニ維摩詰ニ。汝欲ストキレ見ントニ如來ヲ。爲ルヤ下以テカニ何等ノ一觀ントヤ如來ヲ上乎。

經典訓讀文

爾そのときに世尊せそん、維摩詰ゆいまきつに問ふ。汝なんぢ如來を見んと欲ほつするとき、何等なんらを以てか如來にょらいを觀みんと爲するや

經典現代語訳

その時釋迦如來は、維摩居士に問ひました。「汝は如來を見ようと欲するとき、如何なる想ひを以て如來を觀ようと思ひますか。」

〔淨名答ふの科段分け〕（現代語譯）

法身は無相であつて見ることはできないことを説き明す中の第二は、維摩居士が答へます。この答へる中に三つの項目があります。

第一に、如來の絶妙なる本體は無相（一切の差別や執着を離れてゐて、特別のすがた形をもたない）であつて、見ることはできないこと直ちに答へます。

第二に、我觀われかんするにから以下、種々の認識對象のはたらきに就いて、個別的に如來の本體は見ることはできないことを説き明します。

第三に、如來の本體は見ることはできないことの結びの文言であります。この維摩居士の答へは、直接的には法身は無相であつて見ることはできない理由を釋き明し、また此の章より以前の第七章「觀衆生品」の説法を證あかし成立せしめてゐます。何故ならば、釋迦如來と維摩居士とは既に佛法の眞理の主であり、唯一究極の境地に達した人であります。「觀衆生品」に於ては衆生を觀くわんするに空（固定的實體はない）を以てせよと説きましたが、維摩居士は空の理に達してゐますから、導かれる衆生を空なりと觀くわんすることは明らかであります。

（訓讀文）

淨名答ふ。答への中に三有り。

第一に直に答ふ。妙本は無相にして見る可からずと。

第二に我觀するに従り以下、境の事に就きて別に見る可からずと明す。

第三に見る可からずと結す。

此は是れ近くは則ち爲に法身は無相にして見る可からずを釋し、遠くは則ち上の觀衆生章を證成す。何となれば則ち佛と淨名とは既に法の主たり。且是れ一極の人なり。然れば猶即ち所化の衆生の空なること明らかなり。

〔妙本は無相にして見る可からず〕（現代語譯）

（維摩居士が答へる中の第一は、如來の絶妙なる本體は無相であつて、見ることはできないと答へます。）

自らの實相を觀するが如く、佛を觀することも亦然なりとは、維摩居士は自らの身體の空（固定的實體が無いので一切の執著を離れる）を以て、如來の絶妙なる本體を類推するに、法身も同様であり見ることは出来ないと言ふのであります。此の中の法身についての解釋に四つの説があります。

第一には次のやうに云ひます。―此の法身は常住であつて永遠不滅の身體である。何故ならば此の維摩經は常住不滅を明らかに説いてはゐないけれども、此の經の本體は維摩居士の一丈四方の居室で説かれた六章に（第五章、第十章）に於て説き盡されてゐる。だから序説及び流通説に於ても常住不滅が説き明されてゐるが、それでは満足できないのである。―と。

第二には次のやうに解釋してゐます。―この維摩經では常住不滅の法身を説き明してゐない。なほこれは七百阿僧祇（阿僧祇は印度の數量の單位。巨大な數量）の年月を経た後には消滅する身體である。「無相であつて見ることはできない。」と言つてゐる。「無相」は、眞諦に於ける説き盡すことのできない究極の無相である。尚究極の無相では無いといふことは、當然に常住不滅ではないのであるが、「見ることができない。」とは、法身に常に備つてゐる定まりであつて、常住不滅だと言つてゐるのではない。―と。

第三には次のやうに云ひます。―此の維摩經は、序説・正説・流通説共にただ要約して常住不滅を説き明してゐる。それ故經文

のうはべは眞諦に於ける究極の無相を説いてゐるやうに見えるけれども、その趣意は常住不滅の法身を指し示してゐるのである、——と。しかしながら此の説について疑問に思ふのは、眞諦に於ける究極の眞理について論ずるならば、常住不滅は説き盡すことができませんで、常住不滅の意義を要約して説き明してゐるのは此の維摩經だけではありません。一般的な大乘佛敎の經典に於いても既に要約して説かれてゐます。

第四には次のやうに云ひます。——此の維摩經では如來の身體は常住不滅であると、既に説き明してゐる。但し、如來の究極の敎への内容及びどうして淨土にゐるのかといふ理由は明らかにしていません。

(訓讀文)

自ら身の實相を觀するが如く、佛を觀することも亦然りとは、自身の空を以て佛の妙本に類するに、法身も亦然り、無相にして見る可からずといふ。此の中の法身とは、解するに四有り。

一に云はく。是れ常住の身なり。何となれば則ち此の經には未だ常を明さずと雖も、經の正體は唯方丈所説の六章に在り。所以に序及び流通に常を明すも亦憚る可き無しと。

二に解して言はく。此の經には未だ常住を明さず。猶是れ七百阿僧祇の身なり。言ふ所の無相にして見る可からざるとは、是れ理の無相を謂ふなり。尚理の無相に非ざるは當に無常なるべしと雖も、見るべからざるは則ち法身の常法にして、是れ常住なりと言ふには非るなりと。

三に云はく。序と正と流通とを別たす、直此の經は略して常住を明すと云ふ。故に外の文は理の無相に似たりと雖も、内意は即ち常住の法身を指すと。然るに但疑ふらくは、理に就きて論を作さば、略して常の義を明すは何ぞ但此の經のみならん。初敎に於いても亦已に出でたり。

四に云はく。此の經は已に化主の身は是れ常住なりと明す。但し未だ一乗及び正因の義を顯はさずと。

經典(妙本は無相にして見る可らず)

維摩詰ノ言ク。如クニ自ラ觀ズルガニ身ノ實相ヲ一。觀ズルコトモレ佛ヲ亦然リ。

經典訓讀文

維摩詰の言はく。自ら身の實相を觀するが如く、佛を觀することも亦然り。

經典現代語訳

維摩居士は答へて言ひました。「私自身の身體の實相は即ち空（固定的實體は無いので一切の執着を離れる）であると觀するが如く、如來を觀することも同様であります。」

〔境の事に就きて見る可からざるを明す〕（現代語譯）

維摩居士が答へる中の第二は、種々の認識対象のはたらきに就いて、個人的に如來の本體は見ることはできないことを説き明します。我觀するにより以下がこれであります。

此の中に三つの項目があります。第一に、先づ過去・現在・未來の三世についてみることはできないことを説き明します。第二に、色を觀ぜずより以下、五陰（人間を形成してゐる五つの要素。色—物質。身體。受—感受作用。想—心に浮ぶ像、表象作用。行—意志あるいは衝動的欲求の心作用。識—認識作用）について見ることはできないことを説き明します。第三に、四大より起るに非ずから以下、百非（佛身はさういふ存在ではないといふ數多くの否定）について見ることはできないことを説き明します。

この三項目は皆、本地（佛・菩薩の本源における眞實身）の見ることを列擧して、假の姿である迹（衆生教化のためにこの世に現はれた姿、應迹の佛身）を見ることによつて、本地の眞實身も迹と同様に存在し、見る事ができるであらうといふ惑ひを捨て去らしめます。

或る説では次のやうに云ひます。—我觀するにから以下識の性を觀ぜずまでは、衆生教化のためこの世に現はれた應迹身の見る事が出来ないことを説き明してゐる。四大より起るに非ずから以下は、本源の眞實身の見る事ができないことを説き明します。

我觀するに從り以下、第二に境の事に就きて別に見る可からざるを明す。
中に就きて三有り。

第一に先づ三世に就きて見るべからざるを明す。

第二に色を觀ぜず從り以下、五陰に就きて見る可からざるを明す。

第三に四大より起るに非ず從り以下、百非に就きて見る可からざるを明す。

此は皆本の見る可からざるを擧げて、其の迹に執して本に併せて只是とするの惑を遣る。

或は云はく。我觀するに從り以下識の性を觀ぜずまでは應身の見る可からざるを明す。四大より起るに非ず從り以下、

眞身の見る可からざるを明す。

〔三世に就きて見る可からざるを明す〕

(この箇所について太子『義疏』は科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

經典

我觀ズルニ如來ヲ。前際ハ不レ來ヲ。後際ハ不レ去ヲ。今ハ則チ不レ住セ。

經典訓讀文

我如來を觀するに、前際は來らず、後際は去らず、今は則ち住せず。

經典現代語譯

「私が如來を觀じますに、過去は來ることはなく、未來は去りゆくことはなく、現在は一瞬も止まつてゐることはありません。(如來は時間を超越した存在です。)

〔御語釋〕（現代語譯）

前際とは未來を言ひます。（過去の誤りです）此の中の諸句は、若し眞諦（我々の現象世界をかくあらしめてゐる本源の世界）について見ることができないことを説き明すならば、眞諦そのものを見ることはできないのですから、見ることはできないと説き明します。

若し絶妙なる本地の無相（一切の差別や執著を離れてゐて、特別のすがた形をもたない）について見ることができないことを説き明すならば、絶妙なる本地の法身は、本來見ることはできないのですから、そのやうに説き明します。

（訓讀文）

前際とは未來を謂ふ。此の中の諸句は、若し眞諦に就きて見る可からざるを明さば、即ち眞諦は即ち然なり、故に見る可からずと明す。若し妙本の無相に就きて見る可からざるを明さば、亦即ち妙本の法身は法として即ち然なりと明すなり。

〔五陰に就きて見る可からざるを明す〕

（この箇所について太子『義疏』は科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。）

經典

不レ觀ゼレ色ヲ。不レ觀ゼニ色ノ如ヲ。不レ觀ゼニ色ノ性ヲ。不レ觀ゼニ受・想・行・識ヲ。不レ觀ゼニ識ノ如ヲ。不レ觀ゼニ色ノ性ヲ。

經典訓讀文

色を觀ぜず、色の如を觀ぜず、色の性を觀ぜず。受・相・行・識を觀ぜず、識の如を觀ぜず、識の性を觀ぜず。

經典現代語譯

「私が観じますに如來は、物質的なものではなく、物質の眞實のありさまでもなく、物質の本性でもありません。受（感受作用）・想（表象作用）・行（意志的・衝動的な心理作用）・識（認識作用）でもなく、識の眞實のありさまでもなく、識の本性でもありません。（如來

は人間の構成要素の五陰を超離した存在です。）

〔百非に就きて見る可からざるを明す〕

（この箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。）

經典

非ズニ四大ヨリ起ルニ一。同ジニ於虚空ニ一。

六入無クレ積ムコト。眼・耳・鼻・舌・身・心已ニ過タリ。

不レ在ラニ三界ニ一。三垢已ニ離テ。順ズニ三脱門ニ一。

具ニ足スレドモ三明一。與ニ無明一 等シ。

不ニ一相ナラ一 不ニ異相ナラ一。不ニ自相ナラニ 不ニ他相ナラ一。非ズニ無相ニ一 非ズニ取相ニ一。

不ニ此岸ナラ一 不ニ彼岸ナラ一 不ニ中流ナラ一。而モ化スニ衆生ヲ一。

經典訓讀文

四大しだいより起るおこに非あらず。虚空こくうに同おなじ。

六入ろくにゅう積つむこと無なく、眼げん・耳に・鼻び・舌ぜつ・身しん・心しん已すでに過こえたり。

三界さんがいに在あらず。三垢さんくすて已すでに離はなれて、三脱門さんだつもんに順じゆんず。

三明さんみんを具足ぐそくすれども、無明むみんと等ひとし。

一相いつそうならず異相いそうならず。自相じそうならず、他相たそうならず、無相むそうに非あらず取相しゆそうに非あらず。

此岸しがんならず彼岸ひがんならず中流ちゆうりゅうならず、而も衆生しゆじやうを化けす。

「私が観じますに如來は、四大（地・水・火・風）から構成されてゐるのではなく、虚空と同じです。六入（眼・意の六根と色・法の六境）のはたらきが積みかさなることは無く、眼・耳・鼻・舌・身・心のはたらきを既に超離してゐます。迷ひの三界の存在ではありません。三垢（貪欲・瞋恚・愚癡）から既に離れ、三解脱（空・無相・無願）を觀する教へに順應してゐます。三明（宿命・天眼・漏盡明。過去・未來・現在に通ずる力）を具足してゐるけれども、三明即無明（根本の無知、煩惱）と觀じ差別をしません。一相（ただ一つの相）でもなければ異相（種々異なつた相）でも無く、自相（自らの固有の相）でも無ければ他相（他の違つた相）でも無く、無相（特別の相がない）でも無ければ取相（形としてとらへられる相）でもありません。」

迷ひの生死の世に居るのでもなく、六度など悟り求める修行道に居るのでもなく、而も衆生を教化濟度します。」

〔御語釋〕（現代語譯）

此岸とは、迷ひある生死の此の現世です。彼岸とは、迷ひを滅し盡した涅槃の境地です。中流とは、悟りに到達すべく六度や三十七道品などの修行に勵む段階を云ひます。

（訓讀文）

此岸は生死なり。彼岸は涅槃なり。中流は道品なり。

經典

觀_レジテニ於寂滅ヲ一亦不ニ永ク滅セ一。

不_レ此ナラ不_レ彼。不_レ以テセ_レ此ヲ不_レ以テセ_レ彼ヲ。

不_レ可_レラニ以テ_レ智ヲ知ル一不_レ可_レニ以テ_レ識ヲ識ル一。無_ツレ晦無_シレ明。無_ツレ名無_シレ相。無_ツレ強無_シレ弱。非_ズレ淨ニ非_ズレ穢ニ。不

レ在_レラ_レ方ニ不_レ離_レ方ヲ。非_ズニ有_爲ニ一非_ズニ無_爲ニ一。

無_ツレ示無_シレ説。不_レ施_ナラ不_レ慳。不_レ戒_ナラ不_レ犯_ナラ。

不レ忍ナラ不レ悲ナラ。不レ進ナラ不レ怠ナラ。不レ定ナラ不レ亂ナラ不レ智ナラ不レ愚ナラ。不レ誠ナラ不レ欺ムカ。不レ來ラ不レ去ラ不レ出デ不レ入ラ。

一切ノ言語道斷セリ。非ズニ福田ニ一非ズレ不ルニニ福田ナラ一。非レ應ズルニニ供養ニ一非ズレ不ルニニ應ゼニ供養ニ一。非ズレ取ニ非ズ捨ニ。非ズニ有相ニ一非ズニ無相ニ一。

同ジクニ眞際ニ一等シニ法性ニ一。不レ可ラレ稱ス不レ可レ量ル過タリニ諸ノ稱量ヲ一。非ズレ大ニ非ズレ小ニ。非ズレ見ニ非ズレ聞ニ非ズレ覺ニ非ズレ知ニ。離ルニ衆ノ結縛ヲ一。

等シクニ諸智ニ一同ズニ衆生ニ一。

於テニ諸法ニ一無クニ分別一。一切無クレ得無クレ失。無クレ濁無クレ惱。無クレ作無クレ起。無クレ生無クレ滅。無クレ畏無クレ憂。無クレ喜無クレ厭。

無クニ己有一無クニ當有一無シニ今有一。

不レ可ラ下以テニ一切ノ言說ヲ一分別シ顯示ス上。

經典訓讀文

寂滅を觀じて亦永く滅せず。

此ならず彼ならず、此を以てせず彼を以てせず。

智を以て知る可からず、識を以て識る可からず。晦無く明無し。名無く相無し。強無く弱無し。淨に非ず穢に非ず。方に在らず方を離れず。有爲に非ず無爲に非ず。

示無く說無し。施ならず慳ならず。戒ならず犯ならず。

忍ならず恚ならず。進ならず怠ならず。定ならず亂ならず。智ならず愚ならず。誠ならず欺かず。

來らず去らず。出でず入らず。一切の言語道斷せり。福田に非ず福田ならざるに非ず。供養に應ずるに非ず供養に應ぜざるに非ず。取に非ず捨に非ず。有相に非ず無相に非ず。

眞際に同じく法性に等し。稱す可からず量る可からず。諸の稱量を過ぎたり。大に非ず小に非ず。見に非ず聞に非ず覺に非ず知に非ず。衆の結縛を離る。

諸智に等しく衆生に同ず。

諸法に於て分別無く、一切得無く失無く、濁無く惱無く。作無く起無く、生無く滅無く、畏無く憂無く、喜無く厭無し。

己有無く當有無く今有無し。

一切の言説を以て分別し顯示す可からず。

「寂滅の境地を觀じてゐるけれども、その究極の悟りの境地に永く止まつてゐることはない。迷ひの境地に在るのではなく、悟りの境地に在るのでもなく、迷ひの境地を以て満足してゐるのでもなく、悟りの境地を以て満足してゐるのでもなく、迷ひ・悟りを超越し而も同じてゐます。智慧を以て知ることでもできませんし、認識をはたらかせても識ることはできません。暗闇も無く、明さもありません。名稱も無く、姿かたちもありません。強くもなく、弱くもありません。清淨でもなく、穢汚でもありません。定まつた法面に居るのでもなく、いづれの方面からも離れることはありません。有爲(因縁によつて生じた生滅變化する存在)でもなく、無爲(因縁によつて生じたものではなく、生滅變化を超えてゐる存在)でもありません。説き示すこともできず、説き明すこともできません。布施を行ずるのでもなく、もの惜しみも致しません。戒律を守ることもなく、犯すことでもありません。耐へ忍ぶこともなく、怒ることでもありません。

精進することもなく、怠ることでもありません。禪定を行ずることもなく、心を亂すことでもありません。智慧をはたらかすこともなく、愚かでもありません。誠實であるのでもなく、欺くことでもありません。來ることもなく、去ることでもありません。出て行くこともなく、入つて來ることでもありません。

如來は一切の言語を超えてゐて表現することができません。福德を授ける人でもなく、福德を授けない人でもありません。供養を受けることもなく、供養を受けないことでもありません。執着や欲求もなく、執着や欲求を捨てることでもありません。姿かたちが

有るのでもなく、姿かたちが無いのでもありません。究極眞實のさとりと同じく、諸々の存在の眞實の本性と等しいのです。ほめ稱へることもできず、偉大さを量ることもできず、稱へや量りを超えてゐます。大きくもなく、小さくもありません。見るでもなく、聞くでもなく、感覺するでもなく、意識するでもなく、六識のはたらきを超越してゐるので、諸々の煩惱から超離してゐます。諸々の智慧を等しく有しながら、而も衆生と同じく振舞ひます。此の世に存在する一切の事象に對して誤つた分別をしないので、得ることも無ければ失ふことも無く、けがれも無ければ惱みも無く、作爲も無ければ生ずる因も無く、生ずることも無ければ滅することも無く、畏れも無ければ憂ひも無く、喜びも無ければ厭ふことも無く、以上の一切を超離してをります。過去に存在したてもなく、未來に存在するでもなく、現に今存在してゐるのでもありません。

以上の如く如來は、一切の言語による説明を以て思惟することも明らかに示すこともできません。」

「見るべ可らざると結す」

(この箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

經典

世尊。如來ノ身ハ爲スモレ若シトレ此ノ。

作スベシニ如キノレ是ノ觀ツ一。以スルニ斯ノ觀ヲ一者ヲ名ケテ爲スニ生觀ト一。若シ他觀ノ者ヲバ名ケテ爲ストニ邪觀ト一。

經典訓讀文

世尊、如來の身は此の若しと爲す。

是の如きの觀を作すべし。斯の觀を以てする者を名づけて生觀と爲す。若し他觀の者をば名づけて邪觀と爲すと。

經典現代語譯

「世尊よ、如來の身體は以上の如く見ることはできません。このやうに觀ずるべきです。このやうに觀ずる者を正しく觀ずると爲

します。そのやうに観じない者は邪よこしまな観じ方とします。」と。

〔舍利弗、淨名の本處を問ふに因りて、理は生滅無きを明す〕（現代語譯）

見阿閼佛章の中第二は、舍利弗が維摩居士の本源の所在する所を問ふことによつて、本地の究極の眞理に於ては佛身には生ずることも滅することも無いことを更に説き明し、佛身の生滅について衆生が疑問をもち執著してゐるのを捨て去らせます。爾その時に舍利弗、維摩詰ゆいまきつに問ふ。から以下がこれであります。

何故かと申しますと次の通りです。上述の佛身を説き明す中に於て、維摩居士は既に「私が佛身を觀じますには、佛身は無相むでう（一切の差別や執着を離れてゐて、特別のすがた形をもたない）であつて見ることはできません。自らの身體の實相は空くう（固定的な實體が無いので一切の執着を離れる）であつて見る事ができないと觀ずると同様であります。」と言ひます。もし自らの身が無相であつて見る事が出来ないとすれば、今現在維摩居士として生じてをられることをどう説明するのですか、といふ疑問が生じます。従つて、本地の究極の眞理に於ては生ずることも滅することも無いのである、生滅があると假りに説くけれども、菩薩が生滅の此の世に姿を現はすのは、唯衆生を教化濟度する爲であり、煩惱のひき起す業ごうによつて此の世に生まれるのではない、と更に説き明します。

直接的な關係は右の通りですが、間接的には、上述の觀衆生章に於て天女の生滅には定まりの無い旨を説き明かしましたが、これを證あかし成立せしめてゐます。何故かと申しますと次の通りです。觀衆生品に於ては、天女には生滅が無いとのみ直ちに言つてをります。それ故に此に於ては、釋迦如來の面前にて、維摩居士には生滅が無いと説き明し、これを證すのであります。生滅があると假りに説くけれども、それは菩薩が生滅の此の世に姿を現はすのは、唯衆生の願ひに應じて教化濟度の爲に現はれるのであり、煩惱のひき起す業ごうによつて生じたり滅したりするものではありません。

（訓讀文）

爾その時に舍利弗、維摩詰ゆいまきつに問ふ従り以下、第二に眞子は淨名の本處を問ふに因りて、更に理は本ほんには正しょう沒無しと明あかして物の疑ぎと執しやくとを遣やる。

何となれば、此は佛身を明す中に、淨名は既に我佛身を觀するに無相にして見る可からず、自ら身の實相は見る可からずと觀するが如しと言へり。此に因りて物疑ふらく。若し自らの身の空にして見る可からざれば、今自ら生じて居士と爲ること何ぞやと。所以に今此れは更に理は本には正沒無しと明す。假説して設ひ復生沒すと雖も、菩薩の生は唯物を化せんが爲なり。結業を以て生ずるには非ざるなり。

近縁は爾なりと雖も、遠くは則ち上の觀衆生章の天女の正沒定め無きの旨を證成す。何となれば、上には直ちに天女は生沒無しと言へり。故に此に佛の前にて淨名には生沒無しと證を爲すなり。假説して設ひ復生滅すと雖も、菩薩の生は唯是れ應の生にして、結業を以て生沒するに非ず。

〔舍利弗、淨名の本處を問ふ〕

(この箇所について太子『義疏』は、科段分けも示されず、特別の説明もない。)

經典 (舍利弗、淨名の本處を問ふ)

爾ノ時ニ舍利弗。問フニ維摩詰ニ。汝於テ何クニ沒シ而シテ來テヨ生ズルヤ此ニ。

經典訓讀文

爾その時とに舍利弗しゃりほつ、維摩詰いまいまつに問とふ。汝なんぢ何いかくに於おて沒もつし而しかして來きたりて此こゝに生しょうずるや。

經典現代語譯

その時に舍利弗は維摩居士に問ひました。

「居士さん、あなたは何れの國に於て沒し、そして此の娑婆世界に生れ出て來られたのでせうか。」

〔正しく理は生滅無きを明す〕 (現代語譯)

舍利弗が維摩居士の本源の所在する所を問ふことによつて、本地の究極の眞理に於ては佛身には生滅が無いことを更に説き明す中の第二は、本地の究極の眞理に於ては正しく生滅が無いことを説き明します。此の中に二つの項目があります。

第一に、法説を擧げて問答をなし、生滅が無いことを説き明します。

第二に、譬へを擧げて問答をなし、生滅が無いことを説き明します。

經典をこゝ覽なさい。

(訓讀文)

第二に正しく理は本には生没無きを明す中に就きて、亦二有り。

第一に法説を擧げて問答を作し、生没無きを明す。

第二に譬説を擧げて問答を作し、正没無きを明す。

見つ可し。

經典(正しく理は生滅無きを明す)

(法説を擧げて生滅無きを明す)

維摩詰ノ言ク。汝ガ所得ノ法ニ有リヤニ没生一乎。

舍利弗ノ言ク。無キニ没生一也。

若シ諸法無クバニ没生ノ相一。云何ソ問テ言フヤニ汝於テ何句ニ没シ而シテ來テニ生ズルヤト此ニ一。

經典訓讀文

維摩詰の言はく。汝が所得の法に没生有りや。

舍利弗の言はく。没生無きなり。

見阿闍佛章
若し諸法没生の相無くば、云何ぞ問うて汝何くに於て没し而して來りて此に生ずるやと言ふや。

維摩詰居士は言ひました。「君が会得してゐる此の世の諸々の事象に生滅がありますか。」舍利弗は答へて言ひました。「生滅はありません。」

「若し此の世の諸々の事象に生滅する相が無いならば、私に對し何れの國に於て没し、そして此の世に生れ出てきたのですかなど、君は何故そんな問ひを發するのですか。」

經典（譬説を擧げて生滅無きを明す）

於テレ意ニ云何ン。譬ヘバ如キハニ幻師ノ幻ヲ作スルガ男女ヲ一。寧ロ没生スラヤ耶。

舍利弗ノ言ク。無キニ没生一也。

汝豈不ルヤレ聞カニ佛ノ説クラニ諸法ハ如幻ノ相ナリト一乎。

答テ曰。如シレ是ノ。

若シ一切ノ法如幻ノ相ナラバ者。云何ソ問テ言フヤニ汝於テレ何クニ没シ而シテ來テコ生ズルヤ此ニ一。舍利弗。没ハ者爲リニ虚誑ノ法ノ壞敗之相一。生ハ者爲リニ虚誑ノ法ノ相續之相一。菩薩ハ雖モレ没スト不レ盡サニ善本ヲ一。雖モレ生ズ不レ長ゼニ諸惡ヲ一。

經典訓讀文

意に於て云何ん。譬へば幻師の男女を幻作する如きは、寧ろ没生するや。

舍利弗の言はく。没生無きなり。

汝豈佛の諸法は如幻の相なりと説くを聞かざるや。

答へて曰はく。是の如し。

見阿閼佛章
若し一切の法如幻の相ならば、云何ぞ問うて汝何くに於て没し而して來りて此に生ずるやと言ふや。舍利弗。没は虚誑の法の壞敗の相爲り、生は虚誑の法の相續の相爲り。菩薩は没すと雖も善本を盡さず、生ずと雖も諸惡を長ぜず。

經典現代語譯

(譬説を擧げて生滅無きを明す)

「譬へば幻術師が幻術によつて作り出した男女の如きは、生滅がありますか。君はどう思ひますか。」
舍利弗は答へて言ひました。「生滅はありません。」

「此の世の諸々の事象は幻まぼろしの如き相であると、釋迦如來が説法されたのを君は聞いたことがあるか。」
舍利弗は答へて言ひました。「はい、その通り聞きました。」

「若し此の世の一切の事象が幻の如き相であるならば、私に對して何れの國に於て没し、そして此の世に生れ出てきたのですか。君は何故そんな問ひを發するのですか。舍利弗よ。『没する』とは虚假なる諸事象が破壊する際のすがたであり、『生ずる』とは虚假なる諸事象がひき續き存續する際の姿すがたである。菩薩は滅すると雖も善根功德のたねが盡き果つることはなく、この世に生れ出て諸々の惡行を増長させることはない。」

〔理の中には生沒無しと雖も俗の中には生沒有り、爲に淨名の本處を説くを明す〕(現代語譯)

見阿闍佛章の第三は、釋迦如來は、本地の究極の眞理に於ては佛身に消滅は無いのであるけれども、娑婆世界の世俗の道理に於ては生滅が無いわけではないことを説き明し、以て維摩居士の眞實身の本地(妙喜國)を願はします。是こゝの時に佛ぶつに告ぐから以下がこれであります。此の中に三つの項目があります。

第一に、釋迦如來は、維摩居士の本地の妙喜國を正しく顯はします。

第二に、舍利弗は未曾有であると讚嘆します。

第三に、維摩居士は二度に亘つて問ひかけ、舍利弗は答へます。そして世俗の道理としては佛身には生滅が無いのではないが、菩薩は衆生の願ひに應じ教化濟度のために此の世に姿を現はするのであつて、煩惱のひき起す業しよくによつて此の世に現はれるのではないことを、維摩居士は説き明します。

(訓讀文)

是の時に佛に告ぐ従り以下、第三に如來は理の中には生沒無しと雖も俗の中には無きには非ずと明して、以て其の本を顯はす。中に就きて三有り。

第一に如來正しく其の本を顯はす。

第二に眞子未曾有なりと嘆ず。

第三に淨名と眞子とは二番の間答を作し、復俗の中に生沒無きに非ずと雖も、菩薩の生は唯是れ應の生にして、是れ結業をもて生ずるに非ざるを明す。

經典 (理の中には生沒無しと雖も俗の中には生沒有り、爲に淨名の本處を説くを明す)

(如來正しく淨名の本處を顯はす)

是ノ時ニ佛。告ツニ舍利弗ニ。有リ。國名ツクニ妙喜ト。佛ヲ號スニ無動ト。是ノ維摩詰ハ於テニ彼ノ國ニ一沒シ。而シテ來テ生ゼリ。此ニ。

經典訓讀文

是の時に佛、舍利弗に告ぐ。國有り妙喜と名づく。佛を無動と號す。是の維摩詰は彼の國に於て沒し、而して來りて此に生ぜり。

經典現代語譯

この時に釋迦如來は舍利弗にお告げになつた。「妙喜國と名づける國があり、その國の教化の主を無動如來(阿闍如來)と稱する。維摩居士はその妙喜國に於て沒し、そして此の娑婆世界に生れ出てきたのである。」

經典 (舍利弗未曾有なりと嘆ず)

舍利弗ノ言ク。未曾有ナリ也。世尊。是ノ人乃チ能ク捨テニ清淨ノ土ヲ。而モ來テ樂フ。此ノ多キニ怒害一處ヲ上。

經典訓讀文

舍利弗の言はく。未曾有なり。世尊。是の人乃ち能く清淨の土を捨て、而も來りて此の怒害多き處を樂ふ。

經典現代語譯

舍利弗は言ひました。「世尊よ、維摩居士さんは妙喜なる清淨の國を捨て、而も此の濁惡なる娑婆世界に生まれ出ることを願ふとは、まさに未曾有でございます。」

經典（菩薩の生は應の生にして、結業もて生ずるに非ざるを明す）。

維摩詰。語ラク舍利弗ニ。於テレ意ニ云何シ。日光出ツル時與レ冥ト合スルヤ乎。

答テ曰ク。不ナリ也。日光出ツル時ハ則チ無シニ衆冥一。

維摩詰ノ言ク。夫レ日ハ何ガ故ソ行ニ閻浮堤ヲ一。

答テ曰ク。欲ス下以テニ明照ヲ一爲ニレ之ガ除ントト冥ヲ。

維摩詰ノ言ク。菩薩モ如シレ是ノ。雖モレ生ズニ不淨ノ佛土ニ一。爲ナリレ化センガニ衆生ヲ一。不ルナリ下與ニ愚闇一而共ニ合スルニハ也。但滅

スルノミニ衆生ノ煩惱ノ闇ヲ一耳。

經典訓讀文

維摩詰。舍利弗に語らく。意に於て云何ん。日光出づる時冥と合するや。

答へて曰はく。不なり。日光出づる時は則ち衆冥無し。

維摩詰の言はく。夫れ日は何が故ぞ閻浮堤を行るや。

答へて曰はく。明照を以て之が爲に冥を除かんと欲す。

維摩詰の言はく。菩薩も是の如し。不淨の佛土に生ずと雖も、衆生を化せんが爲なり。愚暗と共に合するにはあらざるなり。但

衆生の煩惱の闇を滅するのみ

經典現代語譯

維摩居士は舍利弗に問ひました。「太陽の光が差した時、暗闇と合體しますか。君はどう思ひますか。」
舍利弗は答へて言ひました。「太陽の光が差した時、暗闇は悉く消えてしまひます。」

維摩居士はまた問ひました。「太陽は何故に娑婆世界をめぐり照すのであらうか。」舍利弗は答へて言ひました。「太陽が照り輝き、娑婆世界の暗闇を除かんが爲です。」

維摩居士は法を説き言ひました。「菩薩も太陽の光の如くである。不淨の娑婆世界に姿を現はしても、それは衆生を教化濟度せんが爲である。衆生の暗愚に染まることはない。ただ暗闇の如き煩惱に惑ふ衆生を救ひとるのみである。」

〔大衆の渴仰に因りて淨名の本國を見せしむ〕（現代語譯）

見阿闍佛章の第四は、會座の大衆が維摩居士の徳を仰ぎ慕ふことに因つて、その眞實身の本地たる妙喜國を見せます。爾の時に大衆渴仰してから以下がこれであります。直接的關係はその通りですが、間接的には上述の不思議章の説——高廣の座を燈王如來から借りてきて何らの妨礙も無かつたなどを證し成立せしめてゐます。此の中に四つの項目があります。

第一に、釋迦如來は妙喜國を見せてあげなさいと、維摩居士に命じます。

第二に、維摩居士は釋迦如來の仰せを奉じ、大衆に妙喜國を見せます。

第三に、釋迦如來は大衆に菩提心を發すやう勧めます。

第四に、維摩居士の神通力によつて妙喜國は此の娑婆世界に出現しましたが、また本の處に還ります。

（訓讀文）

爾の時に大衆渴仰して従り以下、第四に大衆の渴仰に因りて、其の本を見せしむ。近縁は爾なりと雖も、遠くは則ち上の不思議品の説を證成す。中に就きて四有り。

一に佛見せしむ可しと勅す。

二に淨名勅を奉じて見せしむ。

三に佛大衆を勸めて發心せしむ。
四に本に還る。

〔佛見せしむ可しと勸す〕

(この箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

經典(佛見せしむ可しと勸す)

是ノ時ニ大衆渴仰シテ欲スレ見ントニ妙喜世界ノ無動如來ト及び其ノ菩薩・聲聞ノ之衆トヲ一佛知テニ一切衆會ノ所念ヲ一告ゲテニ維摩詰ニ一
言ク善男子爲ニ此ノ衆會ノ一現スベシニ妙喜國ノ無動如來ト及び諸ノ菩薩・聲聞ノ之衆トヲ一衆ハ皆欲スレ見ント。

經典訓讀文

是の時に大衆渴仰して妙喜世界の無動如來と及び其の菩薩・聲聞の衆とを見んと欲す。佛一切衆會の所念を知りて、維摩詰に告げ
て言はく。善男子此の衆會の爲に、妙喜國の無動如來と及び諸の菩薩・聲聞の衆とを現すべし。衆は皆見んと欲す。

經典現代語譯

此の時に會座の大衆たちは、維摩居士の徳を仰ぎ慕つて、その本地たる妙喜國の無動如來(阿闍佛)とその國の諸々の菩薩や聲聞
たちを見たいと願つた。釋迦如來は會座の一切の大衆の願ひを知り、維摩居士に仰せられた。「居士よ。會座の大衆のために、妙喜
國の無動如來と及び諸々の菩薩や聲聞たちを現はし出してやりなさい。大衆は皆見たいと欲してゐます。」

〔淨名勸を奉じて見せしむ〕

(この箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

於テレ是ニ維摩詰。心ニ念ズラク。吾當ニ下不レ起シテニ座ヲ一接ス。妙喜國ノ鐵圍山。川。溪谷。江河。大海。泉源。須彌諸山及ビ日月。星宿。天。龍。鬼神。梵天等ノ宮。竝ニ諸ノ菩薩。聲聞之衆。城邑。聚落。男女大小。乃至無動如來及ビ菩提樹。諸ノ妙蓮華ノ能ク於テニ十方ニ一作スニ佛事ヲ一者ヲ上。三道ノ寶階アリ。從リニ閻浮堤一至ルニ切利天ニ一。以テニ此ノ寶階ヲ一諸天來下シテ。悉ク爲ニ禮ニ敬シ無動如來ヲ一。聽ニ受ス經法ヲ一。閻浮堤ノ人モ亦登テニ其ノ階ヲ一上ニ昇シ切利一。

見ルニ彼ノ諸天ヲ一。妙喜世界ハ成ニ就セリ如キレ。是ノ無量ノ功德ヲ一。

上ハ至リニ阿迦尼叱天ニ一。下ハ至ルマデニ水際ニ一。以テニ右手ヲ一斷チ取ルコト如クシニ陶家ノ輪ノ一入ルコトニ此ノ世界ニ一。猶シレ持スルガニ華鬘ヲ一示サンニ一切ノ衆モ一。

作シニ是ノ念ヲ一已テ入リニ於三昧ニ一。現ジニ神通力ヲ一。以テニ其ノ右手ヲ一斷チ取リ妙喜世界ヲ一。置クニ於此ノ土ニ一。

彼ノ得タルニ神通ヲ一菩薩及ビ聲聞衆竝ニ餘ノ天人ハ。俱ニ發シテ聲ヲ言ク。唯然リ。世尊。誰カ取リレ我ヲ去ルヤ。願クハ見レヨニ救護セ一。無

動佛言ク。非ズニ我ガ所爲ニ一。是レ維摩詰ノ神力ノ所ナリレ作ス。

其ノ餘ノ未ダレ得ニ神通ヲ一者ハ。不レ覺ラニ不レ知ラニ己ガ之所ヲ往ク。

妙喜世界雖モ入ルトニ此ノ土ニ一而モ不ニ増減セ一。於テモ是ノ世界ニ一亦不ニ迫隘ナラ一。

如クニシテ本ノ無シレ異ルコト。

經典訓讀文

是に於て維摩詰、心に念ずらく、吾當に座を起たずして、妙喜國の鐵圍山、川、溪谷、江河、大海、泉源、須彌諸山及び日月、星宿、天、龍、鬼神、梵天等の宮、並びに諸の菩薩、聲聞の衆、城邑、聚落、男女大小。乃至無動如來及び菩提樹、諸の妙蓮華の能く十方に於て佛事を作す者を接すべし。三道の寶階あり。閻浮堤從り切利天に至る。此の寶階を以て諸天來下して、悉く爲に無動如來を禮敬し、經法を聽受す。閻浮堤の人も亦其の階を登りて切利に上昇し、彼の諸天を見る。妙喜世界は是の如きの無量の功德を成就せり。

上は阿迦尼叱天に至り、下は水際に至るまで、右手を以て斷ち取ることを陶家の輪の如くし、此の世界に入ること、猶し華鬘を持するがごとく一切の衆に示さん。

是の念を作し已りて三昧に入り、神通力を現じ、其の右手を以て妙喜世界を斷ち取り、此の土に置く。

彼の神通を得たる菩薩及び聲聞衆並びに餘の天人は、俱に聲を發して言はく、唯然り。世尊。誰か我を取り去るや。願はくは救護せられよ。無動佛言はく、我が所爲に非ず。是れ維摩詰の神力の作す所なり。

其餘の未だ神通を得ざる者は、己れが往く所を覺らず知らず。

妙喜世界此の土に入ると雖も而も増減せず。是の世界に於ても亦迫隘ならず。本の如くにして異なること無し。

經典現代語譯

そこで維摩居士は心の中で念じた。私は坐つたままで妙喜國の種々の様を大衆に見せてあげよう。妙喜國の鐵に圍まれた山、川、溪谷、江河、大海、泉の源、須彌などの諸山、太陽、月、星、諸天・龍神・梵天などの宮殿並びに諸々の菩薩・聲聞衆、都市、集落、男女の大人や子供たち、無動如來（阿闍佛）及び神聖なる菩提樹、諸々の絶妙なる蓮華、これらは十方に於て佛陀のはたらきを爲すものであるが、これらを見せてあげよう。寶で飾られた三條の階段があり、此の娑婆世界から三十三天（帝釋天以下の諸天）に住む所まで通じてゐる。諸天は悉く此の階段を降つてきて無動如來を敬ひ禮拜し、その經法を聽き教へを受ける。娑婆世界の人も亦此の階段を登つて三十三天に到り、諸天を見る。妙喜國はこのやうに無量の功德を成就してゐる。妙喜國の最上層の有頂天から下は水面までを右手で斷ち切ることは、陶工がろころを廻して陶工を斷ち切る如く容易であること、そして妙喜世界に立ち入ることとは花飾りを手に持つが如く容易であることを、會座の一切の大衆に示さうと、維摩居士は念じた。

維摩居士は以上のやうに念じをはつて三昧（心を集中する）に入り、神通力を發現し、右手で妙喜世界を切り取り、此の娑婆世界の地上に置いた。

神通力を得てゐる妙喜國の菩薩や聲聞や諸天たちは一齊に聲をそろへて言ひました。「世尊よ、我が妙喜國を切り取り、持ち去るのは誰ですか。お救ひ下さい。お願いします。」無動如來は言ひました。「私の所爲ではない。維摩居士が神通力を以て爲してゐる

もので、心配無用だ。」

未だ神通力を得てゐないその他の人々は、己の國が持ち去られてゐることを覺りもせず、知ることも無かつた。妙喜國は此の娑婆世界に移されたが、何らの増益も無かつた。娑婆世界も亦妙喜國によつてせばめられ、狹苦しくなること無く、本の通り何らの變りも無かつた。

〔佛大衆を勧めて發心せしむ〕（現代語譯）

會座の大衆が維摩居士の徳を仰ぎ慕ふことに因つて、その眞實身の本地たる妙喜國を見せる中の第三は、釋迦如來が大衆に菩提心を發すやう勧めます。此の中に三つの項目があります。

第一に、釋迦如來は菩提心を發すやう勧めます。

第二に、大衆は菩提心を發します。

第三に、釋迦如來は、大衆が將來妙喜國に生れる、即ちさとりを得られるであらうと證しを授けます。

經典をご覧なさい。

會座の大衆が利益を得るのはこの箇所しよせつに於て終ります。それ故、此の維摩經の正説は此の箇所までであると、知ることができま

（訓讀文）

第三の勸發の中に就きて三有り。

一に直ちに勸む。

二に大衆發心す。

三に如來記を賜ふ。

見つ可し。

得益は此に至りて止む。故に知る、正説は此に至りて已るなりと。

經典（佛大衆を勤めて發心せしむ）

（直ちに勸む）

爾ノ時ニ釋迦牟尼佛。告グニ諸ノ大衆ニ。汝等且ニ觀ルヤニ。妙喜世界ノ無動如來ト其ノ國ノ嚴飾ナルト。菩薩ノ行淨ク。弟子ノ精白ナルトヲ。皆曰ク。唯然リ。已ニ見ルト。若シ菩薩欲セバレ得ントニ如キノ是ノ清淨ノ佛土ヲ。當ニ學ブニ無動如來ノ所行之道ヲ。

經典訓讀文

爾ノ時ニ釋迦牟尼佛、諸ノ大衆に告ぐ。汝等且に妙喜世界の無動如來と其の國の嚴飾なると、菩薩の行淨く、弟子の精白なるを觀るや。皆曰はく。唯然り、已に見ると。若し菩薩是の如きの清淨の佛土を得んと欲せば、當に無動如來の所行の道を學ぶべし。

經典現代語譯

その時に釋迦如來は諸々の大衆に告げられた。「汝等は、妙喜國の無動如來と其の國が美しく飾られてるさま、菩薩の修行が清淨で、佛弟子の修行が清淨潔白であるさまを觀たであらう。大衆は「はい仰せの通り觀させて頂きました。」と答へました。釋迦如來は言ひました。「汝等が若し此のやうな清淨な佛國土に生れたいと願ふならば、まさに無動如來の實踐されるさまを學ぶべきである。

經典（大衆發心す）

現ズニ此ノ妙喜國ヲ一時。娑婆世界ノ十四那由陀ノ人ハ發シニ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ。皆願フレ生ゼントニ於妙喜佛土ニ。

經典訓讀文

此の妙喜國を現する時、娑婆世界の十四那由陀の人は阿耨多羅三藐三菩提心を發し、皆妙喜佛土に生ぜんと願ふ。

妙喜國が大衆の前に現出し、釋迦如來が菩提心を發すやう勸めた時、娑婆世界の無數の人々は、無上絶對のさとりを願ひ求め、それによつて衆生を教化濟度しようといふ心を發し、人々は皆、妙喜佛國に生れたいと願つた。

經典（如來來を賜ふ）

釋迦牟尼佛即チ記シテレ之ニ曰ク。當ニ生ズニ彼ノ國ニ一。

經典訓讀文

釋迦牟尼佛即ち之に記して曰はく。當に彼の國に生ずべし。

經典現代語譯

釋迦如來は言ひました。「汝等は皆妙喜國に生れるであらう。（さとりを得る）」と證しを授けました。

〔本處に還る〕（現代語譯）

（此の箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。）

經典（本處に還る）

時ニ妙喜世界ハ於テニ此ノ國土ニ一所ノ應キニ邊益ス一其ノ事訖已リ。還リ復タニ本處ニ一。舉ゲテレ衆ヲ皆見ル。

經典訓讀文

時に妙喜世界は此の國土に於て邊益すべき所の其の事訖已り、本處に還り復す。衆を舉げて皆見る。

經典現代語譯

見阿闍佛章

その時に妙喜國は、此の娑婆世界に於て大衆に利益を與へ救ひとるといふ、爲すべき事が終つたので本の處へ還り復しました。大衆は皆これを見送りしました。

「見阿闍佛章」の中、正説分終り。

〔流通説 科段分け〕（現代語譯）

佛舍利弗に告ぐ。汝此の妙喜世界及び無動佛を見るや不やから以下は、此の維摩經を「序説」「正説」「流通説」の三つに大きく分けましたが、その第三の「流通説」（教へを後世に流布、傳持するために委囑する）であります。此の中を二つの項目に分けます。

第一に、見阿闍佛章の此の箇所から次の第十三章法供養章の終りまでを、流通の緣由（由つて來る事由）と名づけれます。
第二に、第十四章囑累章は彌勒菩薩ほかに付囑し、正しく流通せしめます。

（訓讀文）

佛舍利弗に告ぐ。汝此の妙喜世界及び無動佛を見るや不や従り以下、經の中の第三の大段、流通説なり。中に就きて開きて二と爲す。

第一に此従り法供養章に訖る以來、流通の緣由と名づく。

第二に囑累の一章は、正しく付囑して流通せしむ。

〔流通の緣由の科段分け〕（現代語譯）

流通説の中の第一の流通の緣由について、その中をまた二つの項目に分けます。

第一に、此の維摩經の功德を正しく讚嘆します。見阿闍佛章の此の箇所から、法供養章の中の則ち去・來・今の佛に供養すと爲すまでが是れであります。

此の經典を供養する人は、如來を供養するのと同じでありますので、その人が尊いのです。經典を書き寫し奉持する人の居る處には如來がそこに在ますので、その處が貴いのです。此の經典を受持（教へを受けて忘れず保つ）する者には深い功德が授けられ、此の經典を流通する者は善い報いが受けられると勸めて、流通する人を求めます。

第二に、財物による供養を列挙し、經典の教へを信受することによる供養と比較し、教へを信受することによる供養に勝るものはないことを説き明します。法供養章の中の天帝。正使三千大千から以下、法供養章の終りまでが是れであります。

(訓讀文)

第一の緣由の中に就きて、亦開きて二と爲す。

第一に此從り法供養章の中の則ち去・來・今の佛に供養すとに訖るまで、正しく此の經を嘆ず。人に在りては人尊く、地に在りては地貴し。受持する者は功深く、流通する者は報い重しと、勸めて流通の人を覓む。

第二に法供養章の中の天帝。正使三千大千從り以下、法供養章を盡すまで、財供を擧げて格量するを明し、法の供養の尊きに如からざるを明す。

〔正しく此の經の功德を嘆ずの科段分け〕(現代語譯)

流通の緣由の中の第一の、此の維摩經の功德を正しく讚嘆する中について、亦二つの項目があります。

第一に、舍利弗が此の經の功德を讚嘆します。見阿閼佛章の終りまでが是れであります。

第二に、帝釋天が此の經の功德を讚嘆します。法供養章の初めから則ち去・來・今の佛を供養すと爲すまでが是れであります。

(訓讀文)

第一に正しく經を嘆ずる中に就きて亦二有り。

第一に身子嘆ず。此の章を盡すまで是なり。

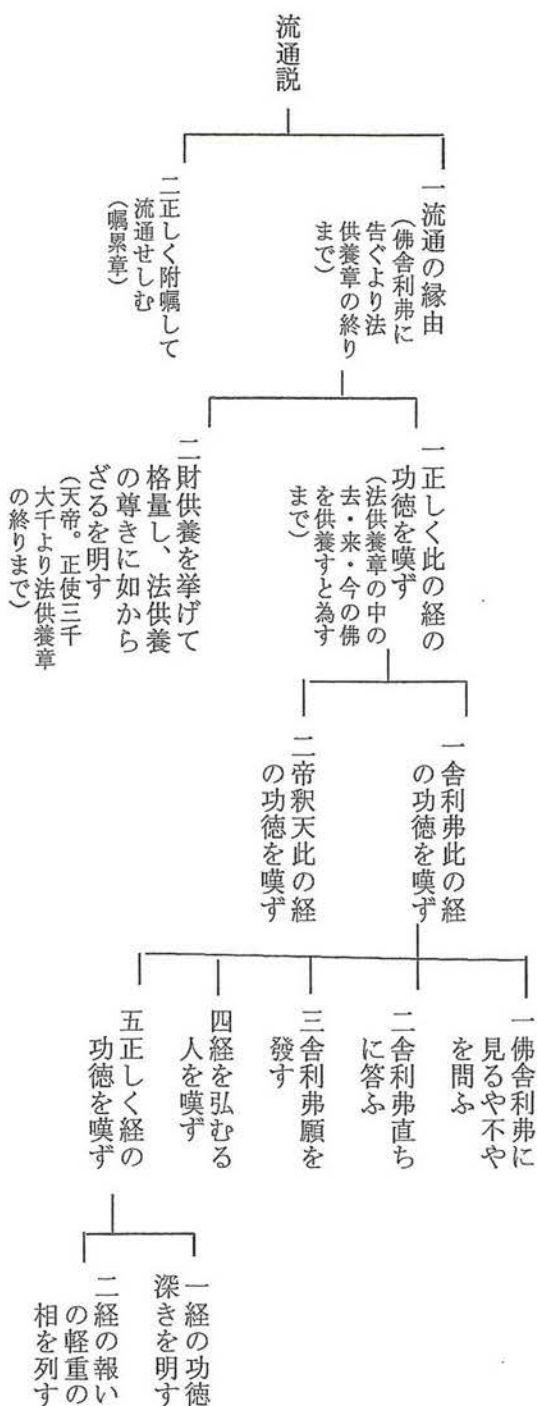
第二に帝釋天嘆ず。法供養章の初め從り則ち去・來・今の佛を供養すと訖るまで是なり。

〔舍利弗此の經の功德を嘆ずの科段分け〕(現代語譯)

此の維摩經の功德を正しく讚嘆する中の第一の、舍利弗が讚嘆する中について、亦五つの項目が有ります。

(訓讀文)

第一の眞子が嘆ずる中に就て亦五有り。



〔佛、舍利弗に見るや不やを問ふ〕 (現代語譯)

舍利弗が維摩經の功德を讚嘆する中の第一は、釋迦如來が舍利弗に「汝は、維摩居士が神通力によつて現出した妙喜國と阿閼如來とを見ましたか。」と問ひます。何故問ふかと申しますと、問ふことによつて舍利弗が見た諸々のありさまを讚嘆せしめ、それによつて此の維摩經の教へを後世に流布、傳持せしめる事由を明らかにしたいと欲したからであります。

(訓讀文)

第一に佛、眞子に見るや不やを問ふ。問ふ所以は、問ひに因りて其の見る所を嘆ぜしめ、仍ち流通を明さんと欲す。

經典（佛、舍利弗に見るや不やを問ふ）

佛告^クニ舍利弗^ニ。汝見^ルヤニ此ノ妙喜世界及ヒ無動佛^ヲ一不^ヤ。

經典訓讀文

佛^{ゴツ}舍利弗^ニに告^グぐ。汝^ニ此^ノの妙喜世界及^ビび無動佛^ヲを見る^ヤ不^ヤ。

經典現代語譯

釋迦如來は舍利弗に問ひました。「汝は妙喜國と無動如來（阿闍如來）とを見ましたか。」

〔舍利弗直ちに答ふ〕（現代語譯）

舍利弗が維摩經の功德を讚嘆する中の第二は、舍利弗は唯然^リ、已^ニ見ると直ちに答へます。

（訓讀文）

第二^ニに直^チに唯然^リ。已^ニ見ると答^フ。

經典（舍利弗直ちに答ふ）

唯然^リ。已^ニ見^ル。

經典訓讀文

唯然^リ。已^ニ見^ル。

經典現代語譯

「はい仰せの通り拜見しました。」

〔舍利弗願を發す〕（現代語譯）

舍利弗が維摩經の功德を讚嘆する中の第三は、一切衆生をして此のやうにあらしめて頂きたいと釋迦如來に願ひします。世尊。願はくは…しめたまへから以下が是れであります。

（訓讀文）

第三に世尊。願はくは…しめたまへ従り以下、願を發す。

經典（舍利弗願を發す）

世尊。願クハ使下 一切衆生ヲシテ得ルコトニ 清淨ノ土ヲ一 如クニ 無動佛ノ一。獲ルコトニ 神通力ヲ一 如クナラヤ 維摩詰ノ上。

經典訓讀文

世尊。願はくは一切衆生をして清淨の土を得ること無動佛の如く、神通力を獲ること維摩詰の如くならしめたまへ。

經典現代語譯

「世尊よ。一切の衆生に無動如來の妙喜國の如き清淨な國土を與へて下さい。維摩居士さんのやうな神通力を得させて下さい。何卒お願ひします。」

〔經を弘むる人を嘆ず〕（現代語譯）

舍利弗が維摩經の功德を讚嘆する中の第四は、此の維摩經を弘宣する人を讚嘆します。世尊。我等以下が是れであります。經典の教へは人に由つて弘まりますので、その人を讚嘆するのです。

（訓讀文）

第四に世尊。我等従り以下、經を弘むる人を嘆ず。法は人に由りて弘まるが故に人を嘆ず。

經典（經を弘むる人を嘆ず）

世尊。我等快ク得テニ善利ヲ一。得タリ下見テニ是ノ人ヲ一親近供養スルヲ上。

經典訓讀文

世尊。我等快く善利を得て、是の人を見て親近供養するを得たり。

經典現代語譯

「世尊よ。私たちは心地よくすぐれた恩恵を得、維摩居士さんに親しみ近づき供養することができました。」

〔正しく經の功德を嘆ずの科段分け〕（現代語譯）

舍利弗が維摩經の功德を讚嘆する中の第五は、正しく維摩經の功德を讚嘆します。其の諸々の衆生以下が是れであります。此の中について亦二つの項目があります。

（訓讀文）

第五に其の諸々の衆生従り以下、正しく經を嘆ず。中に就きて二有り。

〔經の功德の深きを明す〕（現代語譯）

正しく維摩經の功德を讚嘆する中の第一は、經典に對する七種類の所行（維摩經を現在聞く。佛の滅後に聞く。信解する。受持する。讀誦する。解説する。教へに従つて修行する）によつて、總體として維摩經の深い功德を説き明します。

（訓讀文）

第一に總じて經の七品に依りて功の深きことを明す。

經典（經の功德の深きを明す）

其ノ諸ノ衆生。若ハ今現在。若ハ佛ノ滅後。聞クニ此ノ經ヲ一者モ亦得ンニ善利ヲ一。況ヤ復聞キ已テ信解シ。受持シ。讀誦シ。解説シ。如クレ法ノ修行センヲヤ。

經典訓讀文

其の諸の衆生、若しくは今現在、若しくは佛の滅後、此の經を聞く者も亦善利を得ん。況んや復聞き已りて信解し、受持し、讀誦し、解説し、法の如くに修行せんをや。

經典現代語譯

「諸々の衆生にして今現に此の經典を聞く者、或いは釋迦如來の滅後に聞く者も、亦すぐれた恩恵を得られるでありませう。況んや聞き終つて、信じ了解し、教へを受けて忘れず保ち、讀誦し、解き聞かせ、教へに従つて修行する者、これの恩恵は尚更であります。」

〔經の報いの輕重の相を列す〕（現代語譯）

正しく維摩經の功德を讚嘆する中の第二は、經典の報いの種々異なるさまを列舉します。若し手に…得る…有らば以下が是れであります。六句あります。初句は經典を手に奉持する報いを説き明します。第二句は若し…讀誦し…有らば以下、經典を深く學び修行する報いを説き明します。第三句は其れ…供養する…有らば以下、供養する人は尊く、その人の報いを説き明します。第四句は其れ書持する…有らば以下、經典を書き寫し奉持する人の居處は貴く、その居處の報いを説き明します。第五句は若し此の經を聞きて以下、隨喜の功德（維摩經の功德を讚嘆する結果、自己もまた功德を得る）の深い報いを説き明します。第六句は、此の經典の僅か一偈であつても他者の爲に説くならば、大きな報いが得られると、上述の諸句の證しと爲します。

（訓讀文）

第二に若し手に…得る…有らば従り以下、別に其の報いの輕重の相を列す。即ち六句有り。初句は手に得るを明す。

二に若し…讀誦し…有らば從り以下、深く得るを明す。
 三に其れ…供養する…有らば從り以下、人に在りては即ち人の尊きを明す。
 四に其れ書持する…有らば從り以下、地に在りては即ち地の貴きを明す。
 五に若し此の經を聞きて從り以下、隨喜の功深きを明す。
 六に少なきを舉げて上の句を證す。

經典（經の報いの輕重の相を列す）

若シ有ラバ 手ニ得ルニ是ノ經典ヲ一者上。便チ爲スニ已ニ得タリトニ法寶ノ之藏ヲ一。

若シ有ラバ 讀ヲ誦シ解ヲ釋シ其ノ義ヲ一。如クニ説ノ修行スル上。則チ爲スニ諸佛ノ之所トニ護念スル一。其レ有ラバ 供ヲ養スル如キノレ是ノ人ヲ一者上。當ニレ知ル則チ爲ストニ供ヲ養スト於佛ヲ一。其レ有ラバ 書ヲ持スル此ノ經卷ヲ一者上。當ニレ知ル其ノ室ニ即チ有ニ如來一。若シ聞テ是ノ經ヲ一能ク隨喜セン者ハ。斯ノ人ハ則チ爲スレ趣クトニ一切智ニ一。若シ能ク信ヲ解シテ此ノ經ノ乃至一四句ノ偈ヲモ一。爲ニレ他ノ説ク者ハ。當ニレ知ル此ノ人ハ即チ是レ受クトニ阿耨多羅三藐三菩提ノ記ヲ一。

經典訓讀文

若し手に是の經典を得る者有らば、便ち已に法寶の藏を得たりと爲す。

若し其の義を讀誦し解釋し、説の如く修行する有らば、則ち諸佛の護念する所と爲す。其れ是の如きの人を供養する者有らば、當に知るべし則ち佛を供養すと爲すと。其れ此の經卷を書持する者有らば、當に知るべし其の室に即ち如來有ますと。若し是の經を聞きて能く隨喜せん者は、斯の人は一切智に趣くと爲す。若し能く此の經の乃至一四句の偈をも信解して、他の爲に説く者は、當に知るべし此の人は即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提の記を受くと。

經典現代語譯

「此の經典を手に奉持する者があれば、此の人は經典の教への寶の藏を所持してゐることになります。經典の意義を讀誦し解釋

し、教へに従つて修行する者があれば、此の人は諸々の如來によつて念じ護られることになります。右の如き修行者を供養する者があれば、それは如來を供養することに相成ると知るべきです。此の經典を書き寫して奉持する者があれば、此の人の居る處には必ず如來が居られると知るべきです。此の經典の教へを聞いてその功德を讚嘆する者は、此の人は一切を知る智慧を得る道を進むことになります。此の經典の教へを信じ了解して、僅か四句からなる經文の一偈であつても他者の爲に説く者は、此の人は衆生を教化濟度する無上絶對のさとりに達するといふ證し^{あか}を、如來から授けられると知るべきです。」

第十三 法 供 養 章

〔法供養章の名稱の由來〕（現代語譯）

此の經典の第十三章は法供養章であります。此の章は聖者の心を求め願ひ心服してゐる人が、此の維摩經を流通することを説き明します。聖者の心を求め願ひ心服するのは、佛法の修行に連なるものであり、即ち「佛法修行による供養」でありますから、此の章の名稱を法供養品と名づけれます。

（訓讀文）

法供養章第十三なり。此の章は法を通ずる者の聖心を憐ひ悦ぶことを明す。故に因りて章の目と爲すなり。

〔帝釋天此の經の功德を嘆す〕（現代語譯）

流通説に於いて正しく此の經の功德を讚嘆する中の第一は舍利弗が讚嘆します（見阿闍佛章）が、第二は、帝釋天が此の經の功德を讚嘆します。此の法供養章の初めから則ち去・來・今の佛を供養すと爲すまでが是れであります。此の中を四つの項目に分けま

第一に流通すべき此の維摩經を先づ讚嘆します。佛法の眞理とすべてのものの眞實ありのままのすがたを、このやうに定まつてゆるぎなく、明瞭に説いた經典、これによつて衆生に疑問の生ずる餘地の無いことを説き明します。

第二に、我佛の…を解するが如くから以下、經典に記してある七種類の所行（今現に聞く、佛滅後に聞く、信解する、受持する、讀誦する、解説する、教へに従つて修行する。但し此の箇所の經典では、今現に聞く、佛滅後に聞く、解説する、は記されてゐない。）に依つて、經典の功德と報いとありさまを説き明します。

第三に、世尊から以下、此の維摩經を流通する人たちを、誓つて護ることを説き明します。

第四に、佛の言はく。善き哉から以下、釋迦如來が此の維摩經の特質を述べ、此の經の功德を成り立たしめることを説き明します。

帝釋天の讚嘆については、皆經典を御覽なさい。

(訓讀文)

此の章の初め從り則ち去・來・今の佛を供養すと爲すに訖るまで、正しく經を嘆ずる中の第二に、帝釋嘆ず。中に就きて亦開きて四と爲す。

第一に先づ所通の法を嘆ず。理と相と決定し分明にして疑ふ可きこと無きを明す。

第二に我佛の…を解するが如く從り以下、經の七章に依りて功と報との相を明す。〔義疏〕如我從佛

第三に世尊從り以下、誓つて經を通ずるの人を護ることを明す。

第四に佛の言はく。善き哉從り以下、如來の述成を明す。

第一は皆見つ可し。

經典 (帝釋天此の經の功德を嘆ず)

(流通せしむる經を嘆ず)

爾ノ時ニ釋提桓因。於テニ大衆ノ中ニ一白シテ。佛ニ言ク。世尊。我雖モ從ヒニ佛及ヒ文殊師利ニ一聞クト。百千ノ經ヲ。未ダニ會テ聞カニ此ノ不可思議。自在神通ニシテ。決定セル實相ノ經典ヲ一。

經典訓讀文

爾の時に釋提桓因、大衆の中に於て佛に白して言はく。世尊。我佛及び文殊師利に従ひ百千の經を聞くと雖も、未だ曾て此の不可思議、自在神通にして、決定せる實相の經典を聞かず。

經典現代語譯

その時に帝釋天は、會座の大衆の中から立ち上がり、釋迦如來に申し上げて言ひました。「世尊よ、私は世尊及び文殊さんに隨行して數百千の經典を聞きましたが、この不可思議、神通力を自由自在に現はし、すべてのものの眞實ありのままのすがたを、このやうに定まつてゆるぎなく説いた經典、これは未だ曾て聞いたことがございません。」

經典（經の七品に依りて功德と報とを明す）

如クニ我解スルガニ佛ノ所説ノ義趣ヲ一若シ有テニ衆生一聞テニ此ノ經法ヲ一信ヲ解シ受ヲ持シ讀ヲ誦セン之ヲ一者ハ。必ズ得ルコトニ是ノ法ヲ一不レ疑ハ。何ニ況ヤ如クレ説ノ修行セント。斯ノ人則チ爲ス下閉ヂニ衆ノ惡趣ヲ一開クト中諸ノ善門ヲ上。常ニ爲ルニ諸佛ノ之所トニ護念スル一。降ニ伏シ。外學ヲ一摧ニ滅シ魔怨ヲ一。修ニ治シ菩提ヲ一。安ニ處シ道場ニ一。履ニ踐セン如來所行ノ之跡ヲ一。

經典訓讀文

われがつしよせつぎしゆげ
我佛の所説の義趣を解するが如く、若し衆生有りて此の經法を聞きて、之を信解し受持し讀誦せん者は、必ず是の法を得ること
うたがいはず。何に況んや説の如く修行せんをや。斯の人則ち衆の惡趣を閉ぢ諸の善門を開くと爲す。常に諸佛の護念する所と爲
る。外學を降伏し、魔怨を摧滅し、菩提を修治し、道場に安處し、如來所行の跡を履踐せん。

經典現代語譯

「如來が説かれた教への意義を私が解するのと同じやうに、若し衆生にして此の維摩經を聞いて信じ解し、受持し、讀誦する者があれば、必ず此の教へを身につけることは疑ひありません。況んや説かれた教へに従つて修行する者は尚さらです。これらの人は諸々の惡業の果をのがれ、善行への道を開きます。常に諸佛が念じ護つて下さいます。佛法以外に邪しまな教へを降伏し、惡魔を碎き滅し、覺りの道を修行し、佛道を修行する處に安坐し、如來の行じた跡を履み行ひませう。」

經典（誓つて流通する人を護ることを明す）

世尊。若シ有ラバニ受持シ讀誦シ如クレ説ノ修行スル者一。我當ニ下與ニ諸ノ眷屬一供養シ給事ス上。所在ノ聚落・城邑・山林・曠野ニシテ有ルニ是ノ經一處ニハ。我亦與ニ諸ノ眷屬一聽ニ受センガ法ヲ一故ニ、共ニ其ノ所ニ到リテ、其ノ未ダレ信者ニハ當ニレ令ムレ生ゼレ信ヲ。其ノ已ニ信スル者ニハ當ニ爲ニ作ス護ルコトヲ。

經典訓讀文

世尊。若シ受持シ讀誦シ説ノ如ク修行する者有らば、我當に諸の眷屬と供養し給事すべし。所在の聚落・城邑・山林・曠野にして是の經有る處には、我亦諸の眷屬と法を聴受せんが故に、共に其の所に到りて、其の未だ信ぜざる者には當に信を生ぜしむべし。其の已に信ずる者には當に爲に護ることを作すべし。

經典現代語譯

「世尊よ。此の維摩經を受持し、讀誦し、教へに従つて修行する者があれば、私は諸々の眷屬と共に供養し、お側にお仕へ致しませう。集落・都市・山林・曠野、何處であらうと此の經典が説かれる所には、私は亦諸々の眷屬と説法を聽かんが爲に、共に其所へ行き、此の維摩經を未だ信じてゐない者には信を生ぜしむるべく努めます。既に維摩經を信じてゐる者に對しては、その者たちを必ず守護致します。」

經典（如來の述成を明す）

佛ノ言ク。善キ哉。善キ哉。天帝。如シニ汝ガ所説ノ一。我助ケンニ汝ノ喜ヒラ一。此ノ經ハ廣ク説クニ過去・未來・現在ノ諸佛ノ不可思議ノ阿耨多羅三藐三菩提ヲ一。是ノ故ニ天帝。若シ善男女人ニシテ受ニ持シ讀ニ誦シテ供養セン。是ノ經ヲ一者ハ。則チ爲ス供ニ養スト去・來・今ノ佛ヲ一。

經典訓讀文

佛の言はく。善き哉善き哉。天帝。汝が所説の如し。我汝の喜びを助けん。此の經は廣く過去・未來・現在の諸佛の不可思議の阿耨多羅三藐三菩提を説く。是の故に天帝。若し善男子善女人にして是の經を受持し讀誦して供養せん者は、則ち去・來・今の

佛を供養すと爲す。

經典現代語譯

釋迦如來は言ひました。「帝釋天よ。まことによろしい。汝の所説の通りである。私は、汝の法悦を更に高めてあげよう。此の維摩經は、過去・未來・現在の諸佛の無上絶對のさとりを以て衆生を教化濟度する教へを廣く説いたものである。帝釋天よ。それ故に世俗の善男子や善女人にして此の經を受持し讀誦して供養を捧げる者は、過去・未來・現在の諸佛に對して供養を捧げることに相成るのである。」

〔財供養を擧げて格量し、法供養の尊きに如からざるを明すの科段分け〕（現代語譯）

流通の緣由（由つて來る事由）の中の第二は、財物の數々を比較できるやうに列擧し、財物の供養は、教へを信受することに由る法の供養には及ばないことを説き明します。天帝。正使三千大千世界にから以下が是れであります。此の中を二つの項目に分けま

第一に、初めからは是の因縁を以て福は量る可からず訖るまでは、財物の數々を比較できるやうに列擧し、財供養は法供養に及ばないことを正しく説き明します。

第二に、佛天帝に告ぐ。過去から以下、古の事例を引用して、現在に於いても法供養の勝れてゐることを證します。

（訓讀文）

天帝。正使三千大千世界に從り以下。流通の緣由の中、第二に財供養を擧げて格量し、法の供養には如かずと明す。中に就きて開きて二と爲す。

第一に初め從り是の因縁を以て福は量る可からず訖るまでは。正しく格量して財供は法の供養には如かずと明す。

〔義疏〕福不可盡

第二に佛天帝に告ぐ。過去從り以下、古を引きて今を證す。

〔財供養は法供養に如かずと明す〕（現代語譯）

財物の數々を比較できるやうに列擧し、財供養は法供養に及ばないことを説き明す中について、亦三つの項目があります。

第一に、釋迦如來は財物の數々を比較できるやうに列擧し、その財供養による福德は多しや否を帝釋天に問ひます。

第二に、釋提桓因の言はくから以下、釋迦如來の問ひに従ひ、帝釋天が答へます。

第三に、佛天帝に告ぐから以下、法供養が財供養に勝る理由を説き明し、結びの文言とします。

（訓讀文）

第一に格量する中に就きて亦三有り。

第一に佛格量を作して天帝に問ふことを明す。

第二に釋提桓因の言はく従り以下、帝釋順じて答ふるを明す。

第三に佛天帝に告ぐ従り以下、會を結す。

經典（佛、財供養は法供養に如かずと明す）

（佛、格量を作して帝釋天に問ふ）

天帝。正使三千大千世界ニ如來ノ滿テランコトニレ。中ニ。譬ヘバ如ニ甘蔗・竹・葦・稻・麻・叢林一。若シ有リテニ善男子善女人一。或ハ以テシ一劫或ハ減一劫ヲ。恭敬尊重シ讚嘆供養シテ奉ルニ。諸ノ所安ヲ一。至テハニ諸佛ノ滅後ニ一。以テニ一ノ全身ノ舍利ヲ一。起ツルコトニ七寶ノ塔ヲ一。從廣一四天下。高サハ至ルマデニ梵天ニ一。表刹莊嚴シ。以テニ一切ノ華香・瓔珞・幢幡・伎樂ノ微妙第一ナルヲ一。若クハ一劫若クハ減一劫。而供養セシ一。天帝ノ於テレ意ニ云何シ。其ノ人植ルコトレ福ヲ寧ロ爲シヤレ多シト不ヤ。

經典訓讀文

天子。正使三千大千世界に如來の中に満てらんことに、譬へば甘蔗・竹・葦・稻・麻・叢林の如ならんに、若し善男子善女人有り

て、或いは一劫或いは滅一劫を以てし、恭敬尊重し讚嘆供養して諸の所安を奉る。諸佛の滅後に至りては、一一の全身の舍利を以て、七寶の塔を起つること、從廣は一四天下、高さは梵天に至るまで、表刹莊嚴し、一切の華香・瓔珞・幢幡と伎樂の微妙第一なるを以て、若しくは一劫若しくは滅一劫、之を供養せん。天帝の意に於て云何ん。其の人福を植うることを寧ろ多しと爲んや不や。

經典現代語譯

「帝釋天よ。此の三千大千世界の中に於いて、譬へは甘蔗・竹・葦・稻・麻・叢林の如くに數多くの如來がいらつしやるが、在家の善男子や善女人にして、一劫或いは一劫近くの無限とも言へる長年月の間、數多の如來を恭敬し、尊重し、讚歎し、諸々の衣服や玩具等を獻じて供養したとする、諸々の如來の滅後に於いては、その全身のご遺骨の一つ一つを收めるべく金・銀等七つの寶で塔を建て、塔の廣さは四大州と同じほど廣く、高さは梵天の住む天上界に届くほど高く、一劫若しくは一劫近くの無限とも言へる長年月の間、塔上の竿を莊嚴にし、一切の花と香り・珠玉の飾り・飾りの長旗を供へ、微妙第一なる音樂を奏して供養したとする。帝釋天よ汝は、その善男子善女人がうける福德は大きいと思ふか、どうか。」

經典 (帝釋天答ふ)

釋提桓因ノ言ク。甚ダ多シ。世尊。彼ノ之福德ハ若シ以テニ百千億劫ヲ一説クトモ不ラシレ能ハレ盡スコト。

經典訓讀文

釋提桓因の言はく。甚だ多し。世尊。彼の福德は若し百千億劫を以て説くとも盡くすこと能はざらん。

經典現代語譯

帝釋天は答へて言ひました。「甚だ多いと思ひます。世尊よ。その福德は、百千億劫といふ無限に近い長年月に亘つて説いても、説き盡くすことはできないと思ひます。」

經典（会を結す）

佛告ツニ天帝ニ。當ニ知ル。是ノ善男子善女人ハ聞テニ是ノ不可思議解脱ノ經典ヲ。信解シ受持シ讀誦シ修行セバ。福ハ多シニ於彼ヨリモ。所以ハ者何シ。諸佛ノ菩提ハ皆從リ。此生ズ。菩提之相ハ不レ可ラニ限量ス。以テニ是ノ因緣ヲ一福ハ不レ可カラレ量。

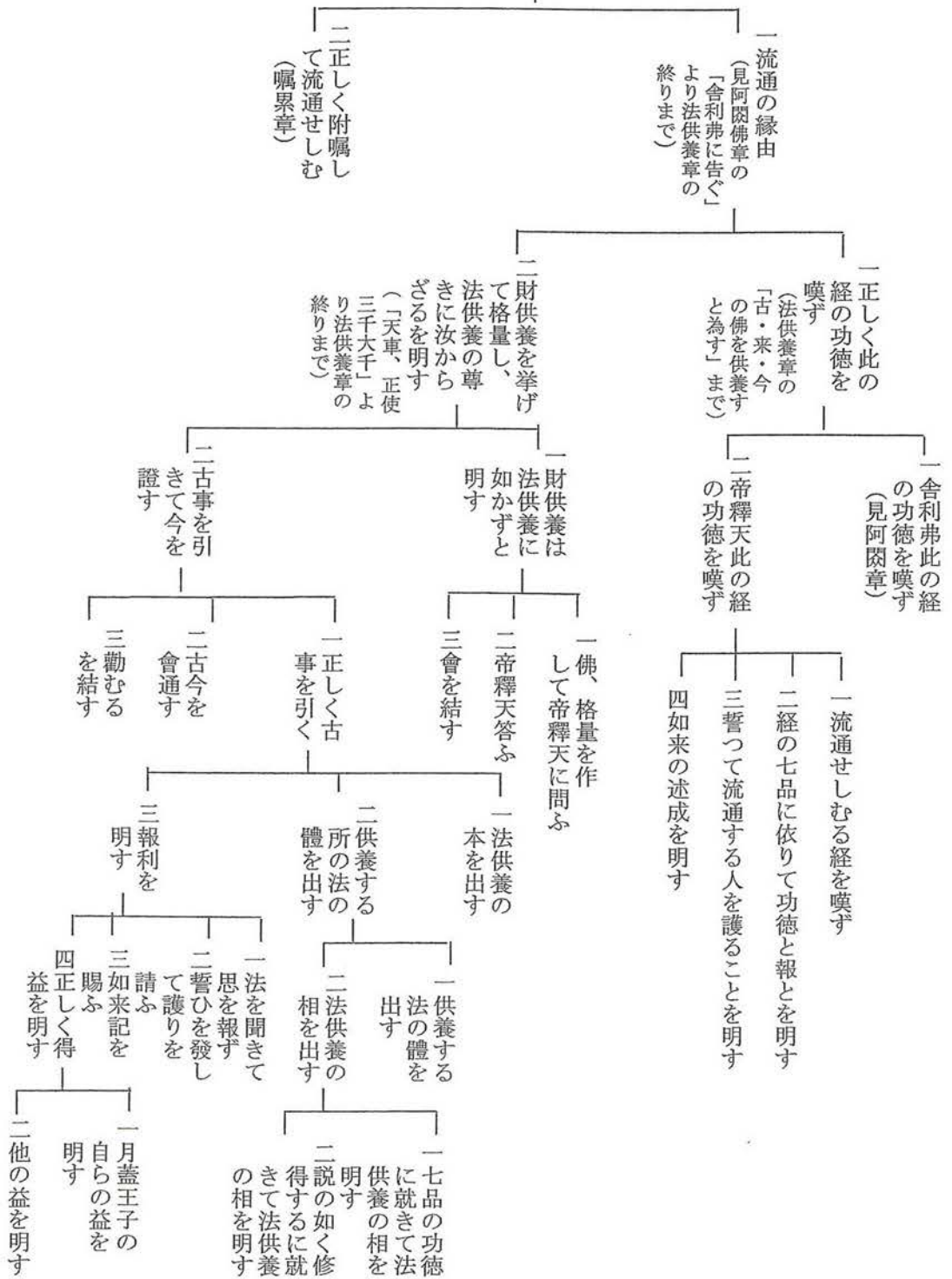
經典訓讀文

佛ぶつ天帝てんたいに告つぐ。當まさに知しるべし。是この善男子善女人ぜんなんしぜんにょにんは是この不可思議解脱ふかしぎげだつの經典きんぎょうを聞ききて、信解しんげし受持じゆぢし讀誦どくじゆし修行しゆぎようせば、福ふくは彼かれよりも多おほし。所以ゆゑんは何いかん。諸佛しよぶつの菩提ぼだいは皆みな此こゝ從より生しやうず。菩提ぼだいの相さうは限げん量りやうす可べからず。是この因緣いんねんを以もつて福ふくは量はかる可べからず。

經典現代語譯

釋迦如來は帝釋天にお告げになりました。「在家の善男子善女人にして此の不可思議かつ束縛から解脱してゐる經典を聞いて、信じ解し、教へを受けて忘れず、讀誦し、修行するならば、財供養よりも福德は多い。何故ならば、諸佛の崇高な覺りは皆此の經典より發生してをり、その覺りの様相は量り盡くすことはできない。この因緣ある故に、法供養による福德は量り盡くすことはできない。以上のことをまさを知るべきである。」

流通説



〔古事を引き今を證すの科段分け〕（現代語譯）

財物の數々を比較できるやうに列擧し、財物の供養は法の供養には及ばないことを説き明す中の第二は、古代の事例を引用して、現在に於いても法供養の勝れてゐることを證しますが、この中を三つの項目に分けます。

第一に、古代の事例を正しく引用します。

第二に、天帝。時の王寶蓋はから以下、古代の王や王子が現在に於いて如來と成つてゐることを説き、古代と現在とを結び合せます。

第三に、是の如く天帝。當に…を知るべしから以下、法供養を勧める結びの文言であります。

（訓讀文）

第二に 古を引きて今を證する中に就きて、開きて三と爲す。

第一に 正しく古事を引く。

第二に 天帝。時の王寶蓋は従り以下、古今を會通す。

第三に 是の如く天帝。當に…を知るべし従り以下、勧むるを結す。

〔正しく古事を引くの科段分け〕（現代語譯）

古の事例を引用して現在に於いても法供養が勝れてゐることを證する中の第一は、古代の事例を正しく引用しますが、その中に三つの項目があります。

第一に、先づ法供養の源泉を示します。

第二に、佛言はく。善男子から以下、供養する所の法の本體を正しく示します。

第三に、佛天帝に告ぐから以下、法供養の報いによつて得られる利益を説き明します。

（訓讀文）

第一に正しく古事を引くに就きて三有り。

第一に先づ法供養の本を出す。

第二に佛言はく。善男子従り以下、正しく供養する所の法の體を出す。

第三に佛天帝に告ぐ従り以下、報利を明す。

〔法供養の本を出す〕（現代語譯）

第一の法供養の源泉を示すについては、經典を（）覽なさい。

（訓讀文）

第一は見つ可し。

經典（法供養の本を出す）

佛告_グニ天帝ニ。過去無量阿僧祇劫ノ時。世ニ有_{リキ}レ佛。號シテ曰_フニ藥王如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世閒解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊ト。世界ヲバ名ツケニ大莊嚴ト。劫ヲバ名ツクニ莊嚴ト。佛壽ハ二十小劫。其ノ聲聞僧ハ三十六億那由他ニシテ。菩薩僧ハ有_{リキ}ニ十二億一。

天帝是ノ時ニ有_リニ轉輪聖王一。名ケテ曰_フニ寶蓋ト。七寶具足シテ主ドルニ四天下ヲ。王ニ有_リニ千子一。

端正勇健ニシテ。能ク伏スニ怨敵ヲ。爾ノ時ニ寶蓋與ニ其ノ眷屬ト。供_フ養シテ藥王如來ヲ。施スコトニ諸ノ所安ヲ。至_リレ滿ツルニ五劫ヲ。過_ギニ五劫ヲ。已_テ。告_グニ其ノ千子ニ。汝等モ亦當_ニ如ク_レ我ガ以_テニ深心ヲ。供_フ養ス於佛_上。於_テレ是ニ千子受ケテ。父王ノ命ヲ。供_フ養スルコト藥王如來ヲ。復滿タシテニ五劫ヲ。一切ニ施ス_レ安ヲ。

章其ノ王ノ一子ヲ名ケテ曰_フニ月蓋ト。獨_リ坐シテ思惟スラク。寧_ソ有_ラシヤトニ供養ノ殊ニ過タル_レ此ニ者一。以_テニ佛ノ神力ヲ。空中ニ有_リテ_レ天曰_ク。善男子。法之供養ハ勝_レタリトニ諸ノ供養ニ。即チ問_フ。何ヲカ謂_フヤトニ法之供養ト。天ノ曰_ク。汝可_シニ往_テ問_フニ藥王如來ニ。當

ニ廣ク爲ニ汝ガ説ク法之供養ヲ。即時二月蓋王子ハ行ニ詣シテ藥王如來ニ稽ニ首シ佛足ヲ。却キテ住シニ一面ニ。白シテ佛ニ言ク。世尊。諸ノ供養ノ中ニ法供養勝レタリ。云何ガ名ケテ爲スヤニ法ノ之供養ト。

經典訓讀文

佛天帝に告ぐ。過去無量阿僧祇劫の時、世に佛有りき。號して藥王如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世閒解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と曰ふ。世界をば大莊嚴と名づけ、劫をば莊嚴と名づく。佛壽は二十小劫、其の聲聞僧は三十六億那由他にして、菩薩僧は十二億有りき。

天帝。是の時に轉輪聖王有り。名づけて寶蓋と曰ふ。七寶具足して四天下を主どる。王に千子有り。

端正勇健にして、能く怨敵を伏す。爾の時に寶蓋其の眷屬と與に、藥王如來を供養して、諸の所安を施すこと、五劫を滿つるに至り、五劫を過ぎ已りて。其の千子に告ぐ。汝等も亦當に我が如く深心を以て佛を供養すべしと。是に於て千子父王の命を受けて藥王如來を供養すること、復五劫を滿たして一切に安を施す。

其の王の一子を名づけて月蓋と曰ふ。獨り坐して思惟すらく。寧ろ供養の殊に此に過ぎたる者有らんやと。佛の神力を以て、空中に天有りて曰はく。善男子。法の供養は諸の供養に勝れたりと。即ち問ふ。何をか法の供養と謂ふやと。天の曰はく。汝往いて藥王如來に問ふ可し。當に廣く汝が爲に法の供養を説くべしと。即時に月蓋王子は藥王如來に行詣して、佛足を稽首し、卻きて一面に住し、佛に白して言はく。世尊。諸の供養の中に法供養勝れたり。云何が名づけて法の供養と爲すや。

經典現代語譯

釋迦如來は帝釋天にお告げになりました。

「無量とも言へるほど數へきれない長年月の昔、その世に佛陀がをられた。佛陀の十種の稱號は藥王如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世閒解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と言つた。その世界を大莊嚴と名づけ、存在する年月を莊嚴と名づけてみた。佛陀の壽命二十小劫の長年月、從ふ聲聞僧は三十六億那由他（數量の單位。異說多し）、菩薩僧は十二億人であつた。」

法供養章

「帝釋天よ。此の時代に寶蓋といふ名の轉輪聖王（統治の輪を轉ずる聖王）が居た。七寶（さとりを得るための七つの教へ）を具足し、四

大州を統治してゐた。寶蓋王に千人の子供があり、儀容氣高く、武勇に勝れてゐて、怨敵を降伏せしめた。その時に寶蓋王は一族郎黨と共に藥王如來に諸々の衣服や玩具などを獻じ、五劫の長年月に亘つて供養した。五劫の供養が終つたところで、千人の子供たちに『私が供養したやうに、汝たちも亦深く道を求める心を以て藥王如來を供養しなさい』と申しつけた。そこで千人の子供たちは父王の命令に従つて、藥王如來に諸々の衣服や玩具などを獻じ、また五劫の長きに亘つて供養した。

寶蓋王の千人の子供の中に月蓋と名づける一子が居た。獨り坐つて考へるには、供養の中に私たちが爲したものよりも格別に勝れた供養があるのであらうか、と。如來は神通力を以て、天人をして空中から言はしめた。『月蓋王子よ。法の供養は他の諸々の供養よりも勝れてゐるのだ。』と。そこで王子は問うた。『法の供養とは如何なる供養を言ふのでせうか。』と。天人は答へて言つた。『汝は藥王如來のもとへ行つて問ひなさい。如來は汝の爲に、法の供養について廣く説いてくれるであらう。』と。月蓋王子は直ちに藥王如來のもとに行詣し、み足を頂いて拜禮し、引き下がつて一隅に立ち、如來に申しあげた。『世尊よ。諸々の供養の中、法供養が勝れてゐると申します。法供養とは如何なる供養なのでせうか。』

〔供養する所の法の體を出すの科段分け〕（現代語譯）

古代の事例を正しく引用する中の第二は、供養する所の法の本體を示しますが、その中について二つの項目があります。

第一に、先づ供養する法の本體を示します。

第二に、若し是の如き等の經を聞きてから以下、法供養の相状を示します。

或る經典研究家は次のやうに云ひます。―此の箇所初めから共に歎譽する所なりに訖るまでは、供養する法の正體を示し、能く衆生をして…しむから以下は、法供養のはたらきを示す―と。

此の科段分けも亦好いと思ひます。

（訓讀文）

但第二の供養する所の法の體を出す中に就きて、二有り。

第一に先づ法の體を出す。

第二に若し是の如き等の經を聞きて従り以下、其の供養の相を出す。『義疏』は聞如是經、或るは云はく、初め従り共に歎譽する所なりに訖るまでは其の法の正體を出し。共に歎譽する所なり従り以下、其の用を出す。亦好きなり。

〔供養する法の體を出す〕

(この箇所について太子『義疏』は科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない)

經典 (供養する法の體を出す)

佛言ク。善男子。法供養トハ者。諸佛ノ所説ノ深經ナリ。一切世間ハ難クレ、信ジ難シレ、受ケ。

經典訓讀文

佛言はく。

善男子。法供養とは、諸佛の所説の深經なり。一切世間は信じ難く受け難し。

經典現代語譯

藥王如來は仰せられた。

「月蓋王子よ。法供養とは、諸々の佛陀が説かれた深經 (諸法實相の深理を説く大乘經典) である。一切世間の凡夫は信じ難く受持し難い。」

〔御語釋〕(現代語譯)

信じ難く受け難しとは、凡夫の心(世俗の安逸にふける心)を以てしては、信受することはできないのです。

(訓讀文)

信じ難く受け難しとは、凡夫の心の得可きに非ず。

經典

微妙ニシテ難シ見。清淨ニシテ無シ染。非ズニ但分別思惟之所ニ能ク得ル。

經典訓讀文

微妙にして見難し。清淨にして染無し。但分別思惟の能く得る所に非ず。

經典現代語譯

微妙な理で見きはめることは難しい。清淨であつて穢れは無い。單に執著、差別の分別心を以て考察しても信受することはできない。

〔御語釋〕（現代語譯）

但分別思惟の能く得る所に非ずとは、單にあれこれ分別して思ひはからふことに由つて知覺できるのではありません。必ず功德を修し積み重ねることを資けとして信受することができると説き明してゐます。一説では次のやうに云ひます。一經典の説く眞理は深遠微妙であるので、執著、差別のはからひある分別心を以ては信受することはできない、一と。

（訓讀文）

但分別思惟の能く得る所に非ずとは、直に智慧分別に由りて能く知るに非ず。要らず功德を修するを資と為して乃ち得可しと明す。一に云はく。經の理深微なれば分別心を以て得可しとす可からずと。

經典

法供養章
菩薩ノ法藏ノ所攝ナリ。

經典訓讀文

菩薩の法藏の所攝なり。

經典現代語譯

菩薩が諸佛の教説を攝める藏としてゐる。

〔御語釋〕（現代語譯）

菩薩の法藏の所攝なりとは、經典は、菩薩が諸佛の大乘の教説を攝める藏であることを説き明してゐます。

（訓讀文）

菩薩の法藏の所攝なりとは、經は大乘の法藏を含むことを明すなり。

經典

陀羅尼ノ印。印シテ之ヲ至リニ不退轉ニ。成ヲ就ス。六度ヲ一。

經典訓讀文

陀羅尼の印、之を印して不退轉に至り、六度を成就す。

經典現代語譯

陀羅尼（諸佛の所説をよく保つて亡失しない）の教への決定したもの、此を信受すべく刻みこむことによつて、さとり境地から不退轉の地位に達し、それに由つて六度（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧）の修行を成就する。

〔御語釋〕（現代語譯）

法供養章
陀羅尼とは、惣持（諸佛の諸説をよく保つて亡失しない）と漢譯します。經典は、惣持の教への決定したもの、これを信愛すべく刻み

こむことによつて、亡失することなく、さとりの境地から退くことなく、それに由つて六度の行に到達することを説き明してゐます。一説では次のやうに云ひます。―此の箇所から以下は皆、衆生に利益を與へることを説き明してゐる。無相（一切の差別や執著から離れてゐる）の教への決定したものを、衆生の心の中に刻み込み、亡失せしめず、さとりの境地から不退轉ならしめ、よつて六度の修行を成就する事を説き明してゐる、―と。

〔訓讀文〕

陀羅尼とは、此に惣持と言ふ。經は惣持の印を以て之を印し、亡せず退せず、六度に及ぶことを明すなり。一に云はく。此従り以下、皆能く物を益することを明す。無相の印を以て物の胸衿に印し、亡せず不退を得さしめ、六度を成就するを明すなりと。

經典

善ク分コ別シテ義ヲ一順スニ菩提ノ法ニ一。

經典訓讀文

善く義を分別して菩提の法に順ず。

經典現代語譯

よく大乘の意義を分別して、無相の覺りの教へを順守する。

〔御語釋〕（現代語譯）

善く義を分別して菩提の法に順ずとは、深理を説く經典の教へを讚嘆するのであります。

一説では次のやうに云ひます。―衆生をして覺りの教へを順守せしめるのである、―と。

（訓讀文）

善く義を分別して菩提の法に順ずとは、深經の爲すことを嘆ずるなり。一に云はく。物をして爾ら使むるなりと。

經典

衆經之上ニシテ入ルニ大慈悲ニ一。

經典訓讀文

衆經の上にして大慈悲に入る。

經典現代語譯

諸々の經典の中の最高であつて、大慈悲、大悲心を説く。

〔御語釋〕(現代語譯)

衆經の上にしてとは、三藏(佛教聖典を經藏・律藏・論藏の三種に分類した稱)を説く十二年間に於いて、方等(大乘經典、この維摩經を最上至極の經典であると説き明してゐます。大慈悲に入るとは、經典が大慈悲心、大悲心を説くことを讚嘆するのであります。一説では次のやうに云ひます。一佛道修行者をして大慈悲心、大悲心を起さしめるのである、一と。

(訓讀文)

衆經之上とは、三藏十二年の中には方等を上と爲すと明すなり。大慈悲に入るとは、經の大慈大悲に入ることゝ嘆ずるなり。『義疏』は入大慈大悲。一に云はく。行者をして大慈大悲に入らしむるなりと。

經典

法供養章 離レテニ衆ノ魔事及ビ諸ノ邪見ヲ一。順ズニ因縁ノ法ニ一。

經典訓讀文

衆の魔事及び諸の邪見を離れて、因縁の法に順ず。

經典現代語譯

佛道を妨げる諸々の魔のしわざ及び諸々の邪見を離れ、因縁の教へを順守する。

〔御語釋〕（現代語譯）

衆の魔事及び諸の邪見を離れてとは、深理を説く此の經典は、諸々の非道を離れ超絶してゐることを讚嘆してゐます。一説では次のやうに云ひます。一衆生を教化して皆佛道に入らしめるのである、一と。因縁の法に順ずとは、あらゆる存在は全て因と縁とによつて生ぜしめられてゐるので、それ自體に固有の實體をもたないことを説き明してゐます。

（訓讀文）

衆の魔事及び諸の邪見を離れてとは、深經の諸の非を離絶することを嘆ずるなり。一に云はく。皆化して道に入らしむるなりと。因縁の法に順ずとは、法は因縁に従りて生ずるが故に自性無きことを明す。

經典

無ク我。無ク人。無クニ衆生一。無シニ壽命一。空。無相。無作。無起ニシテ。能ク令ム衆生ヲシテ坐シテニ於道場ニ一而轉ゼ法輪ヲ上。

經典訓讀文

我無く、人無く、衆生無く、壽命無し。空、無相、無作、無起にして。能く衆生をして道場に坐して法輪を轉ぜしむ。

經典現代語譯

我が存在するといふ執着を捨て、個人がそんざいするといふ執着を捨て、衆生が存在するといふ執着を捨て、壽命があるといふ執着を捨て去る。一切の存在は空（固定的實體は無い）であり、無相（差別の相が無い）であり、無作（人爲的はからひが無い）であり、無起（生起する因が無い）であると觀じて、衆生をして佛道修行の場に坐さしめ、佛法の輪を轉ぜしめる。

〔御語釋〕（現代語譯）

我無く、人無く、衆生無く、壽命無しとは、假名（一切の現象は存在してゐるものとして、假に名稱を付したるもの。我、人などは、固定的實體の無い空だと観ずるのであります。

空、無相、無作、無起とは、實法（現象を存在せしめてゐる法理。空の理、無相の理などは、固定的實體の無い空だと観ずるのであります。深理を説く此の經典は、一切の差別や執着を離れた無相の空の理に隨順することを説き明してゐます。一説では次のやうに云ひます。―衆生をして此の無相の眞理を理解せしむるのである、―と。

（訓讀文）

我無く、人無く、衆生無く、壽命無しとは、假名の空なり。〔義疏〕は無我衆生壽命。空。無相。無作。無起とは、實法の空なり。深經は無相の空理に順ずるを明すなり。〔義疏〕は空無相起作。一に云はく。物をして此の理を解せしむと。

經典

諸天・龍神・乾闥婆等。所ナリニ共ニ歎譽スル。

經典訓讀文

諸天・龍神・乾闥婆等、共に歎譽する所なり。

經典現代語譯

「佛法を守護する天上界の神々・龍神・乾闥婆（帝釋天に仕へて音樂を奏する）たちは、共に譽め讃嘆する所である。」

〔或る研究家の説 供養する法の用を明す〕（現代語譯）

或る經典研究家の科段分けの説に従へば、能く衆生をして…しむ以下は、供養する法の本體を示す中の第二に、供養する法のは

たらしきを説き明します。その意味は、法の本體に如何なるはたらきがあるのかと申しますと、衆生に利益を與へるはたらきがある、と言ふのであります。

(訓讀文)

能く衆生をして……しむ従り以下、第二に用を明す。言ふところは體に何の用有るや。能く物を益するの用有るなり。

經典

能ク令メニ衆生ヲシテ入ラニ佛ノ法藏ニ。攝シニ諸ノ賢聖ノ一切ノ智慧ヲ。説クニ諸ノ菩薩ノ所行ノ之道ヲ。依テニ於諸法實相ノ之義ニ一明ニ宣ベニ無常。苦。空。無我。寂滅之法ヲ。能ク救ヒニ一切毀禁ノ衆生ヲ。諸ノ魔。外道及ビ貪著ノ者ヲバ能ク使ムニ怖畏セ。諸佛賢聖ノ所ニシテニ共ニ稱歎スル。背キニ生死ノ苦ニ。示スニ涅槃ノ樂ヲ。十方三世ノ諸佛ノ所説ナリ。

經典訓讀文

能く衆生をして佛の法藏に入らしめ。諸の賢聖の一切の智慧を攝し、諸の菩薩の所行の道を説く。諸法實相の義に依りて明らかに無常、苦、空、無我、寂滅の法を宣べ、能く一切毀禁の衆生を救ひ、諸の魔、外道及び貪著の者をば能く怖畏せしむ。諸佛賢聖の共に稱歎する所にして、生死の苦に背き、涅槃の樂を示す。十方三世の諸佛の所説なり。

經典現代語譯

「此の經典は、衆生をして佛法の奥義に到達せしめるべく、諸々の賢者聖者の一切の智慧を攝めとるべく、諸々の菩薩の修行すべき道を説いてゐる。諸法實相（一切の存在は、それがそのまま眞實の相である）の教義によつて、無常、空無我、寂滅（煩惱の火の消えはてた究極のさとりの）佛法の理を宣説し、戒律を犯す一切の衆生を救ひ、諸々の惡魔や佛敎以外の敎へを信ずる者及びむさぼり執着する衆生たちに、己の非を恐れる心をいだかしめる。諸佛や賢聖聖者の共に稱歎する經典であつて、生死の苦を捨て去り、涅槃の樂を得ることを示してゐる。此の經典は、過・現・未の三世に亘る十方の諸佛所説なのである。」

〔法供養の相を出す 科段分け〕（現代語譯）

供養する所の法の本體を示す中の第二は、法供養の相状を説き明します。若し是の如き…を聞きてから以下がこれであり、此の中に二つの項目があります。

（訓讀文）

若し是の如き…を聞きて従り以下、第二に其の供養の相を明す。中に就きて亦二有り。

〔七品の功德に就きて法供養の相を明す〕（現代語譯）

法供養の相状を説き明す中の第一に、先づ七種類の福德を生み出す行（聞・信解・受持・讀誦・分別解説・顯示・分明）について法供養の相状を説き明します。その意味は、此の七種類を修行する、これを法の供養と言ふのであります。

（訓讀文）

第一に先づ七章の功德に就きて其の相を明す。言ふところは此の七章を修するを法の供養と名づくるなり。

經典（七品の功德に就きて法供養の相を明す）

若シ聞テニ如キレ 是ノ等ノ經ヲ一。信解シ受持シ。讀誦シ。以テニ方便力ヲ一爲ニ 諸ノ衆生ノ一分別解説シ。顯示シ。分明スレバ。守ニ護スルガ法ヲ一故ニ。是ヲ名ヅクニ法之供養ト一。

經典訓讀文

若し是の如き等の經を聞き、信解し、受持し、讀誦し、方便力を以て 諸の衆生の爲に分別解説し、顯示し、分明すれば、法を守護するが故に、是を法の供養と名づく。

經典現代語譯

「若しこのやうな經典の教へを聞いて、信解し、受持し、讀誦し、また諸々の衆生の爲に導く巧みな手だての方便力を以て思量し

て解説し、顯らかに示し、理解できるやう明瞭にするならば、それは佛法の守護となるので、これを法の供養と稱するのである。」

〔説の如く修行するに就きて法供養の相を明す〕（現代語譯）

法供養の相状を説き明す中の第二に、教へに從つて修行し眞理をさとる、そこに於ける法供養の相状を説き明します。又諸法に於てから以下がこれでありませぬ。その意味は、前述の七種類の福德を生み出す行を修するのみが法の供養だと言ふではありません。

十二因縁（無明・行・識・明色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死。解説〇〇〇頁）に隨順して、假名（存在するものとして假に名稱を付されてゐるもの。衆生など）も實法（現象を存在せしめてゐる法理。無明など）も共に固定的實體の無い空だとさとり、四種類の依り所（義・智・了義經・法）の對象について迷ふことがなく、また過去世からの業と善惡の諸行について、共に空と觀する、以上の如く教へに從つて眞理をさとる、これを最上の法の供養と稱するのであります。

（訓讀文）

第二に又諸法に於て『義疏』は又諸法從り以下、説の如く修行して得を爲すに就きて、其の相を明す。言ふところは但此の七章の功德を修するのみを法の供養と爲すには非ず。復能く説の如く修行し、因縁の假と實との二空を解し、又四依の境に迷はず、亦能く業と行とを同じく亡ずる、是を最上の法の供養と名づくるなり。

經典（説の如く修行するに就きて法供養の相を明す）

又於テ諸法ニ如ク説ノ修行ス。隨フ順シテ十二因縁ニ。離レニ諸ノ邪見ヲ一得テ無生忍ヲ一。決ニ定シテ無我ヲ一。無クレ有ルコトニ衆生一。而モ於テニ因縁ノ果報ニ。無クレ違フコト無シレ諍フコト。離ルニ諸ノ我所ヲ一。

依テ於義ニ不依ラ語ニ。

經典訓讀文

法供養章 又諸法に於て説の如く修行す。十二因縁に隨順して、諸の邪見を離れ無生忍を得て、無我を決定して衆生有ること無く、而

も因縁の果報に於て。違ふこと無し諍ふこと無し。諸の我所を離る。
義に依りて語に依らず。

經典現代語譯

「また諸々の法理について教へに従ひ修行するのである。十二因縁の法理に隨順して、諸々の邪な見解を離れ無生忍（不生不滅の理をさとる）を得、無我なることを心に確立して衆生の存在を空と觀じ、十二因縁の果報についてその理に違背せず、その理を疑つて争ふこともない。その理に隨順して、外界の萬有を我が所有と執する偏見を捨て去るのである。」

眞理を説く教へを依り所とし、偏つた説を依り所としてはならない。」

〔御語釋〕（現代語譯）

義に依りて語に依らずとは、無常（萬物は常に變化變遷してとどまることが無い）を説く眞實の教へを依り所とし、常（萬物は變化することなく常住する）を説く外道（佛教以外の教へを信奉する人）の教へを依り所としてはならない、といふのであります。

（訓讀文）

義に依りて語に依らずとは、謂はく。無常の義に依りて、外道の常の語に依ること莫かれとなり。

經典

依テニ於智ニ一不レ依ラレ識ニ

經典訓讀文

智に依りて識に依らず。

經典現代語譯

正しい智慧を依り所とし、六識（眼・耳・鼻・舌・身・意による認識）を依り所としてはならない。

〔御語釋〕（現代語譯）

智に依りて識に依らずとは、無常を知る智慧を依り所とし、外道の萬物は常住であるとすな邪な説を依り所としてはならない、と言ふのであります。

（訓讀文）

智に依りて識に依らずと『義疏』は依於知不依識とは、謂はく。無常の知に依りて、外道の邪常の知に依ること莫かれとなり。

經典

依テニ了義經ニ一不レ依ラニ不了義經ニ一。

經典訓讀文

了義經に依りて不了義經に依らず。

經典現代語譯

理を究はめた了義の經典を依り所とし、理を究はめてゐない不了義の經典を依り所としてはならない。

〔御語釋〕（現代語譯）

了義經に依りて不了義經に依らずとは、無常を説く教へを依り所とし、外道の常住を説く教へを依り所としてはならない、と言ふのであります。

（訓讀文）

了義經に依りて不了義經に依らず『義疏』は依了經とは、謂はく。無常を説く教へに依りて。外道の常を説く教へ

に依ること莫かれとなり。

經典

依テニ於法ニ一不レ依ラレ人ニ。

經典訓讀文

法に依りて人に依らず。

經典現代語譯

萬物の無常なることを依り所とし、常住を説く人を依り所としてはならない。

〔御語釋〕（現代語譯）

法に依りて人に依らずとは、萬物のありのままの無常なるさまを依り所とし、常住であると説く外道の人を依り所としてはならない、と言ふのであります。

（訓讀文）

法に依りて人に依らず〔義疏〕は依法真依人とは、謂はく。無常の法に依りて、外道の常を説くの人に依ること莫れとなり。

經典

隨ニ順シテ法相ニ一無クニ所入一無シニ所歸一。無明ハ畢竟シテ滅スルガ故ニ。諸行モ亦畢竟シテ滅ス。乃至生ハ畢竟シテ滅スルガ故ニ。老死モ亦畢竟シテ滅ス。作セバニ如キレ是ノ觀ヲ一。十二因縁ニ無クレ有ルコトニ盡相一。不ニ復起サレ見ヲ。是ヲ名ツクニ最上ノ法之供養ト一。

經典訓讀文

法相ほつさうに随順ずいじゆんして所入しよにゆう無く所歸しよき無し。無明むみやうは畢竟ひつききやうして滅めつするが故ゆゑに、諸行しよぎやうも亦畢竟またひつききやうして滅めつす。乃至ないし生しやうは畢竟ひつききやうして滅めつするが故ゆゑに、老死らうしも亦畢竟またひつききやうして滅めつす。是かくの如ごとき觀かんを作なせば、十二じふに因縁いんねんに盡相じんさう有あること無く、復見またけんを起おこさず。是これを最上さいじやうの法ほうの供養くやうと名なづく。經典現代語譯

萬物のありのままの眞實の姿に隨順して、さとりを求めることも無く帰依する対象を求めることも無い。無明（過去世の根本煩惱）は究極には滅して行（過去世の善惡の行業）と成るので、諸々の行も究極には滅して識となる。十二因縁の中間の識乃至有も同様であるが、生現在しやうの業によつて未來に生をうけるは究極には滅して老死と成るので、老死も亦究極には滅して無明と成る。このやうに觀ずれば、十二因縁には盡き果つる相の無いことをさとり、常住する斷滅するなどの偏見も起さない。これを最上の法の供養と稱するのである。」

〔報利を明すの科段分け〕（現代語譯）

古の事例を引用する中の第三は、法の供養を聞いた時、法供養の報によつて得られる利益を説き明します。佛天帝ぶつてんたいに告ぐから以下がこれでありす。此の中に四つの項目があります。

（訓讀文）

佛天帝ぶつてんたいに告つぐ従より以下いげ、正まさしく本ほん事を明あかす中の第三だいさんに、法ほうの供養くやうを聞ききて時ときの得とく益やくを明あかす。中なかに就つきて自みづから四し有あり。

〔法を聞きて恩を報ず〕（現代語譯）

法供養の報によつて得られる利益を説き明す中の第一は、月蓋王子は藥王如來より此の教へを聞き、そのご恩に報いることを説き明します。

（訓讀文）

第一だいいちに法ほうを聞ききて恩おんを報ほうずるを明あかす。

經典（法を聞きて恩を報ず）

佛告クニ天帝ニ。王子月蓋ハ從テニ藥王佛ニ。聞テニ如キノレ是ノ法ヲ。得タリニ柔順忍ヲ。即チ解テニ寶衣ト巖身ノ具ヲ。以テ供養ス佛ニ。

經典訓讀文

佛ぶつ天てん帝たいに告つぐ。王子おうじ月がつ蓋がいは藥やく王おう佛ぶつに從したがつて、是かくの如ごときの法ほうを聞ききて、柔じゆう順じゆん忍にんを得えたり。即すなはちち寶ほう衣えと巖がん身しんの具ぐを解ときて、以もつて佛ぶつに供く養ようす。

經典現代語譯

釋迦如來は帝釋天にお告げになりました。「月蓋王子は藥王如來のもとに行詣して此のやうな教へを聞き、柔軟かつ隨順の心を得ることができた。そこで月蓋王子は立派な衣と身につけてゐる飾り物を献上し供養した。」

〔誓ひを發して護りを請ふ〕（現代語譯）

法供養の報いによつて得られる利益を説き明す中の第二は、月蓋王子は法供養を行ずることを誓ひ、藥王如來に護りを請ひます。佛ぶつに白もうして言いはく以下いげがこれであります。

（訓讀文）

第二だいにに佛ぶつに白もうして言いはく從より以下いげ、誓ちかひを發おこして護まもりを請こふ。

經典（誓ひを發して護りを請ふ）

章ちやう白はくシテレ佛ぶつニ言いク。世尊せそん。如來にょらいノ滅後めつごニ我當わがたうニ行いジテニ法供養ほふくようヲ一守しゆ護ごス正法しやうぽうヲ。願ねんクハ以もつテニ威神ゐしんヲ一加かヘテレ哀あひヲ建立けんりつシ。令めつメタマヘテ我わが法ほふ供く養ようヲ得えセ四降しやう一伏ふくシ魔怨まごんヲ一修しゆスルヲニ菩薩ぼさつノ行ぎやうヲ甲。

經典訓讀文

佛ぶつに白まじりして言いはく。世尊せそん。如來にょらいの滅後めつごに我當われまきに法供養ほうくようを行ぎやうじて正法しやうぼうを守護しゆごすべし。願ねがはくは威神いじんを以もつて哀あはれみを加くはへて建立こんりゆうし、我われをして魔怨まおんを降伏こうふくし菩薩ぼさつの行ぎやうを修しゆするを得えせしめたまへ。

經典現代語譯

月蓋王子は藥王如來に申し上げた。「世尊よ。私は世尊が入滅された後、必ず法供養を行じて佛教の正しい教へを守護致します。願はくは世尊の威神力と哀みいつくしむ心を以て此の誓ひを確立せしめ、惡魔を降伏、菩薩の行を修するを得さしめ給へ。」

〔如來記を賜ふ〕（現代語譯）

法供養の報によつて得られる利益を説き明す中の第三は、藥王如來は、月蓋王子が將來に於いてさとりを開くといふ證明を與へます。

（訓讀文）

第三だいさんに佛ぶつ其そのの深心しんじんの所念しよねんを知りて（『義疏』は佛知其意）従より以下いげ、如來にょらい記きを賜たまふ。

經典（如來記を賜ふ）

佛ぶつ知ちテニ其そのノ深心しんじんノ所念しよねんヲ。而しか記きシテニ之これニ曰いク。汝なんぢハ於おテニ末後まつごニ一守いっしゆニ護ごスベシ法城ほうじやうヲ。

經典訓讀文

佛ぶつ其そのの深心しんじんの所念しよねんを知りて、之これに記きして曰いはく。汝なんぢは末後まつごに於おて法城ほうじやうを守護しゆごすべし。

經典現代語譯

藥王如來は、佛道を求める念ひの深きを知つて、月蓋王子に將來に於いてさとりを開くといふ證明を興へました。「汝は最終に於いて必ず佛教の教へをするであらう。」

〔正しく得益を明すの科段分け〕（現代語譯）

法供養の報いによつて得られる利益を説き明す中の第四は、利益を得ることを正しく説き明します。天帝から以下がこれであり
ます。この中に二つの項目があります。

（訓讀文）

第四に天帝従り以下、正しく得益を明す。自ら二有り。

〔月蓋王子の自らの益を明すの科段分け〕（現代語譯）

利益を得ることを正しく説き明す中の第一は、月蓋王子自身の利益を説き明します。

（訓讀文）

第一に自らの月蓋比丘の益を明す。

經典（月蓋王子の自らの益を明す）

天帝。時ニ王子月蓋ハ見ニ法ノ清淨ナルヲ。聞テニ佛ノ授記ヲ。以テレ信ヲ出家シテ修ニ習シ善法ヲ。精進不シテレ久カラ得ニ五神通ヲ。具シニ菩薩道ヲ、得テ陀羅尼ト無斷辯才ヲ、於テニ佛ノ滅後ニ以テニ其ノ所得ノ神通、總持、辯才ノ力ヲ、滿ツルマデニ十小劫ニ、藥王如來所轉ノ法輪ニ隨ツテ分布ス。

經典訓讀文

天帝。時に王子月蓋は法の清淨なるを見、佛の授記を聞きて、信を以て出家して善法を修習し、精進久しからずして五神通を得、菩薩道を具し、陀羅尼と無斷辯才を得、佛の滅後に於て、其の所得の神通、總持、辯才の力を以て、十小劫に満つるまで。
法供養章
藥王如來所轉の法輪に隨つて分布す。

經典現代語譯

「帝釋天よ。その時に月蓋王子は佛法の清淨なるを見、さとりを開くといふ藥王如來の證明を聞き、深い信仰心を以て出家して善行を修習し、精進すること久しからずして五種の神通力を身につけ、陀羅尼（諸佛の所説をよく保つて忘失しない）と自由自在なる辯才を得、藥王如來の入滅後、その所有した神通力、陀羅尼、辯才力を以て、十小劫といふ長年月に亘つて、藥王如來が説かれた佛法に隨順し宣布したのである。」

〔他の益を明す〕（現代語譯）

利益を得ることを正しく説き明す中の第二は、月蓋王子以外の無数の人々が利益を得たことを説き明します。月蓋比丘から以下がこれでありませう。

（訓讀文）

第二に月蓋比丘従り以下、他の益を明かす。

經典（他の益を明す）

月蓋比丘ハ以テ下 守ニ護シテ法ヲ一 勤行精進ナルヲ上。即チ於テニ 此ノ身ニ一 化シテニ 百萬億ノ人ヲ一。於テニ 阿耨多羅三藐三菩提ニ一 立タシムニ。不退轉ニ一。十四那由他ノ人ハ深く發シキニ 聲聞・辟支佛ノ心ヲ一。無量ノ衆生得タリレ 生ルルヲニ 天上ニ一。

經典訓讀文

月蓋比丘は法を守護して勤行精進なるを以て、即ち此の身に於て百萬億の人を化して、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉に立たしむ。十四那由他の人は深く聲聞・辟支佛の心を發しき。無量の衆生天上に生るるを得たり。

「出家した月蓋王子は佛法の守護に努め勵み精進したので、此の世の身でありながら百萬億といふ無数の人々を教化して、無上絶對のさとりについて不退轉の境地に立たしめた。

十四那由他といふ無数の人々は聲聞・辟支佛のさとりを得ようと深く發心した。無量無数の衆生は天上界に生れることができた。」

〔古今を會通す〕（現代語譯）

古代の事例を引用し現在に於いても法供養が勝れてゐることを證する中の第二は、古代の王や王子が現在に於いて如來と成つてゐることを説き、古代と現在とを結び合せます。天帝。時の王寶蓋はから以下がこれであります。

（訓讀文）

天帝。時の王寶蓋は従り以下、古を引きて今を證する中の第二に古今を會通す。

經典（古今を會通す）

天帝。時ノ王寶蓋ハ豈異人ナランヤ乎。今現ニ得テ佛ヲ號スニ寶焰如來ト一。其ノ王ノ千子ハ即賢劫ノ中ノ千佛是ナリ也。従リニ迦羅鳩孫駄爲シテ、始得タル佛ヲ最後ノ如來ヲ號シテ曰フニ樓至ト一。月蓋比丘ハ則チ我が身是ナリ。

經典訓讀文

天帝。時の王寶蓋は豈異人ならんや。今現に佛を得て寶焰如來と號す。其の王の千子は即ち賢劫の中の千佛是なり。迦羅鳩孫駄を始めと爲して佛を得たる従り最後の如來を號して樓至と曰ふ。月蓋比丘は則ち我が身是なり。

經典現代語譯

「帝釋天よ。古代の寶蓋王とは誰であらうか。佛陀の正覺を得て今現に寶焰如來と稱される方である。寶蓋王の千人の子供たちは賢劫（現在世）の千人の如來である。始めに迦羅鳩孫駄如來が正覺を得、最後に正覺を得たのは樓至如來と稱する。月蓋比丘は誰であらう、私自身なのである。」

「勤むるを結す」(現代語譯)

古代の事例を引用し現在に於いても法供養が勝れてゐることを證する中の第三は、法供養を勤める結びの文言であります。是の如く天帝から以下がこれであります。

(訓讀文)

是の如く天帝従り以下、第三に勤むるを結するなり。

經典(勤むるを結す)

如クレ是ノ天帝。當ニレ知ルニ此ノ要ヲ一。以テニ法供養ヲ一於テニ諸ノ供養ニ一爲シレ上ト。爲スレ最第一無比ト一。是ノ故ニ天帝。當ニ下以テニ法ノ之供養ヲ一供養ス於佛ヲ上。

經典訓讀文

是の如く天帝。當に此の要を知るべし。法供養を以て諸の供養に於て上と爲し、最第一無比と爲す。是の故に天帝。當に法の供養を以て佛を供養すべし。

經典現代語譯

「帝釋天よ。私は法供養によつて正覺を得た、此の要訣を知るべきである。諸々の供養の中に於いて法供養を最上と爲し、第一無比とする。帝釋天よ。此の故に、まさに法の供養を以て如來を供養すべきである。」

第十四 囑 累 章

〔囑累章の名稱の由來〕（現代語譯）

此の經典の第十四章は囑累章であります。此の章は、釋迦如來が煩勞多き經典の流通を付託します。かつその煩勞を佛弟子阿難に付託しますので、此の章の名稱を囑累章（煩勞を付託する）と名づけます。

（訓讀文）

囑累章第十四なり。此の章は佛憂累を以て之を囑するを明す。且つ憂累を阿難に以てするが故に、因りて章の目と爲すなり。

〔囑累章の科段分け〕（現代語譯）

此の囑累章は流通說の中の第二項であつて、經典を付託して正しく流通せしめます。此の中を三つの項目に分けます。

第一に、彌勒菩薩に付託し流通せしめます。

第二に、阿難に付託し流通せしめます。

第三に、諸々の人たちが歡喜し、教へを奉じて實踐することを説き明します。

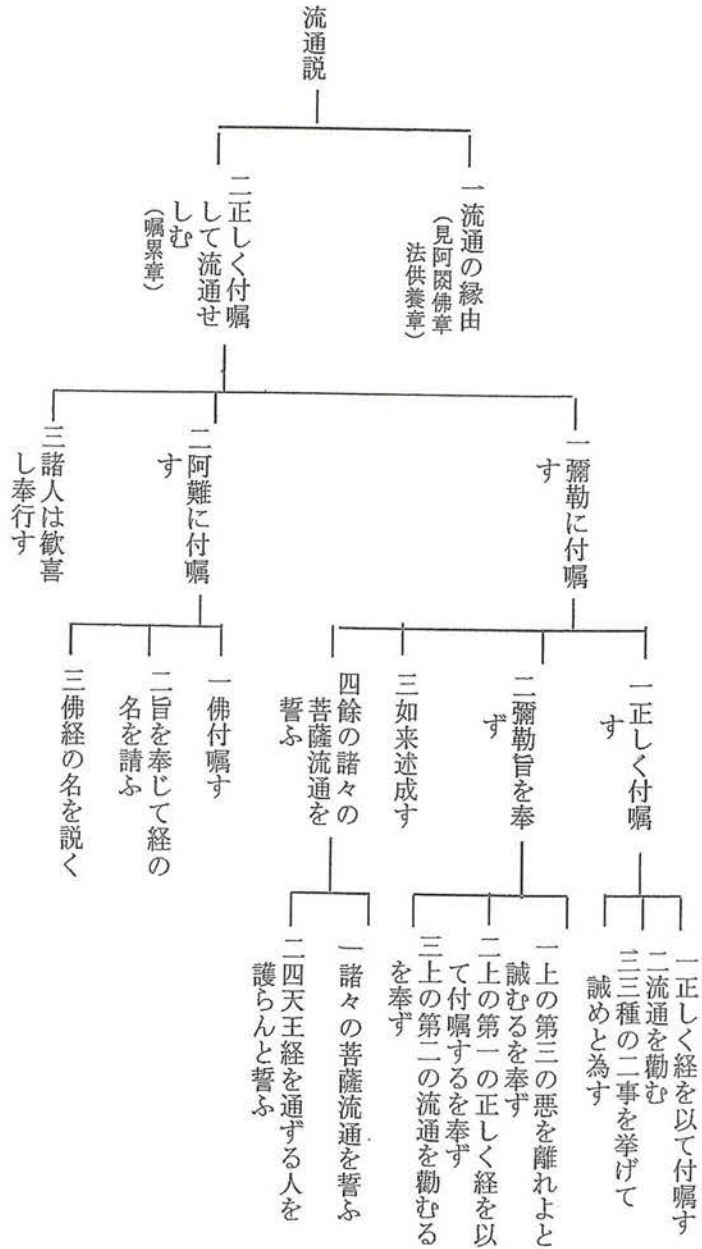
（訓讀文）

此は是れ流通說の中の第二に正しく付囑して流通せしむるなり。中に就きて開きて三と爲す。

第一に彌勒に付す。

第二に阿難に付す。

第三に諸人の歡喜奉行するを明す。



〔彌勒に付囑すの科段分け〕 (現代語譯)

第一の彌勒菩薩に附託し流通せしめる中に亦四つの項目があります。

第一に、正しく付託します。

第二に、彌勒菩薩は、釋迦如來の仰せられた趣意を奉持します。

第三に、佛の言はく、善哉から以下、彌勒菩薩の所説は妥當であると、釋迦如來が稱讚します。

第四に、是に於て一切の菩薩から以下、他の諸々の菩薩たちも亦釋迦如來が仰せられた趣意を捧持し、誓ひを發し、此の經典を流通することを説き明します。

(訓讀文)

第一の彌勒に付する中に就きて亦四有り。

第一に正しく付す。

第二に彌勒旨を奉ず。

第三に佛の言はく、善哉從り以下。如來述成す。

第四に是に於て一切の菩薩從り以下。餘の諸の菩薩も亦旨を奉じ誓ひを發し流通するを明す。

〔正しく付囑す〕(現代語譯)

右の第一の正しく付託する中に亦三つの項目があります。

第一に、經典を正しく付託します。

第二に、是の如き輩の經をばから以下、流通せよと勧めます。

第三に、彌勒。當に知るべし從り以下、流通に關して除くべき缺點を有する菩薩について説き明します。三種類の菩薩について 夫々二つの事がらを擧げて誠めてゐます。

經典をご覽なさい。

(訓讀文)

第一の正しく付する中に就きて亦三有り。

第一に正しく經を以て付囑す。

第二に是の如き輩の經をば從り以下、流通を勸む。
第三に彌勒。當に知るべし從り以下、流通に除く所の過を明す。凡そ三種の二事を擧げて誠めと爲す。
見つ可し。

經典（正しく付囑す）

（正しく經を以て付囑す）

於レ是ニ佛告ゲテニ彌勒菩薩ニ一言ク。彌勒。我今以テニ是ノ無量億阿僧祇劫ニ所ノ集ムル阿耨多羅三藐三菩提ノ法ヲ一付ヲ囑ス於汝ニ一。
（流通を勸む）

如キレ是ノ輩ノ經ヲバ於テニ佛滅後末世ノ之中ニ一。汝等當ニ下以テニ神力ヲ一廣ク宣シ流ク布シテ於閻浮提ニ一無ルキ令ムルコトニ斷絶セ一。所以ハ者何シ。未來世ノ中當ニ下有テニ善男子善女人及ヒ天龍・鬼神・乾闥婆・羅刹等一。發ニ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ一樂フヤ干大法ヲ上。若シ使メバレ不ラレ聞カニ如キレ是ノ等ノ經ヲ一。則チ失ハシニ善利ヲ一。如キレ此ノ輩ノ人ハ聞テニ是レ等ノ經ヲ一。必ズ多ク信樂シテ發スベシニ希有ノ心ヲ一。當ニ下以テ頂受シテ隨テニ諸ノ衆生ノ所ニ應キレ得レ利ヲ。而モ爲ニ廣ク説ク上。
（三種の二事を擧げて誠めと爲す）

彌勒。當ニレ知ル。菩薩ニ有リニ一ノ相一。何ヲカ謂テ爲スヤレ二ト。一ニハ者。好ムニ於雜句文飾ノ之事ヲ一。二ニハ者。不シテ畏レニ深義一如クレ實ノ能ク入ル。若シ好ムニ雜句文飾ノ事ヲ一者ハ。當ニレ知ル。是レ爲リニ新學ノ菩薩一。若シ於テニ如キノレ是ノ無染・無著・甚深ノ經典ニ一無クレ有ルコトニ恐懼一。能ク入テニ其ノ中ニ一聞キ已テ。心淨ク。受持シ。讀誦シ。如クレ説ノ修行セバ。當ニレ知ル。是ヲ爲スニ久ク修ストニ。道行ヲ一。

累章

彌勒。復有リニ二法一。名ツケニ新學ノ者一ト。不レ能ハニ決コ定スルコト於甚深ノ法ヲ一。何等ヲ爲スヤレ二ト。一ニハ者。所ノ未ダレ聞カ深經。聞テレ之ヲ驚怖シ。生ジテレ疑ヲ不レ能ハニ隨順スルコト一。毀謗シ不シテレ信ゼ作サクニ是ノ言ヲ一。我初ヨリ不レ聞カ。從リニ何ノ所一來レル

ヤト。二ニハ者。共ニ有レドモテ護ヲ持シ解ヲ説スル如キレ。是ノ深經ヲ一者。不ニ肯テ親近シ供養シ恭敬セ。或ル時ハ於テ中ニ説クニ其過惡ヲ一。有ルハニ此ノ二法一。當ニ知ル。是レ新學ノ菩薩ナリ。爲シテニ自ラ毀傷ヲ一。不レ能ハテ深法ノ中ニ一調ヲ伏スルコト其ノ心ヲ上。

彌勒復有リニ二法一。菩薩雖モ信ヲ解スト深法ヲ一。猶自ラ毀傷シテ而不レ能ハレ得ルコトニ無生法忍ヲ一。

何等ノ爲スヤレニ二ト。一ニハ者輕シ慢シ新學ノ菩薩ヲ一而モ不ニ教誨セ。一ニハ者雖モ信ヲ解スト深法ヲ一而モ取テレ相ヲ分別ス。是ヲ爲スニ二法ト一。

經典訓讀文

是に於て佛彌勒菩薩に告げて言はく。彌勒。我今是の無量億阿僧祇劫に集むる所の阿耨多羅三藐三菩提の法を以て、汝に付囑す。
(流通を勸む)

是の如き輩の經をば佛滅後末世の中に於て、汝等當に神力を以て閻浮堤に廣宣し流布して斷絶せしむること無かるべし。所以は何ん。未來世の中に當に善男子・善女人及び天・龍・鬼神・乾闥婆・羅刹等有りて、阿耨多羅三藐三菩提心を發して大法を樂ふべし。若し是の如き等の經を聞かざらしめば、則ち善利を失はん。此の如き輩の人は是れ等の經を聞きて、必ず多く信樂して希有の心を發すべし。當に以て頂受して諸の衆生の利を得べき所に随つて、而も爲に廣く説くべし。

(三種の二事を擧げて誠めと爲す)

彌勒。當に知るべし。菩薩に二の相有り。何をか謂ひて二と爲すや。一には、雜句文飾の事を好む。二には、深義を畏れずして實の如く能く入る。若し雜句文飾の事を好む者は、當に知るべし、是れ新學の菩薩爲り。若し是の如きの無染・無著・甚深の經典に於て恐畏有ること無く、能く其の中に入りて聞き已りて、心淨く、受持し、讀誦し、説の如く修行せば、當に知るべし、是を久しく道行を修すと爲す。

囑累章

彌勒。復二法有り。新學の者と名づけ、甚深の法を決定すること能はず。何等を二と爲すや。一には、未だ聞かざる所の深經、之を聞きて驚怖し、疑ひを生じて隨順すること能はず。毀謗し信ぜずして是の言を作さく。我初めより聞かず、何れの所従り

來れるやど。二には、共に是の如き深經を護持し解説する者有れども、肯へて親近し供養し恭敬せず。或る時は中に於て其の過惡を説く。此の二法有るは、當に知るべし。是れ新學の菩薩なり。自ら毀傷を爲して、深法の中に於て其の心を調伏すること能はず。

彌勒。復二法有り。菩薩深法を信解すと雖も、猶自ら毀傷して無生法忍を得ること能はず。

何等を二と爲すや。一には新學の菩薩を輕慢し而も教誨せず。二には深法を信解すと雖も而も相を取りて分別す。是を二法と爲す。

經典現代語譯

是に於いて釋迦如來は彌勒菩薩にお告げになられた。「彌勒菩薩よ。無量阿僧祇劫の長年月に亘つて編集した無上絶對のさとりを説いた此の經典を私は今、汝に付託する。」

(流通を勸む)

「釋迦如來入滅後の末法の世に於いて、汝彌勒菩薩はその神通力を以て、此の維摩經を娑婆世界に廣く宣布し流布し、此の經典を斷絶することなからしめよ。理由は次の通りである。未來の世に於いて善男子・善女人及び天上界の神々・龍神・鬼神・乾闥婆・羅刹(惡鬼。後に佛教の守護神)等が無上絶對のさとりを求め衆生を教化濟度しようとの思ひを以て、大乘の佛法を求め願ふであらう。若し此の經典を聞くを得しめなかつたならば、彼等はすぐれた恩恵を失ふことにならう。これらの人々は此の經典を聞いて、必ず多くの信じ願ふ希有の心を發すであらう。諸々の衆生が夫々に利益を得るべき所を受け入れ、而も彼等のために此の經典の教へを廣く説きなさい。」

「彌勒菩薩よ。菩薩には二種類の人があることを知るべきである。何を二種類と爲すか。一には、種々の文言を飾りたててることを好む人である。二には、深遠な教義に對して少しも恐れず、眞實を解し悟入しようとする人である。種々の文言を飾りたててることを好む人は、初心の菩薩であることを知るべきである。此の維摩經の如く穢れが無く、とらはれが無く、極めて深遠な理を説く經典に對して、少しも恐れることなく教理を究めようとし、教へを聞き終つて心は清淨となり、經典を受持し、讀誦し、教へに従つ

て修行するならば、この菩薩は久しきに亘つて佛道を修行する人だと知るべきである。」

「彌勒菩薩よ。また二種類の人たちがゐる。極めて深遠な教理を信ぜず、教へに安住し止まることのできない、初心の者たちである。何等を二種類と爲すか。一には、未だ聞いたことの無い深理を説いた經典、これを聞いて驚怖し、疑念を生じて教へに隨順することができない。教へを誹謗し信ぜず、私は未だ嘗つて聞いたことが無い、何處から手に入れた經典であらうか、など言ふのである。二には、此の維摩經の如き深理を説いた經典を護持し解説する人がゐても、敢へて親しみ近づかうとせず、供養もせず、恭敬もしない。ある時は經典の教義に誤りや悪があると説く。以上の二種類のものは、初心の菩薩であると知るべきである。これらの者は、深理を説いた經典の教義を自らがそしり傷つけるので、その心を正しくとのへ悪を抑へ除くことができないのである。」

「彌勒菩薩よ。また二種類の人たちがゐる。深遠な教理を信解する菩薩であつても、教理を自らがそしり傷つけ、無生法忍むじやうほうにん（不生不滅の理をさとる）を得ることの出来ない人である。何等を二種類と爲すか。一には、初心の菩薩を輕蔑し、而も教へ諭すこともない。二には、深遠な教理を信解するけれども、而も語句にとらはれて差別の妄分別を爲す。これら二種類の人たちである。」

〔彌勒旨を奉ずの科段分け〕（現代語譯）

彌勒菩薩に此の經典を付託し流通せしめる中の第二は、彌勒菩薩が釋迦如來の仰せられた趣意を捧持します。彌勒菩薩みろくぼさつから以下がこれであり、此の中にも亦三つの項目があります。

（訓讀文）

彌勒菩薩みろくぼさつ從り以下、第二に彌勒旨みろくぼさつを奉ず。中なかに就きて亦三有またさんあり。

〔上の第三の惡を離れよと誠むるを奉ず〕（現代語譯）

彌勒菩薩が釋迦如來の仰せられた趣意を奉ずる中の第一は、上述の釋迦如來の説法の第三に三種類の菩薩について夫々二つの事
囑累章
がらを擧げ、その缺點を取り除くやう誠めてをりますが、その誠めを捧持します。

(訓讀文)

第一に上の第三の悪を離れよと誠むるを奉ず。

經典(上の第三の悪を離れよと誠むるを奉ず)

彌勒菩薩ハ聞キレ説ク「是ヲ已テ。白シテ佛ニ言ク。世尊。未曾有ナリ也。如クニ佛ノ所説ノ一我當ニ遠ニ離ス如キノ斯ノ之惡ヲ」。

經典訓讀文

彌勒菩薩ハ是を説くを聞き已りて、佛に白して言はく。世尊。未曾有なり。佛の所説の如く我當に斯の如きの悪を遠離すべし。

經典現代語譯

彌勒菩薩は上述のやうに釋迦如來が説法されるのを聞き終つて、如來に申しあげた。

「世尊よ。未曾有の説法でございます。世尊がお説きになられた如く、私は菩薩たちの缺點を取り除きます。」

〔上の第一の正しく經を以て付囑するを奉ず〕(現代語譯)

彌勒菩薩が釋迦如來の仰せられた趣意を奉ずる中の第二は、上述の釋迦如來の説法の第一に經典を正しく付託しますが、これを奉持します。如來の…を奉持すべしから以下がこれです。

(訓讀文)

第二に如來の…を奉持すべし従り以下、第一の正しく經を以て付囑するを奉ず。

經典(上の第一の正しく經を以て付囑するを奉ず)

奉ヲ持スベシ如來ノ無數阿僧祇劫ニ所ノ集ムル阿耨多羅三藐三菩提ノ法ヲ。

經典訓讀文

如来にょらいの無數阿僧祇劫むしゆあそうぎこつに集むる所あつの阿耨多羅三藐三菩提あのくたらさんみやくさんぼだいの法ほうを奉持ぶじすべし。

經典現代語譯

「私は、世尊が無數阿僧祇劫の長年月に亘つて編集され無上絶對のさとりを説いた此の經典を奉持いたします。」

〔上の第二の流通を勧むるを奉ず〕（現代語譯）

彌勒菩薩が釋迦如来の仰せられた趣意を奉ずる中の第三は、上述の釋迦如来の説法の第二に此の經典を流通せよと勧めますが、これを奉持します。若し未來世もみらいせにから以下いげがこれであります。

（訓讀文）

第三だいさんに若し未來世もみらいせに従り以下いげ、上かみの第二だいにの流通るづうを勧むるを奉ず。

經典（上の第二の流通を勧むるを奉ず）

若し未來世もみらいせニ。善男子・善女人ノ求ムルニ。大乘だいじやうヲ一者ニハ。當たニ。令めメニ。手ニ得セニ。如ごとキレ。是等ノ經きやうヲ一。與あたヘテニ。其ニ念力ねんりきヲ一。使つかム。受持じゆちシ。讀誦どくじゆシ。爲ためニ。他ノ廣ク説カた。世尊。

若し後ノ末世ごのまつせニ。有あラバニ。能ク受持じゆちシ。讀誦どくじゆシ。爲ためニ。他ノ説ク者もの一。當たニ。知ル。是レ彌勒神力ノ之所ナリニ。建立こんりゆうスル一。

經典訓讀文

若し未來世もみらいせに、善男子・善女人の大乗だいじやうを求むる者には、當に手に是の如き等の經きやうを得せしめ、其に念力を與へて、受持じゆちし讀誦どくじゆし他の爲ために廣く説かしむべし。世尊。若し後の末世ごのまつせに、能く受持じゆちし讀誦どくじゆし他の爲ために説く者有らば、當に知るべし、是れ彌勒神力の建立こんりゆうする所ところなり。

經典現代語譯

囑累章
「若し未來世に於いて、大乘の佛法を求め善男子・善女人があれば、此のやうな經典をその手に得さしめ、それらに念力を與へ

て、受持し讀誦し、他の人々を教化するため此の經典を詳しく説かしめます。世尊よ。佛法の衰へる末世に於いて、此の經典を受持し讀誦し、他の人々の教化のため説く者があれば、それは彌勒の神通力によつて爲さしめられたものとご承知おき下さい。」

(註) 彌勒菩薩は未來の末世に如來として現はれ、衆生を救ふとされてをります。それ故に維摩經の流通を彌勒菩薩に委託するのであり、此の箇所の經典は、未來世、末世について述べてゐます。

〔如來述成す〕(現代語譯)

彌勒菩薩に付託し流通せしめる中の第三は、彌勒菩薩の所説は妥當であると、釋迦如來が稱讚します。此の箇所には細い項目は設けません。

(訓讀文)

第二に如來述成す。開かず。

經典(如來述成す)

佛ノ言ハク。善キ哉善キ哉。彌勒。如シニ汝ガ所説ノ一。佛助ケンニ爾ガ喜ヒラ一。

經典訓讀文

佛の言はく。善き哉善き哉。彌勒。汝が所説の如し。佛汝が喜びを助けん。

經典現代語譯

釋迦如來は仰せられました。「まことによろしい。彌勒菩薩よ。汝の所説はまさにその通りである。私は、汝の満ち足りた思ひを更に助長せしめよう。」

〔餘の諸々の菩薩流通を誓ふの科段分け〕(現代語譯)

彌勒菩薩に付託し流通せしめる中の第四は、他の諸々の菩薩や能力ある者たちが流通することを誓ひますが、その中に二つの項目があります。

(訓讀文)

第四の餘の能くする者の流通を誓ふ中に就きて即ち二有り。

〔諸々の菩薩流通を誓ふ〕(現代語譯)

他の諸々の菩薩や能力ある者たちが流通を誓ふ中の第一は、諸々の菩薩が流通を誓ひます。

(訓讀文)

第一に諸の菩薩流通を誓ふを明す。

經典(諸々の菩薩流通を誓ふ)

於テレ 是一切ノ菩薩合掌シテ白サクレ 佛ニ。我等モ亦於テニ 如來ノ滅後ニ。十方ノ國土ニ廣ク宣シ流ク 布スベシ 阿耨多羅三藐三菩提ノ法ヲ一。復當ニテ 開ク導ク諸ノ説ク法ヲ者ヲ一 令ムク得セニ 是ノ經ヲ一。

經典訓讀文

是に於て一切の菩薩合掌して佛に白さく。我等も亦如來の滅後に於て、十方の國土に阿耨多羅三藐三菩提の法を廣宣し流布すべし。復當に諸の法を説く者を開導して是の經を得せしむべし。

經典現代語譯

そこで一切の菩薩たちは釋迦如來に向つて合掌し、申しあげた。「私たちも釋迦如來が入滅された後、無上絶對のさとりを得ることを説いた此の經典を、國土のあらゆる所に廣宣し流布いたします。また佛法を説く諸々の人たちを教へ導いて、此の經典を得させます。」

〔四天王を通ずる人を護らんと誓ふ〕（現代語譯）

他の諸々の菩薩や能力ある者たちが流通を誓ふ中の第二は、四天王（佛法に歸依する人々を守護する。東方の持國天、南方の增長天、西方の廣目天、北方の多聞天）が維摩經を流通する人たちを、守護することを誓ひます。

（訓讀文）

第二に四天王經を通ずる人を護らんと誓ふを明す。

經典（四天王經を通ずる人を護らんと誓ふ）

爾ノ時ニ四天王白テ、佛ニ言ク。世尊。在在處處ノ城邑・聚落・山林・曠野ニ有リテ、是ノ經卷一讀誦シ解説セン者ハ一。我當ニ率テ諸ノ官屬ヲ一爲ノ聽法ノ一故ニ。往テ詣シテ其ノ所ニ擁護ス其ノ人ヲ一。面リ百由旬。令メン無カラテ、伺求シテ得ルニ其ノ便ヲ一者上。

經典訓讀文

爾の時に四天王佛に白して言はく。世尊。在在處處の城邑・聚落・山林・曠野に是の經卷有りて讀誦し解説せん者は、我當に諸の官屬を率ゐて聽法の爲の故に、其の所に往詣して其の人を擁護すべし。面り百由旬、伺求して其の便を得る者無からしめん。

經典現代語譯

その時に四天王は釋迦如來にもうしあげた。「世尊よ。到る處の都市や聚落や山林や曠野に於いて、此の維摩經を讀誦し解説する者があれば、佛法を聽受する爲に諸々の眷屬を率ゐて説法の場に往詣し、流通する人を守護いたします。また流通する人から百由旬の長距離までの間を探索し、口さき巧みに言つて説法を妨げる者を排除いたします。」

〔阿難に付囑すの科段分け〕（現代語譯）

囑累章は流通説の中の第二項で、經典を付託し流通せしめますが、此の中の第二は阿難に付託し流通せしめます。是の時に佛阿難に告ぐから以下がこれでありす。此の中にも亦三つの項目があります。

(訓讀文)

是の時に佛阿難に告ぐ従り以下、章の中の第二に阿難に付囑す。中に就きて亦三有り。

〔佛付囑す〕(現代語譯)

阿難に付託し流通せしむる中の第一は、釋迦如來が阿難に對して此の維摩經を流通するやう命じます。

(訓讀文)

第一に佛付す。

經典(佛付囑す)

是ノ時ニ佛告クニ阿難ニ。受ヲ持シテ是ノ經ヲ一廣宣シ流布スベシ。

經典訓讀文

是の時に佛阿難に告ぐ。受持して是の經を廣宣し流布すべし。

經典現代語譯

此の時に釋迦如來は阿難に命じられた。「阿難よ。此の維摩經を受持し、世の中に廣く宣布し流布しなさい。」

〔旨を奉じて經の名を請ふ〕(現代語譯)

囑累章
阿難に付託し流通せしむる中の第二は、阿難は釋迦如來が仰せられた趣意を奉持し、此の經典に如何なる名稱を付すべきかを請ひます。

(訓讀文)

第二に旨を奉じ。經の名を請ふ。

經典(旨を奉じて經の名を請ふ)

阿難言ハク。唯。我已ニ受ニ持セリ要ナル者ヲ。世尊。當ニ何ンガ名ツクニ斯ノ經ニ。

經典訓讀文

阿難言はく。唯。我已に要なる者を受持せり。世尊。當に何んが斯の經に名づくべきや。

經典現代語譯

阿難は申しあげました。「はい、かしこまりました。私は既に經典の肝要なる點は受持してをります。世尊よ。此の經典に如何なる名稱を付すべきでせうか。」

〔佛經の名を説く〕(現代語譯)

阿難に付託し流通せしむる中の第三は、釋迦如來が此の經典の名稱を教示します。

(訓讀文)

第三に佛爲に説く。

經典(佛經の名を説く)

佛ノ言ク。阿難。是ノ經ヲバ名ケテ爲スニ維摩詰所説ト。亦名ツクニ不可思議解脫法門ト。如クレ是ノ受持スベシ。

經典訓讀文

佛ぶつの言いはく。阿難あなん。是この經きょうをば名なづけて維摩詰ゆいまきつ所説しよせつと爲なす。亦また不可思議ふかしぎ解脫げだつ法門ほうもんと名なづく。是かくの如ごとく受持じゆちすべし。

經典現代語譯

釋迦如來は仰せられました。「阿難よ。此の經典を『維摩詰所説經』と名づけます。亦『不可思議解脫經』と名づけます。このやうに受持しなさい。」

〔諸人は歡喜し奉行す〕（現代語譯）

囑累章は流通説の中の第二項で、經典を付託し流通せしめますが、此の中の第三は諸々の人たちが此の經を聞いて歡喜し奉行します。佛ぶつ是この經きょうを説とき已まりぬから以下以下がこれでありま

（訓讀文）

佛ぶつ是この經きょうを説とき已まりぬ從より以下以下、章しょうの中なかの第三だいさんに諸人しよじんの歡喜かんぎし奉行ぶぎょうするを明あかすなり。

經典（諸人は歡喜し奉行す）

佛説ぶつせつキニ是こノ經きょうヲ一い已まヌ。長者維摩詰・文殊師利・舍利弗・阿難等及と諸ノ天人・阿修羅・一切ノ大衆。聞きテニ佛ノ所説しよせつヲ一い。皆大ニ歡喜シ信受シ奉行セリ。

經典訓讀文

佛ぶつ是この經きょうを説とき已まりぬ。長者維摩詰・文殊師利・舍利弗・阿難等及び諸の天人・阿修羅・一切の大衆、佛の所説を聞きて、皆大いに歡喜し信受し奉行せり。

經典現代語譯

釋迦如來は此の經を説き終りました。長者の維摩居士・文殊師利菩薩・舍利弗・阿難たち及び諸々の天上界の人々・阿修羅・一切の大衆たちは皆、如來の説法を聞いて、大いに歡喜し信受し奉行しました。

聖徳太子佛典講説

「維摩經義疏の現代語譯と研究」(下卷)

平成二十六年六月

初版頒価 千五百円

編者 磯貝保博 山内健生 澤部壽孫

発行者 公益社団法人 国民文化研究会

理事長 今林賢郁

印刷所 麻屋三英社



國民文化研究會・聖德太子研究會著

聖德太子佛典講說

維摩經義疏の現代語譯と研究

(下卷)

